

刊行の辞

木内 信胤

(世界経済調査会・理事長)

崔書勉さんの滞日が三十年になったといふので、“記念のための集会”が催されました。去る七月二十一日のことでしたが、この会は、發起人の一人としてさう申すのはどうかと思ひますが、とてもいい会、気合のかかった、面白い会となったのでした。

これは会のプログラムを相談した時のことですが、我々は当然のことながら崔さんの三十年の滞日をお祝ひする会”として考へてゐたのに崔さんは、

“飛んでもない、わたしがお礼をいふ会だ。三十年の滞日を、日本が許してくれた。その間実に多くの方が、自分を暖かく受け容れてくれたことに対してお礼を言はなければ”
と言はれる。

私達はこの発想に少なからず驚いたのですが、議論をしても仕様がなない。“それぢや両方をやろう、我々はお祝ひをいふから、あなたは、お礼を言つて下さつていい”といふことになった。さうして実際に会をやつてみた

ら、想像以上に楽しく、面白く、意味の深い会合となったのでした。

さうしてみましたところ、その後どころもなく、

「あの会合の全記録」

を印刷して残しておきたい、といふ希望の声が起って来ました。それなら何名かの方に

「崔書勉と私」

と題する感想文を書いて戴き、なほそれに

「韓国研究院の略史」と「刊行物目録」とを加へて、一冊の本にしたい、

となつて誕生したのがこの本です。

いいものが出来た、と思ひます。なぜなら日韓の関係といふものは、今後も決して“気楽に見てゐられるやうなもの”ではないからです。“多くの「よき事」の積み重ね”といふものがなければ、決して満足していいものとは成り得ない。

その「よき事の積み重ね」を為すであらう、代表選手のやうな方が、実に我が崔さんである以上、いまここに、この「崔書勉滞日三十年記念文集」と題する書物が作られることは、今後の崔さんの活動を“どれだけ楽にするかわらない”と思はれるのです。

崔さんといふ方の全貌は、私にはまだとてもわからないのですが、崔さん自身にも、

“これから自分は何を為し得るか、何を為すべきか”

といふことは、二つながら実はおわかりになつてはゐないであらうと思はれます。それからのことは、カトリックの信者である崔さんは、“神様の御旨に”とお考へになるでせう。カトリック信者ではない私には、“大きな巡り合せ”といふべきものが決めて行く、といふ風に理解されるのですが、何にしてもいままでの崔さんの三十年は、正に準備の期間、これからが本番と思ひます。

その本番のお仕事がどのやうなものにならうとも、崔書勉といふ人物を、多くの日本人が理解するのではなくては、決してうまく行きますまい。それなら、崔さんを理解する上において、我々のこの刊行物ほど役に立つものは、滅多に無いと思はれるのです。“いいものが出来た”と申すのはそのためです。

どうぞ崔さんと日韓関係の将来に幸がありますやうに。

(一九八七年十二月十五日・大統領選挙の前日)

目次

刊行の辞	木内信胤	(1)
第一部―崔書勉君の滞日三十年を祝う―		
発起人お引受けの依頼状		(13)
記念会への案内状		(14)
崔書勉君の滞日三十年をお祝いする会―記念会次第―		(15)
祝 辞	泰野章	(17)
祝 辞	インゴルフ・キッソー	(20)
祝 辞	ブリジット・キーオ	(22)
祝盃の辞	長谷川峻	(25)
発起人を代表して	木内信胤	(28)
お礼のことば	崔書勉	(29)

祝辞―終身の「大使」として……………鈴木卓郎(38)
祝辞―世界一のハサミダコ……………尹 充 基(41)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

孟蘭盆に供えて意義深いものに……………阿 部 トミ(45)
私にとつて何よりの記念……………猪 木 正 道(46)
当日のスナップ二枚同封……………江 坂 輝 彌(47)
病臥の身で参集できず残念……………大 庭 さち子(48)
本当に楽しい一夕でした……………菊 池 真紀子(49)
心遣いに恐縮しております……………林 和 子(50)
少しも変らぬ若々しいお姿……………藤 原 英 子(51)
お元氣そうなお姿を拝見して……………北 条 玲 子(54)
またとない良い会でした……………三 上 佑(55)

第二部―崔書勉院長と私―

韓国と私と崔先生……………足 川 力 雄(59)
「韓」創刊の頃のこと……………阿 部 洋(67)

崔書勉先生の事	安藤豊祿	(71)
崔書勉先生と私	稲葉継雄	(73)
崔書勉先生の誤解	上草 穎	(75)
私だけが知り得た素顔	大谷吉彦	(78)
押しかけ弟子入り	小河原史郎	(82)
お墓も隣り合わせ	金山政英	(89)
安重根を通じての交わり	鹿野琢見	(96)
崔書勉さんを送る	神谷不二	(99)
温かい思いやりに感謝	賀陽美智子	(101)
韓末外交史研究の発展を祈って	河村一夫	(103)
崔さんのプロフィール	木内信胤	(106)
ひと粒の考える種	木原悦子	(109)
勝れた日本語の文章を書くお方	桑原金彌	(113)
厳然としたケジメの中で	小谷豪治郎	(117)
国際野人の崔書勉先生	小牧正英	(119)
大変な(学者)ナシヨナリスト	酒井忠夫	(122)

あの頃のこと	佐々木年重	124
崔書勉氏のプロフィール	佐々木展子	126
明るくユーモラスなお方	島路陽子	128
崔書勉―私の対韓意識を変革させた人	鈴木卓郎	130
強烈な熱情を持った人	高橋通敏	145
チェさん時代の思い出	建部喜代子	147
崔書勉先生に呈すること	田中正美	151
血肉わけたる仲ではないが	筑波常治	154
崔書勉院長と私	津崎至	157
崔書勉先生の細心ぶり	寺谷弘壬	161
ぼだい樹のほとりで	寺田康順	163
崔院長と私	中野泰雄	168
崔院長のユニークな文献整理法	西川孝雄	176
一夕の出会いから	西村多聞	179
ダイナミックな直感力と行動力に感服	林建彦	184
崔書勉の三つの性格	藤尾正人	188

感電“させられ通しの十五年”……………藤田義郎(190)

あの方、日本語わかるのかしら……………藤塚明直(210)

一見如古以心伝心……………榎浩史(214)

崔書勉さんと『朝鮮キリスト教の文化史的研究』の再版……………宮原兔一(216)

崔書勉博士と『国際韓国学研究機関協議会』結成のことなど……………村上四男(218)

滞日三十年に寄せて……………ニール・ローレンス(224)

ジギル博士と私……………李鳳雨(226)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

崔書勉教授の横顔 (THE JAPAN TIMES 一九七〇・四・二)……………(234)

崔書勉略歴 (『現代日本人物事典』旺文社 一九八六)……………(238)

崔書勉寄稿目録……………(240)

第三部―東京・韓国研究院略史―

東京・韓国研究院 略史……………(251)

東京・韓国研究院 定款……………(264)

「国際関係共同研究所」設立趣意書……………木内信胤・崔書勉(272)

国際関係共同研究所 概要……………(275)

「国際韓国研究機関協議会」―創立の経緯と展望―……………崔書勉(278)

アジアの将来を考える九カ国共同委員会―東京総会報告―……………木内信胤(283)

全世界の心ある人々へのアピール……………木内信胤(293)

第四部―『韓』誌 総目次―

『韓』のことば……………(299)

『韓』総目次(創刊号〜一〇八号)……………(301)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

お礼のことば……………崔書勉(344)

題字 木内信胤

第一部
— 崔書勉君の滞日三十年を祝う —

《発起人お引受けの依頼状》

拝啓 初夏の候、貴下益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、私達の永年の友人であります崔書勉君が来日されましたのは一九五七年六月十日であります。以後崔君は、韓国研究院を設立して日韓の高級な意味における文化交流に一身をささげ、日韓の真の親善に尽力されました。

本年は在日三十年目にあたりますので、知人、友人相集い、同君の永年の労をねぎらいかつ激励も致したく、お祝いの会を左記により開催致したく存じます。

就きましては、この趣旨にご賛同の上、何卒発起人をお引受け頂きたくお願い申し上げます。尚、左記の日時を予定しておりますが、お祝いの会のご案内は、後日追ってご通知申し上げます。

日時 昭和六十二年七月二十一日（火）午後六時三十分より八時三十分

場所 日本プレスセンタービル、十階ホール

御諾否、同封の葉書にて六月八日までに御回示頂ければ幸甚に存じます。

敬具

昭和六十二年 月 日

崔書勉君の在日三十年をお祝いする会

発起人代表

木

内

信

胤

殿

《記念会への案内状》

謹啓

初夏も近くなりました。いよいよ御健勝、お慶び申し上げます。

さて、私共の永年の友人、崔書勉君が来日されましたのは、一九五七年六月十日でした。爾来三十年、韓国研究院の創立を始めとする同君の活躍、日韓両国に対する貢献が並々ならぬものであったことは、皆様御承知の通りであります。

就きましては、この三十年間にいろいろの意味で同君と交友関係を深められた皆様と一堂に会し、同君に対し深甚の祝意を表すると共に、同君のこれからの御抱負などを拝聴する機会を持ちたいと存じます。

時 七月二十一日（火） 午後六時三十分より九時迄

所 日本プレスセンター 十階ホール

（会場電話 当日五時三十分より五〇一一八九三二）

会費 一万円（当日御持参下さい）

何卒、万障御繰合わせ御参加のほど、御勧誘申し上げます。

なお御出席の有無同封の葉書にて七月十日までに御回示戴ければ幸甚に存じます。

敬 具

昭和六十二年六月二十五日

崔書勉君の在日三十年をお祝いする会

発起人代表 木 内 信 胤

発起人

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 安藤 豊 緑 (小野田セメント相談役) | 鈴木卓郎 (評論家) |
| 安齋 實 (日本ライフル射撃協会会長) | 鈴木 一 (元日韓親和会会長) |
| 阿部 洋 (国立教育研究所室長) | 高橋 通 敏 (創価大学教授) |
| 宇野 精 一 (東京大学名誉教授) | 田久保 忠 衛 (杏林大学教授) |
| 江坂 輝 彌 (慶応義塾大学名誉教授) | 田 中 正 美 (愛知学院大学教授) |
| 衛藤 藩 吉 (亜細亜大学学長) | 筑波 常 治 (早稲田大学教授) |
| 大谷 吉 彦 (評論家) | 寺 谷 弘 壬 (青山学院大学教授) |
| 大沼 保 昭 (東京大学教授) | 富 田 正 文 (社) 福沢諭吉協会理事長) |
| 大畑 篤四郎 (早稲田大学教授) | 西 村 多 聞 (朝日新聞福岡総局長) |
| 小河原 史 郎 (日韓協力委員会・事務局長) | 西 村 光 夫 (世界経済調査会常務理事) |
| 加藤 涉 (日本大学名誉教授) | 二 宮 文 造 (社) 参議院協会理事) |
| 金山 政 英 (国際関係共同研究所所長) | 長谷川 峻 (日韓協力委員会理事長) |
| 鹿野 琢 見 (弁護士) | 秦 野 章 (元法務大臣) |
| 神谷 不 二 (慶応義塾大学教授) | 林 建 彦 (東海大学教授) |
| 小谷 豪治郎 (京都外国語大学教授) | 藤 島 泰 輔 (作家) |
| 小牧 正 英 (近代舞台芸術研究所代表) | 藤 田 義 郎 (政治評論家) |
| 酒 井 忠 夫 (筑波大学名誉教授) | 前 田 利 一 (住友銀行顧問) |
| 桜井 義 之 (作新女子大学名誉教授) | 村 上 四 男 (和歌山大学名誉教授) |
| 志 賀 節 (衆議院議員) | 村 松 剛 (筑波大学教授) |
| 柴 田 穂 (サンケイ新聞論説委員長) | 渡 部 学 (韓) 編集委員長) |

(五十音順)

「崔書勉君の滞日三十年をお祝いする会」

—記念会 次第—

時 昭和六十二年七月二十一日（火）
所 日本プレスセンタービル 十階ホール

一八時三〇分	開会のごあいさつ	村松剛	先生
一八時四〇分	祝辞	秦野章	先生
	祝辞	インゴルフ・キッソー	先生
	祝辞	ブリジット・キーオ	先生
一九時一〇分	祝盃の辞	長谷川峻	先生
一九時二〇分	発起人を代表して	木内信胤	先生
一九時二五分	お礼のことば	崔書勉	先生
一九時四〇分	祝辞	鈴木卓郎	先生
	祝辞	尹充基	先生
二〇時〇〇分	中じめ・乾杯	金山政英	先生

祝辞

秦野章

(元法務大臣)

司会(村松剛)——今晚はゆっくり、崔さんの滞日三〇年を祝しましてお祝いをしたいと存じます。それでは最初に秦野章様から御祝辞を頂戴したいと存じます。宜しく願います。

ご指名を頂きましたが、私が果たしてトップにお話申し上げる資格があるかと疑いながら、村松剛先生のご指名ですので立たせて頂きました。

「崔さんのプロフィール」と題した木内信胤先生のパンフレットが、皆さんに届いていると思いますが、これを御覧になれば、崔さんは私なんかとても及ばない造詣の深い、つまり崔さんという人についての人物と歴史の一切が含まれていますので、何も殊更に申し添えることはないと思存しますが、一言だけ申し上げて切角の御指名に答えさせていただきます。

私が国会に働かせて戴いた十二年の間、特に記憶すべきことがあったことを申し上げたいと思います。

皆さんにも充分御意見がおりでしょうが、それは安重根問題です。日本にとって伊藤博文は卓越した人物でありました。しかし、伊藤博文が韓国への侵略の首謀者であると感じた韓国人が、彼を敵として考えることは韓国人にとって当然のことであります。日本に吉田松陰のような偉い先覚者がいると同じく、韓国にも吉田松陰的偉人がいても当然のことであります。

安重根は、韓国のため韓国人の立場で侵略の主たる伊藤博文を撃つたのであります。民族の独立と自由と平和のために行動した安重根の歴史性を認めないで、日韓の親善を図る事は難しいということを、国会で時の文部大臣・小川氏に質問したら、小川文部大臣は極めて解りの良い返事をしてくれました。全くその通りであると同様の意を表しながら「蒙は啓かれた思い」という言葉までつけ加えてくれました。

日本人の中にも、まだその辺の処が解らない人が居るようですけれども、韓国の独立とか平和とかという言葉は、安重根の歴史、韓国の歴史を知らずに言えるものではないと思います。安重根の命を賭けて独立を勝ちとろうとした志を理解することこそ韓国を理解することだと、私は信じているしだいであります。安重根の心こそ韓国の平和の道であり、独立の道であったわけです。極めて簡単なことだが、多くの日本人が知らないことは誠に残念なことだと思えます。

国会に於ての私の行動に対して、我々の仲間からの批判を受けましたけれども、だんだん解ってくれるようになりますと私は信じています。

崔さんは、この民族の独立と平和の問題について、即ち、安重根の志その儘を三十年間も日本に於て尽くして来られた人と云っても良いのではないのでしょうか。

ものすごく幅が広く、また、歴史学者としては人並み優れた立派な方であり、その魂は素晴らしいと思います。私は、秦野という苗字であります。祖先是多分、良く解らないが、韓国から来たのではないかと思えます。

或はまた、中国からかも知りません。どちらにせよ、我々はアジアの一員であり、各々独立を守り、しかも平和でなければならぬという具体的なテーマとしての歴史の中で、安重根を見い出さなければならぬと思います。大変自慢みたいになって恐縮ですが、昭和五十七年初めの、歴史教科書問題で世間が騒がしい時に、国会の文教委員会に於いて政府がそれを認めてくれたことについて、私はとても嬉しかった記憶を披露させて頂いた次第であります。

崔さん、本当に三十年間ありがとうございました。また、これからも引き続き頑張って頂きたいと思えます。それは、崔さんの活躍は、日韓友好のため、民族のため、また、その独立繁栄のためだと心から信じて、そう申し上げて、三十年間のご努力を心から感謝申し上げたいと思います。

ありがとうございます。

祝辞

インゴルフ・キッソー

(スエーデン代理大使)

司 会——秦野先生有難うございました。次はスエーデン代理大使のインゴルフ・キッソー様
よりお言葉を頂戴致します。

皆さん、今日わ。

外国に住んでおりますと、本国の人々に愛国者として認められ続けるということは、大変難しいことであります。特に、外交官の場合にはそういうことがしばしばあります。ところが、崔書勉院長の場合は、この点におきましては、極めて成功的なケースであると申さなければなりません。今日に至るまで、彼は東京・韓国研究院の設立と発展のために一身を捧げて来ました。その研究院の諸活動を通じて、彼は日本に於いて韓国に関する心や研究を刺戟してきた訳であります。また、彼の集めた文献や資料は実に膨大なものでありまして、韓国研究院の図書室は、韓国に関するものとしては、私自身かつて見たことのない程素晴らしいものであります。

もう一つ、外国に長らく生活しておりますと、自然にその国、その地域に対して大きな関心を持つようになるのが常であります。私はかつて三年程北朝鮮の平壤におりまして、その間にいろいろと北朝鮮のことについて関心を抱くようになりました。また、その後は韓国の方にも外交官として滞在し、同じく韓国に対しても大きな関心を持つようになりました。このように、私は韓国南北を通しての研究に対して特別の感情を持っております。

私は、日本に来て以来、韓国について個人的に研究して見ようと考えた訳であります。崔院長を紹介して頂いたのは、そのようなことからあります。私にとって、彼は想像力豊かで該博な知識を持った、最も良きトーキング・パートナーでした。私は、彼のような献身的で架け橋的な人物が韓日両国の間に存在することは、誠に慶賀すべきことであると思っております。韓国について語るときも、また日本について語るときも、彼は実に興味津々豊富な内容で、人を飽きさせません。

最後に、この三十年間、実に生産的かつ意義深い歳月を送って来られた崔院長に、心からお祝いの言葉を申し上げたいと思います。

どうも有難うございました。

祝辞

ブリジット・キョオ

(聖心修道会・東洋管区長)

司会——インゴルフ・キツソーさん、ありがとうございます。

来賓のご挨拶は、実はこのお二方と想っておりますが、聖心修道会の東洋管区長、この方はアメリカ人でブリジット・キョオさんという方からメッセージが来ております。これは英文でございますが、私(村松)、日本語に訳して、拙い訳ですが、読ませて頂きます。

このブリジット・キョオさんは、丁度朝鮮戦争の直後、そして崔さんが張勉副大統領がカトリックの総務院長だった時の事務局長をしておられた。その時にソウルを訪問されたようであります。以下キョオさんの言葉です。

崔さんに初めてお目にかかりましたのは、およそ三十年前のことです。中学校を韓国に作るために修道会のシスター達を訪韓させる可能性を調べようとして、私はソウルに着いたばかりでした。

朝鮮戦争が終わった直後で、ソウルの町は廢墟から漸く立ち上がろうとしていました。交通機関と言えば軍の

ジープとトラックとが泥道を走っていただけです。こんな状況の中では、国籍も様々なシスター達の入国査証を手に入れることは、困難というよりは不可能に見えました。私共は援助をお願いに司教様の所に行き、そこで情熱的な、てきぱきとした友情に満ちた一人の若者に出会ったのです。

この青年は困難を前にしてニコリと笑い、解決出来そうにない問題を解決してしまう能力を備えていました。それから後、彼にどれほどしばしば助けを求めることになるかを、このときの私は全くと云ってよいほど理解していなかったのです。間もなく崔さんは私にとつて、心温かい友人であると同時に、なくてはならぬ支援者となりました。ところがこの交友関係が、或る日突然断ちきれたのです。彼は、消えてしまったのです。雷に打たれたような思いでした。何が起つたのでしょうか。何の伝言も彼からはなく、噂さえも耳にしませんでした。

私は当時東京に住んでいましたが、ソウルにいるシスター達のところへしばしば行っていたのです。或る日、私の東京の事務所が鳴りました。崔さんでした。彼は東京にいたのです。喜びでいっぱいのは、すぐ東京の修道会において下さいと申しました。修道会の小さな喫茶室で崔さんと会い、彼のそれまでの物語を聞きました。

今度もこのひとは、不可能を可能にしてしまったのです。と申しますのは、当時の彼にとつて日本への入国は不可能だったからです。彼は全てを、はじめからやりなおさなければなりません。仕事もなく、住居もなく、友人もない状態から彼はやりなおしをはじめ、不可能に挑戦することを続けました。徐々にしかし確固として、彼は東京で足場を固めました。

彼の勇気はどんなことに遭つてもたじろぐことがなく、人生にたいする情熱は不変でした。それ以来、崔さん

が私のために尽くして下さった事柄を、ここで列挙することは到底できません。困難に直面するたびごとに、私は心の片隅で、「結局、崔さんが片づけてくれるのだわ」と思っていましたし、崔さんは実際に片づけてくれたのです。

例えば入国査証を五分間で取得するとか、既に満席の飛行機の切符をどこからか手に入れて来るとか、面会不可能の人との会見の約束をとりつけるとか。それが日本であれ、台湾であれ、中国であれ、世界のどこであつても彼にはそれが出来るのです。喜んで彼はそれを行い、そして仕遂げて来ました。この文章を書いている現在のこの瞬間も、私は崔さんの奇跡のお陰を蒙っています。

彼は自分では中国に行ったことがないのに私のために中国旅行の手配をして下さいました。どれほど私共が崔さんのお世話になって来たか、筆舌には尽くせません。また、それを今は申しますまい。何故なら、崔さんへのそういう意味での借りは、今後とも増えつづけるだろうからです。

祝盃の辞

長谷川 峻

(衆議院議員)

司会——まさに崔さんのお人柄をほうふつさせるエピソードでございまして、私自身も韓国で飛行機が満席で切符がとれない時、崔さんに電話をしたら「そんなの簡単だよ、誰か一人殺しやいいんだろう」と乗せて頂いたこともございます。これから先も我々、崔さんのお世話になると思います。将来のことも考えてここでお祝いをさせて頂きたいと存じます。では、長谷川峻先生、祝盃をお願い申し上げます。

私は、国と国との関係は、ケース・バイ・ケースだけでは絶対いけないと思っております。やはり民間の方達が長いことかかって、政府の力でも理解出来ないものを理解させる……そういう不可欠の人がいつの世にも絶対必要です。韓国の場合には、私は崔書勉さんが、やはりそういう人だと思えます。

私は、そこにご令息もいらつしやいますが、中野正剛先生の書生をしておりました。先生の書生には、韓国人

も、時には国会議員もおりました。そして、中野正剛先生の思想を見ると、あの人の著者には、〇〇と書いてあります。即ち朝鮮の独立です。書けないものですから〇〇としてありました。寺内総督と若い新聞記者の中野正剛がやりあつてるところは、徳富蘆花が「みみずのたはごと」に書いてあります。そういう所で育つた私でありますから、崔書勉さんとも付き合つています。

一つ因縁話をしますと、安重根義士のことが日本でも紹介されておりますが、その一つのきっかけが、彼が旅順監獄にいる時に守衛がなんと私の町者であつたところから始まります。安重根さんが亡くなる前に、親切にした守衛でした。この守衛は、国賊と言われているところの安重根さんの態度の立派さに感激して、何がしかの親切をしたようであります。安義士は処刑される前に、立派な字を書いてその守衛に記念に渡した。貰つた守衛は扱い方に困りました。そこで郷里に送つて、何と仏壇の抽出しに五十年もしまつておいた。そして約十年ぐらい前にそれを韓国に寄贈したのであります。

韓国に返した書（為国献身 軍人本分）は石に刻みこの守衛の郷里の大林寺というところに立派な碑石を建て、毎年お二人を偲ぶ会を行つています。

我が国に於いては皆さんご承知の安藤豊禄さんが安重根の顕彰会をつくられ、私の選挙区にあるこのお寺に於いては韓国からも人が来てお祀りをしております。私にはこんな因縁があります。

韓国の大使はしょっちゅう変わりました。然し崔さんは変わらない。そして皆さんと深い付き合いをされて今日に至つております。こういう方によって、日韓関係がきしむ時があつても、これを匡してくれながら、私達とお付き合ひして下さいます。周囲の事情を良く理解し、良く潤滑油の役割をしていただく崔さんには、本当に

敬意を払うものであります。

今日は、安重根さんを書いた中野正剛さんのご令息・中野泰雄君も来ております。彼も崔書勉さんのお世話によつて時々韓国に行つては、講義もし、資料も集めて充実されておられる。

こうした因縁話を見ますというと、一人の人の力というものは国以上に大きいということをしみじみと感じ、心から乾杯の音頭をとらせて戴く光栄に感激しながら、皆さんと杯をあげたいとおもいます。

さあ、ご用意出来ましたか？（暫し準備の間があつて）

おめでどうございませう！ どうぞ皆様もご健勝に！ おめでどう！

（一同） おめでどうございませう！

発起人を代表して

木内信胤

(世界経済調査会理事長)

司会——長谷川先生有難うございました。次に、発起人を代表して木内先生から一言だけ
お願いします。

私はただ一言だけ申し上げたい。この会をしようということで、崔さんに打合せに参りましたところ、「この会はお断りする。自分が日本に来てお祝いを受けることはないのだ。むしろ日本に対してお礼を申し上げたい」とおっしゃるので、「それは結構だ。我々としてはお祝いの会をしますけど、途中で切り替えて、お礼の言葉を頂戴する会に致しましょう」と。ですから、今からこの会は、お祝いをする会と、お礼を言上して頂く会と二つが並行して進む会に切り替えますので、そんなことで一つ宜しく願います。

お礼のことば

崔 書 勉

(東京・韓国研究院院長)

司 会 ― 何か変な具合なんですけど(笑い)。それでは崔博士お願い申し上げます。

有難うございます。いま木内先生がおっしゃったように、「日本に来て三十年になったそうだが、我々はお祝いの会を開こうと考えている」とおっしゃったのに対して、それは三つの理由からお断りしますと申し上げたのは確かでございます。その三つの理由というのは、まず私は王仁博士のように日本政府から招かれて来たわけではない。二番目は、日本に来て初めて自分が韓国において勉強出来なかったことを勉強させて頂いたこと。三番目は、東京という安住の地が無ければ、ソウルにいて、口をすべらせるうちに刑務所に何回も入っていたかもしれない――特に三番目の理由からしても、私はお礼を言う立場にあっても三十年だといってお祝いを受けるのは非常に心苦しいのです。それでお断りしますと申し上げた。しかし木内先生は、ちょうど私にとっては年の多い兄のような、またお父さんのような、そしてまた私をずっと小さくすればおじいさんのような立場の方です。ですから、

日本人の好きな「建前」と「本音」の使い分けをさせて頂くとすると、「建前」は「祝う会」で「本音」は「感謝の会」に切り替えましょうと、そういうことにさせて頂きます。

実は、ご招待状をお送りする時にも非常に遠慮致しまして、平素私がお世話になった方だけに限って頂きたい今日も昨日も一昨日も、お前のこういう会があると人から聞かれたり、飲み屋で聞かれたりしているのだが、何故私を招ばないのかと、たくさんの人から聞かされました。実は私はお世話になった方だけにお集まり頂いて、心からお礼を申し上げたい方だけに限定して頂きたいと準備の会にお願いしておりましたので、失礼なこともあったかも知りません。本当に三十年間有難うございました。

私が東京に着いたのは一九五七年五月二七日だと覚えております。当時一九五七年到着時にお世話になった方々に先ずお礼を申し上げたい。この後の三十年間に友情・ご指導を受けた方々は別として、私は密航して来ましたから、東京に最初着いた時に、一人の友人もいませんでした。そして一人の知人もいませんでした。電話番号帳も私にとってはクズにもならないものでした。そういう時に助けて下さった方達にはお礼を申し上げて三十年目の日を過ごしたいということで、五月二七日の夜、ささやかな宴を張らせて頂きました。三十年前のその日、東京で政治的亡命を申し出た時、ポルトガル総領事のところに、「チェ・ソ・ミョンという人物がポルトガル本国、植民地並びにポルトガルの権限の及ぶ地域に着いた時は直ちに外務大臣に連絡して保護を怠るなかれ」という電文が届きました。ポルトガル総領事はその日から毎週、日曜日になりますと私達夫婦を必ずどこかの山や海にドライブに連れて行って下さいました。私はソウルを発つ時にローマに行く約束で出発しました。密航で東京を出ていく旅券が無い、この時、聖心女子大学の理事長をなさっていたマザー・キートンにお会いした時に、「何か手伝

うことはないか」——おそらく金銭的援助をおっしゃって下さったのでしよう、「お金は心配ない。ただローマへ行きたいのだが、その方法がない」と申し上げたところ、シスターは非常に単純に、裁判所の仕事だと思つてか、田中耕太郎先生を紹介して下さった。そこで、田中先生の所へまいりました。先生はその時最後に、「私は法律の番兵だよ、密航者を捕らえて裁判をする者が、君をこっそり出国させる……？ 私の秘書室長が東京入管の初代所長だったから、道案内をするから自首しろ」と。それで神保さんという秘書室長に連れられて東京入管に自首したわけです。

ま、この田中先生は当時最高裁判所長官でおられた。ですから、密航者が堂々と最高裁判所長官の部屋へ行つてもう一回密航させてくれといった歴史を持つているのがこの私です。(笑い)

その田中先生ももうこの世にいらつしやらない。先程述べた、毎週ドライブに連れて行つて下さったポルトガル総領事も今は亡き人である。そして空港から都内に入りまして最初に迎えて下さった東京カトリック協会の会長も亡くられています。それで今回ようやくかまえたのが、総領事ピントさんのお嬢さんです。あの時きれいであったあのお嬢さんを迎えて五月二七日感謝の会を行わせて頂きました。あの日にお嬢さんに、「おいくつになられたのか」と伺つたところ、六四歳になられたという、あちらにいらつしやるのがそのお嬢さんです。(拍手)

昨年末、ある新聞社から「そろそろ自伝を出さないか」と言われました。何故出すのかと聞くと、「お前の一生の記録はとても面白そうだ」という。「いやあ、言える話もあるし、言えない話もある。密航を助けてくれた方のことは三十年はおろか五十年経つても言えない」というと、「嘘でもいいから書いてよ」と。これほど私を愛して

くれる新聞社の主筆があちらにいらつしやる方です。(笑い) 今日お集まり頂いた方々を拝見すると、ほんとうにお世話になった方々ばかりで、お一人お一人、お名前をあげさせて頂いてお礼を申し上げたいのですが、今晚はおろか明日の晩までかかってしまいそうです。ですから今日、私が事務所を出る時、私の後輩が心配して「院長の話は長いから、今日もそうだと、お客様に嫌われるよ」(笑い)と注意してくれました。私も短くしよう短くしようと今努力しているのですが、日本に着いた時だけのことを言うのにこれだけかかってしまいました。(笑い)

私がおのあとお世話になったのは国会図書館に通った頃のことです。最後にはアジア・アフリカ課の方から、「あの本はどこにあるのでしょうか」と逆に聞かれたくらいです。毎日、日曜日以外は朝九時から閉館までいました。この間に私が気づいたのは、昔、ソクラテスの「汝自身を知れ」の言葉はとても生意気に解釈していましたが、ハタと、これは「お前は韓国人なのに韓国のことは何も知らない。この機会に自分自身についてしっかり勉強しろ」と私について言ってくれた言葉だと気がついて、三年半、国会図書館に通いました。この時に読んだ本は全てメモしてあります。いつか御披露する機会があると思います。国会図書館、地方の図書館の方々、今日はお招きしております。何故かと言うと、密航で来ましたので、偽名を使って図書館に通っていたからです。(笑い)

今日はこの発起人会で私がお世話になっているお手伝いさん、私の健康を守って下さっている二人の主治医の先生方を招んで下さっていることに深く感謝致します。私はワイシャツはクリーニング屋に出したことはないのです。この小母さんが洗ってアイロンをかけて下さる。向こうの和服の方がその小母さんです。(拍手)

今日ここには、安重根研究会の集いでもないのに、二人の先生が安重根の話をして下さって、死んだ安重根がとても喜ぶと思います。そして私にとっても非常に有り難い話です。今後の日韓関係を考える時に、田中耕太郎先生は私に、「何回か韓国へ行ったことがある。でも心から知り合った人は今日まで一人もいなかった。丁度いい機会だから、君と僕とで勉強しよう」とおっしゃって下さった。最初は金玉均を選びましたけれども、金玉均の墓は三つありますが、そのうちの一つだけ遺体があります。その本郷のお寺の寺田ご住職もお見えになってます。今も私達は毎年命日にお墓参りをしています。金玉均をある人は親日だと言い、またある人は反日だと言う。このような金玉均の評価を見ていて、私は日韓間で安重根の処理なしに友好はあり得ないと考えるようになりました。つまり、安重根——秦野先生がおっしゃった如く、日韓両国が認め得る安重根の座が確立されてこそ、今後如何なることがあっても日韓関係というのは崩れることがないということです。

昨日、福田赳夫先生がこの会に出られない。最近、総理大臣を誰にするかで忙しいので、その代わりに書を贈るといつて下さって、「一衣帯水」と書いた書を贈って下さった。福田先生には申し訳ないが、あえて言わせて頂けば「一衣帯水」ほど危ない言葉は無いと思います。これまで日韓間で、「お前と俺は一衣帯水」だと言われ続け て来た。いい時は一衣帯水、それでは悪い時はどうなのか、やはりこれも金玉均と同じで、両方の解釈のある金玉均は浮かばれない。そこで日韓双方が認める安重根を、本当の日韓関係の礎にしたい、という趣旨の安重根研究会の会長である安藤豊祿先生は「おい、崔義士」と私を呼ばれる。「それはどういうことですか」と聞くと、「私が安重根、安重根といっても誰も見向きもしなかったのに、お前が来てからはどこでも安重根の話が通じるので、お前が義士だよ」と言われたことがありますけれども、安藤先生、覚えていらっしやいますか。

お二人の先生が今日、安重根について言及して下さったのは、私の初めの設計が三十年目に実ったということで、これぞ今日私が受ける最も有り難いお祝いの言葉と存じます。実はこの間、韓国政府から四度叙勲の内示がありましたけれども、お断りしました。それよりも今日この会でお二人の先生が安重根についてお話下さり、又国会で取り上げて下さったりしたことが最高の贈り物だと考える次第です。藤田先生が私に、「この政治家は知っているか、あの政治家はどうだ、発起人になってもらおう」とおっしゃった時に、「政治家だけは止めてくれ」と。そしたら発起人に国会議員が二、三人いらつしやる。「こういう方はどうするんだ、入れないわけにはいかないだろう、毎日会っているのだから」と言われた。「それならこうしよう。研究者という名前で。志賀節先生のように、研究院に来て本を読む研究者だということをお願いしよう」と。いろいろと私の注文を聞き入れて下さった発起人の方々にあらためて感謝申し上げます。

今日ここへ来る前に脅迫を受けました。「三十年過ぎた今、これからあと何をするのかを言わないと今日のお祝いの意味が無くなるのだ」と。さて、私は、有り難いということだけ申し上げればすむと思っていました。昨日まで考えていたこともありませんが、今日は別のことを申し上げます。昨日迄考えていたことは、いつ韓国に帰ろうか、ということもその一つです。そう思つて色々考えてみますと、帰れない事情がたくさんあります。(笑い) 例えば、韓国の民主化が進んで金泳三か金大中が大統領になったと仮定しましょう。この人達が日本との関係で今迄やったことは、社会党や、自民党を出た人達ばかりと往来をしていますが、本当の日本を背負っている自民党本流との交流をどうしようというのか、今のうちに韓国の政権がいくら変わっても日本という国は常に韓国の友人であるという確信をこの人達が持たなければいけない。

今日の昼、金大中さんから致された時その側にいた金敬仁という元国会議員が訪ねて来ました。どうして日本に来たのかと聞くと、「アジア……」という会議の招待だという。その人に、先程申し上げたようなことをこれからはやらなければいけない。君は金大中のイトコじゃないか——と言いました。こういうことを考えますと、これからは韓国の次の大統領が、盧泰愚さんになるか金大中さんか金泳三さんか、いずれにしろ、これからの日韓関係はさらに大事なことになるうと思います。これを今のうちに強調しておかねばなりません。こんなことをおしゃべりしますと、「本当は帰りたいなくて帰らないんだ」と思う方もあるや知れませんが、これから何をするか、はつきりここで宣言致します。これからは、物を書こうと思います。

金玉均、閔妃事件、安重根等の原稿は八割は出来ていますが、出版はしていません。というのは、私は職業が研究院長ですので、院長というものは後輩を養成するのが仕事なので、自分の本を出したりしてはいけない、院長を辞めた時に、それまでの蓄積を本にしたい、という考えでおります。

今度私が三十年を迎えると言ったら、皆様にお贈りした井戸茶碗というものを、お金を一文もあげなかったのに、韓国の友人が三千個焼いてトラックに積んで東京に運んで来てくれました。三千個を船で釜山から大阪に運び、東京までトラックで運搬してくれたのです。私の祖国でもこういう形で私の三十年を祝ってくれた方がいます。私が日本に居ようと、顔は祖国に向けていたことを忘れていなかったのでしょう。

この茶碗を、私は古書店にたくさん贈りました。この人達がいなかったら今日の韓国研究院は成り立っていなかったからです。それから、たくさんの方々から感謝のお手紙を頂戴致しました。有難うございました。

これから、木内先生のように八十九才まで生きられるかどうか分かりませんが、皆様から受けた御指導

の成果を書き物にして後世に遺したいと思えます。

最後に一つお願い申し上げたいことは、皆様が私に、「崔書勉と私」という題で、どのようなものであってもいいから、書いて下されば、一冊になるうが、十冊になるうが、本として出版させて頂きたいと思えます。理由は、私の子供に遺産として残すのではなく、崔書勉という、一人の知人も友人もいなかった私が日本で三十年間行つて来たことを韓国の人々に読んでもらうことによつて、日本に来たこともない、来ることも出来ない人達に、本当の日本人というものは韓国人とどういう付き合いをするのかということを見せたいからであります。どうぞ皆さん、枚数は制限致しませんから、「崔書勉と私」をお願い致します。(拍手)

この三十年を振り返つて見ますと、大使閣下といわれた前田駐韓大使も、チンピラ課長時代から付き合い合つていますし、この間、家で見付けましたが、中曾根総理大臣の名刺がその時々ポスト名で六、七枚ありました。私は東京に着いた時友人の一人も持つていない人間でしたのに、今日このように大勢の方々にお集まり頂くほどに成長させて頂き下さった皆々様に厚く御礼を申し上げて、ご挨拶を終わらせて頂きます。(拍手)

司 会 一 有難うございました。到底二十分などと申すものではありませんでしたが、大変に感動的なご挨拶を有難うございました。この会がお祝いの会なのかお礼の会なのか迷つてしまうところなのですが、先程 崔さんのお言葉にありましたように、建前はお祝いの会でもいいとお許しがりましたので、このまま続けます。さして頂きます。

昔、崔さんを大統領に担ぎ出そうという動きがあったそうです。そういう動きがあっても不思議はないほどの見識の持ち主であります。崔さんはお酒を飲むと靴を脱いで人の頭を殴る癖があり、韓国の閣僚でも殴られた方が少なからずいたと思います。ま、大統領もいいですが、それよりも日韓関係、先ほどスエーデン代理大使がおっしゃいました非常に微妙な関係にある二つの国の橋渡し、これは崔さんしかお出来にならないことで、今後とも努力して頂きたいと考える次第でございます。皆様も同じお考えと存じます。

随分長くなりましたが、ここで、皆様もお疲れになられましたでしょう。一旦休みを入れまして、召し上がって頂きたいと思えます。

祝 辞——終身の「大使」として

鈴木卓郎

(評論家)

司会（藤田義郎）「恐縮ですが、ここで司会を村松さんから私、藤田義郎に交代させて頂きます。村松さん、有難うございました。それでは朝日新聞にいらっしやって、安重根の記事を多く紹介して下さい、今は評論家として活躍していらっしやる鈴木卓郎さんにスピーチをお願い致します。」

本日は崔書勉さんの「滞日三十年をお祝いする会」に招かれまして本当にありがとうございます。今の私の気持ちは「お祝い」するよりも「感謝する」といったほうが正直な感じでございます。私は若い頃から国際政治史には深い興味を持ってきましたが、お隣りの韓国については普通の日本人と同じ程度の知識しか持っていませんでした。殊に昭和初期に小学生だった私達には、教師が教壇から朝鮮人を蔑視するようなことを堂々と説いてましたから尚更です。今なら重大な日韓紛争に発展することですが、当時の日本の教育はそうだったのです。

私が崔さんに感謝したいのは、そうした無知だった私に「韓国人の心」と日韓関係史を開眼させてくださったからです。その崔さんから多くの韓国人の政治家、言論人、学者を紹介していただき日韓関係についての知的源泉となつていますが、それ以外に非常に多くの各界の有力者が、このパーティに参列しているように崔さんの「顔」の広さには感嘆かつ敬服せざるを得ません。

私が崔さんという韓国人を知りましたのは昭和四十八年十月のことです。その年の八月には東京で金大中事件が起きましたので当時は朝日新聞の公安担当記者として両国関係の推移を取材していました。すでに両国関係は険悪になつていまして、その事態処理のため第一無任所長官の李秉禧氏が来日されていきました。李長官は日本のマスコミ関係者から日本の世論を知りたいと願つていたようでありまして、私は親しい雑誌編集長に誘われて長官と崔さんに初めて面談することができました。当時の日本には反韓世論が強く新聞記者も同じでしたが、その席で崔さんが「日本人は主権を侵害されたといいますが、日本は韓国の主権を奪ったことがあるでしょう。それが安重根の義挙（伊藤博文殺害のこと）を生んだではありませんか」と問われて私は大きな衝撃を受けたのです。それが私をして日韓関係史を研究する動機となったことを思いますと、私と崔さんとの交友は安重根が取りもつたといえるでしょう。

今でこそ崔さんは立派な研究所で大きな成果を築かれて今夕のようにおおくの日本人に敬愛されていますが、来日の当時は非常にご苦労が多かったと拝察いたします。

韓国大使は数年の駐日で交代しますが、崔さんは終身にわたり実力ある在日大使であると思います。ことに夜になれば顔の広さ、明晰な頭脳、さわやかな弁舌で「大使」たる実力を発揮されています。私も微力ではありま

すが、崔さんのライフワークに協力したいと願っています。

あまり深酒や夜ふかしをされないで終身の「大使」たる実績を築かれることを期待してご挨拶に代えさせていただきます。どうも、ありがとうございます。

祝辞——世界のハサミダコ

尹 充 基

(東京カトリック信者代表)

司会(藤田)——有難うございます。最後に崔さんと格別に深い親交のおありになる東京のカトリック信者会代表の尹充基さんに、一言ご挨拶をお願い致します。

ただ今ご紹介にあずかりました尹充基でございます。このように盛大な立派な会でご挨拶させて頂くのは初めてでございます。韓国人代表として挨拶をするようにと言われてまして、朝から胸がドキドキ、膝はガクガクしている次第です。

私は院長の人柄についてお話したいと思います。まず最初に世界一のハサミダコについて申し上げたい。研究院を訪ねると院長はいつでも資料を切り続けて二十年、右手の中指に豆粒ぐらいの大きなハサミダコが出来ます。皆様ご存じのとおり研究院の膨大な資料は、先生の世界一のハサミダコから生まれたのです。また、そのハサミの切り方ですが、たった一ミリでも間違えたら院長の目付きが怖くなります。我々はその位でいいんじや

ないかと思いますが、先生はこのことに関しては非常に厳しい方です。何でも徹底的にかつ正確にやらなければいけないというお考えなのです。

このことは本を収集することについても同じです。私は何回か院長について古本屋回りをしたことがございます。本屋に入って院長は、本棚から次々と本を抜き出し、何十冊も、床を本の山にしてしまいます。これを見て、私も本屋さんもびっくりしてしまいました。本屋さんは心の中で「無茶な人だ」と思ったのではないでしょうか。でも、そのあと院長は本屋さんと呼んで、本の山を指差し、「これを全部買いますから会計をお願いします」と言ったので、本屋さんはホッとした様子でした。とにかく全部買い上げるといので、ホッとしたと同時に大変嬉しそうです。私は院長が本の題名もろくに見ずに次から次へと本を抜き出して行くので、何の本なのかちゃんと分かっているのかと心配していたのですが、帰ってから説明を聞くと全て有用なものばかりだったので、またびっくりしたものでした。

次に院長のお年について申し上げたい。院長の年齢というのはミステリーでございます。院長は話相手によって自分の年齢を十歳〜二十歳も違えておっしゃるのです。でも、私が推測したところ、先ず姉上のお年以上のこととはありえませんが、滞日三十年ですから四十歳以下のこともありません。院長の友人がソウルからいらっしやうって、私も会食のお相伴をさせて頂いたことがございます。その方は院長と三十年のお付き合いのある方でございましたが、院長の方が自分より年上だと思っていらっしゃったのでしよう。「兄貴」と呼んでいらっしやいました。ある時、他の友人の方から聞いて、自分より院長の方が年下だということがやっと分かって、院長に「これからは私を兄貴と呼んで下さい」と言われた。その返事として院長の言ったことが面白かった――「今まで私を

ずっと兄貴と想っていたのだから、そのままでもいいじゃないか。今までどおり兄貴と呼びなさい」と。それで一同大笑いになりました。

以上、院長のお人柄の一端についてお話し上げました。

最後に、こういう八方破れの性格から、院長の信仰面について本当に宗教心があるのかと不審に思われる方もいらつしやるかも知れませんが、「ロザリオ」というお祈りの一節がございまして十五分ほどの長いものです。このお祈りを、あの忙しい中で、院長は毎日、少なくとも四、五回はやっていらつしやるという程の、深い信仰心をお持ちでございます。常々これについては、「人というものは何も持っていない。死ぬ時も何も持っていない。文化・歴史・政治など、色々学問研究をして自分を成長させ、なおまた後輩をよく育てていきたい」とおっしゃっておられ、誠に篤信なカトリックの信者でございます。私もカトリック信者でございますので、院長の信仰心について皆様にお知らせした次第でございます。有難うございました。

会のおわりに

司会（藤田）——どうも有難うございました。崔さんは自分の歳を絶対に言わない人でございましたね、一九一四年生まれだとばかり思っていました。木内さんの書かれたプロフィールを見ますと、一九二六年になっていますが、これもどうか分かりませんね。さて、今、木内信胤さんが、非常にこの会に感激されました。先ほど崔さんが、大変感動的なご挨拶をされましたけれども、今日お集まり頂いた方々は、本当に各界を代表するすばらしい方々ばかりで、「崔さんをお祝いする会」また「崔さんが御礼する会」が文字どおりの会になりましたのを大変喜ばれまして、一言私にしゃべらせてくれとの御要望でございますので、……登壇して頂きます。

木内信胤（発起人代表）——どなたも聞いておられなくていいのですが、崔さんだけは聞いていててくれないと困るんです。今日お分かりになられたように、崔さんという人物は研究に値いするんです。だから大いに働いてもらう必要がある。ついては彼に簡略なる自叙伝を書いてもらいたい。自分は、例えば大反日家であった。その時はこう考えていた……といったことも語ってほしい。決してお手数をかけません。私が質問をしますから、それに答え下さってそれを録音とると出来ますから。OK?（OK）有難う。（拍手）

孟蘭盆に供えて意義深いものに

阿部トミ

(故・阿部吉雄氏 夫人)

此の度は在日三十周年の並々ならぬ御活躍をお祝い申し上げます。

故阿部吉雄こと 一方ならずご厚情をいただき、改めて御礼申し上げます。

賜りました井戸窯の記念品は、丁度孟蘭盆に供えてもつとも意義ふかいこととし重ねて感謝いたしております。
一層のご健勝を念じ上げます。

かしこ

七月二十九日

私にとって何よりの記念

猪 木 正 道

(青山学院大学教授)

暑中お見舞い申し上げます。

三十年の日本での御業績をたたえ、心より尊敬申し上げ、今後とも一層のご活躍を祈り 上げます。

拙宅までお見事なおよろこびの記念の御品を拝受させて頂き、厚く御礼申し上げます。

陶器の好きな猪木にとりまして何よりの記念のよすがとさせて頂きます。

有難うございます。

代筆

一九八七年 盛夏

当日のスナップ二枚同封

江坂輝彌

(慶応義塾大学名誉教授)

先日は、先生の生活の一つのメドの経過として、本心に心からお祝い申し上げます。これからの先生の人生をさらに有意義に御活躍、御発展を祈りたいと思います。

うまく撮れませんでした。当日のスナップ二枚同封呈上致します。

三十日から、八月二十七・八日頃まで、韓国各地での発掘調査を見学して参ります。帰国しましたら地図を持って伺いたいと思います。

先ずは写真送付まで。

一九八七年七月二十八日

病臥の身で参集できず残念

大庭 さち子

(作家)

一衣帯水とは申しながら長い間遠くて近い隣国だった日本においでになり、数々の御苦労御苦心もございましたように、ついに三十年という長い月日をこの国に根をおろし、今や両国のためにはなくてはならぬ第一人者となられ、数々の輝かしいご業績をつまれ、ここに一くぎりを作られて、感無量といったお気持と存じます。

滞日三十年をお祝いする会にも病臥の身参集できませぬこと、ほんとうに残念に存じます。にもかかわらず、この度は貴重なお品を頂いて、何とおん礼申し上げてよろしいやら言葉もございません。井戸の茶碗は私達の長年のあこがれの品、三十年のふし目をこのような形で私たちにもお恵み頂くことは身に余ることでございます。

ありがとうございます。

不順の折柄、くれぐれもご自愛を祈りあげます。

(病床にて)

七月二十一日

本当に楽しい一夕でした

菊池 真紀子

(小牧正英氏 夫人)

残暑御見舞い申し上げます。

過日は、先生のお祝いの会に小牧に便乗して出席させていただきましたが、とても素晴らしい会で、お陰様で楽しい一夕を過ごすことが出来ましたこと、お礼申し上げます。

先生が、韓国と日本になくはならないお方だと、ますます再認識致しましたし、今迄、私が知らなかった先生の一面を知ることが出来ました。大勢の方がお見えになられておりましたので、お話をする時間も短く残念でしたが、先生の優しいお心遣いと暖かさが良く伝わり、本当に楽しい一夕でした。

また、お目に掛かれる日を楽しみにしています。

御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

かしこ

八月十九日

心遣いに恐縮しております

林 和子

(故・林毅陸氏 令嬢)

朝夕は少し凌ぎよくなりましたが、日中は残暑のぶり返し厳しい昨今でございます。御機嫌よくご活躍にておよろこび申し上げます。新聞にも先き頃の会の記事が載り、日韓両国の御功績が三十年という年月をご研究の道ひた走りの様に、ただただ驚き入るばかりでございます。

これとってお役に立つこともできず、しかし、様々の歴史につながる御研究の積み重ねと、資料のつきぬ深さ、国の動きと共に辛苦を乗り越えられての御経験の豊かさと、生まれながらの才と御努力の充実した人生を歩まれた崔先生とご面識を得まして、私としても余程の事がなくてはお近づきの機会は得られませんただの主婦で、有り難く存じております。

どうぞ御健康で、より以上の御研究達成をお祈り申し上げます。

かしこ

八月二十七日

少しも変らぬ若々しいお姿

藤原英子

(元・職員)

前略

崔先生、長い間御無沙汰致しております。

先生はじめ奥様、ポールさん、エンディさん、皆様お変わりございませんか。先生のご活躍のご様子を「今日の韓国」で拝見し、二十年前と少しも変らぬ若々しいグラビアのお姿を見てとても懐しく、私がお世話になった時から、もう二十年も過ぎたことが信じられないような気が致します。

この度は先生の滞日三十年のお祝いの会が開かれるとのこと、本当におめでとうございます。案内状を拝読させて戴き、発起人の錚々たる方々のおられるのを知り、先生の渡日されてからの交友範囲の広さに今更ながら驚かされました。

わずか一年間お世話になった私ごときに、この二十年来かさず年末年始の挨拶状を下さる様な先生のお人柄ならば、多くの方々に愛され親しまれるのも当然のことと思われます。たしか私が結婚した頃に韓国研究院を創

立されたと記憶しておりますから、二十年近くの長きに亘り院長としての責任を全うされている先生、そして熱き母国愛の精神を持つ先生の韓国と日本に与えた貢献には安からんものがあるかと察せられます。そのような先生の記念すべきお祝いの席にご招待いただき本当に光栄に思います。奥様や息子さん達、隆矢さん他当時の学生さん達にもお逢いしたい気持ちで一杯です。私の子供も、長女が高二、長男高一と手が掛からなくなり、時間が取れるものならどうにかして駆け付けたい思いは山々なのですが、現在、兄弟と協同で本業の米穀商の他に、雀荘、焼肉店、お好み焼店、古物商など副業を持っており、弱小企業の悲しさで家族総出で商売に取り組んでおります。私一人休むことは、他に迷惑をかけることになりますので、それも出来ません。本当に残念ですが、私は下関の地で、先生の記念すべき日をお祝いさせていただきたいと思えます。

一昨年、子供達に母国を見せたいという両親の長年の希望で、孫に至るまで全家族で韓国を訪問しました。日本で生まれ育った私達兄弟であります。韓国訪問の四日間は忘れられない思い出となり、今更ながら自分の中に純然たる韓国人の血が流れていることを知らされました。

私の父は帰化した韓国人の人達の集まりである成和クラブ連合会の山口県会長を務めており、帰化人同士の結婚問題などに微力を投じております。常々、いくら帰化していても自分の祖国に対する想いは誰にも負けないと申しており、近年とみに祖国に足を運ぶ事多く、年とともに祖国に対する望郷の想いがつのつているようです。私が韓国の地に足を踏んでいなければ、そんな父の想いも理解出来なかつたかも知れません。渡日三十年、堂々と韓国人として生きて来られた先生、帰化人として複雑な思いを胸に抱きながら生きて来た私の父、そして日本しか知らない私達……、本当の意味での韓国の歴史というものを覗いてみたいような気が致します。

いつか商売の方に余裕が持てましたら是非々々先生にお目にかかり色々教えて戴きたいと思えます。

現在のご自宅も変られたかも知れませんが、今でも思い出すのは、上目黒のお宅の書物の部屋です。学生の頃、本ばかり読んで勉強など少しもしなかった私ですが、あの多くの本に囲まれた部屋を掃除していますと、自分がとても偉くなった心持ちになったものでした。夢中になるものを持つ事のすばらしさをあの部屋で知ったような気が致します。商売の方もけっこう忙しいのですが、今でも夜中に書道の勉強をしたり、三味線、民謡の先生になるべく二兎も三兎も追いながら老けたおばさんにだけはなりたくないとがんばっています。書道もまだまだですが、何かお祝いにふさわしい言葉でも書けたらとがんばってみましたが、あまり先生が偉いお方になられたようで、とうとう氣後れしてやめに致しました。本当に自信の持てる作品が出来ましたら、その時は先生に受け取っていただきたいと思っています。民謡の方は武道館でコンクールの全国大会があります。万が一にもそれに出場出来るようなことがあれば、三味線を持って先生宅に伺い、三味を弾きながら先生のお酒の相手でもさせて戴きたいものです。そんな日が早く来るようがんばりたいと思えます。

とりとめのない事ばかり書き連ねました。あまりの懐かしさについて筆が進み、お忙しい先生の時間を煩わしたのではないでしょうか。送りましたウニは下関の名産ですが、何でも手に入る今日では珍しくありませんが、下関の味と思って食して下されば幸せに思えます。

最後になりましたが、記念品の陶器ありがとうございました。大切に使用させていただきます。

それでは、今後先生の益々の御活躍とご家族ご一同様のご健康をお祈りしつつ筆をおきます。

お元気そうなお姿を拝見して

北条 玲子

(故・北条誠氏 夫人)

暑中お見舞い申し上げます。

先日は御盛会で誠におめでとうございました。

晴ればれとお元氣そうなお姿を拝見して、嬉しゅうございました。

先年、交通事故におあいになったこと、ご病気でいらした事等、全然存じませんでお見舞いも申し上げず失礼いたしました。

随分御無沙汰続きでございました。お許し下さいませ。

例年にないきびしい暑さ、幾重にもご自愛遊ばしますよう、益々ご健康でご活躍下さいませ。

御大切に

八月二日

またとない良い会でした

三 上 佑

(福沢諭吉協会・廿一年慶応三田会)

暑中御伺い申し上げます。

此のたびの会は晴天涼風に恵まれ、誠にまたとない良い会でした。重ねて御礼申し上げます。

富田正文、福沢諭吉協会理事長 都合でどうしても出席出来ませんでしたので、御報告の手紙を差し上げました。

尚、感激のあまり拙文御送りいたしますが御訂正の上、こういう一人の男も居ることをお含み下さい。

一層のご自愛をお祈りいたします。

敬具

第二部
— 崔書勉院長と私 —

韓国と私と崔先生

足川力雄

(東京厚生年金病院耳鼻科部長)

一、はじめに

世の中というものは不思議なもので、七、八年前までは全く赤の他人であった崔先生の滞日三十年記念パーティーに私も出席させて戴いた。

崔先生は私の患者さんの一人であるが、私と崔先生を結びつけたのは、韓国の耳鼻科医それも Seoul のカトリック医大耳鼻咽喉科学教室の先生方である。そこで、やや冗長になると思うがその経過を記して見ようと考えた。

一、私の韓国訪問

私は昭和四十三年十二月に、生れてはじめての海外旅行をした。それが台湾と韓国とである。当時、慈恵医大の講師として勉学する傍ら夜間開業をしていた私に、海外に出かけることを強く薦めたのが、日本に私費留学を

していた成昌燮博士（カトリック医大助教授、現慶北大学医学部教授）であった。

「是非韓国を見て下さい、日本人の持っている韓国観が変わります。儒教精神に富み、長上を敬い、長い歴史と文化を持っていることがわかります。但し現在は動乱のあとで貧しいですが……」。

慈恵医大の高橋教授と共に Seoul に行った私は、金弘基 Seoul 大教授をはじめとして数多くの韓国耳鼻科学会の先生方と接し、中でもカトリック医大の金炳宇教授、Seoul 大の盧寛澤助教授（現在教授）、金基鈴教授（延世大）と親交を得た。

Seoul では小学校の児童の鼻疾患の調査と K C I A の秘書室長をしていた李端龍氏の鼻疾患の手術を行った。帰国後李氏が来日され小生宅で約十日間をすごした。李氏は K C I A の高官というが、柔和なカトリック信者で紳士であった。

以上のことが私と韓国との結びつきの第一歩である。

二、韓国と鼻科学

日本にはかつて蓄膿症の患者が溢れていた。

これは含水炭素を多食する米食民族の宿命かと思える位に多くの人が悩まされた。韓国もご多分に洩れず同様であった。

しかしながら、日本の耳鼻科医で真剣に取り組む医師はそれ程多数ではなかった。わが慈恵医大では高橋良教授

の指令下、耳鼻科教室の全員が蓄膿症に対して挑戦していた。

私はその教室の鼻副鼻腔研究班の班長で、大多忙を極めていた。そこに成昌変博士の帰国後、韓国より多くの教授・助教授の方々が一〜六ヶ月間の予定で留学されてきた。

私は私の知る限りのことをご伝授した……現在であれば医師法違反になる診療・手術をも行って貰った。なかでも真剣になられた方は、金炳宇教授、盧寛澤助教授、朴仁勇講師（現在は延世大教授）、朴二恵博士で、鼻疾患の研究に全精力を注がれた。

四、朴大統領閣下と私

昭和五十三年二月に盧寛澤教授より私に電話があった。「今、帝国ホテルに滞在中、一度会いたし」。帝国ホテルで久闊を叙すると、内科の関献基教授のお伯父さんの鼻が悪いので、一度 Seoul に来て診察をと依頼された。

四月一日に渡韓すると患者さんは朴大統領であった。こわくなって直ちに帰ることに決めたがパスポートはなく、止むを得ず四月二日に青瓦台の官邸を訪れた。その際、see 大学の李博士というのが私の假の名前であった。

医務室で拝診したところ、ひどい蓄膿症で膿汁が咽喉につきまり強固な痂皮を形成し、今迄に五回位手術をうけた経験があるとの事であった。

何とか日本に帰らねばと考えていた私は、閣下とお話しをしている中に、この方のために努力をして治さねばならぬという心境になって来た。これは一見して織田信長のような鋭さがあり、また、水戸黄門のような柔和さ

もあり、閣下には人に努力せねばならぬという気持にさせる何ものかがあった。それに閣下の服装、時計などを拝見するととても質素であり、それだけでも強い感銘をうけた。

五月に手術を、六月に診療をさせて戴き一応治療を終了したのである。

翌五十四年九月に駐日韓国大使の金正廉閣下を通じ、大統領閣下より私共夫婦が非公式な御招待を戴き、夫婦で十一月二日に渡韓の予定の所、金戴圭KCIA部長による大事件が起きた。私共十一月下旬に墓参に国立墓地を訪れ、閣下御夫妻の御冥福を祈った。

五、崔先生について

崔先生は朴大統領と親交があり（亡命してきた人が大統領と面談できるといのが崔先生の崔先生たる所か！）、私のことを御存知であったようで、昭和五十五年の一月十九日に突然、私の外来に現れて耳漏が出るので治療をと云われた。先生はカトリック医大設立代表をされ、金炳宇教授共非常に親しい仲であるので共通の話題が多く、其の後は御昵懇に願っている。

患者さんとしての崔先生の話は別として、私が崔先生より得た印象を若干述べて戴くことにする。

本年四月にある患者のことで、私は Seoul に出かけたところ、宿泊したプラザホテルに崔先生がアメリカより到着した。

忽ちにして、私の予定は変更となり崔先生のお伴をして深夜から暁方の Seoul 市内特別視察となった。

これからその視察のあらましを記述するが、その前に順序としてSeoulでの宿泊について述べる。

(1)、プラザホテルでの崔先生の部屋

Seoulでは崔先生は常にプラザホテルの一四五二号室に宿泊するが、その部屋からは市廳と徳壽宮のよく見える、角部屋である。

その窓からは徳壽宮、旧ロシア公使館、昌徳宮、青瓦台が見渡せる。かつて、先生は窓から外を見ながら一八九五年十月の三浦梧楼公使の計画による有名な閔妃虐殺事件、一八九六年二月の高宗のロシア公使館への待避事件について可成りきつい調子で私に語りかけ、この部屋から窓外を見ていると、如何にすれば韓国にとり最善の途となるかを考えさせられると述べられたのが印象的であった。

(2)、南大門市場での買物

午前四時頃の南大門市場の活力はすさまじいもので、一般民衆のエネルギーのすごさを知った。先生と婦人服の卸問屋街を歩くと、先生は女子留学生達のために数十点の買物をし、「日本に居る留学生のためになるし、韓国経済の発展のためにもなる」と一言。

(3)、Seoulの城壁に沿い車で視察

Seoul市周囲の城壁沿いにSeoul防衛部隊が多数駐とんし、朝の訓練にはげんでいるのを見て、韓国の持つ「侵

略は二度と許すまじ！」の實際を肌で感じ、日本の現状と比較して羨ましかった。

(4)、飾り窓の女

タクシーの運転手が Seoul にも飾り窓の女が居るので案内するというので、見に行ったのが朝の五時三十分頃である。車から降りると若い頬が林檎のように赤い、やや丸々とした女の子（十八、九才？）が崔先生の所に来て何か話しかけた。

先生は二、〇〇〇ウォンを渡しながら、昨夜は客にあぶれたので、寝酒を呑むお金が欲しいというのだと私に説明した。

一つの国にあのような女性が居るということは、まだ政治が不完全であり、今朝はとても淋しい！！何とか早く、あの様な女性が居ないですむ韓国にしなければと、独白された。

後で聞いた所では、この飾り窓の女性は釜山、仁川という国際港と Seoul でのみ官許されたものであり、吾々の知る人身売買はなく、西独などと同じ個人の意志でインスタント恋愛をしているものだというが、やはり売春しないで済めばそれにこした事はないのである。

(5)、韓国料亭「風谷」での朝食

その後、車中より十字架を見つけた先生は丘の中腹にある教会に車をつけさせた。

朝の礼拝をしたいとの事であったが、何回も案内を乞うても早朝のためか教会の人が出て来ないので、さすが

の崔先生も早朝のお祈りを諦めて車を大通りに出させた。車を三、四百米走らせると突然にターンさせ、風谷という韓国風建物の一軒の料亭の門前に停めさせ、その大きな門扉を叩き出した。

どうしたのですか？　と問うと、足川先生ここで朝飯をたべようと云う返事。

暫くして扉があき玄関から室に入ると、そこは六十、七十歳位の女将とおぼしき人の部屋で、韓国語のやりとりで不明だが、多分、おい女将さん、朝食をたべさせろ！　という事であろう。

お馴染さんらしく女将と雑談する。間もなく妓生？も来て、こんなに早朝からお座敷なんて初めてよとの事（崔先生の通訳）。当然であろう。

妓生たちは朝の呼出しが早すぎるので、女将が死んだのではないかと疑ったそうである。

花札をして時間をつぶしていると食事が運ばれて来た。焚きたてのご飯と数多くの副菜、野菜が多くてお腹には丁度良かった。

私も朝の六時半頃に料亭を叩き起こして朝食を取ったのは初めてで、崔先生の顔の広さと茶目気の多さには一驚したものである。

この特別視察で先生は、民族の持つエネルギー、防衛、きわめてこまかな政治、多少のユーモアという四点をそれとなく私に教示された。

六、まとめ

朴大統領が韓国を貧困と混乱から脱却させたという点については、日本の左翼のジャーナリストも認めている。その政策に強引な所もあったと私も感じるが、国民所得を七十ドルから年間一千ドル以上にまで向上させた。

これはイギリスのチャーチル、フランスのドゴールと同様に、混乱から国を脱却させた世界的な偉大な政治家である。

しかし、ブルトナーザーの走ったあとを、きめ細かく整理する政治が必要であり、現在の韓国民衆はそれを求めている。

その際、なにが必要か、なにが悪かを見定める「マナコ」が大切で、これが出来るのが崔書勉先生である。細やかな心くばり、官僚的な紋切型でない情のこもった政治が出来得る方であると信じているので、私は今後も御交誼を得たいと思っている。

『韓』創刊の頃のこと

阿 部 洋

(国立教育研究所)

一九七一年はじめの頃だったか、たまたま延世大の金蘭洙教授が私の研究室を訪問された時のこと、東京韓国研究院のことが話題となり、最近創立された研究院には韓国関係の資料が豊富に揃い、研究室なども整備されているのでぜひ一度行ってみるようにと勧められた。これが崔書勉先生のお名前をうかがった最初である。

実際に崔院長とお会いしたのは、それから二、三ヶ月後渡部学先生から電話があり、このたび崔院長から相談をうけ、韓国学に関する専門の雑誌を出す計画を立てているので協力して欲しいとのことであった。先生には学生時代から韓国教育史の研究に関して指導・助言を頂いてきたこともあり、そのご指示とあれば可能な限り協力したいと考え、早速先生のお供をして韓国研究院をお訪ねした。当時研究院は麻布飯倉の外交史料館の裏のところにあり、福沢諭吉ゆかりの建物には見事な風格があった。

部屋中あふれんばかりの書物の重みで床がギシギシときしみ、今にも抜け落ちそうな感じの応接間で初めてお目にかかった崔院長は、エネルギーと自信に満ちた風貌で、韓国史や日韓交流史の諸問題について論じ、その研

究や関係資料の収集をとおして日韓両国間の相互理解の増進に役立てたい、韓国研究院をそのための一大センターに育てたいと、将来への抱負を熱情をこめて語られたことを今でもよく覚えていいる。この情熱に圧倒される思いで、私も雑誌の編集のお手伝いをさせて頂くことにした。

『韓』の編集体制がどうやら整ったのは七一年も暮れ近くになってのこと、木内信胤先生の「創刊の辞」を掲げた第一号が七二年一月一日付けで発行され、以後編集委員長渡部先生の見事なリーダーシップの下、毎月やや遅れ気味ながら刊行が続けられた。現在渡部先生は病床に伏しておられるが、当時は実に意気盛んで、韓国学研究の発展のために全エネルギーを注いでおられた。とは言え、それほど多くもないスタッフで月刊誌を刊行することはさすがに大変で、始めの頃はほとんど毎週のように編集会議が開かれた。その後編集業務が軌道に乗り始めてからは月二回の開催となった。

編集会議では、議題に沿っての討議もさることながら、会議後みんなが一杯飲みながら勝手におしゃべりをする放談会が実に楽しく、新しいアイデアなどそこでの雑談から生まれることが多く、夜遅くまで会が続くこともしばしばであった。院長は研究院の運営と機関誌の発行とを明確に区別され、編集の内容や方針について直接口を差し挟むことは控え、あくまで編集委員会の自主性を尊重された。そのお陰で、我々は自由な構想に基づいて、学術性の高い韓国学に関する内外の論文・記事を取捨選択し、系統的に編集して『韓』をユニークな研究誌に育てあげることができたと思っている。編集にあたっては原則として毎号特集形式をとることにし、その場合日本国内の研究者のほかに、李絃淙、李光麟、崔永禧、兪昌均など著名な韓国の先生方にも適宜参加していただいたり、意見聴取などでご協力をいただいたりしたが、このようなことができたのも院長の配慮によるものであ

った。

こうした編集努力の結果として、全体として見た場合、『韓』は期せずして韓国学の日本語版エンサイクロペディアの体をなすこととなり、ここで各種ハイレベルの研究論文や資料が容易に利用できるように、現在でもあちこちの大学で学生の卒業論文指導などに大いに重宝がられているのである。通巻一〇〇号の発行を機に一応の役割は果たしたとして、以後四年余りにわたり休刊したにもかかわらず、一九八六年五月末には季刊として『韓』が復刊されることになったのも、これまでの同誌の韓国学研究の上での不可欠の役割が関係者によって認識され、これらの熱烈な支援や要望があったからこそである。その間、復刊に向けての崔院長のご尽力には、編集委員一同全く頭が下がる思いであった。

筆者個人としても、『韓』の編集に参加したことで多くの恩恵を受けた。まず第一に、内外の多くの韓国学専門家の方々の面識を得、多くの教示を得たことである。その中には阿部吉雄先生や李瑄根先生などのようにすでにこの世にない方々もある。これらの先生方とは研究会や各種の会合で一緒したが、ことに七一・七二年の二回にわたって開催された日韓文化シンポジウムや七九年の韓国学国際学術会議では、各国からの専門家と直接意見を交換することが出来、韓国学研究への新しい目を開かせてくれた。

しかし、これにもまして筆者にとって有難かったのは、資料面での各種の恩恵である。周知のとおり、崔院長は金玉均、金九、安重根などの研究者としても著名で、しばしば各種の新資料を発掘して学界に大きな貢献をしておられるが、こと資料に関しては何事につけ貧欲そのものである。そのため、研究院の書庫は正に各種資料の宝庫となっており、ぶらりと書庫に入り二、三時間そこにいるだけで、なにがしかの新しい知見を得ることがで

さる。但し、図書類の分類・配列が独特な「崔書勉式」ですこし慣れる必要があるし、それよりも院長がその日の気分で（？）、時々書庫の図書類の配列を変更されるため、久しぶりに書庫に入ると前回あったところにその資料がなく、もう一度捜し直さねばならないことがよくあるのである。然しそうなるといっそうその資料が見たくなるのが人情で、書庫の中を探しまわっている中に思いもかけないような新資料が別の棚から見つかるということもしばしば体験している。実は、福沢諭吉の朝鮮人留学生教育への関わりについての筆者の研究なども、こうした経緯できっかけをつかんだもののひとつなのである。

崔院長は、日本ご滞在が現在すでに三〇年になる由。今後もぜひ日本での韓国学研究の先導役を果たし続けて欲しいと切望している次第である。

崔書勉先生の事

安藤豊祿

(安重根研究会会長)

崔書勉先生に御目にかかったのは、多分、昭和三十九年（一九六四年）頃と思う。東京に於いてである。私は沢山の韓国の人に接して居るが、此の位い日本語を而も精確で品の良い日本語を話す人に未だ御目にかかったことがない。而も何処か方言のトーンのある日本語が何とも言えない良さがある。

これが初対面の印象だった。その後何度かお話しする間に、その最初の印象が間違いで無かったことが更に確かめられた。

崔先生の事は其の後韓国に行く度に段々に聞く機会があつて、その何れをとつても容易ならざる人材であり、学者であり、且つ志士であることが判つて来た。

好い人が日本に来て下さつたと言うのが私の偽はらざる感情である。

韓国研究院の御仕事は大層大切な仕事である。集められた二十万冊と言はれる文献丈けでも、両国の為にどれ丈け大切なものか計り知れないものがある。

交友は内外に山の如く情報が集まることも抜群である。何しろそのたゆまざる努力が物を解明する原動力だから、こんこんとして尽きる事を知らない。

安重根義士に関する先生の深い見識に就ては知る人ぞ知る。併し、此の事に関する先生の努力を静かに眺めて見ると、よくもあれ丈けの情熱を傾けられたと思う。今や多くの文献が続々として集められて居るが、その何れを見てもほんとうに頭が下る。

韓国の問題は今後尚頭の痛い事が沢山あるであろう。斯る折柄、崔先生の御自愛と御健康を祈ること誠に切なるものがある。

崔書勉先生と私

稲葉 継雄

(筑波大学助教授)

一九七四年八月下旬、当時高麗大学大学院博士課程に留学中であった私に崔先生から国際電話が入った。「筑波大学に新設される地域研究研究科の教員にならないか」とのお話であった。「韓国研究では飯が食えないから留学は止めたほうがよい」という九州大学時代の指導教官の忠告を振り切って郷関を出た私には、帰国後の就職の不安が常に付き纏っており、また、陸英修女史殺害事件を契機とする反日デモ、そのために大学は休講続きという情勢に少々嫌気がさしていた頃でもあったので、私は即座に承諾の返事をした。数日後、酒井忠夫筑波大学教授(当時)から書面で正式の通知があり、私は、九月一日付で高麗大学を中退、帰国した。

帰国後、直ちに韓国研究院の研究員となり、主として『韓国にとつて日本とは何か』(一九七七年 国書刊行会刊) の翻訳と『韓』誌インフォメーション欄の執筆に従事し、七五年四月、地域研究研究科の発足とともに筑波大学に奉職することになった。筑波大での最初の五年間は、予期に反して冷や飯も随分食わされたが、それともあれ、筑波への道を開いて下さったのは他ならぬ崔先生であり、この意味で私の人生の恩人である。お蔭で

今日の私は、研究と教育の内容がほぼ一致するという、日本の韓国学研究者の中では希有な幸せ者である。

韓国研究院を辞職した後も、私は一貫して『韓』の編集委員を務めさせていただいているが、その間、崔先生には大病・交通事故という災厄があり、『韓』も一時休刊を余儀なくされた。しかし、崔先生は、度重なる危機から不死鳥の如く蘇られ、『韓』もまた、八六年春、月刊から季刊へと装いも新たに再出發することができた。韓国研究院が「研究院」である限り、学術誌たる『韓』の発行と付属図書館の運営は、いわば生命線である。この二大事業のうち、私としては『韓』の内容充実に微力を尽くすことが崔先生への報恩にもつながると思っっているが、そのためにはまず『韓』の、つまりは韓国研究院自体の存続が大前提となる。院長あつての研究院であつてみれば、崔先生の今後ますますのご健勝と、とくに財政面でのご活躍を祈つてやまない。

崔書勉先生の誤解

上 草 穎

(目白学園常務理事)

崔先生は実に不可思議な方である。ご自身のご専門の分野の他、驚く程不偏な広い知識や、情報に優れ、又日本国内の対人関係や人脈はあらゆる分野に及び、時々、生れる前から日本に居られたのではないかと疑いたくなる位である。

処が、去る七月六日久し振りに出席した国際関係共同研究所の定例研究会で、韓国の本年の学生運動の講演の後、崔先生が私のことを「学生運動を鎮静化させる専門家」のように紹介されたので、一寸戸惑ってしまったが、その時始めて、崔先生もたまには誤解されることもあるのだなと安心した次第である。

私と崔先生との出会いは今から十六年前、東京で開かれた日韓文化シンポジウムのご案内を戴いた時からである。会終了後何回か韓国研究院を訪れ、崔先生の知遇を得たが、私共の学園は現在は女子学園であるが、戦前は男子の商業学校であり、当時仲々入学がむづかしかった韓国の子弟の方々を大勢受け入れたため、現在韓国には数百名の卒業生が居住しておられるので、その方々への連絡や、招聘などにいろいろとお骨折りを戴いたのであ

る。

そのような訳で、研究院の研究会員とは一寸変ったお付き合いをさせて頂いたが、数年前と記憶するが、ある会で崔先生が私のことを、「学園紛争の鎮静化には独特の力のある人で彼が赴くと忽ち静まるといわれている人」と紹介された。私は学園紛争の意味が一寸違っているのではないかと思つたし、また崔先生にはそのような話をしたことはないし、どこから聞かれたのかと驚いたが、あなたがち違つているとも言えないので敢えて否定はしなかつた。

それというのも、学生運動の荒波が大学や学園を吹き荒れた後、静けさを取り戻した学園に新たな嵐が巻き起つたのである。それは列島改造論や石油ショック等によつて引き起こされた物価の異状高騰を背景にした労働攻勢であり、労使紛争であつた。殊に私立学園にあつては本来の労働組合の範囲を逸脱し、学園の教育理念を無視した教員の自由な教育権の主張や、特殊なイデオロギーの導入を要求する過激な左翼系の教職員組合が続出した。学生運動においては、一部の教職員を除いて、大多数の教職員は学園と一体になつて鎮静化に努めたからよかつたものの、労働攻勢となれば組合員が皆相手である。理事者や幹部は過激な労組の夜打ち朝駆けの攻勢に、自宅に帰れない人まで出る仕末であつたが、品格を重んずるミツシヨン系の学校は特にひどく、教育は荒廃し、民主化の美名の下に、教育の内容まで組合管理になる学校まで現れた。

偶然にも私は当時、私学の教育権・自由権を研究していたので、日教組私学部や過激な私学の組合の理論を次々と論破していった。その頃、埼玉のルーテル派の学校の労働紛争をさる教授に頼まれ、私はクリスマスチャンではなかつたが、理事長の委任を受けて県の私教連（私学の組合の連合会）と対決し、数ヶ月でルーテル派の教育

理念を否定する教員を総て排除した。

その後、今度は愛知県のカトリック系の学校において、日教組理論の採用を要求する組合が現われ、カトリック精神の危機であると支援を頼まれたので応援に赴き、数回の団交の後要求を撤収させ平穏を取り戻した。その後何校かの学校を支援するうち、日教組私学部や私教連から、「上草理論」の異名を附され、岐阜県の短期大学や、静岡県の西部の学校などでは、私が赴いて学園幹部と打合せしただけで、翌日からの無期限闘争が消滅するなど事態も発生した。

崔先生は敬虔なカトリック信者なので、恐らくカトリック系の方から私の学園紛争収拾の実績を聞かれ、それが労使紛争ではなく、学生運動と誤認されたのではなからうか。

崔先生程の人でも、たまには誤認されることもある（人並みの処もある）のだと思い、大いに安心した次第であります。

私だけが知り得た素顔

大谷 吉彦

(評論家)

訝しい話になるが、西暦で下一桁が「九」の年は、なぜか歴史に残る事件や変事が多い。一九〇九年には伊藤博文が、一九七九年には朴正熙が、奇しくも同じ十月二十六日、銃弾で斃れている。いまは“普通の人”が新しい親善関係を構築しようとしているが、日韓のあいだには十年きざみで不幸な事件や騒動が相ついだ。

崔書勉院長とは、十七年のつき合いになるが、その間、末尾に九がついた西暦年は一九七九年だけである。一回しかなかったこの“当り年”を抜きにして、院長のことを記すことはできない。

それにしても、歴史は魔物である。あるべからざるところに結節をつくるからだ。中興の祖といわれた朴正熙の非業の死も、その一つのように思えてならない。当時、私はサンケイ出版の役員をしていたが、「正論」の編集長も兼ねていた。事件突発の翌二十七日早朝第一報を受けたが、大統領射殺を誘発した原因や背景を説明する報道は皆無に等しかった。いらだつマスコミが現地取材を急ぐのはあたりまえである。ビザを申請しても、雲をつかむような話で、とりとめのない日々が幾日もつづいた。私も特派員時代の経験から、入国のむずかしさについては、あるていど理解していた。戒厳令を敷いた軍当局が、国辱的な弑害事件の取材を簡単に許すわけではない

思ったからだ。けれど、なんとかして現地へ行きたいという熱い思いが一計をめぐらせた。

院長の出番である。道理さえ通れば、いやとはいえない院長の気質にかけることにした。頼むのは、国葬の日取りが決まってからだと自らにいいきかせながら、発表されるや否や電話を入れた。幸い院長は研究院にいた。

「葬儀にはいついくの……」

「いまのところ一日（十一月）を予定している」

「一緒に連れてってよ」

しばらく間があった。それから院長のちよつと高い声が返ってきた。

「あんたほんとにいくの……」

「もちろんだよ　これからパスポートと写真をもっていく」

こんなやりとりがあつて、ビザの発給を受けることができた。私自身、院長の計らいもあつて、二度ほど青瓦台を訪れ、朴大統領の訶咳に接している。弔問するのは当然で、黒の礼服を用意して成田を発った。機内の院長はいつもより緊張気味に見えた。冗談をいって笑わせることもなく、断片的な情報交換をしても言葉少なく、終始弔問に向かう姿勢を崩さなかった。

ソウル入りしたのは正午まえだったが、いつ何が起きても不思議でないという判断から、私たちの行動は個々に、ホテルも別々にとつた。ところが、その夜某所で院長から聞いた情報には、目を見張るものがあった。先入感を排した事件の全容は綿密で、分析と観察は的確で鋭かった。それに意外性をみつける独特の嗅覚で、軍内部の動きにまで及んだ。私は興奮して思わず身体中が熱くなつていくのを感じた。ソウルについたその夜のうちに、

紛れもない第一級の情報を入手できたからである。それにしても、ホテルのまえで別れてから六時間ほどしか経っていない。機内でも「すべてはソウルについてからだ」といつていたが、これほどの一次元情報をどこでどう蒐集したのだろうか——私は改めて院長を見詰めた。感性より理性を重んずる行動人だ、と思った。

翌日、私はさわやかな朝を迎えた。前夜聞いた話で、取材のヤマを越した安心感のためだろう。しかし、取材はまだ残っている。飛び出して夕方ホテルへ戻ると、院長から「通夜に行けるようだ。陸（寅修）さんのクルマが迎えにいく」という連絡を受けた。午後七時まえ、私は威儀を正して青瓦台へ向かった。夜のとぼりが下りた街並は静かで暗かった。官庁街に入るとさらに暗く、青瓦台ちかくではついに漆黒の闇に変わった。政務室で、食堂で、故人と真剣に語り談笑したありし日の光景が、走馬灯のようによぎる。

遺体はクルマ寄せから入って左側の中広間（謁見室）に安置されていた。窓際や壁寄りに約百人ばかりの人が首を垂れていたが、その姿は、生きとし生けるものが悪く、故人だけが聖者だという雰囲気を醸し出していた。両手を合せて冥福を祈り、深々と頭を下げて別れを告げたあと、廊下をはさんだ反対東側の部屋に案内された。大きな円型のテーブルと椅子があり、約二十人ほどの人が座っていた。旧知の張都暎元首相から、遠路の弔問を謝するあいさつを受けただけで、あとはお茶ひとつでず、沈黙だけが続いた。先にかけていた院長は、ただ一人東側の窓に向かって、心もち前かがみに立っていた。私が座ったところからは、右横顔がかすかに見えたが、部屋中が私語を禁じているような空気なので、とても言葉などかけられそうにない。

と、窓際のほうからむせび泣く声を耳にした。私は一人しか立っていない院長を見た。そして窓ガラスに写っている院長の頬に、つき合ってから始めて、一筋の涙が流れているのを見たのだった。私はわが目を疑った。

院長は泣いていた。右手を固く握りこぶしにしたまま、その頬を涙が滂沱と流れていた。

“鬼の目にも涙”に似たこの「崔書勉の涙」は、院長と別れて、一足先きにソウルを離れた機中でも、後光効果として残った。院長とはいまだにこの涙について話し合ったこともないが、私が考えたのは、弔問の直後でもあり、どうしても人間の生き方につながるものであった。それは、現代人は時代に遅れることを極端に怖れているが、その不安から脱け出すために、時代というものを自分の都合のいいところに止め置こうとするのではないか、ということである。もしそうならば、むかしからいわれているように、人間は天地自然の間に存在していると考えたほうが、どれほど悩まされることもなく、安心した生活を送れるかということである。

この年（一九七九年）は、また院長の大演出によって「義士」になった安重根の生誕百年目に当った年でもある。安重根と同じ手相（両肘掛）をもつ崔書勉院長！

こんどは、あなたの生き方を誰もが刮目しているのです。

押しかけ弟子入り

小河原 史 郎

(日韓協力委員会
理事・事務局長)

『無尽蔵』という言葉がある。

院長のお腹を他人が「太鼓腹のようだ」と言うと、院長は厳かに「この腹には知識が詰まっている」と満足そうに言うや「さあ、飲みましょう！」と、回りの人達と杯を高く上げ、飲干したコップを頭上に逆さに翳す。これが、院長の夜の代表的な姿だが延々と午前二時でも三時迄でも続く。

一方、研究院での院長は朝九時から六時きっかりまで、鉄を右手に資料の整理に余念がない。その間、日韓の官民間わず千客万来である。誰言うともなく、院長は一体いつ眠るのか？ という共通の疑問を持つのが当然であろう。私はホテルオークラの裏手にある院長のマンションで、数カ月居候を決め込んだことがある。それは昔の人が、書生をしながら師に教えを乞うたのに倣った押しかけ弟子入りであった。

昭和三十三年に、岸内閣の特使として日本人第一号で訪韓、時の大韓民国大統領・李承晩閣下に会い、日韓国交回復に尽力され、その後日韓協力委員会を創設された、いわば韓国問題のエキスパートでもあった矢次先生がある時取材に訪れた新聞記者に対し「その問題なら、麻布の崔書勉院長の所に行くがよい」と言われ、当時『天

下の矢次』と思っていた先生から、その時初めて崔書勉という名前を耳にした。

昭和五十八年に矢次先生の亡きあと、故岸信介会長から、日韓関係に専念し日韓協力委員会の活性化を命ぜられた時、それが頭に残っていたので、「よし韓国及び韓国人を理解するにはこの院長の全てを吸収してみよう」と敢行したのが、前記の居候である。

十六世紀の韓国に李退溪という学者がいたが、院長は正しく現代の退溪である。

昼の退溪と夜の退溪は、西洋的にいえばジキルとハイドと説明するのが妥当か。そして院長の睡眠時間は平均四時間と云える。

だから、私の見た院長の滞日三十年は、今日から明日への時間がまことに短く、従って並の人の五十年間を日本の社会で活躍したのではないかとさえ思う。

はかり知れない知恵と知識は、凡人にはとても汲み尽くせないものがあるが、私はまだまだこれからの日韓関係のために、院長の『無尽蔵』のお腹を活用させてもらおう。

居候体験も珍しいが、院長と海外旅行をした人も少ないだろう。それも行き先がモスクワ、モンゴルとあつては……。昭和六十二年十月二十一日〜二十七日の間、私は院長とモスクワ、モンゴルを訪問した。正確には二十二日からである。というのは、新聞報道もされた如く、モスクワの七十五年ぶりという記録的な霧のため成田出発が丸一日遅れたからである。しかし空港に来てしまつてからの事情のため、一夜成田で時間を過ごす羽目になった。こんな時でも院長は無尽蔵のお腹に知識を詰め込むことに怠りない。早速、佐倉市の国立博物館見学を行ったのだ。

千葉県出身の私にとって民族博物館の見学が出来たことはまたとないチャンスで其の意味では貴重な出発遅延であつた。

今回の院長のモンゴル訪問は、韓国地図のルーツを求めることであつた。十五世紀作られた西洋の古地図では、韓半島が島として描かれている。地図学者は、鴨緑江、図們江を大きく書きすぎたためという説を樹てているが、院長にいわせると、これは地図学者が歴史を知らないための誤つた説だという。蒙古襲来時、高麗は時の王様を江華島に移した。蒙古は陸上では強大であるが、海戦は駄目で江華島を何度も攻撃したが遂に成功せず、王様は降服しなかつた。当時、高麗の王様が無敵の蒙古軍の襲来に負けず降服しなかつたことを見て、西洋人達が、その理由として王様が島に逃げ込んだからだろう、そうすると高麗という国は島ではないかと考えて、韓国を島として地図に描いたのであろう、というのが院長の説である。そして、その当時の資料がおそらくモンゴルの残されているに違いない、その資料をぜひ発掘したい、というのがモンゴル行きの目的だったようである。

モンゴルは共産圏である。当然韓国とは国交が無く、今回韓国人である院長がモンゴル入りをしたのが個人では韓国人として初めてではなからうか。院長から訪モの計画と同行を求められた私はすぐ衆議院議員長谷川峻先生に相談をした。というのは日韓協力委員会理事長である先生は我が国をして（昭和三十六年）国連加盟十八番目のモンゴル承認国（米国は昨年）にされた立役者で現在日蒙議員連盟の会長でもあり、かつてモンゴル日本人墓地墓参団团长として訪モしているからだ。先生は崔院長の訪モを大変驚きながら喜びかつ私の同行を激励して下さい、大田モンゴル駐在大使宛てにわざわざ御紹介状を書いて下さつた。

尚またモンゴル迄の空路はモスクワ経由である。そこで私はソ連の入国ビザも取つて行つた方が何かと都合

が良かろうと考え末次一郎先生に話をしたところ、出発前日であったにもかかわらず御多忙のところをモスクワと東京の大使館に電話をかけ、これを半日で取得して下さった。恐らく末次先生は、崔書勉なる韓国人にクレムリンを見せたいと思われたのかも知れぬ。長谷川、末次両先生の御高配を院長は「韓国人の出来ないことを日本人がどれだけ協力してくれたかと思うと感謝にたえない」と言われたが、院長の言葉は日本人として私も嬉しかったし、両先生あつての今度の旅行といつても過言ではなくあらためて深くお礼を述べたい。

成田から十時間、やっとモスクワに着いたかと思いきや、どうもアナウンスが「レニングラード、レニングラード」と言っている。飛行機はモスクワが霧のためレニングラードに下りてしまったのだ。空港で待つこと五時間後に飛行機は突然出発、ようやく夜遅くモスクワに到着した。このようなこともあるかと思ひ、東京出発にあたり日本航空本社斎藤秘書室長に、モスクワでの宿泊をお願いしておいて良かった。ビザとホテルが予約していなかったら空港から外に出られずロビーで一泊するところであった。

一夜明け、在モスクワ大使館の都甲公使お車をお借りし、赤の広場、クレムリン、モスクワ大学、研究機関を大急ぎで回り、深夜十二時出発のアエロポートで目的地ウランバートルに現地時間午後二時到着した。ウランバートル到着時院長の第一声は「オ！空気がおいしい！」であった。「この機会に煙草を止めよう」ここまでは良かったのだが、出迎えに来て下さった日本大使館田附参事官が「空気がいいので煙草がとってもおいしいんですよ」と言われるではないか！空港で一同大笑いしたものである。

二十四日～二十七日の四日間モンゴルに滞在したわけであるが、院長も私もすっかりモンゴルのファンになった。これを評して院長は「蒙古酔い」と言い、或いは「蒙古は私の第三の祖国です」とも言う。院長によれ

ば蒙古人と韓国人は非常によく似ており、南方人種の血が混じっている日本人より似ている割合が大きいらしい。また言語もよく似ているという。モンゴル語の発音には「○○チ」というのが多いが、さしあたりキムチは全くこの種の言葉であろう、モンゴールの漬物貯蔵法がキムチのそれとよく似ているのを目にして院長は、我が意を得たという顔であった。元王朝第十一代皇帝、即ち最後の皇帝である順帝（トゴンティムール）は、四人の妃を擁していたが、うち奇妃のみが子を産んだ。その奇妃は韓民族であったという。順帝は元王朝滅亡後ドロンノールに逃れこの地で没したが、奇妃と順帝の子が北元を樹て、以後四人の妃のうち必ず一人は韓民族の女性をたてたそうである。この北元が現在の外モンゴルと内モンゴルへ連なっているわけである。

院長いわく、韓文化の一部は蒙古を源とするわけだが、このことを率直に認め蒙古と韓国の諸学会に導入せねばならないとの感を現地で一層固め、そのため凡ゆる労をいとわないと決心しようだ。そして韓国と蒙古の関係を名付けて「韓蒙関係」でもない、「朝蒙関係」でもなく、「麗蒙関係」にしたいと提唱された。

麗蒙関係研究の第一歩となる古地図資料はモンゴル国立博物館の奥深く秘められていることが判明した。

我々が手にとって調査出来なかつたのは残念である。というのは、モンゴルは一九四一―四五五年の間に蒙古文字をロシア文字に完全に改変する政策を採つたため、従来の蒙古文字資料を全て博物館の奥深く秘蔵してしまつていたためである。いた仕方なく、日本大使館員で蒙古文字を読める花田参事官に後を托した。これについては来年早々ソウルで開催される韓国地図学会で院長が報告する筈である。

大田日本大使をはじめ花田、田附両氏には大変お世話になった。院長はこれについて、「同朋である小河原さんよりもむしろ韓国人の私を大事にしてくれた。モスクワの日本大使館でもそうであった。だから韓国人は、自国

の大使館の無い地域に行ったら、日本大使館を頼るがいい、日本人よりも大事に保護してくれるのだから」と感激されていた。しかしこのような配慮は日本のみが行ったのではない。帰路トランジットの北京でも起きた。

北京空港で院長のパスポートを見て中国の役人達がワイワイ騒いでいる。何故騒いだのかといえば国交のない中国の通過ビザを韓国人のパスポートに押ししたら、院長が韓国で困るだろう、押したら気の毒だ、しかし規則がある、さあ、どうしようというところらしいのだ。院長は押ししてくれても構わないと言ったのだが結論が出なくて、とうとう上司の判断を仰いだようであるが、上司も困った、しかし、結局、規則が負け、配慮が勝って、院長のパスポートに通過ビザは押さなくともいいという極めて友好的な措置になったのである。北京はいわば韓国ブームであった。入国管理局の女性までが盧泰愚・金大中の写真を持って来て、大統領になるのは誰かという話かけて来る。これはどうもサッカーの波及効果にも依るらしい。オリンピック出場権を賭けて中国と日本が対抗し、中国が勝利を収めてソウルへ行く切符をしたというので大騒ぎだったのである。

院長はこの現象について「国と国の関係にスポーツは大変な意義がある」と感にたえないようであった。

今回のモンゴル旅行については、回りの皆さんが大変心配して下さった。何しろモンゴルなのである。まして国交のない韓国人の院長はどれだけ心配であつたらうか。しかしモスクワといい北京といい、勿論モンゴルといい、これではまるで国境が存在しないことを確認しに行ったようなものではないか。驚くべき話がもう一つ、アメリカ人がモンゴルにハンティングに来るといふ。大挙してやってくるのだという。ウランバートルのホテルのロビーで米国人女性と出会って話をしたが、彼女は U. S. News and World Report 東京支局長でアメリカがモンゴルを承認したので米国民にモンゴル事情を知らせるために取材に来たのだという。素晴らし

い話である。

院長ともども後髪をひかれる思いでモンゴルから帰ったのだが、院長はすぐまた行きたいと言う。それも一月の厳寒期に行きたい、何故なら厳寒期のモンゴルが一番モンゴルらしいからということだ。モンゴルには韓国人が在住していて、蒙古語で韓国人のことを「ソロンゴ」というが、恐らく「新羅」（シルラ）がなまったものであるというのが院長の仮設である。次回の院長のモンゴル訪問は、在蒙韓国人の取材調査になるのではなかろうか。院長の飽くなき探究心に脱帽する次第である。

なお、この紙面をかりて院長に一つお詫びを申し上げたい。ウランバートルのホテルで朝目覚めると、院長が必ず次の間の部屋の床に毛布を敷いて寝込んでいる。私の「いびき」のせいなのである。たいていのことに驚かぬ院長が「豪快ないびき」と表現してくれるぐらいだから、相当ひどかったのだろう。

居候を決めこんでいた時もそうであつたに違いない。思えば冷汗三斗の思いだ。

最後に、昭和二十年終戦を迎えながら抑留生活と強制労働の中「異国の丘」に散った日本人墓地に参拝し、風すさぶ広野に長谷川峻先生の直筆「諸士よ祖国日本は……」の碑を前に祖国の発展と平和を報告し、御霊が安らかに眠らんことを祈念してモンゴルの旅を終えたことを御報告させて頂く。

お墓も隣り合わせ

金山政英

(第二代駐韓大使国際
関係共同研究所所長)

駐韓大使を最後に外務省を退官したのは一九七二年であったが、韓国研究院を訪ねたのは、それから間もないときであっただろう。

私の大使としての最後の任地韓国で過ごした四年間は、日韓関係が日本にとって肝要なものであるという信念を抱かせ、自分の第二の人生を日韓親善のため尽くしたいと密かに決意していた。

当時私の周辺では、退官後のポストとして、ヨーロッパの日本館館長にとの動きが私の為にあつたらしい。日本館館長のポストは、当時公使級であったものをわざわざ私のために大使級に格上げまでしようという具体的お膳立ても進んでいた。有り難いお話であつた。この切角の御好意をお受けしてヨーロッパに行つて、その帰国後に日韓親善事業に従事するという考えもあつたろうが、それではなんとなく気がすまないという気持ちに駆り立てられていた。そうこうしているうちに東京に韓国研究院があることを知り、訪ねることになった。私が私的に崔書勉院長に会つたのはこの時が初めてである。

当時飯倉にあった研究院は旧福沢諭吉翁令嬢邸という由緒ある建物で、研究所として誠に相応しいものであったが、何分、増え続ける一方の図書の収容と火災時の対応を考え、現在の三田に移転したのである。この飯倉時代、机、椅子、本棚などの設備は全て院長が自分で車を運転して恵比寿の中古家具センターから買ってきた中古品であった。

その中で院長が初めて新品を買ったのは私のための机である。「大使を勤めた金山さんに中古では申し訳ないから」ということであった。良いもの、良い店といえは当時の院長の常識では三越であったらしい、その三越に行つて私が使う机や椅子を買い込んで来てくれたのである。

院長は私を迎えた時、「これは大変だ」と思ったという。大使経験者にはそれに相応しい待遇をしなければならぬと考へたようで、理事長の木内信胤さんにすぐ電話したという。今は無くなったが、泉岳寺にあったコリアハウスという料亭で早速三人で会つて食事をしながら研究院の今後を夜遅くまで論じあつた。金山を理事に迎へようと木内氏が提案してくれた。そこで、実質的な活動をする覚悟を披瀝すると、常務理事というポストを与えて下さつたのである。

それからまた日を経ずして、七二年の十一月には、研究院の社会科学部門研究機関として国際関係共同研究所を設立し、その所長に据えて頂いたわけである。

このような次第で院長とは身内の間柄として十五年続いている。

身内といへば、院長は私の墓まで作つてくれている。ソウルの崔家の墓地に院長のお墓に隣り合わせて私の墓を作つてくれたのであるが、私は自分で自分の墓に参つたことがある。これはもうずいぶん前のことで、私も健

康に七十歳前半まで過ごして来て、このお墓のことは念頭に無かったのであるが、身体不調でここ数年二回ほど入院したことがある。その時院長は私の息子に、「まさかの時には韓国に作ったお墓に埋葬すべきである。家族の同意が得られないときは小指の一本でも分骨すべきである」と言ってくれたらしい。これは私が韓国を大事にしている気持ちを汲んでいてくれればこそその崔院長の友情であろう。

研究院がまだ狸穴にあった時代、私にとって忘れられない出来事がある。世に有名な金大中事件である。その報道を聞いたのは自動車のラジオであった。すぐ車から下りて院長に「君の友人の金大中氏がら致された」と知らせると、目には見えなかったが、飛び上がらんばかりの驚きようであった。行き先を変えて研究院に戻ると、院長は、何のために誰がしたのかの検討よりも、まず、どうすればいいのかと私をせき立てるのだった。私は、日本で起きた事件だから日本人に責任があり、何とかしなければいけないと思ったが、彼の言い方は、日本国内で起きた事件だから日本人が解決しなければいけないと言わんばかりの言い方であった。彼と私の間に国籍の違いがこれほどはつきり現れた事はかつてなかった。

当たり得るところは全て当たって見た。しかし、犯人は韓国側のようなのであるとの結論であった。この事件で経済協力を通じて順調に発展して来た両国の関係が損なわれ、悲劇的な方向へ旋回しそうな悪い予感がした。犯人が日本側ではなさそうだと聞いて、私は思い切ったこと——朴大統領へ直訴状を送ったのだった。

大統領の預かり知らぬことであろうけれども、国の責任者として最高の対応ができるのは大統領であると思っただけである。私は電報を青瓦台に送った。「大統領閣下、明瞭な措置を乞う」という短いものである。朴大統領

が日韓関係を大事にし、また私の日韓親善の増進を願う気持ちを日頃から汲み取っていて下さるといふ確信があったため、このように短い表現でも多くのことを理解してくれるであろうと思つたからである。

爾来、金大中事件によつて長期間にわたり相互の信頼を損ね、無関係なことにでもぎくしゃくした対応が生じてしまつたことを考えると、まさにこの事件は二度とあつてはならない歴史的教訓であろう。

今、金氏が自由に活動しているのを見ると、うたた今昔の感に堪えない。金氏は狸穴の研究院にはよく出入りし、職員たちも院長の居る居ないに拘らず、その対応は金氏を鼓舞するものであつたように記憶している。政治的立場がどうであれ政治家は活動の自由が保障されなければいけないと考えるのは私だけではないだろう。政治表現の食い違いや政治的立場の相違だけの理由で人が出国や入国が禁じられてはいけないことは言うまでもない。従つて金氏が日本に入国の際に受けた入国不許可の態度に私は怒りを覚え、それ相応の対応をすべく取り計つてあげたものである。

金大中事件を思うにつれて知らせなければいけない話はたくさんあるが、此の項は院長と私の関係に絞られているので、ここでは割愛してまたの機会にさせて頂きたい。

駐韓大使時代、私は朴大統領と親しくさせて頂いていた。大変立派な方で気迫に満ちて国家建設を推進なさつていた。院長に「大統領に会つたことがあるか」と尋ねたら「会つたことはない」といふ。それではいけない、日本で独力で韓国研究院を作つた人物を韓国の大統領が知らないといふことは不自然であると思つた。是非大統領に会うべきだと院長に勧めてみた。と彼は、「あんな奴は嫌いだ」といふ。しかし、特に嫌いといふしかるべき理由も無さそうだ。そこで大統領に会わせてみようと思つた。私は院長をソウルに連れてゆき、大統領と一緒に

お目にかかったのである。「今回大統領にお目にかかりにソウルに参りました理由は、この人を大統領にお引き合わせするためです」と申し上げて院長をご紹介したのであるが、これは好結果をよんだ。兩人とも性格を異にしてはいたが、院長は日本における朴大統領の不評について臆することなく申し立てた。朴大統領はこれを聞く耳を持っていた。そして大統領はこの会見で日本における韓国研究の意義をよく理解されたようであった。院長自身も大統領から直に「感謝する」という言葉を聞いて自信を得たようであった。

院長とはよくソウルに一緒に行ったものである。院長の御母堂の三回忌に参列した時のことである。多くの参列者の中で長老然とした人物がいたが、院長の伯父上であった。私は自己紹介をしたが、当時の韓国人はよく私を知ってくれていて紹介するまでもなかった。この方は日本語が大変達者で日本に留学でもされたのかと聞いてみた。留学はしていないが日本人には大変お世話になったとおっしゃる。「それはどういふことですか」と尋ねると「住まいと食料を二十二年間も世話してくれました」といふので、私が「エッ」といぶかると「反日独立運動で投獄されて二十二年間刑務所にいたのです」とおっしゃる。驚いたものである。そしてこの時の私が刑務所から解放された後の暮らしの中で初めて出会った日本人だという。またまた驚いたのであるが、そこで私が、「日本人についてどう思われますか」と聞くと、大きく息をついて「日本人のしたことを赦すことはできないが、しかし忘れることは可能かもしれない」と、誠に立派な答えをされたことを今でもよく覚えていゝ。従姉の方にもお目にかかったことがあるがこの方は仏教に造詣の深い立派な女性で、私と院長のつきあいを大層喜んで下さって、私にとっても良いものを贈って下さった。私の号は「了夫」といふのだが、これはその方が作名して贈って下さっ

たのである。

私は近年身体を悪くして一切お酒を飲まなくなったが、それまでは院長とソウルに行くときよくお酒をのんだり、仁寺洞の古本屋回りにつきあったりしていた。ある時、武橋洞を歩いていて酔余の一興で、とある店でお揃いのスーツを作ったことがある。これは当時一万円であったように記憶している。院長は韓国の特色のあるデザインの洋服をやたらに友人や友人の奥さん、お嬢さんに贈る癖がある。憎めない癖であり、院長はその意味では一種の衣装道楽であろう。

院長も私もクリスチャンである。私は第二次大戦中と戦後にわたって十一年間ローマに在勤、そのうち九年間をバチカン境内のバラソ・デイ・トリビュナリで暮らした。ここは元来裁判所であり、告解神父が住んでいた場所である。大戦中米軍がローマを占領していた時、当時の枢軸国であった日本、ドイツ、ハンガリー等の外交官はローマの大使館を撤収してここに押し込められて暮らさなければならなかった。勿論、ローマ市内の出入りを禁止されわずか四十四エーカーの狭いバチカン内で暮らしていたが、当時のローマ法王ピオ十二世には大変なご配慮を頂いたものである。

帰国後はバチカンに何う機会がなく残念に思っていたが、院長と御縁が出来たあと、バチカンを訪れる機会に恵まれることになった。院長は敬虔なクリスチャンである。日頃の彼の信仰ぶりを見ていて、私は法王に会わせてあげたいと思った。院長も否も応もない、すぐ二人でバチカンへ飛んだものである。

この時の法王パウロ六世は、私がバチカン在任中、外交上のことから家族のことまで大変お世話になったモンテーニュ卿（当時国務長官代理）であった。私はパウロ六世に院長をご紹介した。その時も朴大統領の時と同じ

ように申し上げたものである。「私が法王様にお目にかかりにバチカンに伺った理由はこの人をお引き合わせするためです」と。院長は一九五七年亡命当時ローマを目標に韓国を脱出したことはよく知られているが、彼にとつて、これがその目標の実現となつて感無量であつたのではなからうか。

院長の苗字は CHOE でチュエと発音するが、「」に気がつかないとイタリア語ではコエと読みやすい。法王もコエと呼んだがすぐチュエと直して呼んでくれた。それからパウロ六世を間に挟んで三人で記念写真を撮つた。新旧混じつた組み合わせではあつたが、三人とも旧知のような和やかさであつた。この写真は今も研究院の院長室に大事に飾られている。

院長との付き合いは、これからも私の健康が許す限り続くであろうし、そしてこの世では忙しくて尽くせなかつた話は、隣同士の墓に入る故、死んだ後あの世で続くであろう。

安重根を通じての交わり

鹿野 琢 見

(弁護士)

二十年も前になるだろうか。亡千葉十七が旅順刑務所で安重根の看守をし、その処刑五分前に「為国献身軍人本分」の揮毫をして貰ったエピソードを韓国の新聞に紹介した折、拙宅を訪れて下さった韓国研究院院長崔書勉氏の名を知ったのは。

そして研究院の会合にご案内を頂くようになり、もの珍らしく出席し、そこで多くの人に引き合わされ、話をさせられ、いつのまにか研究院「同人」或は「院友」になった。そして、崔さんの独特なお人柄にふれ、又東洋哲学的な人間性を徐々に知るようになった。

と同時に、それ迄に日本で事業を営んでいる韓国の人しか知らなかった私にとって、その方々とひと味もふた味も違った肌合いの人のいることを知る驚きもあった。

その間に崔さんは、私を信頼され、法律相談やら親戚・知人の訴訟事件を紹介下され、私も又協力申し上げた。その中ぜひ渡韓を、とのおすすめも屢々あったが、弁護士会の雑事に追われ、私自身のためらいもあり、仲々果

せず、矢張り韓国は私にとつては、しばらくの間「近くて遠い国」であった。

その崔さんとの関係がぬきさしならない決定的なものになったのは、昭和五十四年「為国献身……」の揮毫を韓国に差上げることがきまり、同時に郷里の菩提寺大林寺にその碑を建てることになってからである。安重根の碑を、日本の北のはてである宮城県栗原郡若柳町に建てるということは日本人として通常の分別をこえるものであり、韓国人である崔さんのご意見に頼らざるを得なかったのである。

昭和五十六年三月、碑の建立が終り、同五十八年三月初めてのソウル市における安重根義士追念式参列行は、不慣れのためすっかり崔さんによりかかったのであった。

その頃発足した安重根研究会も、始めは崔さん中心であり、韓国の人たち主体の研究会であった。これに対して崔さんは、日本における「安重根研究会」であるから、日本の人たちが中心になって欲しい、と申され、又早く乳離れして下さいともいつてくれた。

私はこの崔さん独特のジョークに千金の重みを感じたのであった。確かによりかかり過ぎ、自主性がなかった。崔さんは又、われわれ韓国人であれば「安重根義士」であり「安重根義士研究会」となるであろうが、日本人がやる場合は「安重根研究会」であるべきではないか、ともいつてくれた。これらはすべてまことに示唆に富んだ言葉であり、私はそれらのお言葉にすべてしたがうことにした。そして、私の「安重根」に対する取り組み方も少しづつ変化して行つた。「日本人」としての研究、という大前提に立って出発し直さなければならなかったからであった。これら一連のお導きを私は心から感謝申し上げたい。

私たちの「研究」は、牛歩の歩みであり、遅々として停滞しているのに比較し、崔さんの学究は一日もたゆた

うことなく、目まぐるしく日本国内及び韓国を旅し、多くの人々と語り、かつ研讃健斗を今日も明日も続けて居られる。

ご自愛を祈るや切である。そして、私たちに対して今後もあたたかいご垂教お導きを切にお願いして止まない。

崔書勉さんを送る

神谷 不二

(慶応義塾大学教授)

ついでこないだ「在日三十年を祝う会」をしたばかりなのに、崔書勉さんが突然東京を引揚げてソウルへ帰るといふ。

ずいぶん急な話だが、思慮深い崔さんのことだし、言い出したら容易には考えを変えない崔さんのことでもあるし、おそらく近々そういうことになるだろう。

東京韓国研究院は残して、というふうには伺っているが、崔院長なきあと誰がどう運営するのか、詳しいことは聞いていない、帰国後崔さんのする仕事の概略は承った。これから日韓関係が深まってゆく上で欠かすことのできない大事な役割を、きつと担ってゆかれるにちがいない。

ここ二十年ほど、崔さんとはいろいろな付き合いがあった。そのいくつかの場面が――古い表現をつかえば――走馬燈のように私の脳裡をかすめてゆく。

それらを通じて私がつとも強く印象づけられているのは、崔さんの思考が一貫して柔軟だということだ。韓

国の友人たちには、すくなくともこれまでのところ、良きにつけ悪しきにつけ硬い考え方をする人が多い。日本に対する考え方、共産主義についての態度、北朝鮮に対する姿勢、アメリカへの見方等々、よろず妥協や曖昧を排するのあまり、固定観念にとらわれたり単眼的理解に流れたり、といった点がめだつのを否定できない。そんな中で、崔さんは原則を踏まえつつも常に柔軟だった。

朴正熙と金大中が激しく対立しているときも、崔さんはどちらの側にも偏狭でなかった。あれは十年あまり前、「維新」体制の全盛期のころだった。崔さんと私は、朴政権下で金大中を統一院長官として入閣させ、それによって両者積年の対立と怨念を解消し国民和同を図れないものかと論じ合ったことがある。

結果的には柔軟思考同士の空廻りだったけれど、方向としてはまちがっていなかったと崔さんはいまも思っているだろう。金大中はいまだに、盧泰愚とはもとより金泳三とさえ共通の基盤を持つとうとしない。そこに、韓国の国内亀裂の根深さが昔ながらに温存されている。崔さん以て如何となす。

崔さんの韓国における人脈について、私はかならずしも審かではない。しかし、それが広汎多岐にわたることは想像にかたくない。それをフルに活性化させて、崔さんには本当の日韓友好の絆づくりをやっていたきたい。私も応分の協力をしたと思う。利のために結ぶことは易しい。だがそれは所詮脆いものだ。日韓両国は義のために結ばねばならぬ。それは難しい。だがその結びつきは堅固なものである。

この難しい課題に、崔さんはソウルで本格的に取組んでくれるにちがいない。壮士一度去って亦復らず一一崔さんは厳しい心構えで帰国を決意したのであろうからだ。これからも、ソウルでまた東京で、できるだけ頻繁に会いましょう。御健勝と御健闘を祈るや切。

温かい思いやりに感謝

賀 陽 美智子

(国際教育情報センター
常務理事)

昭和五十七年は、日本の歴史教科書の記述ぶりをめぐり、韓国および中国からの抗議がよせられていることを新聞やテレビが盛んに報道していた頃でした。当時、中央区の新富町にありました国際教育情報センターの事務所に崔先生が突然おいで下さいました。静かにそして誠意をこめて、他国の教科書を収集し、その内容を調査、研究して必要と認めた場合は、その執筆者、編集者、出版社に訂正を申し入れ、日本に関する資料を提供することを業としているセンターのとるべき道について、先生が考えておられるところを話して下さいました。

「決してあわてることではない。このような騒ぎの中で意見を発表しても、正當に互いを理解することは困難であろう。今まで通り民間ベースで、長い目で交流をつづけることによってこそ、いつの日か解決される問題であろう。ゆっくりと落ちついて韓国と日本の信頼関係を築き上げましょう」という御意見でありました。

当時、私は父・賀陽恒憲が生前、崔先生と親交がありましたことは存じませんでした。

崔先生にあらためてお伺いしましたら、崔先生が父に初めて会われたのは、一九六〇年代、駐日韓国公使が方

熙さんであられた頃のこと、方熙公使が赤坂の福田家で、父が在日韓国の人のお世話をしてその方が大変成功なされたということで、父を招いて一席設けて下さったお席ということでございました。崔先生がその時の印象について「皇族なのか平民なのか分からないほど率直な物の言い方をなさっていた。歴史的事件に対して世評の如何に関わらず御自分の考え方を勇敢に提示されたので、私の日本研究には非常に役に立ちました」とおっしゃって下さいました。韓国研究院というのがどのような研究所で、崔先生がどのような方なのかは存じませんでしたが、センターが発刊した「訂正事業の成果」をのこらず綴じ合わせたものを手に、適切な時にどこからともなくあらわれて、実に適切な言葉を温かく述べて下さる崔先生に、初対面とは思えぬ親しみを感じました。「近くて遠い国」とよくいわれる韓国が、にわかにな身に近づくことができました。

その後、韓国研究院を訪問し膨大な蔵書に囲まれて研究に励まれる先生をかいま見させて頂きました。韓国語から日本語への翻訳のいきばえを判定していただいたり、当センター制作フィルム、日本歴史韓国語版の脚本を校閲していただいたり、韓国と関係のあることで評価あるいは判断が必要になるといつも崔先生に相談いたしますと、結論はおっしゃらないにも抱わず、不思議と良き解決が得られるのです。

これからはますますお元気で、日韓のかけ橋として御活躍していただきたいと思います。

韓末外交史研究の発展を祈つて

河村 一夫

(明治大学講師)

私が崔院長に始めてお目にかかったのは、十五年以上前の昭和四十六年の春であったと記憶する。その年の四月に、外務省外交史料館が東京の港区飯倉六丁目(今の麻布台一丁目)に開設され、私もそこに配属されたが、霞が関の外務省とは離れているので、何かと不便であった。私は外交史料館に通勤するには、地下鉄の神谷町駅から坂を上り、高台の外務次官官邸の横を通って行ったが、その次官官邸の向かい側の住宅風の建物が、当時の韓国研究院であった。ある日の昼休みに、韓国研究院とはどういう施設か全く知らずに、突然お邪魔した処、院長がおられて、親切に説明して下さいました。間もなく、韓国研究院は恐らくその蔵書の増加の為、同じく外交史料館の近くの麻布中の橋の現在の地に移転されたが、院長は時々、単独か或いは大使館の方と一緒に外交史料館へ来られ、熱心に史料を閲覧された。院長は、金玉均と安重根の研究者として普ねく知られた方であるが、例えば金玉均関係の書類を見られた際、日本外交文書に採録されていない良い史料があったと言われたように記憶する。また、安重根関係について、外交史料館には韓国併合関係の書類が全くないのですねと慨嘆されたのが、未だ忘れられない。この韓国併合関係の書類の焼失については、他の内外の学者からも等しく惜しまれた処である。私

は、院長のご希望で、五年程前のように記憶するが、外交史料館所蔵の日韓関係史料に関し韓国研究院でお話した。準備と勉強の不足の為、院長にとっては期待外れと思われたであろうが、夜遅くまで歓待して下さった。私はまた、外務省図書館で、ある時、天理大学の朝鮮学報を見つけて以来、同誌に時々小稿を発表し、殆んど毎年、同大学で研究発表を続けた。研究発表のテーマは、手許にメモがないが、朝鮮学報への題目は、「青木外相の韓国に関連する対露強硬政策の発展と日英同盟の成立との関係」「韓国における日露両国の争覇とこれに対する国王のご宸慮」「李鴻章・李経方と金玉均との関係について」「斉藤実総督の朝鮮総督府中枢院官制改革関係史料」などがある。この中で最初の青木外相関係の小稿は、昨年、これを改訂して「韓」第一〇六号に掲載させて戴いた。天理大学での研究発表は、その機会に私の京都の親戚に会う目的も兼ねたのであったが、ある年、明治四十三年にロンドンで開催された日英博覧会について発表した。これは、この博覧会の顧問の一人に私の親戚の塚本靖博士の名を見出したのに興味を惹かれた為で、同博士は一二年前我家から発見された南大門停車場の簡単な設計図により、現在のソウル駅の設計者と確定したとのことである。しかし私がこのテーマを朝鮮学会で発表した理由は、明治四十三年、当時の小村寿太郎外相が明治期外交の二大懸案たる朝鮮問題と条約改正の解決の為に、同盟国の英国の理解と協力が必要と考えたのではないかと思っただけからである。多分この発表の際かと記憶するが、院長に天理大学でお目にかかったことがある。

さて、私は大正十五年一月生まれなので、一昨年一月末で外務省を退官した処、院長は私に「韓」の編纂に参加するよう命ぜられた。顧みるに私は、昭和二十七年七月に外交史料館の前身とも考えられる文書課外交文書室に採用されて以来、慨して外務省保管の古い史料を通読しただけで、極めて限界が狭いことを痛感する次第であ

る。しかし同時に、近代日韓関係史についての最大の業績との評価が高い田保橋潔教授の大著にも、細部には未だ若干検討の余地があると思われる。私は、この見地から、昨年秋も甲申事変前後に関する研究発表を天理大学で行なった積りである。私は「韓」第一〇六号の編集後記でも、あらゆる分野は皆重要であるが、中でも韓末外交史の分野は最も重要な一つに入るであろうと記した。私はこの見地から、日韓関係の発展の為にも、研究者各位のご援助を衷心から希望する次第である。

崔さんのプロフィール

――私の見た彼――

木内 信胤

(世界経済調査会・理事長)

今度のこの会の発起人の間で、参集される方々に「崔さんのプロフィール」を書いて差上げよう、といふことになったのですが、月並みなものではつまらないといふことで、私が、「私の見たままの彼」を書いてみることにしました。

一、出生 江原道の原州に生れる。一九二六年四月四日。今年四月で彼は満六十一歳。

二、学歴 四つの年から「開運塾」で漢学を学ぶ。中学四年で「京城師範大学」に入学したが、その日本の教育に不満を抱き、民族的教育の殿堂であった「延世大学」に転校。

三、社会歴

(一) いつの頃からか、日本の支配を憎み、独立を夢見る。

(二)戦争末期の彼は、どこかの山の中に逃げてゐた。八月十五日、日本で言えば「終戦」、韓国でいえば「解放」となったが、彼は九月になって始めてそれを知った由。

(三)「解放」の後に訪れたアメリカ軍の「信託統治」に、彼は激しく対抗、「大韓学生連盟」を組織して委員長となる。李承晩政権が成立したあと、故あってこの政権に睨まれることになり、いよいよ危険迫ると感じた一九五七年五月、盧基南カトリック大主教の庇護の下、ヨーロッパ遊学の名目で韓国を離れる。その実体は「亡命」であり、日本には“密入国”であつた。滞在はそのまま続いて、三十年となつた。

(四)日本で「国会図書館」を訪れて、韓国に関する書籍を見た彼は、“韓国について自分は何も知つてゐなかつた”と知つて猛勉強を開始した。

(五)間もなく彼は、日本における「韓国に関する可能な限りの資料」の蒐集を志すことになり、一九六九年に至つてその基盤の上に、「韓国研究院」を創立する。亡命からは十二年。その時から今日まで十八年。目下の彼は二十萬点に及ぶその資料の整理に、日夜忙殺されてゐるかの如くである。

四、「社会歴」は右の如く、その後半は甚だ単純であるが、この期間、彼は資料の蒐集整理ばかりやつてゐたわけではない。「年表」で見るやうに、韓国は依然として混沌。彼は何をやつて来たのか、私は知らない。朴正熙大統領とは大変親密であつたやうに思はれてゐるが、それは、韓国研究院の業績を知つた大統領が、進んで補助金を給与するに至つたことを見て、世間が持つた感覚に過ぎない。

五、彼の安重根の研究は有名であるが、彼には莫大な“書き蓄めたもの”があつて、その気になれば、直ちに何冊もの書物が出版出来るといふ。しかし彼は、後進の研究者に発表の場を譲るべく、幾多の出版者の出版依頼を拒み続けてゐる。このやうな人物がただの学者、研究家でないことは明瞭疑いのないところであらう。

六、では彼はいま、何を志してゐるのか。過去の三十年は長いやうであるが、それに近い長年月の社会的活動を、これからの彼に期待していいと思ふ。当人に訊いてみれば、“いままでに集め得た学問的蓄積を、将来の人に遺したいと思ふ”といふ。しかし彼の胸中にあるものが、それに尽きるとは思へない。

しかしまた、これは“彼の一存”で決まる事柄とは限らず、“周囲からの働きかけにもよる”ことであらう。ならば我々は、彼にこれから、どのやうな働きかけを行ふべきか？ — そのやうなことを考へさせるのが、「私の見た半生の彼のプロフィール」である。

ひと粒の考える種

木原悦子

(フリーランス・ライター)

それは一九七九年の五月、射るような太陽が眩しい伊豆の島でのことであった。

私はひよんなことから（おたあ・ジュリア）という女性に興味をもち、神津島で毎年開かれていた「ジュリア祭」に初めて参加した。

おたあは、文禄・慶長の役の折り捕虜として日本に連れて来られた朝鮮の貴族の娘で、秀吉亡きあと徳川家康に召し抱えられるが、やがて、キリシタン禁教令に触れて遠島流罪となった、殉教史に名を留める女性である。

神津島は、当時、幕府の直轄領で流刑の地だった。その僻遠の島で四十年余の流人生活を送り、生涯を閉じたといわれる、おたあ・ジュリアを偲んで、ゆかりの島で祭りが開かれるようになって、この年、十年目を迎えていた。

文禄・慶長の役といえば、国内統一を果たした秀吉晩年の理由なき“侵略戦争”ではなかったか。とすると、ジュリアは痛ましい戦争の犠牲者ということになる。それにしてもなぜに戦場から“連行”されて来たのである

う。帰国はかなわなかったのであるか。信仰に生きたとはいえ、望郷の思いは絶ち難かつたろう……。なぜか四百年の歴史のかなたに埋もれた話とは思えなかったのである。

「ジュリア祭」はミサ聖祭で始まった。場所は炎天下の公園。鬱蒼と生い茂る樅の古木でかなり陽が遮られているとはいえ、初夏の日差しは強烈だ。前浜には大型客船が停泊していたが、早朝、その船で八百名からの（巡礼団）がやって来たのだ。遠く韓国から参加したと見られる色とりどりのチマ、チョゴリで盛装した女性も多かった。

ミサに続いて記念式典。第十回ということで、列席者は多士済々の模様である。

初参加で、しかも個人で参加していた私は、全く勝手の分からぬままに、どうしたことか（御招待席）に迷い込んでしまっていた。席に腰を下ろし、しばらくして気が付いたのである。周りでは聞き慣れぬ外国語が交わされていた。どうやら韓国語だ。しかし、彼らの様子からして、はるばる海を越えて来た人々ではなさそうだった。ためらいがあつたが、手帳を取り出して、私は隣の席の男に尋ねてみた。

「失礼ですが……。韓国の方とお見受けしますが……。崔書勉さんという方が、もしやこの会に出席されているかどうか、ご存知でしょうか」

隣の男はにっこり笑って、そのまた隣の席の男を指した。

「この人ですよ。替わりましょう」

そう言つて席を立ったのは韓国大使館の某書記官で、替わつて坐つたのが、恰幅のいい、およそ学者先生とは

相容れぬ風貌の、だが面差しのやさしい崔書勉氏であった。

前日、私は島の郷土館の（おたあ・ジュリア資料室）でにわか勉強をした。その折りに、おたあ・ジュリア関係の資料の提供者として頻出するこの人の名前を私は手帳にメモしていたのである。私は自己紹介をして、事の経緯を手短かに説明してから、

「一度是非お目にかかって、お話をうかがいたいと思っておりました」と、挨拶をした。

「そうですか。おたあ・ジュリアのことをお調べですか。わたしが雑誌に発表した論文があります。一部差し上げましょう」

翌日、東京韓国研究院の発行する「韓」という雑誌をいただいたのである。崔書勉院長の論文は、「七年戦役の被虜 おたあ・ジュリアについて」と題する五十頁にわたるもので、捕虜の問題に言及し、この戦役は今日の対日不信感の遠因の一つになっている、と記されていた。

当時、私は日本版「リーダーズ・ダイジェスト」誌の一編集者であったが、やがて組織を離れて独り立ちすることになった年の夏、歴史教科書における。“侵略”の記述をめぐって教科書検定問題が紛糾し、外交問題にまで発展した。中国、韓国の双方からは記述の修正を要請されたが、韓国側が是正を求めた項目の一つに、「文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）」があった。私はひとりの女性——おたあ・ジュリアのドキュメンタリーを横系にして（問題の時代）を俯瞰してみようと思いついたのである。秀吉の朝鮮出兵を私たち日本人は歴史譚として片付けてしまいがちだが、韓国の人々が日本の“侵略”を問題にする場合、四百年前に遡って、ここから説き起こす

のが常であることを私は前述の崔書勉氏の論文からも大いに教えられていたからである。こうして私の処女作品が誕生する。

ところで「おたあ・ジュリア」を手掛けている間に、もうひとつ、捨て置けない問題と関わってしまった。こちらは今世紀。水原・堤岩里事件である。

思えば、神さまのプログラムとでも言うのであろうか。あの暑い五月の日曜日、全く個人的な興味に引きずられて訪ねた神津島への初めての旅。そこで初めて見聞いた隣国の雅びな歌舞音曲。あのころ、隣国との複雑な関わりについて、ほとんどと言っていいほどにその真相を知らなかった私が、その無知を埋めるべくひたすら記録の叢林を涉猟し、やがて、その深みに嵌まって行く……。

崔書勉先生はご承知あるべくもないが、ひと粒の貴重な（考える種）を、先生は私の中に蒔かれたことは確かなのである。

『おたあ・ジュリアのアリランが聞こえる』は一九八八年二月、毎日新聞社刊

勝れた日本語の文章を書くお方

桑原金彌

(隨筆家)

このところ、大変厳しい暑さが続いておりますが、如何御過しでいらつしやいましょうか。

先日、崔先生の「在日三十年をお祝いする会」にお誘いいただきまして誠に有難うございました。初めて先生に間近にお会いすることができました事を大へん嬉しく又光栄にも存じまして、あらためて心から感謝申し上げます。次第でございます。

幾人かの方々のスピーチによりまして、一般的には余り知られていないお人柄の、いわゆるかくれたる側面ともいべきものを知ることができまして、私は大へん興味深く、そして苦節の年月もあつたであろう過ぎこしかたの日々と思ひ合せて私なりの感慨を以つて先生の「在日三十年」に遠く想いを馳せつつ皆さまの語る言葉を拝聴しておりました。

燃ゆるような祖国への愛と民族魂、揺ぎなきその信念、そして、人々に対する大らかにして豊かなる愛情、みなさんのスピーチを拝聴し、又、先生ご自身が語られた数々の想い出や御考えなどを拝聴致しまして、今始めて

間近に視る先生のお人柄がくつきりと浮び上つてくるのでございました。

私は崔書勉先生の御名前は早くから存じ上げておりましたが私個人が極めて強い印象を受けたことが一つございまして、それ以来、或いは私だけのといえるかも知れない崔先生のイメージというものを持つていたのでございます。そのことを先生にお知らせしてみたくなくて、ペンを執つた次第でございます。

あれは、もう何年位前の事だったでしょうか、月曜評論に崔先生の記事が掲載されたことがありました。その内容は、今、全く覚えていないのでございますが、その誠に御見事な日本語の文章には驚嘆してしまいました。

その余りにも大きかった衝撃は今以つて新たなものとなつて甦つてくるのでございます。

少しの無駄もなく歯切れよく力のこもつた正確なるその文章は誠に端正そのもので私は目を見張るおもいで瞬間、言葉もなくそこに立ちつくしてしまつたようなおもいでございました。そして、その驚きがようやく静まろうとしたとき、もう一つの驚きが今度はじわじわと湧き上つてきたのでございました。

然しながら、この驚きも、私には、いわば動転する程のものであります。何故なら、私は日本人の一人として決して失いたくないと思つていた「日本の宝（日本の正しい言葉、正しい文章等）」が実は、日本に於て失われつつある時に、全く思いもかけないようなところに燠銀いぶぎんの重みを以つて、しっかりとそこに、保たれていたということの発見でもあつたからでございます。そして、この衝撃はやがて、そこから私に種々な思索へと導いて行き、いやでも遠い歴史におもいをひそめざるを得ず、民族興亡の明と暗、落胆と希望、そんなものがこもこも心の中を駆けめぐり、ひととき何をも忘れて、深く考え込んでしまつたのでございました。

素晴らしく正確な日本語の文章——少しの無駄もなく誠に要領よく充分にその内容を伝えて引締つてゐるその

文章は、端正そのものというより外なく、読み終って私は全く唸ってしまいました。

文法の専門家でもないし、文学の専門研究者でもない私には「ここがどうだから、どこがこうだから勝れた文章なのだ——」というようなことは、全くできないのでございますが、私の育った時代の学校教育、家庭教育に於いての文字や言葉の正しい使い方、正しい書き方、正しい文章の書き方等、徹底した厳しいしつけや訓練によって培われた私の「勘」みたいなものが、なんの説明もなしに「なんとという勝れた文章だろう！」と直感するのでございますから、どうしようもないものでございます。

日本は敗戦から年月を経る程に、言葉は乱れる一方。そしてあやしい日本語のはんらん、正確な日本語の文章など失いつつある現状は、心ある知識人の憂うるところとなっております。そういうことでは、実に厳しい、しつけや訓練を受けて育ってきた人間の一人として、私などもその一人で、どうにも気になることでございます。

以上のような次第で、崔書勉先生は、「実に勝れた日本語の文章を書くお方」という強い印象をもっておりました。そして、たまたま「在日韓国老人ホームを建てる会」主催の講演会で先生の講演なされた録音テープを起して文章に書きかえる仕事をさせていただいたのでございましたが、今回それが「共に生きる新しい世界」という小冊にまとめられ出版されましたものをあらためて拝見し、またまた私は全く驚嘆してしまいました。

テープに吹き込まれたそのままを書き綴った私の文章が、そのまま（崔先生が新たに書き直したものではありません）出版社に渡されたことを聞いておりました。

これが又、実に立派な日本語になっていたのでございますから、私は本当にびっくりしてしまいました。崔先生は、お書きになった文章が勝れているばかりではなく、語ることに於ても、全く、さながら文章そのもので、

少しの無駄もなく乱れもなく、全く、端正そのものだ！ 「共に生きる新らしい世界」の先生の文章を拝見し、あらためて、ほどほど感に耐えませんでした。

成る程、これでは、崔先生はスピーチの原稿など必要としない筈だ、そんなものは却って、邪魔になる位のものかも知れない——と先日「在日三十年——」の会の先生のスピーチ等と思ひ合せて深く納得した次第でございました。

崔先生は「勝れた日本語の文章をお書きになる方、そしてまるでその文章を口で綴るが如くに素晴らしいスピーチをなさる方」このような印象を更に強くさせられた次第でございます。このようなわけで崔先生の隠れたファンがここに一人おりますことを御記憶の片隅にでもおとどめ頂けますなら誠に有難いことでございます。

韓国研究院では今、先生によって明治のころ、併合後、終戦後と、この三つの時代にそれぞれ韓国からの留学生たちが韓国史発展における役割りは何であったか——についての研究会がなされておられます由、その研究成果は、やがて一冊の、或は数冊の本にまとめられる御事でございます。私はそれを是非とも拝見したいと存じまして、それをたのしみにしております。

韓国研究院に於ける崔書勉先生の業績は、誰れもが等しく称賛しているところのものでございます。今後とも、いよいよ御健やかに韓国を為、日本の為、御活躍遊ばされますよう私は心こめてお祈り申し上げます。

おもいのままにずらずらと書き連ねてしまいました。崔先生の前に最も悪い日本語の文章の典型を、お見せしたような気さえして、少々お恥かしいような気が致します。

先生の御上に、神さまの御祝福が一層豊かにありますようお願い申し上げます。

厳然としたケジメの中で

小 谷 豪治郎

(京都外国語大学教授)

人の出会いというものは、偶然なものでしょうが、その出会いが思い掛けないほど貴重な物を、与えて呉れることがあるものです。私の人生のなかで、何件か、数は決して多くありませんが、そういった出会いというものがありました。それだから出会いということを、大切にしなければならぬといった、功利的なことを言う積もりはありません。

ただ、私がここで言いたいのは、その数少ないものの一つが、崔さんとの出会いであったということであります。そしてそれだけに崔書勉という名の人物を、何かに付けて思いだし、彼が決して忘れ得ない人物であることは、言うまでもありません。

限られたスペースの中で、書かなければならないとされていることは、決して少なくはありません。しかし、先ず何よりも先に、感謝の気持ちを明確に表現して置かなければなりません。というのも、韓国問題について私なりに見解を世に問う、といったことが出来るようになったのも、完全に崔さんの適切な指導があったからです。

改めて、この場を借りて哀心より謝意を表明して置きたいと思えます。

そればかりではなく、感謝しなければならぬのは、崔さんを通じて素晴らしい韓国人の何人かを、終生の友として得られたことです。しかし残念なことに、この短文を書いている時点での韓国は、これらの友人に会いに行きたいにも拘わらず、二度と足を踏み入れたくない国となっています。こういった偏狭な考え方を、私が持っているが故に、結局は崔さんとも疎遠になってしまったのかもしれない。

しかし、私の偏狭さは或る意味では、崔さんの心の中にある、物の考え方の一部と、共通しているのではないかと、思っています。それは絶対に妥協しない、非寛容さとも言うべきものです。私は崔さんの野放図な面の背後に、ガツチリとした絶対に許さない精神が、横溢しているのを、私は見て来た積もりです。このことが、当然のことながら、私達の関係を、民族の血を超えたものにするのを、阻む原因になったのではないかと、考えています。

ところでもう私は、墓のことが多少とも気にかかる年代になりました。私の墓を韓国にある崔さんの墓の横に、作つたらと仰ったことを崔さんは覚えていた筈です。あの時私は返事をしませんでした。あれは正しい反応であったと思っています。厳然としたケジメが、韓国人と日本人との間にはなければならぬことを、このことは教えているように思います。生ある限り、この限界のなかで、崔さんとの交友を続けていきたいと願っています。

国際野人の崔書勉先生

小 牧 正 英

(近代舞台芸術研究所代表)

崔書勉という人物は、私の頭の鏡の中では妖怪人物、得たいのしれない大物、それにとっても親切であり誠実な方で、豊かな教養と人生体験を積んだ知識人の野人というように映り照らされています。

私の記憶がいでなければ、崔書勉先生との出会いは、朴政権に変わって数年後に挙行された大イヴェント五一六祭典の芸術祭の時だったのか、さもなければ、その後一九六七年十月迄の間で、場所はバンド・ホテルのロビーだったと思います。当時は一般日本人の渡航がすくない頃で、私は東亜日報社の金相万博士の招きで訪韓しました。それは、一九六六年春から一九六七年十月までは毎月往復し、十日間はソウルに滞在しました。そして私の仕事は、梨花女子大学、慶熙大学、首都女子師範大学、淑明女子大学、エグリン楽団、ソウル芸術高等学校の舞踊科学生に「劇場学」の講義と実践の実践のためでありました。それに又、一九六七年十月十日から十五日まで、東亜日報社主催のアジア・バレエ祭で「白鳥の湖」全幕を韓国で初演し、日本からは岡本佳津子外三名が参加出演しました。

そんなわけで、私のソウル滞在中は気にいったホテルを定宿にしていました。ヨーロッパ風で簡素なバンド・ホテルがありますが、このホテルは、主にアメリカ人とか外人さんが多く宿泊、出入りしたところで、連日にぎわいました。

この人間砂漠の中で、ある日の夕方、正体不明の一見野人的な紳士に偶然に出合わせる瞬間に、なぜか近親者のような親密感が湧き、どちらからともなく挨拶を交わし語り合いました。ハッキリ印象に残っていることは、彼の野人紳士が自分の部屋に私を誘いました。その部屋はホテル最高の貴賓室のようで、華麗な部屋が幾室もありましたから、このような豪華な部屋を専有できるということは普通人ではなく、どこかの大使閣下か、あるいは億万長者の大富豪なのかと思い、不可思議であつたことが、今でも怪人物の印象が残像しているというわけがあります。

ところで、バンド・ホテルの四階の私の部屋から見えるソウルの風景はすばらしいもので、旧朝鮮ホテルを近景に南山を望む景色の美しさや又、ソウルの街のたたずまいは、古都の風采を想うに十分な美しい風景でありました。

しかし、ここにも近代化の波がおしよせて来て、朝鮮ホテルが近いうちに取り壊されることになり、理由としては旧日本の朝鮮総督府時代の遺物の建物が目ざわりだからという風潮が拡大したためということを耳にしました。

それはともかく、この美しい建築物が事情の如何を問わず破壊されてしまうことを惜しむ気持がしたので、私はF八十号のカンバスと画架をソウルに持ち運び、バンド・ホテルの窓から眺める朝鮮ホテルをモチーフにした

風景を、八ヶ月がかりで画きあげました。そして、その年の一水会展に出品した後、絵は韓国研究院に寄贈させて頂きました。

ともあれ、そんなわけで崔書勉先生との出会いは動物的本能感覚によるもので、誰方かの紹介というものではありませんから、全く自然的なもので、不思議と謂えば不思議に思いますが、崔書勉先生には益々畏敬の念が深くなるばかりであります。

一九八七年一〇月二九日

大変な（学者）ナシヨナリスト

酒井忠夫

（筑波大学名誉教授）

七月の末に崔先生の来日三〇年というので、祝賀会を催されました、その時勿論出席しましたが、その時の模様をじっと拝見しておりますと、また、その後でそれを再録した「今日の韓国」誌を拝見したりしますと、どうも崔先生の一面しか出ていないように思うわけでありませう。

崔先生と私が知り合いましたのは、崔先生が木内先生と接触されたあとだと思いますが、私は、中国・韓国・日本等の文化の研究者ですから崔先生とこの分野で接触致しました。それ以来、崔先生と接触を重ねるに従いまして、この人が大変な学者であることが充分に分つてまいりました。祝賀会では、このへんのことばかり出ていませんでしたので、私としましては残念に思つた次第でございます。

崔先生は、韓国の歴史を中心にしてアジアにおける日・中・韓の三国の関係等について、特に近世以後のことについて非常に専門的な研究をしておられます。中でも韓国を中心にした地図の歴史的研究は、まことに執念で貫ぬかれたような、従つて成果も非常にあげておられます。韓国を中心にした地図等はよく集めておられて、

この分野の学術論文は早晩まとめられるだろうと思います。

崔先生は、韓国を中心としたアジア近世史、地図学、日韓関係について大変立派な論文が書ける人だろうと思っております。まだ学位は貰っていらっしやらないとは思いますが、当然学位授与に値する大変な学者であると思います。勿論、三〇周年の会で皆さんがおっしゃられた如く、崔先生の本領は学者であると同時に、韓民族を代表する大変なナシヨナリストであつて、日本でいうと、明治維新の志士に接したかの如く当初からわたしは感じておりました。私は崔先生のおかげで韓国の歴史を勉強してこれましたし、また発言も出来るようになりました。ナシヨナリストであるとともに素晴らしい学究である、いわば文武両道を兼ね備えた偉大なる韓国の代表的な人物として活躍されることを期待しております。

崔先生は、「神に救われている」と申せばよろしいのでしょうか、相当に危険なことも潜り抜けて無事それを抑えて自分の仕事をやり遂げられるという人だろうと思います。歴史とか神がアジアのため、韓国のために崔先生を絶対に死なさない、不死身であるというようにも感じられるのです。志士的な過去を持つておられる方でありますので、そういう面でも死線を越えてこられたと思います。今後とも「自分は不死身である」「韓国のため、アジアのため不死身である」との信念を持つて頑張つて頂きたいと思う次第です。

私は、時間がないため原稿として書くことができませんで、このように口述の形になりましたし訳けありません。自から筆をとつて書かなかつたことをお詫びするとともに、重ねて崔先生が「自分は不死身である」「韓国のため、アジアのために頑張るんだ」ということで、文武両道において大いに活躍されることを期待しております。こうした崔先生にあやかりたいと思う学者は、私一人ではないと思います。

あの頃のこと

佐々木 年 重

(日本放送作家協会会員)

崔書勉氏と初めてお会いして、すでに十数年の刻が流れた。東京に韓国研究院という学術研究会があることを、日本に於けるクラシック・バレエの巨匠・小牧正英先生から紹介され、当時狸穴にある韓国研究院を訪れたときが初対面で、一面識もない私を思いがけなくも、その場で快く受け入れてくれたのが、院長である崔書勉氏であった。

当時、韓国を訪れたばかりの私にとって、韓国は私に大きな驚きと同時に数々の教訓を与えてくれた。

その韓国の大地に足を踏み入れてみて、まず最初に感じたのは、アジアの一員でありながら韓国は日本とは全く異質の（勿論、共通の部分は沢山あるが……）風土であり、それが何故かヨーロッパに通じる肌合いを感じさせたことであつた。

更に、ネルチンスク山脈を越え、ロシヤ平原をへてヨーロッパと地続きであるという韓国の大地の、単純ではあるが明白な事実への強烈な感慨――。

その頃の韓国は、まだ朴政権下の政治、経済ともに最も苦しい時代で、誤解されることを前提にして敢えて云うならば、日本の明治維新と敗戦後の混乱と、そして現在の日本（その当時の）を合せもった印象を受けしかも、そうしたなかで三十六年間もの長い日本の過酷な植民地政策と、戦後足掛け四年にも及ぶ悲惨な韓国動乱の深い傷を負いながら、必死になって祖国再建のために取り組んでいる韓国各層の敬虔な姿を、それらを目のあたりに見て私は深い感動をおぼえるばかりであった。

そうしたときに、私は始めて崔書勉氏にお会いした。

氏は、その頃の韓国を彷彿させるに充分な祖国に対する敬虔な気持と奥行き深さをそなえ、真の意味での日本と韓国との交流に身を挺し歴史を通じて有りのまゝの日韓の姿を伝えて、我々日本人に新しい目を開らかせてくれた。

最近の韓国の目ざましい発展と同様に、崔書勉氏はこれからも「商人国家」から「技術屋国家」に移行しつつある我々日本人に、多くのものを語り続けてくれるに違いない。

日本にとっても韓国にとっても、氏はまさに貴重な存在であると云わなければならない。

崔書勉氏のプロフィール

佐々木 展子

(フリーライター)

崔書勉氏という人は、日本人には数少ないキャラクターを備えていて、あゝいう方こそ本当の意味での国際人なのかも知れない…。というのが、夫が語った崔書勉氏の第一印象でございました。十五・六年前の我家は、数人の韓国の方との交流が始まったばかりで、辛いキムチや焼肉やコチジャンなど、すでに無くてはならない常備食になっていましたから、韓国と聞いただけで親しみを持つようになっていた私は、崔書勉氏という韓国研究院の院長先生は、非常に身近かであると同時に、大いなる興味を抱かせられる方でもありました。

そして、それから程なくの事であったと思いますが、韓国研究院が、まだ狸穴のソ連大使館近くにありました頃、民間の歴史学者として有名でいらった故山辺健太郎氏の御講演があるとお知らせを頂き、夫と私は連れだって研究院を訪れることになりました。

二十畳ほどの院長室に通されて先ず目に入ったのは、部屋のほゞ中央に据えられた朝鮮虎でございました。それはまるで崔書勉氏を守るかのように、また入室者を睨み据えるかのように入口に向かって四股を踏んでいました。

そして、私にとって初対面の崔書勉氏も、その虎と同じように、人を喰った巧みな話術を駆使しながらも、実に人ざわりのなめらかな細かい心配りをして下さる方でもございました。でも、その頃の崔氏は、心なしか青味を帯びた冴えないお顔の色をなさって、いまひとつ体調がすぐれない御様子と、私には感じられたのでございます。ところが昨年、久し振りにお目にかかった崔書勉氏は、アッと目をみはるばかりに変貌していらつしやいました。鼻下に黒々と立派な髭をたくわえ、まるでウラル・アルタイの騎馬民族もかくやといった精悍さを発散させておいでなのです。

世の男性方が髭を立てることについて、女の私ごとやかく申し上げるのは慎しむべきことでもございましょうが、正直申しまして、何とも摩訶不思議なタイムマシンにでもせられた気分に襲われましたのも、事実なのでございます。

崔書勉氏をして、かくの如き変貌に向わしめた御心境とは、一体いかなるものであったのでしょうか。御本人の崔氏に直接お伺い申し上げるのも憚られ、内心びっくりしましたものの、崔氏の内面には、とてつもなく大きなものへの挑戦とでもいえる強い意志が、あのような髭へと突出されたものと、勝手ながら私なりの結論を見出した次第でございます。

崔書勉先生の、日韓両国にわたるこれからのご活躍に乾杯を捧げます。

明るくユーモラスなお方

島 路 陽 子

(日本歌手協会所属)

崔先生との出会い、それはちょうど一年前の七月、新宿厚生年金病院の耳鼻咽喉科ロビーだった。七月十四日、パリ祭に出演当日、突然目まいと激しい腹痛で救急車で運ばれ、やっと一人で車椅子を動かすことが出来るようになった或る日、談話室に入って行くと、包帯で頭をぐるぐる巻いて片耳を手術なさった先生が座っていらした。普通の患者さんとは異なったコスチュームをつけられた先生は、ひょうひょうとした姿勢の中にも何か威厳が感じられ、目がとても優しくかった。

先生は明るくユーモラスな方で、気軽に私達に話しかけられ、ともすればじめじめした雰囲気の入院生活の中で、先生にお目にかかるのが楽しみになった。入院中も毎朝必ず各新聞や雑誌に目を通されて、スクラップしていらした御様子に、学問に対する先生の情熱が伝わってくるような気がした。

一番楽しかった思い出は、ある日一階にある食堂にさそってくださって友人と一緒にカレーライスを御馳走になったこと。(たしか病人食以外は禁食だったはずだが……)

先生は、

「このカレーは美味しいよ……。カレーはこうして御飯にかきまぜて食べるのが一番美味しい」と、スプーンでかきまぜて手本を示された。私達がそれにしたがったのは云うまでもない。

それから先生は一カ月位で退院されたが、名刺を頂戴していたので、私も退院して何とか歌えるようになった時、一番に先生に御聴きいただきたくて、御案内状を出したが御多忙でお目にかかれず、祝電を頂いた。そして退院後の一年目に、こうして又先生の『在日三十年をお祝いする会』にお招き戴き、先生の日韓両国に対する貢献が、本当に素晴らしいことを知り、崔先生に対して尊敬の意を深くしました。

人間は皆平等、愛に結ばれていることを信じて、先生との偶然の出会いを感謝して、これからの先生の御健勝と御活躍を心からお祈りいたしております。

一九八七年七月二一日

崔書勉——私の対韓意識を変革させた人

鈴木卓郎

(ジャーナリスト)

崔書勉さんと私の交友はほぼ十五年になり、そう長年というものではないが、少しオーバーな表現を借りると二人の交友の背景には、戦後ある時代における日韓関係史があるように思える。ことに両国間に面倒なトラブルが浮上するつど、それを節目として討論しながら交友が深まったような感じがする。中曾根内閣時代に全斗煥大統領が来日されてからは「日韓友好」が流行語のように容易に使われていると思うが、彼と私の交友は本当の意味での「日韓友好」のようにさえ自負している。しかも二人の交友は政治家や外交官の立場でなくて、全く一人の韓国人学者と一人の日本人ジャーナリストとしてで、それは人間の交流であるとさえわたしは思っている。

彼と知り合ったのは昭和四十八年十月二十日(土)夜のことだ。「この日が韓国に対する意識変革の日となった」とも私の日記にある。場所は港区内の韓国料理屋だった。その年の八月八日には東京のホテルから金大中氏が韓国人グループに強制連行されて犯人は不明だったが、日本のマスコミは反韓記事であふれていた。当時は朝日新聞の公安担当記者だった私も、その事件を追う毎日でマスコミの論調は強く韓国の日本に対する主権侵害を

糾弾していた。ホテルの犯行現場から在日韓国大使館員の指紋が検出される直前にその大使館員が急ぎ離日したので政治、外交問題に発展して険悪な関係になっていた。その事態解決のため第一無任所長官の李秉禧氏が秘かに来日して日本側関係当局の意向を打診していた。その李長官がマスコミ人の意見を聞きたい、ということのようである。崔さんが数人の日本人ジャーナリストを集めたが、私も親しい雑誌編集長の紹介で招かれたのが彼との初対面となった。確かに韓国官憲が日本の主権を侵害した容疑は濃厚で私も韓国を厳しく批判していたが、その席で崔さんから「日本は韓国の主権を三十余年間にわたり奪ったではありませんか。日本人は他国に主権があることをご存知でしたか」と反問されてわたしは返答に困った。それが韓国人の心を知った私のおおきな転機となった。その席は崔さんが李長官に活字やテレビでなく日本マスコミの本当の声を直接知らせたほうが有益である、と考えてセツトしたのであろう。

両氏には初対面だったが、私は一貫して「この事件は韓国側が一日も早く遺憾の意を表明しなければ、日本の世論は鎮静しまい」と強くアドバイスした。その進言に効果があつてか、結局は後に李長官が金鍾泌首相とともに来日、田中角栄首相を訪ねて公式に陳謝することで事態は政治解決へ動くことになったが、その知られざる功労は崔さんのものである。

その後は度々崔さんと会うことになったが「安重根という人をご存知か」とも問われたが、私には伊藤博文を銃殺した犯人という程度の知識しかなかった。平凡社の世界大百科事典三十三巻の中にも「安重根」の項目はなく、崔さんの研究所で古い文献や資料を閲覧して韓国人の心を知り胸は痛んだ。

ところが翌四十九年（一九七四年）八月十五日の光復節では日本で生れて育った韓国人青年の文世光が、偽造

旅券でソウルへ潜入して朴大統領夫妻を銃撃し、陸英修夫人は死亡した。金大中事件とは逆にこんどは日本が責められる立場で再び両国関係は険悪となり、また李長官が来日した。その時も崔さんを含めた三人で、なんとか悪化した日韓関係を修復できる途を探したが、このあたりから私は日韓関係史ことに総督府時代の検証に深い興味を持ち大きな意識変革に襲われた。

昭和五十四年（一九七五年）九月二日は安重根の生誕百年祭がソウルの国立劇場で開かれることを彼から知らされて初めて訪韓したが、安重根に寄せる韓国人の心を知り驚いた。その生誕祭から帰国して朝日新聞（79・9・10付）に「伊藤博文暗殺の安重根生誕一〇〇年祝う韓国人の心民族の英雄と崇拜 日本とは対等な交流望む」との大きな特集記事を署名入りで書いた。多くの読者に大きな衝撃を与えたようで、それを契機として安重根に関する資料、遺墨、証人が続々と名乗り出て次々と新聞記事として追った。続いて文芸春秋社の『諸君！』（79・12月号）には「義士 安重根は生きている 生誕百年祭に見た日韓の断層」という拙稿が、また大きな反響をよんで安重根の研究熱が日本で高まった。

日本の歴史教科書の日韓関係の記述に誤りがある、という声が高まり昭和五十七年（一九八二年）八月十日の参院文教委員会では秦野章議員（後に法相）が小川平二文相に次のように質疑した。

「韓国にとって伊藤博文を暗殺した安重根が英雄なのは当然であり、日本にとっては伊藤博文は偉大な政治家である。これは矛盾するものではなく、そこまで踏み込まないと国と国の友好は進まない。

侵略の史実を教科書に正しく記述するということは、再び侵略を繰り返してはならないという意味である」

その質問の後、私とは親しい秦野氏は「まだ日本では安重根という歴史上の重要人物を知らない政治家、役人、

新聞記者が多いので一人でも多く安重根を知ってもらいたくて質問の形で安重根を紹介したかった」と打ち明けた。

日本に帝国議会が創設されたのは明治十四年（一八八一年）十月だが、それから百年以上たって秦野議員によつて、日本議会政治史で初めて「安重根」なる韓国人の名前が紹介され、国会の速記録に残ったのである。しかし、その秦野発言とは逆に閣議では歴史教科書の検定問題に関連して松野幸泰国土庁長官は、

「伊藤博文を元凶といい、その暗殺犯を英雄として扱っている外国の教科書もある。その犯人を英雄とする外国の教科書については、日本人も黙っているではないか」と発言した。

これでは韓国が日本の教科書に抗議するのは不当だ、といわんばかりなので在日韓国大使館は日本外務省に抗議した。

昭和四十四年（一九六九年）に東京・神田の古本屋で崔さんが安義士の獄中記（日本語訳）を発見したことから日本では安重根を見なおす関心が起きてきた。

三省堂発行の高校教科書『日本史』には「日本は、これ（伊藤暗殺）をきっかけに韓国を併合する準備を進め」と、また自由書房『新日本史』は「伊藤が暗殺された事件を契機に」と、さらに東京書籍『日本史』は「韓国民の不満は大きく、前統監の伊藤博文もそのために暗殺された。そこで日本は、このような動きをおさえるため一九一〇年（明治四十三年）日韓条約を成立させた」と記述しているが、いずれも間違いである。

これらの教科書では、あたかも伊藤暗殺があったから日韓併合となった、ということになるが、伊藤暗殺（一九〇九・一〇・二六）より前の同年七月六日に桂太郎内閣は閣議で併合条約を正式決定している。

崔さんの日韓関係史の研究方法は実証的であり、安重根に関しても証言や証拠を重視して多くの資料を発見している。

その一人、旅順刑務所で安重根の処刑に立ち会った栗原貞吉典獄の三女、今井房子さんの証言も崔さんは録音している。その今井さんとはソウルの生誕百年祭へ一緒に出席したが、すでに七十七歳という高齢だった。今井さんは百年祭の後に開かれたパーティで次のように挨拶した。

「あのころ私は小学生でしたが、父から家で安重根さんのことをたびたび聞かされました。父は『あの男は殺人犯ではあるが、死刑にするには惜しい立派な人間だよ』と口癖のように言っていました。処刑の時刻が迫り父は安重根さんから羽二重の韓国服を着せてくれ、と頼まれたので差し上げ、父は『誠に申し訳ない』と謝ったというところでございます。官舎へは毎日のように多くの韓国人が助命嘆願に見えて、泣いていたのを覚えています」

安義士への関心が日本で高まるにつれて処刑直前に獄中で書いた遺墨が宮城県下の農家に秘蔵されていることも判明した。崔さんに申し出た遺墨の持主は同県栗原郡若柳町の農業、三浦幸喜、くに子夫妻であった。

くに子さんの叔父に当たる元陸軍憲兵曹長の千葉十七（とうしち＝明治十七年生れから名づけられた）さんは明治四十三年（一九一〇年）三月二十六日、安被告が死刑されるまで旅順刑務所の看守隊長だった。

死刑の時刻が迫ると安被告は千葉曹長に「獄中で親切な世話を受けたことに感謝する。友情の印としてこの書を」と絹布に書かれた遺墨を贈った。

それには「為國献身軍人本分 庚戌三月 於旅順獄中 大韓國人 安重根謹拝」とある。幼少のころから漢学

を学んだだけになかなかの達筆で、左手の掌紋が押してあるが、薬指が欠けているのは同志と薬指を斬って博文への「義挙」を誓う断指同盟の旗に血書したためである。

千葉曹長は退役し、その遺墨を持って故郷の宮城県に帰ったが、当時のこととて他言することは許されず仏壇に所蔵していた。千葉曹長は昭和九年（一九三四年）十二月に他界したが、その遺墨は三浦夫妻に引き継がれていた。

その遺墨を高額で買取しようとした業者や政治家もいたが、三浦夫妻は断り続けてきた。だがその三浦夫妻も崔さんの熱い説得を受けて譲渡を快諾して上京、昭和五十四年（一九七九年）十二月十一日、遺墨の贈呈式が東京韓国研究院で行われた。

その席でくに子さんは

「生前の叔父は安重根は単なる殺人犯ではない。いずれの日か、韓国が独立した時には忠臣として再評価されるでしょうと遺言して亡くなりました。実子のいない叔父から私が遺墨を引き継ぎ、その遺言どおり長いこと仏壇におさめ人目を避けて供養してきましたが、世の中が変り晴れて故国へ帰られることになって、うれしい……」

と涙を流しながら挨拶した。

その贈呈式は朝日新聞（79・12・12付）に報道されたが、その記事の末尾には崔院長の談話として「貴重な文化財である安義士の遺墨を売買の対象として値段をつけることはできない。安義士を賛えるにふさわしい公共の場に永く飾りたい」とあるように母国の陸軍士官学校へ寄贈されている。

この話が新聞で宮城県栗原郡に伝えられると、地元の曹洞宗大林寺の斎藤隣悟住職が中心となって「安重根義士記念碑期成会」が結成され、同寺の境内に供養記念碑が建てられて昭和五十六年（一九八一年）三月二十六日の命日、落慶法要と祝膳会が催された。

安義士が死刑された日、つまり命日には再三にわたりソウルを訪問したが、そのつど崔さんの紹介で多くの韓国人と知り合い暗い総督府時代の証言を得た。

そのうちの一人、崔さんの叔父に当たる崔養玉さん（故人・当時八十六歳）は反日独立運動で長く獄中にあった。獄中の十八年間の苦勞を彫ったように深いしわの顔、そして精悍な眼光が日本人の私をにらみつけるようだった。その時も問答を記録すると、

「昔の話を聞きたいんですが」

「日本が戦争に負けて刑務所から釈放された時、日本人を皆殺しにしてやろうと思った。もう日本人の顔なんか、見るのもいやだったけど……、崔書勉の紹介ならば……」

「どんな罪で投獄されたのですか」

「二十五歳のころ、上海にあった独立司令部の命を受けて独立運動の闘争資金を獲得する活動をしていったんだ。日本の憲兵や警察に捕って刑務所を出たり、入ったり……最後の獄中は十八年、五十二歳の独身で解放の日を迎えたんだ」

「独立運動って、どんなことを」

「わしは日本総督府の現金輸送車を襲って資金を奪う役目だった。国を奪われた民族が日本のカネを奪い返すのは正義だ、という信念だった」

「解放後は、どうしていたのですか」

「この二十二年間、家賃は払わず、めし代もタダ、囚人服を着せられていた。多くの仲間は獄中で暴行を受け死んだよ。五十二歳で自由の身となったが、なんの職業にもつきようがなかった。だが解放後に『お前は刑務所のこと、よく知ってるだろう』といわれ思いがけずに刑務所長となった。まあ、日本には随分と世話になったよ」

「解放された時には」

「戦争に負けて帰っていく日本人を見たらかわいそうになり、報復はやめたよ。引き揚げの手伝いまでしてやった」

「今の気持ちは」

「もう昔のことだ。今まで一度も日本人に謝罪されたことはないが、もう許してやる。だが、あのころの苦しさは忘れていない」

「その老闘志は語りながら不幸な過去を思いだして次第に興奮し、ゲンコツをふり回しながらしゃべりまくり、私も狼狽せざるを得なかった。

またソウル訪問中に親しくなった年配の外交官からは次のような回想を聞いたことがある。

「総督府時代に、まだ私は小学生だった。学校では憲兵や警察官が教室にまで来て日本人の教師を守っていた。日本人の教師は生徒たちに朝鮮語を使うことを禁じていたが、家に帰ると母親から『日本語を使うな』と叱られた。学校で成績がよくて賞状をもらい、うれしくなり家に帰って母親に見せたら『そんなもの、捨てなさい』といわれて困った。今になって思うと、それはどういうことであつたのか、母親の気持ちがよくわかる」

朴政権時代の駐日大使だった金永善氏とも崔さんの紹介で親しくなり、大使公邸での食事に招かれたこともある。その後ソウルを訪ねた際にも、商工会議所総裁となつた大使ともお目にかかつたが、間もなく亡くなつた。金大使が離日する際には、また崔さんの提唱で小さな歓送パーティが国際文化会館で開かれたが、その席での金大使の挨拶は今も鮮烈に私の耳に残っている。それは

「日本の皆さんは韓国問題に関する限り、もう少し歴史的な反省を持つていただけるとよいと思います。

金大中事件で韓国政府はできるだけのことをやつたのに、両国の間には相当深いコミュニケーション・ギャップがあります。文世光事件にしても背後関係がいろいろあり、その資料を日本側へ提供しましたが、日本国内法の問題だという理由で、ほとんど採用してもらえませんでした。

明治時代のことですが、駐韓日本公使は浪人を引きつれてきて当時の明成皇后を殺害（一八九五年の閔妃事件）しました。それなのに日本の裁判所は証拠不充分という理由で全員を無罪放免にしているではありませんか。日本の歴代総理は欧米や東南アジアは訪ねますが、隣の韓国にはおいでにならない。

日韓経済協力ともいいますが、日本は韓国を無償で援助しているわけではありませんでしょう。日本の経済援

助には感謝しておりますが、その資金援助には利息も払っていますし、日本も随分と儲けたはずですよ。

韓国は日本の軍事援助で守られているのではありませんのに、韓国内のできごとを日本の内政のように批判する人がいます。アメリカ軍は韓国に駐留していますので、韓日関係と韓米関係とは違うのではありませんか」

訪韓の際、元朝鮮日報の論説委員で言論界の長老である崔錫采氏に崔さんと一緒にソウルの料理屋で供応を受けたこともある。その際に聞いた同氏の話も印象的で忘れることができない。それは

「いまさら日本の韓国支配を、とやかくいっても仕方がない。

われわれの先代が非力で日帝の侵略に屈服してしまった。私は日帝を憎むよりも、先代の腰ぬけぶりに腹が立つ。これからは経済力と軍事力を強化して日本とは対等の関係になり、日本が不当なことをいったら九州あたりへ一個師団ぐらい出兵させてから外交折衝したらいい。

今ごろになって日韓友好とか経済協力とか、なんとかいっているが、日本人にペコペコ頭を下げてカネを儲けさせてもらおうなんて、卑屈な考えを持つ人がいては韓国はダメだ。われわれの先代がだらしなから日本にやられたんだ。

これからは日本に負けないように国力を充実させることだ。ぼくは若い者にそう説いているんだ」

これは韓国人の歴史的な反省から生れた言葉で、高齢の韓国人が若い世代の韓国人に贈る言葉として理解できるが、藤尾正行氏のように日本の文部大臣が雑誌で公言すると問題になる。加害者の方から被害者を批判する発言ではないからである。

ソウル市の南山公園に石造の安重根義士記念館が建てられている。総督府時代には伊勢神宮と明治神宮を模して朝鮮神宮が建てられて、韓国人に参拝を強要した跡地だが、終戦つまり解放されると直ちに撤去された。韓国人の心のシンボルともいえる聖地で、修学旅行の生徒が参拝するところでもなり、いつも長い市民の列が続いている。

安義士の処刑日（命日）である三月二十六日には追念（法要）式が安重根崇慕会の主催で開かれるが、崔さんから紹介された同会の理事長である尹致映氏（当時八十九歳）も忘れることのできない人である。尹理事長は大正初期に東京へ留学した早大卒、元内相、元駐仏大使もつとめた人で、早大時代の回想になると話が止まらない。九月二日の安義士の誕生日には来日し宮城県の大林寺を訪ねて前述した供養記念碑に参拝する。三月二十六日の命日に再三参列したが、昭和六十一年（一九八六年）の場合は印象が深い。

当日の日本からの参列者は私のほか日韓問題の法的側面を研究している鹿野琢見弁護士、『安重根 日韓関係の原像』を著述した中野泰雄・亜細亜大学教授、それに日韓親善のボランティア活動をしている山口卓治・サンオフィスKK社長の四人だった。

式典当日の記念館と銅像は花輪に包まれていて少年少女の安義士を賛える朗読が感慨深かった。ちようど、その春は皇太子ご夫妻の訪韓が伝えられて韓国側には賛否両論が渦まいていた。後に妃殿下の健康上の理由で訪韓は中止となったが、訪韓に最も強く反対していたのは民主統一民衆運動連合（文益煥議長）で、一部の野党と学生が同調していた。その反対理由は声明文によると「天皇は三千万同胞の民族精神と文化を抹殺しようと画策した帝国主義集団の総責任者だ」「韓国の軍事独裁政権が国民の指弾を受ける不利な立場を外勢によって解決しよう

とする外勢依存的な態度の見本だ」などというものだった。

明治、大正、昭和の戦前戦後にわたり日本を見つめてきた高齢の尹理事長は、皇太子の訪韓をどう考えるのか、深い興味があった。その尹理事長と懇談する機会があったが、その際に彼は

「私も若いころ東京で反日帝の独立運動をやった。だが、いつまでも昔のことを怨んでいても発展的ではない。これから大切なことは両国の親善だ。大統領の訪日に答礼として皇太子が来韓されるなら、それでいいではないか」と寛容であった。

話は時期が前後してしまっただが、その前年の昭和五十九年（一九八四年）の九月、中曾根首相の招きで全斗煥大統領が来日し、皇居へも参上した。韓国の元首が来日して天皇を訪ねたのは両国関係史で初めてのこと。大きな波紋を両国に描き、これを機会に「日韓友好」「日韓新時代」という言葉が流行語ようになった。だが「日韓友好」というのは、口先や活字でいうほど簡単なことではない。そのためには、あらためて長く暗い両国関係に傷つけられた韓国人の心を理解することが前提条件だろう。

全大統領の訪問をうけた「天皇のお言葉」には「永い歴史にわたり、両国は深い隣人関係にあったのであります。このような間柄にもかかわらず、今世紀の一時期において両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います」とあった。

これに対して全大統領は「陛下が過ぐる日の両国関係史における不幸だった過去について述べられるのを、私のはわが国民とともに厳粛な気持で傾聴しました」と答え、それからの日本では「日韓新時代」という言葉もマス

コミに気やすく使われるようになった。

天皇の「おことば」について東亜日報・宋建鍋編集局長の「韓日間の不幸な過去というのは侵奪されたわれわれが不幸だったわけ、加害者の日本が不幸だったわけではない。従ってこの表現は適切とは思わない」との談話も日本の新聞に伝えられた。

そこで崔院長の意見を求めると

「日本の朝鮮侵略は天皇の名で推進された。その加害者である天皇がソウルを訪問する前に、被害者の韓国大統領が皇居へ参上するのは順序が逆ではないか」

というものだったが、それも韓国人の心として理解できる。

初めて安重根記念館を訪ねたのは暑い日だったが、太極旗を飾って前進する安義士の銅像の台座にはハンダ文字で詩が彫記してある。立ち読みする崔さんから日本語に訳していただいたが、それは

祖国の傾く時

正義を貫きし人よ

歴史の波の上に

山の如く聳えし人よ

月も日も行く道をとめ

あなたを仰ぎ見る

銅像の背後にある広い石壁にもハングル文字がぎっしりと彫記されているが、それは安義士が処刑直前に書いた遺書だということである。それも崔さんの訳によると

「余は祖国の独立を願ひ 東洋平和のため 伊藤博文なる盜賊の征伐には成功したが 独立という所期の目的を達成せず いま処刑台に立つ わが二千万人の兄弟は 自ら奮発して 学問に励み 産業を振興し 余の遺志を継いで祖国の独立を回復するならば 余に処刑への怨みは全くない」

続いて「伊藤博文の罪状十五カ状」が列記してあるが、主なものを拾うと「韓国皇帝の廃位を強いた」「軍隊を強制的に解散せしめた」「良民を多数殺害した」「母国語の教科書を焼却して日本語を強要した」「土地と食糧を奪った」などがある。

私は安重根に寄せる「韓国人の心」を理解することが真に日韓友好への不可欠な前提だと考えている。それを踏み越えないうちに日本人は軽々しく「日韓友好」を口にするのは慎しまねばならない、とも思っている。私は新聞や雑誌を通して一人でも多くの日本人に安重根に関する正しい知識や情報を広めることがジャーナリストの任務とも信じている。しかし日本の現状では拙宅へ名前を明らかにしない日本人から電話がかかり「お前はそれでも日本人か。人を殺した安重根は悪い人で、伊藤博文は偉い人である。バカ野郎」とどなられたこともある。安重根の義挙（伊藤暗殺）は明治時代における両国の国益の衝突から起きた流血事件ともいえるが、今大切なことは当面の自国の利益を武力で実現する「狭い愛国心」であるよりは、人類の利益を視点とした広い「ヒューマニズム」であろうと信じている。

「崔書勉氏と私」との友情には八十年も前の安重根義士が生きている。そして日韓関係史に関する私の知識や

評価の源泉には、崔さんとの交友がある。文中に登場した人物は、すべて崔さんから紹介された人ばかりなのだから。

強烈な熱情を持った人

高橋 通敏

(創価大学教授)

いつの日であつたか思い出せないが、私は外務省時代の同僚かつ畏友金山政英・元韓国駐在大使を彼の主催する国際関係共同研究所におとずれたことがあつた。彼を通して私は韓国研究院長の崔書勉先生に紹介され、ぎっしりつまつた書庫をみ、そのなかにはいつかは読んでみようと思う多くの著書、資料をみた。爾来、私は崔先生や金山元大使の主催する研究会や報告会にしばしばお招きを受け崔先生と会談する機会をもつた。そして、たちまち崔先生の魅力――いや魔力といった方がよいかもしれない――のとりことなつてしまった。崔先生には大きな包擁力、あるいは政治力といったものがあるように思われる。しかし、私が魅力を感じたのはその点ではない。そんな人は沢山いる。崔先生の心の奥底にはあくまで真実を探究してゆこうとする強烈な熱情が私にはみえるのである。(その頃、私は東西ドイツの分裂の経緯及びその将来についての研究に没頭していた。)

国家間の関係は地理的位置が近ければ近いほどもろもろの紛争や葛藤や憎悪が発生する。いわゆる Love and Hate の関係である。その間にあつて冷静に客観的にししかも熱烈に事実を追つてゆこうとするとは並大ていのこ

とではない。私が崔先生の魅力にとりつかれたのはこの点である。私はひそかに崔先生の心の奥底にいはばこのような冷い火、冷酷あるいは残酷とまでも言いたいような、めらめらと燃え盛っている火をかいまみるのである。崔先生が抱擁力あり政治力ありと言われているのも、このようなすばらしい「冷い火」をおおいかくそうとしている一種の社交技術に過ぎないのではないか。

国家間の関係を恒久的友好的関係におくにはお互いに相手国のことを過去、現在、将来に亘って「事実」をもつて徹底的に研究するほかない。――また学問に国境はない――。そうすることにより是非曲直が明らかとなり、理解が生まれ寛容が生れてくるのではなからうか。崔先生こそまさにこれをやり遂げられる人であろう。

私も及ばずながら過去の日韓関係についてもっともっと研究して――七十の手習いということがある――崔先生の心の奥底に闖入してみたいと思っている。

チエさん時代の思い出

建部 喜代子

(元・国会図書館A A資料課)

崔書勉院長と私は、およそ二十五年来のおつき合いです。十年位前まで私は、院長のことを、いつも、友達同志のようにチエさんとおよびしていました。それもチが高音で、まるで日本人女性のチエさんをよぶように。じつは、院長とも関係深い人で、私が勤めていた国立国会図書館（以下、「国立」を略します。）の先輩同僚吉田フミさんが、感心（？）にも、「サイ」さんでなく「チエ」さんといつも云われていたのが私にうつったようです。しかし、二十五年間のさまざまな出来事が忘却のベールをかぶって行くなかで、吉田さんも亡きあとの今では、自分ではそれでよかったとおもうと同時に、ひとしおなつかしいよび名なのです。またなぜか、チエさん、で思いう出すのは、お知り合いになつて間もない頃のことばかりです。

その頃は、一般に世の中の歯車がゆっくりまわっていたようです。国会図書館の建物（現在の本館）が、約十年がかりで完成したのが一九六一（昭和三六）年でした。その開館時から私は、自分から希望してコリア（韓国、北朝鮮の総称名として用います。）関係の仕事を担当しますが、以来十六年お世話になるそのアジア・アフリカ課

は、雄大な課名とうらはらに、人員は課長共で八名、そして年齢構成も高いためか、私が入る時はあまり人気のない課でした。私はラッキーでした。大学の専攻と関係なしに、韓国（忠清南道）で子供時代をすごした経験のみで有資格にされたふしがありました。

その頃は、世田谷区の下馬一丁目に住んでいて、通勤の乗物（バスと地下鉄）の中で、吉田さん（当時五十歳位）とよく出会っていました。吉田さんは才色兼備の、みるからに高貴の出で、じじつ、国会図書館でも有数の上流婦人だといわれていました。当初はそのような、部署もちがう人と親しくお話するなどおもってもみませんでした。ところがひょいと吉田さんの方から、彼女の家に韓国政府の要人とおぼしき人物とその家族が一諸に住んでいることを、また、その一家を大切な店子だとして私に話されました。

崔書勉院長と私がお知り合いになるきっかけは、つまり、吉田さんのその大切な店子の方が、ほかならぬチエさん、院長だったからです。はじめて吉田さんから、院長を紹介された時のことをおぼえています。ある日、吉田さんにさそわれて青山の韓国公報館へ韓国映画をみに行ったところ、そのあとで、ダーク・スーツをびしょとさめて、一人の韓国人男性が現実に見われた！……まだなにか、映画をみているようなシーンでした。ほんの三分の顔合せだったでしょうか。院長は、三八、九歳にみえました。そして、今からおもえば、どこことなく李朝時代の両班の面影があつて素敵でした。滞日五年位！

当時のチエさんは、筑地か銀座あたりのビル内に事務所をもつておられ、一度だけそこへ伺ったことがあります。しかし実質上の事務所は、私自身が近くに住んでいたせいか、目黒区東山のご自宅（吉田邸）の書斎兼客間の印象でした。ときどきこちらから文献資料等をおとどけするのはお宅の方で、その方が私としては自然でし

た。いずれにせよ、文字どおり国際人として東奔西走の今日の院長でなく、おそらくほとんど東京在住の頃の話です。お子様のポールさん、エンディさん共、まだたいへんお小さい時分でした。奥様の朴順玉女史は、まさに吉田さんの云われるチャージングな美しい方で、また、日本語の発音がとてもきれいでした。長くアメリカにご滞在とか、まだ日本人を嫌いになっていらつしやらなければ、いつか、もう一度お目にかかりたいと心からおもう方です。

ところで、図書館の仕事をしていてもわかりましたが、一九六三年頃から、それまで江戸時代の鎖国同様であった日韓の關係が、すくなくとも人的交流面でいちだんと活発化しました。世の中の齒車のまわり方がすこしはやくなったことを、日本人一般も感じはじめた頃でしょう。翌一九六四年には、東京オリンピックが行われます。さて、その年は、なんといつてもチエさんと私との最大の思い出、私の韓国訪問の年です。なお、生まれてはじめての海外旅行経験の年でもあります。生まれ育った国へ、生まれてはじめての……まだ国交回復前の韓国を、ただの觀光目的で一月も訪問旅行ができたのは、ほかならぬチエさんのおかげだったのです。もちろん、その出発の日はよくおぼえています。十月十七日（オリンピック開催中と時期がかさなるのは、私がスポーツにあまり関心がなかった証拠です。念のため一一）の当日は、早朝から、チエさんみずから運転の車に吉田さんと同乗し羽田空港へむかいました。空港には、入館同期の桜、土井稔子さんが、時間休をとって見送りにきていました。皆で写真をとったり、私は花束をいただいたりと、それはもう、晴れがましくもうれしい、あの日の旅立ちでありました。

十年位前から私は、崔書勉院長ご本人にたいしては、「院長さん」とおよびすることにしました。それまでご本

人にたいしても、チエさんだったものを。それからだんだん、普通「崔書勉院長」、「院長」、ただし、韓国人と韓国語で話す場合などは、昔も今も「崔書勉氏」となります。

最近の私は、国会図書館を退職後、イギリスでは英語を、イタリア（のフィレンツェ）では、イタリア語とルネッサンス美術を勉強するために、三回、約延べ二年間私費留学をしていました。昨年のお正月は、フィレンツェの私のところに、院長から韓国研究院の手帳が例年どおり送られてきたので、たいへんうれしくおもいました。吉田さんは八、九年前、土井さんも五年ほど前に五十歳の若さで亡くなってしまい、あの韓国出發の朝の四人が、院長と私だけになりました。二十五年は、やはり長かったとおもいます。そして、亡くなった二人の、よき先輩、よき同輩にめぐまれたからこそ、今日まで私と院長とのよきおつき合い、と自分でおもっているもの、も、できたのではと。

（一九八八年一月記す）

崔書勉先生に呈すること

田中正美

(愛知学院大学教授)

崔先生にお近づきをいただいてから、十年ぐらいになる。そのきっかけは、私どもが、筑波大学で、日韓学術交流をすすめようとして崔先生にいろいろと御教示や御援助をお願いしたことにある。たしか同僚の村松剛・稲葉継雄両先生が、熱心に仲介の労をとって下さったように思う。その時以来、崔先生には一方ならぬ御世話になりながら、お恥しいことに、一向になんのお返しもできないまま今日にいたっている。もつとも、私以外にも、崔先生のお世話になりっぱなしの人々が、案外多いのではないかと思う。それにもかかわらず、崔先生のにこやかな態度はいつも変わることはない。別にお返しがあろうとなかろうと、いわんや私欲など全く問題外で、日韓交流への献身と韓国研究への情熱を、悠揚迫らぬ姿勢で、倦むことなく日常的ペースとして、継続しておられるのである。

崔先生とは、このような先生である。だから私どもは深い敬愛の念をもちながら、遠慮もなく、どんな問題でも率直に提示し、討論をつくすことができるのである。

私は、中国史の研究に従事する身であるが、近ごろしきりに思うことは、中国史の研究を通じて日本の歴史や文化、もしくは伝統の独自性をどのように理解すべきであるか、さらに日本人の長所や短所とは何なのか、という問題である。日本の優秀性に関しては、私なりの考え方があがるが、それは一応おくとして、中国の歴史や文化には、比較にならぬスケールの大きさがあがり、しかも、自国の歴史や文化に対する意識的無意識的な尊重があがる。これらのことは、中国史上の人物にも、また現代中国の指導者にもよく反映されていると思われる。

韓国の文化には、中国の文化のすぐれた要素がしみこんでおり、それが歴史の苦しい試練を経て、独自の性格に形成されながら今日にいたっている。崔先生のなかにあるスケールの大きさと強靱さは、このような韓国文化の独自性につながるものであろう。

また、崔先生は、何といってもすぐれた愛国者であって、その本質は、安重根の研究に傾けておられる情熱と努力からして、安重根と共通したものと考えざるをえない。ただ、崔先生の愛国者としての人柄には、少くとも表面的な激情的なものや怨念的なものが、ほとんど現われてこないものであって、それだけに、私どもは時として、恐るべき迫力と畏敬を覚えずにはおられない。

この七月二十一日に、崔先生の在日三十年をお祝いする会が開催されることになり、まことに慶賀にたえない。この間、崔先生には、さぞかし私どもにははかり知れない御苦勞を経験されたことであろう。しかし、文字通り強靱な精神力と体力と、さらにやむにやまれぬ使命感に支えられて、度重なる苦境を克服され、日本と韓国との民間における最大のかげ橋となり、日本の韓国研究の発展に偉大な業績を樹立されたことは、驚嘆に価するものであり、ほとんど敬服にたえない。しかし、日本と韓国との間には、相互理解と親善の上で、なお幾多の課題が

存在するし、それへの真剣な対応には、相互交流と相互研究をさらに発展させ深めて行く継続的な熱意と努力が不可欠である。

こうしてみると、崔先生は、まさにかげがえのない存在なのであるから、切に御自愛と御健闘を祈らずにはおれない。

血肉わけたる仲ではないが

筑波常治

(早稲田大学教授)

血肉わけたる仲ではないが

なぜか気が合うて離れられぬ

これは、旧海軍の愛唱歌『同期の桜』のなかの一節だが、崔書勉さんにたいする私の気もちもこのとおりである。「なぜか」は文字どおり「なぜか」なのであって、もっと具体的に説明しろといわれてもできない。ほんらい好きとか嫌いとかは感情の領分にぞくし、なかなか理論的にはわりきれない。むしろ理くつなどこじつけず、どういおうとも好きなものは好きなのだと素直に告白しておくのがいちばんよいと思う。

最初に知りあったきっかけは宮廷料理だった。李王朝の宴会料理の伝統をまもり伝えているという在日韓国人の人から――それまでその人ともじつは全く面識がなかったのだが――どういふ関係でかとおぜん試食会の招待状がとどいたのである。食道楽を自認する手まえ早速でかけて見た。一九七〇年ごろのことだ。

いって見たその席で、ちょうど真ん前にむかいあって座った人が崔さんで名刺を交換した。これがはじまりで

ある。まさに奇縁だが、交際とはこのように偶然から生じることが多いのだろう。ただそれを契機としてあとあとまでつづく場合と、そのとき限りで終わる場合とにわかれる。崔さんとは前者の関係になったということだ。

わたしは崔さんの過去は知らない。延世大学の出身でカトリック信徒で、日本へ密航亡命して……といった程度は御本人から聞いている。ほかの人たちからいくつか噂は聞いた。そしてどの噂がほんとうだかわからないゆえに「怪人物」であるというこれまた噂も聞いた。だがそれはそれでよいのだと思う。人間だれしも秘密とはいえないまでも、あえて話す必要のないことがある。おたがいに知り得た範囲のなかで、可能なかぎりのつきあいをするのが、理想的対人関係ではあるまいか。まさに「親しき仲にも礼儀あり」であり、「君子の交わりは淡き」と水のごとし」というのだから。

そしてそういう範囲で私は自分なりに、崔さんおよび韓国研究院をずいぶん利用させてもらった。この点ではどうも淡きことという君子の域をすでに越えてしまっているかもしれない。私は韓国にかんする知識を、さまざまな経路をつうじて得るようにつとめてきたつもりだが、あらためてふりかえって見ると崔さんと研究院によるものが圧倒的に多いのだ。同時に――勝手ながら――私なりのけじめもつけてきた。崔さんには当然ながら各方面の交際があり、それにもとづき研究院の事業もいろいろな分野にまたがるようだ。しかし私はたとえば国際政治をめぐる生ぐさいような話題には、あえてふれないようにしている。その種の話題が無価値という意味ではない。だがそれにはそれにふさわしい人材が他におり、私などにはしよせん不向きな領域と考えているからだ。そのかわり韓日関係の歴史とか、学術文化をめぐる問題とかには、積極的に参加するようところがけてきた。もつとも参加とはいっても、こちらから何かを提供する能力はなく、もっぱら一方的に情報を得させてもらっている

だけなのだが。

そういう次第で、もとはといえば宮廷料理の奇縁から生じた崔さんとの交際によって、十年以上——そろそろ二十年に近づく——この歳月、私は大いに利益を得てきた。けれども私の存在が崔さんや研究院にとって、はたしてどう役だったか考えると心もとない。どうも私のほうが寄生してきただけではないかという気もするのだが、出入り禁止にならないところをみると多少貢献はしてきたことになっているのかも知れない。

崔さんと私の関係は以上のとおりである。そして私としてはこの関係を今後もつづけて行きたいと念願している。

崔さん、どうぞ、これからもよろしく！

崔書勉院長と私

津崎 至

(元・日本経済新聞記者)

「韓国人にしては、いささか風変わりな人物……」というのが、初対面の時の印象だった。

もちろん、私にとって、それまで崔書勉氏がいかなる人物であるか、全く知らなかった。たまたま、「日韓友好」のテレビ番組作りのため韓国研究院の建物に“同居”されていた金山政英氏（国際関係共同研究所々長・元駐韓大使）を訪れたのが、崔氏と言葉をかわすきっかけであった。

実は私の“ふるさと”は、京城——韓国・ソウル特別市である、銀行マンであった父を四歳の時（一九二九年）に亡くしたが、そのまま、母、兄、姉とともにこの地に二十年の歳月を過ごしたのである。したがって、韓国人、韓国文化は、それとない形で私の頭に“定義”づけられていた。

また、その生まれ、育ちから、引揚げ後（日本に）四十数年たった今も、いわゆる日本人になりきれないでいる自分を、時々、見出すのである。職業が新聞記者であったせいもあって、そうした“非日本人”的な言動は、災いとならず？ 今日に至っている。

そのような私にも、一つの定型化した韓国人の姿があった。こう言つてはなんだが、(一)、強力な権力をバックに虎の威を借りるパターン、(二)、絶対強力な権力に出合うとひれ伏すタイプ(もちろん、この二つのタイプは日本人に多く見られるので、あながち韓国人だけのタイプとは言えないが……)が顕著な形であった。

そうそう、もう一つのタイプがあった、それは「われ関せず……」の人物である。

そうしたタイプの中で、私が特に感じたのは、(一)と(二)である。それは、おそらく、わが国が三十八年間朝鮮半島を統治した“大日本帝国統治時代”に育ったせいでもあろう。

ところが、この崔氏なる人物、ひょうひょうとして、全くの自然体なのである。

韓国人のあごひげは珍らしくないが、鼻の下のひげはめつたお目にかかれない。しかし崔氏は堂々と鼻の下に黒々としたひげをたくわえている。これもラチ外の韓国人である。

お会いしているうちに、崔氏が安重根、金玉均両氏の研究家であることも知った。たまたま、金玉均氏については、現代戯曲全集の中に、庚申の乱?についての劇作があったので、それを読み、金玉均氏の側面は知らされていた。

いささか余談になるが、この劇作に見る金玉均氏、当時の韓国政府(李朝)に対して、全く臆するところなかった、また、日本に亡命しても、日本政府に“自分が亡命者”であることを全く意に介する卑屈な姿勢はなかった、いわゆる大人物である。また、日本政府も同氏に対して、少なくとも三十八年間統治の間に見られるような圧迫は見られなかった。後日、崔氏から光栄にも金玉均氏の伝記を一冊、頂戴したが、それを読んでも同氏は堂々と日本で“ただめし”を食っていた。おそらく、現在、日本のどこかに同氏と日本の女性との間にできた二

世、三世が現存しているのではないかと考える（このくだりについては、全くの推測、誤りであればヒラにごめん下さい）。

崔氏の滞日三十年にも、このような堂々たる“風貌”を感じる。

私どもの少年時代、韓国人はほとんど、反日的な思想を持っていた、それは当然のことだと思っていた。

崔氏も、抗日運動を続けた、と聞く。

その抗日運動の主が、戦後、反政府的言動から、日本に密入国したという。抗日の士が、その地理的な関係から日本に密入国というのは分かるが、それから三十年、抗日の士のまま、日本に滞在というのもおもしろい。もつとも、現在では多くの日本人知友を得ているところから「抗日の士」も、少なくとも「知日」の人となっているのだろうかと思うが……。

私“ふるさと・韓国”を離れてから四十年、その間、六、七度、韓国を訪れた。私の育った厚岩洞周辺は、昔のままであるのがうれしい。その間「日韓友好」のテレビ番組（李御寧著の“縮みの文化”から）（万葉の謎の訳者・金思燁）二本を作成することができた。

特に韓国研究院にお世話になったのは、京城三坂尋常小学校（現、三光小学校）の同窓会誌を作成するに当たって、同院に収納してあった戦前の教育関係資料を拝見できたことであった（その一冊は、同研究院に贈呈）。

その後、定年から新聞記者を退き、現在、コンピュータ関係を仕事としていてるところから、崔氏とお会いすることもなくなったが、私の願いは、韓国と日本とが昔のような征服者、被征服者という形でなく「おい！」「おおい！」という仲の間柄に……ということである。ルーツは、同じなのである。

そうした意味からも、これからの韓国の民主化への動きと崔氏の存在には重要なものがある。

崔書勉先生の細心ぶり

寺谷弘壬

(青山学院大学教授)

崔書勉先生に初めてお目にかかったのは、いまから約二十年前。アメリカ留学から帰国して間もなくのことであつた。

その時以来、私は崔先生を師と勝手に決めている。とくに学びたいと思うのは、人生の大胆豪放な生き方と繊細な情報収集力である。磊落な生き方については、おおくの先輩諸氏が指摘されているから、私は偏狭なまでの収集ぐせについて述べる。

韓国研究院には約二十万点を超す資料があるが、それが崔先生一人の掌中によく整理されている。どこにどういう資料があるか、崔先生はカードをめくらなくても頭の中に入っているのだ。

それもそのはず、夜遅くまで図書整理に崔先生が率先してはげんでおられる。しかも嬉々としてである。私は時々、夜遅く訪ねて、それを目撃している。大胆豪放に生きる人は、えてしてこういう面にはうといものだ。忙しくて時間がないとつっぱねるものだ。

繊細な面で関心したのは、人名整理の敏捷さ、整理の手際よさである。送られてくる雑誌なども、目次のページを広げなくても、そのまま見えるように、見開きを反転してしまう。アイデアである。

だから文具マニアでもある。外国でめずらしい人名簿や整理カードなどを見つけられると、さつさと購入して、使い試される。なかには、使いこなせないものもあって、すぐ他の人にあげてしまったりする。まるで、子供がオモチャを集めているようで、みていてほほえましい。あらゆることに知的好奇心が多すぎる方である。還暦をお祝いし、この知的好奇心をいつまでもちつづけられんことを。

ぼだい樹のほとりで

寺田康順

(真浄寺住職)

むかし本堂の前に、二股に分かれた幹の上で昼寝が出来るほど大きなぼだい樹があった。いつ、だれが植えたのか父はいわなかったので、私を知る由もない。たぶんその前の住職も、そのまた前の住職も知らなかったのだろう。江戸の初め寺は神田連雀町にあった。慶安元年火伏地として召し上げられたので、知り合いを頼りに転々とした後、宝暦十一年現在地に移ったが、その時先祖の墓と一緒に神田の故地から移植したか、あるいは遠いむかし鳥がどこからか種を運んで来たのだろうか。

毎年、春になると真っ白な花を一杯咲かせて馥郁と漂う清楚な薫りが訪れる人々のところをなごませる。咲き終わると大きな葉をこんもりと付けてほどよい憩いの場所を与えてくれる。門の爺や朝顔作りの名人で、開花時になるとぼだい樹のほとりに紅白の幕を張り巡らし、床机に赤い毛氈を敷いて自慢話をするのを唯一の楽しみとしていた。時には話に夢中になり過ぎて鴉にお饅頭を攫われ、カンカンになって追っ掛け回していたことなどが昨日のことのように思われる。このぼだい樹の左側に韓国の志士・金玉均の大きな自然石の墓があった。その

斜め前にはそれと同じ形の「甲斐軍治之墓」と刻まれた小さな墓があった。

真浄寺と金玉均との出会いは四代前の住職・寺田福寿に溯る。師は明治五年京都に開校された教師教校より十年八月慶応義塾に留学生として派遣され、その後十二年七月八日より福沢邸に書生として寄寓し親しくその薫陶を受けていた。一方金玉均は明治十三年九月二十八日の来日に先立ち、浅草本願寺に寄寓していた韓国の僧・李東仁を介して福沢諭吉に接近しようとしていた。李東仁は京都東本願寺で得度した関係上事務総長の渥美契縁とは知り合いであったし、契縁は福寿が学んだ教師教校の学長でもあったので、その労を福寿に取るよう依頼した。時に金玉均は三十才、福寿は二つ年下の二十八才であった。そして数年間は断続的ではあったがともに福沢邸で過ごした。そんなことから二人はすっかり意気投合し「我れと友たること年あり」と金玉均が述べたように、友情は急速に深まって行つた。福寿は翌々年の七月十七日、真浄寺に住職候補として入寺した。それを機会にかねてより親しかつた犬養毅も壇家として二人に加わつた。金玉均より三つ年下の二十六才であった。

だが図らずも翌十六年十一月八日、真浄寺は盗みに入った泥棒の焚き火の不始末で本堂・庫裏ともに焼失し、やむなく仮堂を建てたが、三十坪の本堂と棟続きの庫裏は二十坪だが三部屋だけであつた。そのころ五十才になる純行住職を始め十人近い家族構成だったので寝泊まりは出来ず、ろくな持てなしも出来なかつたはずである。おそらく三人はぼだい樹のほとりに机を据えて杯を交わしつつ歓談に時を過ごしたのであろう。

福寿には「善悪の標準」「真宗大意」「人道教初歩」「人生の目的」「浄き御国」のほか、「愛国護法策論」「仏教振興論策」「仏教と理学との関係」など未刊も含めて十余部の著述があるが、その一つ「真宗大意」が出版された際の（明治十九年六月）金玉均の所見は次の通りである。

「私はこのように聞く、仏の教えには三乗・十二分教等数多くあるが、みな衆生のため説かれたものである。五濁の衆生は迷いに被われ自らの力で覚ることが出来ないのです、仏は塵垢衣を纏って雲頭に按下し、泥に入り水に入って衆生と同じ境遇に身を置かれている。まさに仏ご自身のご苦勞で救われるのだ。世の中は老若・男女・貴賤・道俗等さまざまだが、それなりに生きる道は開かれている。どの教えにも一理一源あって互いに悖ることなく、水の地にあつて随处に淵を盈して自在なるごとくである。どうして邪正があり得ようか…」

これに依る限り金玉均は天台・浄土に基づき、一如平等の慈悲行の精神に徹していた。だが犬養毅はいう。

「金氏の学問と修養の根底は儒教にあらざして仏教にあつた。すなわち氏の学問は禅学であつてその修養も禅によるものであつた。だから氏は終始仏書を愛読して儒書は全然手にしない、むしろ嫌いであつた」

では禅の彼にだれが天台・浄土を教えたか。福寿は多くの著述が示すように、かなりの仏教的教養があつたはずだか、どちらかといえば諭吉の手紙に「好んで英書を読み、就中フィロソフィーに執心…」とあるように、日常常ペンサーの「第一原理」「社会学」、コントの「社会学」などを座右に置いて愛読していた。後の東洋大学学長の境野黄洋はいう。

「福寿は主義の人であつた。あえて学者というほどでもなかつた…」

「寺田福寿という名は記憶している人があるに違いないが、その養父の寺田純行という名を知る人は恐らくあるまい。しかしこの人は極めて世間離れた、しかも頗る誠実な人で、名の知れていないだけ、それだけ高い人であつた。…学問は天台が一番得意で真言も好きであつた。天台は慧澄律師の講釈を聞き、行誠上人の講釈も聞いたそうだし。縁あればどんな後進の人の講釈でも多く聞く。講釈する人はどうでもその書物の中の道理が聞く

たびに新しく感ぜられて、面白くてたまらぬという風であった」

犬養毅は真浄寺の檀家だから浄土真宗一辺倒である。その仏教観の一端を紹介すれば次の通りである。

「成仏の道はいずこにあるや。『有心をもって得べからず。無心をもって求むべからず。言語をもって造る可からず。寂黙をもって通す可からず』とあれば、我々凡夫のあさましき争いてか、斯かる玄妙の境界に達し得べき。誠に渺茫として大洋を望むが如く、何を船とし、何を筏として彼岸に到るべき。凡夫の限りある自分を以つて成仏せんこと中々叶う事にあらず。されば我々凡夫は只管弥陀如来の妙智力に取り縋り参らせて、何卒済度し給わん事をたのみまつるの外なきのみか、斯かるたやすき方法を以つて成仏せんこと誠に喜ばしき事ならずや。抑も人に聖凡・迷悟の別あるも、成仏には決して二種あらず。自ら悟りて仏となるも、迷いのまま他力によりて仏の悟りを開かしむるも、己が身にとつては均しく成仏するに相違なければ、我々凡夫は捨家・棄欲・難行・苦行を以つて彼岸に到らんよりは、寧ろ心の煩惱絶え間なく、朝な夕なにこの浮世のことに迷いはてし身を持ちながら、我れ知らず帝の法に叶うて成仏するに如かず。蓋しこの迷いの浮世に迷いながら、我が信心は単にして雑ならず、真にして假ならず、一に弥陀の光明を目的として辿り行かば、設い迷いとはいえ、迷いの中にて復た何の迷う所かあるべき。故に我々が成仏を求むるには、千部・万部の経乗を要せず、唯六字の名号（南無阿弥陀仏）さえ喜べば三塗の川をも渡るべく、六道の辻にも迷わざるべし……」

純行・福寿・犬養毅から学んだ仏教精神がその後の金玉均にどのような道を歩ませたかは別の問題であるが、福寿は金玉均が明治二十七年三月二十八日、四十四才で志半ばで横死したのを悲しみ、「古均院釋温香」と法名を送った二カ月後の五月三十日、四十二才で後を追った。犬養毅もまた七十八才で凶弾に倒れた。

私の養父である先代の住職・寺田慧眼は、毎年三月になると、決まって境野黄洋、その跡を継いで東洋大学の学長となった高島米峰らと一緒に、金玉均の墓前でこれ以上は無理だというくらい反り返って写真を取るのを楽しみとしていた。関東地震・今次大戦の際における罹災者への奉仕、並びに二・二六事件での住職なりの対応を思うと、写真撮影の際なにを考えていたか分かるような気がする。養父は僧籍にある身として批判的な言動は避けていたが、戦争は嫌いであった。終戦のあのお言葉を聞き終えてその場に倒れ、翌十六日の早朝息を引き取って行った。六十四才である。

私の代になって本堂建設のためやむなく墓を現在地に移した。今に至るも香煙の絶え間もないが、参詣だけでなく私に多くの史料を提供し、教え下さったのは崔先生をお迎えするようになってからである。先生は法要に併せて後進のため有益な集いを数々お催しになった。本年のご命日には先生とご一緒に墓前で写真を取った。福寿が金玉均と語り合ったように、先代が世の安穩を念じつつ毎年写真を取ったように、恐らく崔先生の胸中には国境を越えて日韓両国の平和の精神が脈打っていることであろう。私は思う。崔先生のお気持ちを受け継がれて行く限り、末長く金玉均の精神は生き続けて行くに違いない。

崔院長と私

中野泰雄

(亜細亜大学教授)

崔院長と私との出会いは安重根のおかげである。私が安重根の研究にとりかかることになったのは、それとは知らず、安義士生誕百年に当る一九七九年のことであった。亜細亜大学の経済学部には国際関係学科がおかれ、国際関係についての研究プロジェクトに参加している私は、国際関係の見直しには、明治十八年三月以来の福沢諭吉の「脱亜論」を克服しなければならず、まず「近くて遠い国」と言われていた韓国との関係を原点にさかのぼって研究する必要があると考えたのである。収書の課程で市川正明著『安重根と日韓関係史』を手にし、伊藤博文殺害事件裁判調書と「安応七歴史」が収録されているのを読んで、「大韓国人安重根」の伊藤元老告発の内容が、亡父正剛の近代日本政治史における役割を四十年來、追求しつづけてきた私の見解と重なり合うのを知って、日韓関係におけるの役割を明らかにする論文を書くことにしたのである。日本近代政治史における伊藤博文の役割について、多くの歴史学者たちの著作がすべて勝海舟や中江兆民の見解と著るしくへだたっていることに不審をいだいていた私は、安重根のなかに「同志」を認めたのであった。そして、一九八二年九月刊の亜細亜大学

『経済学紀要』に「歴史と審判・安重根と伊藤博文」を發表した。私の韓国研究を知っていた私のゼミ卒業者呉忠根君が、研究のための資料を見るためには、是非とも知っておかなければならない人があると言つて、案内して紹介されたのが韓国研究院の崔院長であつた。

かけだしの韓国研究者である私はそもそも韓国研究院を知らぬままにいたのであるが、驚いたことに崔さんは私の論文を読んでいて、適切な助言を頂戴し、研究院の資料を喜んで提供することを約束してくれた。まさに、千里の馬を得るために馬骨を買う名伯楽であるといふべきであろう。私が論文を書く時に、市川本の「安応七歴史」が自筆本の完本であると信じていたのに、これが写本であり、「以下略」で末尾が省略されたものであることを教えられたのはこの時である。爾来、研究院の閲覧と蔵書のコピーとは私の研究に大いに役立つことになつたのである。

しかし、翌春もつと驚いたことになつた。二月初旬、安重根研究会に招かれて出席すると、鹿野琢見弁護士、鈴木卓郎記者とに紹介され、鹿野さんがあの「為国献身軍人本分」の書を安義士によって贈られた憲兵千葉十七の甥で、幼少時から安義士を敬慕して、弁護士業を同じ精神をもつて遂行されている人であると知り、鈴木さんが日韓問題に造詣の深い朝日記者であることを知つた。その時、話題となつた伊藤博文殺害事件に関して安重根の再審請求が、私をソウルの安重根義士記念館まで連れて行くことにならうとは、まだ考えてもみなかったのである。

しかし、三月になると安義士記念館からの招請があり、鹿野弁護士を団長として、鈴木さんと崔さんと私とが同行することとなり、求められるままに、旅券を申請して、一行のまさしく「騏尾」に付することとなつた。

しかし、私にもソウルとは親からの因縁がある。私の父正剛は朝日の新進政治記者として頭角をあらわしていたが、桂内閣打倒の憲政擁護運動に熱中して、社の上司からうとまれ、京城特派員に「左遷」され、赴任直前に母と結婚、新婚旅行が赴任の旅となり、ハネムーン・ベビーとして長兄克明は京城で出生したのである。彼の「総督統治論」は、日本の政治の藩閥・軍閥的体質を批判する点で、東条内閣打倒運動につながる原点となるものであった。三月二十五日に午後、成田を立ってソウルについた一行は、手厚い歓迎の中で朝鮮ホテルに着き、同夜、新羅ホテルで安義士記念館の関係者の方々による盛大な晩餐会が開かれ、私の中にあつた「異邦人」の危惧はじきに薄れていった。亡父の東条憲兵政治に対する抵抗は、日本の政治学者たちとはちがひ、高く評価して頂いたようで、意外の感をいただき、八十才なかばの尹致英理事長のスピーチは、幼少時に日韓併合を体験し、早稲田留学当時に三・一運動に参加し、米国に亡命留学で法学博士をとり、独立運動に参画して捕えられ、獄中で拷問を受けたことがあるにもかかわらず、解放後の政治行動も踏まえて、国際的な感覚を身につけている点で、日本の政治家たちとはくらべるのできないものを身につけていることが感じられ、一座の方々々の御厚情とともに、国籍のヒダを忘れさせられた。

翌朝、伊藤博文絶命の時間に合わせて処刑された安義士昇天の時間である午前十時に、黙禱から始まる追念式に、一行は最前列に座って、安義士の肖像を見つめ、追慕のことばに耳を傾けながら、韓国民の義士への思いが、日露戦争以来の日帝への記憶と結びついていることを了解しはじめた。式後、私は李文郁館長の部屋で、崔院長からあらかじめ依頼されていた安義士論を役員たちにその一部を披露し、安重根義士崇慕会編の『安重根自叙伝』を頂戴し、中国飯店での昼食を御馳走になり、鹿野さんと私は、今後、毎年、日本人の一員としてこの追念

式に参列させて頂くことを約束した。残りの時間は各新聞社からのインタービューにとられ、ほとんど息をつく暇もなかったように記憶する。翌朝、景福宮を見学することができ、閔妃の殺害された跡の碑を見て、安義士が伊藤罪状十五箇条の第一条にこのことをあげていることの重さを改めて感じさせられた。帰路につくために金浦空港に着くと、来賓室に案内され、V・I・Pの扱いを受け、各新聞に安義士再審を願う一行の記事の切抜を贈られ、飛行機も往路のエコノミー・クラスがファースト・クラスに格上げされ、私は満ち足りた気持ちでソウルを離れることができた。これはすべてみな崔院長の演出の見事さによるものと、舌を巻く思いをしたのであった。

この年の秋、九月に亜紀書房の棗田さんが私を書いた安義士についての一文をある雑誌で見つ、安重根についての単行本を書いてほしいと依頼してきたので、半年間の執筆期間を予定して引き受け、論文の誤記と欠陥とを補正するために、しばしば韓国研究院に通つて、安義士裁判の背景を探り、また獄中で完成を願つた東洋平和論があることを知り、国会図書館にかけて、七条清美文書の中にある「安重根伝記及論説」が安義士自伝の完全な写本と未完成の東洋平和論の写しであることを知り、研究院の資料と漢文で書かれた安義士の自伝および東洋平和論によつて、一冊の本に仕上げる目途をつけることができた。執筆を引き受ける頃、宮城県栗原郡の禅寺大林寺に「為国献身軍人本分」の石碑があり、ソウルから尹理事長たちも法要に参加されるといふことで、私も新幹線で一関まで行く途中の車中で尹さん一行と再会し、法要に参加したことが、一層の励みとなつていたにちがいない。しかし、翌年の三月、追念式までに原稿を書き切ることができず、前年の約束を破ることとなつたが、四月上旬までに完成するために、やむなく追念式参列を断念して、崔院長に電文を托して、まったく失礼してしまつた。

私の著書は棗田さんの発案で「日韓関係の原像」という副題をつけて七月十日に発行され、諸新聞の書評欄にとりあげられ、折りからの教科書問題と、韓国経済の躍進にともなう韓国ブームで、私の著書としては二年後に再版となり、重版となりそうな良い売行を示しており、読者からも励ましの手紙を数多くうけて、亡父に関する著作の時とはちがった勢がある。まだ、安義士が死刑囚としての獄中で日本人が「大いに安重根をたたえる日が遠からずやってくる」という義士の予感にはほど遠いが、安義士への理解が日韓関係の理解とつながるものとなることは間違いない。

崔さんから安義士の上告断念には母親の励ましがあつたという事を書いていないのは残念であるという指摘を受けたが、十三才で母を亡くした私には、親子関係への理解に欠けることがあるのであろうが、他のあるにちがいない欠点については、大目に見てくれて頂いているようである。

崔院長は私の『安重根』を多数、韓国に持って行かれたようであるが、この年の暮に金永光国会議員のハンブル版が二万五千冊、出版され、また漢陽大学（理事長金連俊博士）から名誉文学博士の学位を頂戴することになったが、日本人が安義士について書いたことを評価されたのであろうが、著者の父正剛についても、「義士中野正剛」として評価される韓国の方が多いのに、驚きつつ、安重根研究会会長安藤豊祿さんにあやかれば、「我が心の故里」を韓国に感じるほどであることを、告白しなければなるまい。

国際化時代の到来が叫ばれながら、日本人の島国根性は牢固として抜きがたい。円高の中で「リッチ」であることを得意がり、四十年の悲惨な状況の中から、今日の繁栄がもたらされたことを忘れ、昭和十年代の軍閥横行時代の「夜郎自大」の心情が戦前の教育の尻尾をつけた人々の中に甦りつつあるようにおもえるのは、私が安重

根を通じて知り会うことのできた韓国の方々がみな国際性を身につけていることとくらべて、暗然とした思いにとられるほかはない。十九世紀に繁栄を誇ったイギリスが、ドイツとアメリカとの挑戦を受けて稠落し、第二次大戦後、富強を誇ったアメリカがハイ・テク時代に日本、台湾、韓国の急追に、衰退を示していることを忘れてはなるまい。日韓関係の難かしい時代に亡命同然の姿で渡日してきた崔さんが、日韓関係の改善に素晴らしい能力を示されたことは、私ども日本人に国際化の何であるかを示してくれているものといえる。ハイ・テクと低賃銀による韓国の脅威を強調する声もあるが、新興諸国を見下し、アメリカの先進性に幻影をいだきつつあるようでは、現在の日本の偏差値万能の教育では絶対に身につけることのできない人間性を持つことはできない。

深い体験が人間性を裏づけることなしに、要領のいい官僚的人間だけが権力ピラミッドの頂上によじのぼることができるとは、国民の将来を明るくする針路を進むことはできない。明治時代に和魂洋才と称して、ドイツの哲学の根を欠いた憲法と官僚制を輸入した大日本帝国は、清帝国とロシア帝国よりは近代化に成功したが、ロシア革命とドイツ革命後も、その旧態を維持し、ついに軍閥官僚が舵をとって、ブラック・ホールの泥沼に突入していった。安重根を評価することは、伊藤博文を筆頭元老とした明治政府の実態を暴くことと表裏の関係にある。

崔院長の智謀に助けられて、日本で安重根研究会が発足することができたが、その活動はまだ安義士の予期した所にはほど遠い。明治十八年三月の福沢諭吉の「脱亜論」の精神は日本の官僚および学者の中になお深く根差している。崔院長は安義士追念式に参加せずに、明治二十六年三月十八日に上海で暗殺された金玉均の顕彰に力を注いでいると言はれるが、明治十七年十二月四日の甲申事変と金玉均の役割とを理解することは、日清事変以

後、大日本帝国の東洋平和蹂躪が、民間の自由民権運動を弾圧した藩閥官僚の所業を知ることにつながり、安義士裁判において安被告に好意を寄せた人々が土佐民権の流れを汲み、とくに弁護士水野吉太郎が安義士に傾倒して、後にキリスト教を信じ、また太平洋戦下に板垣退助の記念館の保存につとめ、「憲政の祖国」の石碑を建てたことは、伊藤・山県・桂・寺内の藩閥軍事官僚が日本の進路を誤ったことを告発していることと見ることができよう。崔院長の意図する金玉均の霊を慰めるためには、我々日本人は明治革命の原点に帰り、勝海舟、横井小楠、坂本竜馬、高杉晋作などが胸に抱いた日本革命は、孝明天皇の怪死後、大久保利通、岩倉具視らによって逸脱し、ドイツ帝国を模範とした絶対主義を樹立し、江藤新平、前原一誠、西郷隆盛をつぎつぎと権力斗争の血祭りに上げていったことを知らねばならない。安義士が伊藤の罪状の一つとしてあげた孝明天皇の殺害は、伊藤の所業ではなく、岩倉の仕業であるとしても、その後の日本の政治路線が官僚主義的権力主義へと向う岐路となつていることを考えなければならぬ。崔さんの努力にもかかわらず、安重根研究会の発展が十分でなく、金玉均顕彰がまだ端緒を見るに至っていないことは、まさしく、我々日本人の恥である。

第二次世界大戦後、日本はアメリカ合衆国の民主主義の形骸と合理的技術とを学んで、経済の組織化と工学的革新とによって、特に製品の品質管理は、戦敗の苦い経験によって、師匠を凌駕するに至り、ドイツのクライビツヒは、その『知の社会』において、スウェーデンのヨハン・ガルトウングの繁栄と停滞の世界分類において、欧米資本主義諸国を第一世界、国家官僚制社会主義を第二世界、南米、カリブ、アフリカ、アラブ、西アジア、南アジアを第三世界に一括し、「イチバン（一番）」の世界に、日本、ミニ・日本、アセアン、東アジア社会主義諸国、オーストラリア、ニュージーランド、オセアニアを第四世界に分類している。この見方は、「脱亜入欧」を

気取る日本人に新たな「黃禍論」を突きつけているとも、もっと明るい未来への展望を期待しているとも、読みとることができるかもしれない。ミニ・日本には、当然、韓国、台湾が、そして東アジア社会主義諸国にはモンゴル、北朝鮮、中国、などが含まれるが、これを第四の世界として結集する能力が日本にあるかどうか、従来の日本の教育および政治では、この指導性を期待することはまずできないと、私は考えている。夜郎自大の天狗になることをやめて、日韓関係につくしてきた韓国研究院と崔院長の仕事ぶりに、私たちはもっと学ぶべきである。さもなければ、この第四世界をリードするのは、日本ではなく、ミニ・日本の中から抜けでる政治的智慧を持つ国民であろう。第一次世界大戦中、日本の軍閥は「挙国一致」を唱えて国民の異論を封じようとし、孤立と侵略の道を行んだが、最近では「挙国一致」をスローガンとして、国民をたぶらかせる手法で、改革を口にしながら内容の乏しい政策を打ち出して、官僚化の一途をたどりつつある。緊張した国際関係を意識し、民政の改革に専心しつつある韓国が、パルパル・オリンピックに成功し、もし朝鮮半島の統一を他日、実現することができるとすれば、スペインをオランダが追抜き、オランダをイギリスが抜き去り、イギリスをかつての植民地アメリカが圧倒したように、韓国が日本を凌駕するのではあるまいか。崔院長の怪物的な活動ぶりは、私の想像力をかき立てる。マックス・ウェーバーが近代の合理化の果てに、古代ローマ帝国のエジプト化の姿を見て、「精神のない享楽人」、「心臓のない専門人」の支配する化石化を予想したのには、我々は東アジア文化の融合が対症剤となることを期待し、韓国研究院の躍進に希望をかける。

崔院長のユニークな文献整理法

西川 孝雄

(筑波大学講師)

今から十余年ほど前に韓国に関する文献をおおく所蔵する研究院を御紹介くださったのは当時武蔵大教授であった渡部学先生であった。早速崔院長にお会いし研究員になることを承諾した。

李氏朝鮮王朝時代の歴史を研究したいと考えていた当時の私は早速東京での下宿生活をはじめ、研究院の図書館で資料整理をしながら研究することになった。

その時、研究院で崔院長のユニークな文献整理法について教育を受けることになった。それは全図書館員必須科目であった。

先ず、時事問題を扱うには新聞の切り抜き、雑誌等の資料をどの様に整理するのかが大問題であった。当時、一名の新聞切り抜き専従員がおかれ毎日毎日山のように資料が出てきた。ただの白紙の用紙になんとなくべたべたと糊で貼付けていたのであった。研究者としては関係資料を漁るのに、すべての切り抜きに目を通さねばならず不便であった。そこで崔院長の改革がはじまった。

切り抜いた資料を「ハッサム」で挟み、背に内容から見た表題を油性のペンで記入し書架にならべる方法をとったのである。専門誌でない週刊誌等による韓国関係の記事は関係分のみ切り他は捨てる方法をとった。勿論発行年月日・号数・巻数等の記入を忘れないようにした。「ハッサム」はまとめて本の空ケースに入れて立てることにした。

次に、研究院独自の文献整理法として人物関係の書架がある。人物関係の資料をどう整理して研究者に供するか、いろいろと意見があったが崔院長の改革案に従うことになった。人物の属する時代を問わず、総て、カナタラ順に配架した。例えば金氏、朴氏といった姓別に分類して配架した。今日でも人物に関しては姓氏別ですぐ関係文献の有無を調査できる様になっている。又重要人物のみ書架を特設して関係文献を網羅している。金玉均、安重根、閔妃等の特設書架は特に有名で崔院長御自慢のコレクションの一つでもある。

次に、他の研究所の図書館といえは図書分類法でカード化されすべて整理配架されている様に考えられがちであるが、韓国研究院の図書分類法は崔院長のアイデアによる独自の配架分類法をとっている。

先ず、歴史に例をとれば神話時代、石器金属器時代、三国、高麗、李氏朝鮮時代、韓末日帝時代、近現代までの資料文献が各時代別に配架されている。そして、時代別の重要事件なり、論争点のあるところ（例えば好太王碑文改竄問題）には関係資料が配架されている。いわば各時代別に各項目別に資料が整理されている。

その他、韓国研究に必要な民族、言語、儒教思想、宗教、政治、教育、文学、動植物、医学、自然科学、各種年鑑類等々の資料が収集網羅されて研究者に供されている。

ただし、カードで検索する公共図書館になれた韓国研究初歩入門者の人々は、研究院で関係資料をさがそうと

するときつと戸惑つてしまふと考えられる。

何という図書館であるのか、訳がわからない整理法ではないか、どの書架を見ればあるのか等々と。ところが専門家（研究者）にとつてみれば、実に便利な配架法である。

檀君神話について調査する必要が生じた時には、神話時代の書架に行けば関係資料がならんでいるのである。本人が探索している文献以外にも意外な興味ある文献資料を発見できるのも崔院長のアイデアの賜である。ただし、文献解題をよく読んでいないとすぐに内容が把握出来ず戸惑うことが多々ある。それは新聞の切抜きから一次史料まで同時配架されているからである。

次に、専門雑誌の整理は韓国文はカナタラ順、日本文はアイウエオ順、英語はアルファベット順といった具合によく整理されてカードがすべて完備している。

その他、地図の特設書架、八道別地誌、邑誌の特設書架等、特色ある分類配架がされている。

以上が博覧強記である崔院長のアイデアによる図書整理改革法的一端である。この作業に私は二年間助手をつとめた関係上、今では韓国に関する多くの文献資料を知ることが出来る様になった。

以上が崔院長と私との関係で思い出される印象深い点である。

（一九八七年十月吉日）

一夕の出会いから

西村多聞

(朝日新聞福岡総局長)

「朝日新聞福岡総局長」の辞令をもらい、東京本社 of 政治部デスクから赴任して、博多生活も間もなく一年になる。十月三十日から十一月四日まで、JR九州博多駅コンコースで「釜山観光展」が催された。それに先立って、福岡市内のホテルで開かれた懇親会にお招きを受け、韓国・釜山直轄市から来られた代表団のメンバーや、福岡市在住の韓国人の方々とお会いする機会を得た。去る四月には福岡市内のデパート「天神岩田屋」で「大韓民国展」が開かれ、韓国の物産を目的の当たりにすることが出来た。金権萬・福岡総領事とはいろいろな会合でお会いすることが多く、その後、個人的にもお付き合いをさせていただいている。福岡と韓国との関係は歴史的にも古いが、最近では来年のソウル・オリンピックを控え、市民の間にも韓国語熱が高まっているという。

私自身、福岡県の出身で、多分、祖先は朝鮮半島から漂着した系統ではないか、と思われるふしもあることから(勝手な思い込みかも知れないが)、朝鮮半島には特に親しみを感じている。

こうして、いろいろな形で「韓国」にふれる時、最近では常に「人間・崔書勉」さんの存在を忘れることは出

来ない。「韓国」との出会いといえば、まず、必ず、崔さんの顔が浮かんでくる。

× × ×

私が崔書勉さんと最初にお会いしたのがいつだったのか、日時の記憶は定かでないが、お会いして名刺を交換した時の印象は極めて鮮明だ。私が名古屋本社の社会部デスクから、東京本社の政治部デスクにかわって間もなぐのことだから、多分、五年ほど前のことだと思う。実感としては、もう十年も十五年も前のような気がするのだが……。

それは、千葉相互銀行社長・吉成儀さんの夫人庸子さんが、まだ「鳥海庸子」さんのころ、親しい人たちを対象に年一回開いていた夕食会の席で、だった。同じ円卓の左隣の席が崔書勉さんで、名刺を交わすまで韓国の方とは全くわからなかった。司会者の指名を受け、マイクの前に立った崔書勉さんは堂々としていて、その即興のスピーチは機転とユーモアに加えて細やかな心情にあふれ、しかも見識の深さをうかがわせる内容だっただけでなく、起承転結の行き届いた、実に見事なものだった。「今日の日本人には、まず、いないな」というのが私の率直な印象だった。

その夜は崔さんと痛飲、一気に「百年の知己」の気分になってお別れした。しかし、その後の「人間・崔書勉」さんとかかわりが、これほどまでになるうとは、そして、その源流がその一夕に発することになるうとは、私の想像を超えることだった。

もともと私は「一期一会」という考え方が好きだし、「ここで会ったら百年め」とか「思い込んだら命がけ」といったつもりで初対面に臨む。人との出会いを大事にしたいという心情からだ。しかし、崔書勉さんとの出会い

は、こうした通り一遍の心情だけでは説明のつかないものとなった。

× × ×

崔書勉さんの知識の広さ、学の深さ、加えてその抜群の行動力、交際の広がり大きさ、故国を思う心情の熱さ…… どれ一つをとっても並みの男ではない。現在の「壮士」という言葉が頭脳に浮かぶが、それでも物足りない。「滞日三十年」とはいえ、時流に重つてのことではなく、逆風、激流の中を生き抜いて来られた重みとでもいおうか、ひと口ではいい表わせない雰囲気「人間・崔書勉」の迫力を醸し出していると思う。

もちろん、私の中にある崔書勉さんは「人間・崔書勉」のごく一部で、しかも恐らく表面的に過ぎないだろう。崔さんの歩んできた歴史も断片的にしか知らないし、崔さんの裏も表も知り尽くしているわけでもない。むしろ、わからないところはわからないままでいいと思う。私などにはわからない面がいっぱいあって、それが逆に崔書勉さんの人間としてのすごみになっている、とさえ思う。

人間としての重み、厚み、深み、広がり、暖かみ、物事の核心を見透す洞察力、ずばり本音を指摘する勇氣と分析力、そして謙虚さ……を見るにつけ、本来ならもっともっと大きな仕事をする人だろうと、今の崔書勉さんを惜しいと思う。もったいないなあ、と思う。

× × ×

これまでのお付き合いでは、私の方がお世話になったことが多い。後輩が仕事で訪韓する際には、いろいろ便宜を図っていただき、要人とのパイプをつけていただいた。私自身、崔書勉さんを中心とした会合にも招かれ、各界の要人に紹介していただいた。その中には韓国の方だけでなく、日本人も多く含まれている。ただ、その日

本人には、どちらかといえば、いわゆる「親韓派」と目されている方々が多いようだ（私は本来、こうしたレッテルは好きではないので、使いたくはないが、あくまで「いわゆる」の意味で）。崔さんご自身も、その種のことをもたらされたことがある。

名刺を交換したり、自己紹介すると、中には「私は朝日新聞はきらいだよ」「朝日新聞は私の敵だと思っている」などと、苦笑しながらも、ずけずけ言われるようなお年寄りもおられる。こうしたことは、これまでにも他の場面でも何回か経験があることではある。じっくりお話しする機会があれば、それなりに私を理解して下さり、その後、永いお付き合いになっていることもある。崔さんを取り巻く日本人がすべて同じような傾向の人たちでないことは知っているが、そうした一種の雰囲気が漂っていると思う。崔さんご自身がそこに気づいておられるからこそ、「朝日新聞記者」である「西村多聞」を、「友人」としてご紹介下さったのではないかと、とも思う。

私自身は、いわゆる「左」でも「右」でもないと思っているし、朝日新聞についても「左」でも「右」でもないと思っている。例えば、野党にも厳しく、政府・自民党にも厳しい目を向けているつもりだ。仮に、一部の人が言うように「野党に暖かく、政府・自民党に厳しい」としても、「朝日新聞は左だ」と決めつけるのは、短絡的誤解だし、誤まりだと思う。「万年野党」より、時の権力をより厳しい視点でとらえるのは、むしろ新聞の大きな使命の一つだと思う（もちろん、自らに厳しいことが前提だが）。あくまで「是は是、非は非」の立場を貫きたいと思う。崔書勉さんは、その辺を見抜かれて、小生を一見、肌合いの違うような人たちにもご紹介下さったのではないかと、とも思っている。

×

×

×

東京在任中は新宿、赤坂、六本木、新橋……と、崔さんとよく飲み歩いたものだ。酒の飲みっぷりも実に気持ちがいい。周囲の人間を暖かい空気で包んで、楽しませて下さる独特の才能を持っておられる。去年十二月に私が福岡に着任したら、間もなく、突然、来福して下さり、思いがけず中洲で飲みかわしたこともあった。たまたに電話すると、「こんどはいつ東京に来るの？」と聞かれる。今の私の立場は、東京に出かける機会がなかなかない。申し訳ないような気持ちになると、「それなら私の方が出かけるよ」とおっしゃって下さる。「滞日三十年」のお祝いの会にも、発起人に名を連ねながら、出席することが出来ず、失礼してしまった。最後にお会いしてから早くも一年近くが過ぎたが、韓国研究院の安永佳世女史によると、お忙しそうで、極めてお元氣のようだ。

× × ×

韓国はいま大統領選を目前に控え、韓国の歴史上でも恐らく画期的な激動の中にある。ソウル・オリンピックも来年に迫っている。米ソ関係に大きな動きが出て、世界情勢に変化の兆しが出始めているのではないか、との予感の中で、今後、朝鮮半島をめぐる動きはますます世界の注目を集めることになるだろう。一衣帯水といわれる日韓両国の関係はもちろん、日本と朝鮮半島の関係が一層重要さを増してくることは必至の情勢だ。そうした中で、崔書勉さんの役割は大きいと思う。これからもご健勝で、広い分野でご尽力いただきたいと心から思う。

（先般来福いただいた時は、小生がまだ博多に着任したばかりで、十分なおもてなしも出来なかった。その後、いい店をいくつか見つけることが出来たので、また来て下さることを楽しみにしている。そして、いずれ東京に戻ったら、まず、第一番に崔書勉さんの顔を拝見しに行きたい、と思っている）

ダイナミックな直感力と

行動力に感服

林 建彦

(東海大学教授)

私がまだ新聞社に籍を置いていた時のことである。目の前の電話が鳴り、いつものように受話器をとると、「韓国研究院の崔書勉です。あなたの『北朝鮮と南朝鮮』を興味深く読みました。研究院主催のパーティにお招きします。出席しませんか」

まことに直截な、有無をいわせぬ響きの崔院長流のお誘いの電話だった。それにつけても、このときすでに在日韓国人として、ひとときわ高名でもあった崔書勉院長から、じきじきのお誘いの電話をいただいたこと自体、私にはまったく不意の出来事に近いものだった。

多少のためらいを覚えながら、国際文化会館のパーティに顔を出した私だったが、会場に一足踏み入れたとたん、たちまち参加者の多彩な顔ぶれに目を見張ることになった。まさしく崔院長の日本における交友関係の広さのそのままの証であった。パーティが進行するにつれて私が思わずうなったのは、崔院長の口をよどみなくつい

出てくるダイナミックな日本語だった。つぎつぎに参加者をうながしながら紹介していく語り口は、そのまま一人、一人みごとに人物短評の趣をなしており、私はただただ舌を巻くばかりだった。

こうしてその日のパーティは、崔院長の個性さながらの雰囲気となり、演出者としても当代一流の感銘を私はいよいよ深くしたのだった。

二度目に時間をかけてお目にかかることになったのは、韓国研究院が今の三田のビルに移り、崔院長の滞日二十年の記念碑ともいべき二〇万点の収集資料が公開された記念パーティの席だった。二階の書庫、展示室、さらに地下室にまで、所せましとばかり収納された朝鮮・韓国の近・現代にかかわる図書、記録、資料の山に私は息を呑み、始めて目の当たりにした金玉均、安重根、金九らの直筆の前では思わず脚が釘づけされるのだった。

こうして私の足が韓国研究院の資料室に向かい始めるのは自然の勢いだった。私事にわたるが、拙著『近い国ほど、ゆがんで見える』の第二章「弥勒の微笑」は『古代朝鮮仏と飛鳥仏』の中で、著者の久野健氏が繰り広げている「明治の大修理説」に触発されて成った一文である。同書と私の出合いは、たまたま韓国研究院の図書室に未整理のまま、積み重ねられてあったおびただしい新刊入荷図書の中に、同書を見かけたという偶然の幸運によるものであった。

さらに拙著の第六章「負け方を知らなかった日本」が、崔院長も自ら参画された『総合シンポジウム、韓国にとつて、日本とは何か』（全三巻、韓国研究院・国際関係共同研究所編）の第一巻『政治・経済』編を読みはじめていきなり「日本のヘタクソな負け方」「負けるルールを知らなかった日本、日本人」という韓国側の二人の発言に遭遇し、意表を衝かれ、たじろぐ思いの中で執筆したものであったことは、第六章の書き出しで触れたところ

でもある。

崔書勉院長のすぐれた歴史家としての資質は、そのダイナミックな直感力と、人並みはずれた行動力につくづく由来している。この二つの要素のいずれを欠いても、韓国研究院の背骨ともいうべきあの膨大な資料収集作業は成り立たなかった筈である。

近年の崔書勉院長は自らを語ることの少ない人であるが、『カレント』八月号の対談「韓国はいまー韓国が目指すものー」は、聞き手に人を与えて人間崔書勉を知るうえで、好個の読みものであった。「対談を終えて」の中で矢野弾氏は「崔先生は今日、ソウルにとび、学生に会い、市民に会い、何を彼らが考えているのか、何を行動の源泉としているのかを確かめてきたが、その生々しい事実は人を説得せずにはおかない」と書いておられるが、私もまたまったく同感である。対談の中の、延世大の李韓烈君の入院先に足を運び、病室を取り囲む学生たちと、直接膝を交えて話し合い、学生たちの北朝鮮観、米国観をかれらの口を通してありのまま語らせ、韓国の学生たちの真の姿を確認して安堵されるくだりは、歴史家崔書勉のまさに真骨頂である――と、くり返し読んだのだった。

話は前後するが、尊敬する金山元駐韓大使（国際関係共同研究所所長）のおすすりめもあり、私は現職に転ずると前後して、同研究所刊行の月刊研究誌『北朝鮮研究』の責任編集者をお引受けすることになり、いちじは崔院長とも週一度のひんばんさでお目にかかることとなった。今から十一年前の五月頃であった。『北朝鮮研究』は、安永佳世、竹下英五郎さんらのスタッフ、研究員はじめ、外からも多くの協力者をえて、内外の朝鮮問題研究者、研究機関から高い評価をいただくようになった矢先、よんどころない事情が発生、その成果を継続して関係各位

に問いつづけることが、ついに不可能となるに到った。

責任編集者として、不本意な結末を迎えなければならなかったことの不始末を、はなはだ遺憾に思うし、
あり、改めてその間の経緯について整理し、記録しておかなければならない責任を、崔書勉院長に対しても痛感
しているしである。

崔書勉の三つの性格

藤尾 正 人

(キリスト同信会伝道者)

崔書勉と初めて会ったのは、二十二年も前の一九六六年のことだ。たしか、銀座から晴見通りを勝どき橋のほうへ行って、右か左か忘れたが、古いビルの一室に不似合いな、大きな机に陣取って、今と同様、尊大な態度で私をむかえた。机の上に黒塗りの名札にらんで、「崔書勉 江原道開発公社」と浮き彫りにした字がまず目に飛び込んだ。この「江原道開発公社」のあとに、「事務総長」とあったのか、「東京事務所長」とあったのかは記憶にさだかではない。しかし、この「書勉」という名前は、日本人が絶対につけない名前でありつつ、きわめて文人的で新鮮な印象を私はいけた。

当時、私は国立国会図書館調査局の文教課長で、韓国初訪問のための招請状を斡旋してもらうため彼をたずねたのであった。この初対面の私の頼みを、彼はこれまた今と同様あっさりと引き受けてくれ、翌一九六七年二月から三月にかけて私は生まれてはじめて大陸の土を踏んだ。彼が私を紹介して招請状を送らせるようにしたのは、彼が幼い日から兄事した大韓教育連合事務総長・鄭泰時先生であって、以来二十年、私は崔書勉よりもある意味

では鄭先生御一家と親しい交わりを家族ぐるみでさせていただいている。

この初対面の印象はそのまま今にひきついで変わることがない。まず第一に彼は尊大である。こんちくしょうと思うほど尊大な時もある。しかし彼には憎めない愛きようがあつて、腹をたてながらも頼みをきいてしまうことがある。

第二に彼はその名のとおり文人の志をしつように持ちつづけている。原州開発公社の次ぎに彼とあつたのは、狸穴のソ連大使館の前、むかし郵政省、今の国土庁のとなりにあつた古い大邸宅の中に「韓国研究院」の看板を掲げた時であつた。その研究院の書庫がみるみる一杯になつて現在地に移転したのだが、彼の本領は開発公社などではなく、やはり研究にかかわりのある文人的志にあつたのだ。もちろん彼は“安重根研究家”であるが、彼の真骨頂は研究者を集め、研究を組織化し、研究の場を提供し、そのスポンサーとなることではあるまいか。彼には一個の研究者でおわるには惜しい経営者としてのすぐれた才能があるからだ。

第三に彼には、しごくあっさりと人の頼みをひきうけてくれる面倒見のいいところがある。しかも彼は韓国、日本はいうにおよばず、世界中に人脉をつうじた情報のネットワークをもつていて、たちどころに要件をかたづけてくれるのだ。一昨日（一九八七年一〇月二十九日）わたしは韓国済洲島チエジュドから帰つてきたが、チエジュから博多へのキップしかなかったのを、まっすぐ成田に飛んで帰れたのも彼のおかげであつた。

二十年もつきあつていて、変わらない彼のこの三つの性格、尊大と、文人性と、世話好きは、これからも変わらないであろうし、変わつてほしくないものだ。そのなんともいえぬ愛きようとともに。

“感電”させられ通しの十五年

藤田義郎

(マスコミ総合研究所所長)

“ボツ原”

私は崔書勉さんに“借り”がある。

彼は忘れたろうが七年も前の話だ。私は「記録・椎名悦三郎」を書いた。椎名さんは池田と佐藤内閣で連続外務大臣をやり、戦後の日本外交史上で一番の難物といわれた日韓交渉をまとめ国交正常化をやりとげた人物。これは八十一年の彼の生涯を飾る輝かしい歴史的足跡だ。

椎名記録には当然にこの日韓外交を入れなければならない。それには執筆する私が常識程度には過去に遡及しての日韓関係を知っておくことが不可欠だ。その知識がこつちには全く欠けている。そこで崔さんに事情を話してその部分の原稿をたのんだ。二つ返事で快諾して呉れた代わりに、締切りに遅れること三か月、百二十枚の力作が届けられた。

古代から中世・近代に至る日韓関係史だった。一瞥、さすがは歴史学者、史家の検証にたえうる堂々たる論文・資料と感服した。

感服はしたものの、たとえそれが十四年間に及ぶ記録的な外交交渉ではあれ、一九六五年の日韓条約に“古代”から“中世”の出来事はあまり必要でないと判断した私は、夏のまっさかり、おそらく何日か徹夜で汗がしたり落ちたにちがいない崔さんの論文、三分の二を切り捨て、つまり“ボツ”にしてしまった。

だが歴史学者崔書勉をして云わしめれば、椎名外相ほどの人物が、それだけの教養と思い入れの上に立つて韓国側と交渉したことにして欲しかったのだろうし、そのことが椎名外交をより光彩あらしめる所以にもなるとして“ボツ”部分こそが“いのち”だったということかも知れない。

彼はナニも言わない。私もあえて彼の意中を付度せぬサマで通してきた。が“ボツ原”は七年経ったいま私の気持ちに引かかったままである。

去年五月七日で、崔さんは滞日三十年になった。それを記念する質と量ともに充実した会が七月二十一日に東京の日本記者クラブで行われた。いいだしっぺいは八十八歳の木内信胤さんだった。「崔さんが一番よろこんで呉れる会にしようや」この一言で、たしかに崔さんにとって大感激の「一番うれしい」会になったはずである。その会で、これも木内老が提案して崔さんを知る人それぞれが「私と崔書勉」を書いたらどうか。書きたい人だけが書けばいい。原稿は一枚でもいいし百枚あってもかまわない、となった。締切日も枚数も制約のないのが面白い。いい機会だ。私も駄文を以て“ボツ原”の借りを返えそうと考えた。

賢弟愚兄

私が崔さんと呼ぶ場合いつも「院長」という。ところが彼はそうでない。ひると夜とで私への呼称がちがう。

二人だけの時は「サン」づけ、人前では「センセイ」。それが夜になると俄然一変「おいッ弟！」と獐猛になる。彼は一九二六年、私は二二年の生まれ。算術計算ではこちらは四歳の年上だ。韓国は古来儒教礼節の国と聞く。ならば私を「お兄さん」と敬まつて然る可きに「おいッ弟！」である。そう呼ばれても私は別段文句は云わないことになっている。いわれは二人だけの秘事で外に説明の義理はない。

ただ、崔書勉という賢弟は、さすがに愚兄おもいであつて、頼みもしないのにもう何年も前に韓国に私の墓を造ってくれた。ソウルから三十八度線にむかつて車で四、五十分もあるうか、丘陵地帯にある。崔家先祖の広大な墓地の一角にだ。一角といつても何十坪もあるらしい。御影石で四囲をかこつた立派なものだそうで、私は今直ぐにでも入れるようになってゐる。私だけではない。金山政英さんの墓も傍にでつかい土饅頭型で完成しているし、木内さんの分も用意してあるという。奇得にも金山さんは自分の墓に自分で何回かお参りしたというから愉快だ。こんな次第で、私はあの世に行つてまでも彼とは離れなれない破目にされている。

不死鳥か憎まれっ子か

私が崔さんとの初対面は十五年前ホテル・オークラでの出会いだった。十五年の交じわりは長いとも言えぬが

短くもない。

崔さんは来日して三十年だから私は彼の来日後半期の全部をおつき合いしている勘定だ。前半期のことは知らない。彼の告白からみてその期間は「充電」の日々で、後期十五年はそのエネルギーを存分に「放電」した時期といえるのではあるまいか。そうとすれば彼我二人の関係では、もっぱら私は彼の放電流に“感電”させられた放しの十五年だったことになる。

たしかにそれだけの感化を彼から受けた。韓国自体は勿論、日韓関係にもまったく無知だった私を多少は開眼させてくれたし、朴正熙大統領など雲の上の人々とも知り合うことができた。この間の想い出は数多い。それらを書く故人への追悼文じみてる。

彼は現に生きている。それも生半可ではなく実に“したたか”に生きている。“したたか”と断わったのには訳がある。崔さんは敬虔なクリスチャンだ。バチカンで法皇にも謁見しているし、函館の男子禁制の修道院も彼だけは別格でフリーパスと聞いた。バチカンの方は法皇さまと一緒に写真があるから信じるが、修道院については何ともいえず。しかし信じてよからう。韓国のクリスチャンからあつい尊敬を受けていた盧基南大司教に実の親、思師の如くにかしずき、ソウルの崔さんの自宅にむかえて大司教の最後を看取って上げた一事からして、不思議とは思わない。

いま一つに、三年前の出来事がある。四月の日曜日、崔さんは交通事故で仮死状態になった。六本木の教会のミサの帰へり、電柱に車をぶっつけた。車は前半分がペシャンコになったほどの事故だ。三日ほどして知らせを受けて病院に駆けつけたら、無惨な包帯姿で目だけ開けていた。「ミサの帰へりに死に損なうとは、キリストさ

まもアテにならんね」と浴びせたら、「ナニをいう。キリストさまが守って下さったからこうして生き返えったんだッ」と彼は吠えた。モノも言いよう。だが彼が助かったことは事実だ、まったく奇蹟といっている。

キリストは死後三日にして再生復活したという。嘘か本当か、そっちに私の関心はない。だが崔さんの場合はシカとこの目で見届けた。仮死状態のまま二、三日後に蘇生したのだ。キリストさまから千と九百何十年目かに、彼は「復活」を自作自演してみた。

彼はこの世に二回生をうけた。いや三回かも知れぬ。三十年前、彼の身に何がおきたかは知らないが、学生運動に身を投じ時の権力に反抗し死地を脱しての“亡命”という噂も聞いた。ともあれ、これほど彼はしぶとく、したたかに生きている。「不死鳥」である。もっとも「憎まれっ子世に憚かる」という諺もある。不死鳥か、憎まれっ子か、それはこれからの崔さんの生涯が答へを出すだろう。

一度だけの“放電”

さてこのように彼から“感電”させられどおしの私にも、ただ一回だけ強烈に彼を“感電”させたことがある。一九七四年秋におきた「日本の政変」——即ち田中角栄首相が辞職して三木武夫政権が誕生する際の話だ。この政変は、文藝春秋が九月十日発刊の“十月号”で「田中角栄——その金脈と人脈」と題した記事が引き金になった。田中首相の莫大な軍資金が実は“土地ころがし”の不浄なカネであることをスッパ抜き、疑惑に満ちたその金権体質を白日の下にあばき出したのである。

いかに出版界の雄であろうと、強大な政治権力の前には、所詮、非力な一月刊誌にすぎない文春の告発が政権を打倒した。並の政権ではない。“今太閤”が君臨したつよい政権である。首相は五十代と若く、無尽蔵とみられる豊富な政治資金を散布し、党内最大派閥を擁し、政官界を睥睨する長期不倒と噂された政権を一一である。日本の内閣史上、前代未聞の珍事で国中を震撼させる出来事だった。天麩羅鍋を引っくり返へした大騒ぎになった。政治不信は沸騰し、田中批判の大合唱は燎原の火と燃え上がり、自民党は結党以来の危機に立つ。狼狽と混乱の渦巻くなかで時局收拾が焦眉の急となる。

田中は一年後、また「ロッキード事件」の主役になる。“前首相逮捕”の電撃波が世界を駆け巡り、与党内は“三木退陣”の凄絶な政治斗争絵巻を繰り広げていくのだが、国民大衆が受けた衝撃の度合はロッキードよりはるかに強烈であった。

混乱はどう結着するか、次期首相は誰か――世界が注視していた。

「権名裁定」

政治とは面白いものである。極度の混乱が然らしめた珍現象という他ないのだが、この政治危機收拾、次期総裁決定の“時の氏神”に、いつの間にやら副総裁の権名悦三郎が表舞台に登場してしまうのである。

権名さんは文春が火を吹いてから二カ月近く、政治の大混乱をよそに、ほとんど自宅にこもったままで沈黙考、吾れ関せずの態度に終始していた。党三役、派閥の実力者、岸信介・佐藤栄作・船田中といった首相、議長

経験者らの最高顧問たちが何度会議を開いてもラチがあかない。次期総裁は公選か話し合いか、誰が、いつ、どんな方法で——名案も出さず堂々巡り。十二月通常国会の招集は迫まってくる。

こうして時流が超然孤高の立場にあった椎名副総裁の決断を待つに至って、腰を上げた椎名さんは断然たる牙えをみせた。鉦で大根を叩く切るような実に乱暴に快刀乱麻の裁断を下したのだ。誰の意見も求めず、斟酌もせず、意中も明かさず、党の機関も手順も規則もまったく無視して、十二月一日の日曜日、党本部総裁室に三木武夫・福田赳夫・大平正芳・中曽根康弘の四実力者を呼び集め「後継総裁に三木武夫君」と一方的に断を下した。世に云う「椎名裁定」である。この裁断で、椎名さんはものの見事、一挙に政局混乱を鎮撫してしまったのだ。呼吸というか、一瞬の“間”というか、椎名が生涯に見せた至妙の名人芸というほかはない。

当時、政界もマスコミも「三木政権」を想定したのは皆無だった。三木さんは自民党にあって主流から外れた傍流の最小派閥であり、政変劇ではカヤの外に置かれて、せいぜい“刺身のツマ”程度にしか見られぬ存在であった。誰しもが、福田赳夫か大平正芳のどちらか、と見るのが定説だった。それだけに椎名さんの「三木武夫」指名はまったく意表を衝いた裁定で、指名された三木さん自身が顔面蒼白“晴天の霹靂”と絶句したほどだ。

朴大統領に極秘電

椎名さんが「三木」を決断したのは正確にいうと裁定の前日十一月三十日朝八時前のことだ。二十九日夜から三十日明け方にかけて熟慮を重ねた椎名氏の意中は「保利茂」の指名というものだった。そう私が断言出来るの

は、三十日朝七時半、椎名邸に入って彼の寝室で起きたばかりの椎名さんと眼を合わせたとき、「決めたよ」——彼はポツリこう言った。「誰です?」「保利だ。……あれしかないよ」と言ったのである。それから二十五分の間に、椎名さんは保利案を撤回して「三木」と決断するのである。

私が崔書勉さんに「次は三木武夫」と“極秘情報”を伝えたのは、たしか二十九日の夜ではなかったかと思う。崔さんは韓国の新聞が日本の誰が新総理になるかについての記事の中で、ハト派の誰がなると韓国に不利と書きタカ派の誰がなると韓国にとって有利のような書き方に対し彼らしい批判をいだいたのであった。彼の説は日本の総理が多少の差はあっても社会党や共産党から総理が出て韓国を無視するわけに行かないし、韓国とはうまく行くことにとめなければならぬ条件にあるのが両国であるという主張をもっていたから、ハト派、タカ派を分ける期待記事に不満をもっていたのである。そういう状況の中でハト派の三木さんがなると日韓関係がマズクなると考える作文用記事に一針を加えるつもりであったらしい。

崔院長は本国の朴正熙大統領にこの情報を急報した。どんな方法でかはよく知らない。

二十九日夜というのは、さきに述べた如く、椎名さん自身は“保利”指名を構想していた時刻だ。私は崔院長だけでなく、三木武夫さんにも会って“三木指名”を予告しておいた。なぜ私が確信をもって、崔さんに知らずことが出来たのか、それは省く。

後日談

話を戻して――田中首相が退陣表明をしたのは十一月二十六日だった。既に極度のノイローゼになり体重も六・七キロも減り、心身共耗弱状態に陥っていた首相は、二階堂や大平ら会う人ごとに“一日も早く辞めたい”と口走っていた。

だが二十六日までではどんなことがあっても辞意表明は出来なかったのだ。

米国大統領の訪日である。日米修交百年に際しフォード米国大統領は田中首相の招請を受けて来日し、ついで韓国、シベリアでの米韓、米ソ首脳会談の極東巡訪が決まっていた。その矢先、日本の“政変気配”だ。アメリカは慌てた。国務省は「大統領の極東巡訪が完了し米国に帰着するまで、首相の辞意表明はしないよう」日本政府にクギをさしてきた。だからフォード大統領が十八―二十二日の日本訪問、二十二―二十三日の米韓首脳会談、二十三―二十四日の米ソ首脳会談を滞こおりなく済ませて、二十五日、日本時間二十六日帰国したのをシオに田中首相の辞意表明となつたわけだ。

ところで、韓国を訪問し朴正熙大統領とのトップ会談、ついでキッシンジャー国務長官らを交じえた首脳懇談で、当然のことながら日本の政局が話題になった。キッシンジャーは「次期首相は福田赳夫に間違いない」と胸を張って予言したという。

朴大統領ら韓国首脳に望ましいのは福田政権であった。何といってもこれまでの日韓両国関係に、岸・佐藤の兄弟首相が果たした親善関係の努力は大きい。その直流たる福田赳夫の登場は歓迎されるからである。米・韓ともに福田政権を希望していたということだ。

そうした大統領のもとに崔院長からは、予想だにしない「三木武夫」の知らせであった。これは三十日のこと

に違いないが、大統領はスナイダー駐韓米国大使とゴルフをした。ゴルフ場の歓談でスナイダーは「福田赳夫に間違いはない」と観測を述べたら、大統領は「そうだろうか……わたしは三木武夫ではないかと思う」と言った。後にこの米国大使は「どうして韓国大統領だけは三木と知っていたのか」と大いに驚いた一とこれは崔院長から聞いた後日談である。

三木内閣での初の通常国会が七十五年一月に開かれたが、社民連の田英夫氏が“日韓癒着問題”の質問のなかで「三木政権は日本で国会議員もマスコミも誰一人、事前に知る者がいなかったのに、韓国の朴大統領だけは前もって知っていた。どういう訳か」と政府を追求した一幕もあった。

後日談ついでもう一つ一三年ほど前、朴政権時代の中央情報部で国際関係を担当した尹鑑均次長が来日し、一夕久闊を叙したおり、尹さんは往時を回想して「院長サン から“三木武夫” の電報で、大統領閣下から三回も私に“大丈夫か” と問合わせがあり、私は崔院長さんの情報だからゼツタイ大丈夫です、と閣下にお答えしたが、決まるまでは冷や冷やしどおでした」とはじめて楽屋ウラの披露を聞かされたものだった。

朴大統領にしてみれば、福田さんに期待していたしアメリカ情報も、或いは駐日大使館の情報も「福田」とあるのに、「三木」だと知らされて半信半疑、韓国にとって一番好ましくない人物の登場として信じたくなかったのかも知れない。

“凡人”をみた

もう少し駄文をつづける――三木さんが指名された日の十二月一日夜。私は崔院長に連絡して二人で渋谷区南平台の三木私邸を訪ねた。

おりから日韓関係は二つの事件で政局に暗い影を落していた。前年八月に起きた「金大中事件」と、四カ月前の八月十五日在日韓国青年、文世光による「大統領夫人・陸英修女史殺害事件」である。いやが応でも三木内閣が影の処理をせまられることになる。その三木当人は韓国問題は“無知”といつてよかった。将来のため、崔院長を三木さんが知っておくことは双方にとつて大事だと思つたからでもある。

三木邸は蜂の巣をつつついた騒ぎだった。降つて湧いた“大命降下”に動転し、代議士は馳けつける、新聞記者はつめかける、テレビや祝い客が押しかけて、それ茶碗が足りない、魔法瓶が足りないテンテコ舞いのまっ最中。私達をみた秘書があわてて奥に消え、間もなく二階の納戸部屋に通された。家中どこも一杯で箆笥部屋しか空いてなかったのだ。睦子夫人が和服の正装でみずから茶菓を持って現われ二人の前に両手をついて「このたびは本当に有難うございました」深々とお辞儀をする。夫人は盲腸炎を患い慈恵医大に入院していたのだが、急拠私邸に戻つて休んでいたところだという。入れ代わりに三木さんが来た。入るなり「アリガトウ、アリガトウ」と私の手を握つて離さない。崔さんを紹介したら、今度は彼の手をとつて「ありがとう、ありがとう」。後の話は興奮状態の三木さんの耳には入らぬらしく、鼻じろむばかりにアリガトウの連発だった。

世間にうつる政治家はいつてみれば“虚像”である。盛り沢山の経歴・肩書き・実績という“勳章”をにぎにぎしく飾りつけたコケおどしの姿でしかない。三木さんの場合もそうである。政界の最古参、副総理や臨時首相代理、幹事長など党三役も何回かやり、三木派の総帥で実力者――ベタベタつけられた効能書きからは、雲の上

の“政治家”とは感じて下界の“人間性”はカケラも感じられない。庶民大衆には、およそ“無縁”の存在としか映らないのだ。嬉しければ素直によろこび、泣きたい時は泣けばいい。“勲章”をとつばらった“実像”をみせてこそ、その政治家に人間性を感じ、親しみも湧いてくる。もし「総理大臣」といわれて、カオ色も変えず、興奮も感動もしないモノがいたら、人間ではない、バケモノだ。

その点、私達二人の前で演じた三木さんの挙動は生臭い俗臭をプンプン発散させて、まことに人間性溢れた“凡人”の姿であった。崔院長もそれを感じたに違いない。肝腎の崔さんによる“韓国講義”は勿論出来ずじまいであったが――。

「デタント呆け」

政局は新政権の人事から動き出したが、実はここにも崔院長の影響が現われるのである。崔さん本人は自覚していないだろうから、書いておきたい。

三木政権産みの親は、いうまでもない、椎名悦三郎である。その椎名氏は裁定以後は元のダンマリの椎名に戻り、新政権の人事には一切口を出さない態度をとった。当然のことだ。憲法上、閣僚の人事権は首相の専権事項であり、これが首相がもつ権力の源泉でもある。

その椎名さんが、三木さんに注文つけたかった一つの例外は「外務大臣」の人選だった。「デタント呆け」という警句は、椎名語録の“名作”の一つだ。緊張緩和という字ヅラに酔って本質を見失っているという警告である。

「自由」と「共産」、「右」と「左」には本質的に相違がある。それをシツカリ見極めた上で両者の融合を図るべきで、無原則な融和妥協は間違いの元になる、という考え方であった。同行異極——という言葉も使った。

現に、いまレーガンとゴルバチョフについてそれが言えよう。米ソ首脳会議で中距離核削減の合意が出来た。米ソはデタント時代に入った——と日本の政治家もマスコミもいう。そしてゴルバチョフの人気はアメリカでも急上昇しているという。ならば尋ねたい。

ゴルバチョフは従来のソ連指導者とはまったく種類の違う人種であるのか——ロシアの反体制派から出て来た人物なのか。冗談ではない。彼はソ連の今までの「体制」の中に育ち「体制」のおかげで最高指導者になれたのではないか。その彼が己れの拠つてもつて立つ現「体制」を崩すことなど出来る筈はあるまい。

ゴルバチョフは本気でソ連を変えたいと考えている——本気かどうか、おそらく本気だろう。それはソ連の地盤沈下——非能率・低生産性・不合理とはびこる官僚主義、失われた勤労意欲、著しい経済の停滞。指導者なら誰でも黙視できないソ連の現状だ。ペレストロイカは成功するか失敗するか。成功させねば彼の政治生命は断たれるかも知れない。本気になるのは当然ではないか。

では成功したらどうなるか——ゴルバチョフは相対的に弱いロシアを目指そうとするだろうか。逆である。彼は強いロシアを目指し、世界で超大国としての威信回復をはかり、政治的な力を発揮したいとするだろう。

強くなったらどうなるか——“金持ち喧嘩せず”でソ連は卒先してデタントの見本を示すだろうか。そうした徴候はいまのところ全然見えない。彼のこれからの言動を待つほかはない。米ソがデタント時代に入ったと手放しでの楽観は、まったくその時期ではない——といえはしないか。

崔書勉情報

三木政権誕生の時がそうだった。しかもおりから椎名さんの危惧する「デタント呆け」が実証される“事件”が隣りの韓国で起きたばかりだった。

それはこういう出来事だ。「極東巡訪」で日本から韓国に飛んだフォード大統領は、伝えられるところでは一種の先入感をもっていて、韓国の「民主化」と「人権問題」について朴大統領にかなり厳しい苦言を述べるつもりであった、という。

ところが、フォード大統領は朴大統領主催の歓迎晩餐会で「私は朴大統領閣下の政治姿勢と政策に全面的に同意し、米国政府は閣下を絶対的に支持します」と当初のハラづもりとはまったく違う全面支持の声援を送ったのである。

それは韓半島の厳しい現実に身をおき、さらに生々しい「トンネル事件」に接してであった。韓国と北朝鮮を分断する悲劇の三十八度線。アチラではこれを「軍事境界線」と呼ぶが、その境界線に設けられた四キロメートルの非武装地帯の地下の岩盤をくりぬいて、北朝鮮が韓国領内に向けて侵攻用のトンネルを掘っていた事実が発覚した。これが米大統領が訪韓する一週間前の十一月十五日のことだ。五年後の八月までに、北による侵攻用トンネルは三本が発見されたが、これは最初の発見第一号であった。

第一号トンネルを私も視察したが、高さ一・二メートル、幅約一メートル、二二〇ボルトの電線が張られ、二

○メートルごとに裸電球をぶら下げてあり、トロツコ用のレールも敷かれていて、連隊規模の部隊が軽装備で“南侵”できる大きさである。第二・第三トンネルはもつと規模は大きい。

韓国軍と駐韓米軍の合同調査班が、トンネルの内部を調査中、埋設された地雷の爆発で韓国と米国の中佐二人が爆死、双方六名の重傷者を出す事件がおきた。死亡事件は、フォード来韓の前日だった。

訪韓した米大統領は、この事件を知り、直ちに米軍ヘリコプターで最前線に飛び、現場を見た。そこでフォード大統領は、あまりにも一触即発の危険に満ちた韓半島の緊張状態に愕然とするのである。米本国からトンネル探知機の空輸を命じた大統領は、その晩ソウルの晩餐会で、さきの朴大統領“応援演説”を行ない韓国政府を大いに鼓舞激励することになったわけだ。フォードには、それ以上“余計な”お説教などするゆとりはなかったのだ。

同じようなことが七十九年六月にもあった。東京サミットから韓国に飛んだカーター大統領だ。「人権」の旗手を自任するカーターは朴大統領に「人権」について忠告を試みたが、「ワシントン郊外の飛行場の下に敵がトンネルを掘っていたら貴方はどうするか？」と朴大統領から一矢報いられ「自由を守るためには、自由がある程度制限せざるを得ない」韓国の特殊的立場を説かれて、同意せざるを得なかったのである。

椎名氏は一九七二年九月の日台断交に際しては、「台湾特使」として緊張の沸騰点に達した台湾に赴き、結果において台湾側をだました苦汁をなめた。

朴大統領夫人の陸英修女史が、日本からわたった文世光の兇弾にたおれ、その事後処理をめぐって韓国朝野が激昂、日韓関係が“断交”の危機に立ったとき「韓国特使」を引き受けて韓訪、朴大統領との間に“椎名メモ”

を取り交わして危急を切りぬけたのは、三木指名の二カ月前の九月十九日のことだった。

こうした肌での実感からも「デタント呆け」を正さねばならぬと椎名さんは痛感し、「外務大臣」人事だけは傍観者ではいられなかったのである。

椎名書簡と崔さん

椎名副総裁が私に、三木総裁に手紙を書くから届けてよく真意を説明してくれ——と頼まれたのは、三木総裁が椎名邸にお礼言上に訪れた翌日だから十二月三日だったと思う。椎名さんは別室で三十分ほどかかって手紙を書いた。「読んでみてくれ」という。こう書いてあった。

『フォード大統領が訪韓し、今さらの如く、北朝鮮の韓国侵透への苛酷さに驚愕。当初の方針を百八十度転換し、朴政権への全面支持を約束したという。

これは、日韓外交に対する米政府の重大なる警告、と受けとれぬことはない。この際、日本外交は、これを根本的に見直す必要ありと思考される。そのためには、外相の人選は、ことのほか重要と思われ、それには党外起用が絶対に必要なり、と思えます。

私は、武内竜次君（元駐米大使）が最適任と考えます。ご勘考下さい。』

椎名さんが三木さんへの書簡にフォード訪韓を持ち出したのは、「崔書勉情報」の引用である。崔さんが私に朴一一フォード会談の内幕を伝えてくれ、これをすぐ椎名さんに取り次いだ。彼は“崔情報”を聞くやすぐに三木

総裁に「手紙を書く」と別室で右の書簡を認めたというわけである。

文面の「米政府の日本への警告」という意味は、当時、外務省は北朝鮮に対して約四百万ドルの輸銀資金の使用を考え、木村俊夫外相の指示のもとに北朝鮮に対して“前向き”姿勢をとっていたことを指していた。輸銀資金が、北朝鮮でポルト・ナットやタオルといった平和目的に使われる、としても、その分、資金余力ができればそれを軍事費に転換できる。韓国が「トンネル事件」で北の対南侵攻に神経をはりつめている矢先、無用のマサツを起す“前向き”姿勢は論外だという指摘だった。

椎名さんは武内竜次氏の起用を考えた。武内さんは椎名氏が外相の時の駐米大使で、下田武三さんと並ぶ外務官僚きつての硬骨漢として知られていた。南平台の私邸で三木総裁に会って椎名書簡を渡した。黙読した三木さんは「承知しました」と即答。これを受けて椎名さんは武内家に電話したらニューヨークに行っているという。夜を待ってニューヨークのホテルに電話し、本人をつかまえて外相受諾をたのんだが、武内氏は「ご勘弁願いたい」とどうしても承知しない。結局、椎名案は実らず、宮沢喜一さんが外相に就任するのである。

朴政権は三木内閣に不安をもったにちがいない。後日、私が大統領に会ったら「私は三木さんでなく“椎名内閣”だと思って安心しています」といわれた。三木首相の閣僚名簿原案には宇都宮徳馬氏の環境庁長官があった。これは陽の目をみなかったが北朝鮮と関係が深く、金大中氏とも昵懇の彼を若し起用していたら、韓国の反応はどうだったろうか。

ところで、椎名さんが三木さんを指名したのは、三木さんの最高指導者としての“能力”は他の実力者より優れている、と見て裁定したのではなかったのだ。それどころか能力的には“党の遊説部長”程度にしかなかった。いなかつた。

要するに未曾有の政局混乱を鎮静させる。換言すれば“火事を消す”ために緊急避難措置として名指ししただけである。それには三木さんはうってつけの人物であった。与野党を通じて船田中氏と並ぶ政界最長老であり、しかも身边は清廉である。加えて彼は何十年も“政党近代化”を唱えつづけていた政治家だ。

田中氏は“地上げ屋”そのけのあくどい錬金術で金権政治を行なった。しかし田中だけが責められはしない。政党そのものがドブプリ構造的金権体質にはまり込んでいる。政治不信はそれを衝いていた。したがって、この非難に耐え得る人物を充えなければ時局收拾は出来ない。そこに三木さんの効用があつたのだ。つまり、ワンポイント・リリーフとしての役割りを彼に演じさせたいと考えたわけである。別の表現をすれば本格政権ではなく暫定政権という構想だつた。そこに、椎名さんの誤算があり、三木さんの反撥があり、ロッキード事件が火に油をそそぐきっかけになつて齒車は逆回転しはじめるのだが、それはもう崔院長には無関係のことだから書く必要はない。

朴大統領が泣いた

私は崔書勉さんとの交際で、冒頭に述べたように一方的に彼から教えられることばかり。十五年の二人の関係で一回かぎり「三木総裁」を教えてあげただけだ。しかし読んでおわかりのように、椎名さんも三木さんも間接的であれ、ずいぶんと崔さんに教えられていることに気がつく。日本の閣僚人事にまで崔さんは影響を与えていたのである。

崔院長は私のたった一度のささやかな義理に酬いるためか、私を韓国に招待し、朴正熙大統領に表敬させてくれた。十二月十四日に金山元韓国大使・小谷京都産大教授・村松筑波大教授・大谷サンケイ記者の一行に加わって訪韓した。

十六日夕刻青瓦台の大統領官邸で夕食会に招かれたが、私はそこで“劇的”光景をみたのだ。私と肩をくっつけて立った朴大統領が話の途中、滂沱たる涙――形容そのまま、私の横で泣いていたのである。何という純粋な人なのか、私は云いようのない感動に打たれたものだ。

本当はそれを書きたかった。いずれ二回目の「私と崔書勉」が出るならば、そこに譲ることにする。

終身“日韓大使”

おわりに一言。

「日本での三十年で“本当”の韓国を知ることができた」。こんどは「韓国で“本当”の日本を研究してみたい」。崔書勉、祖国へ帰るの弁である。至妙の言葉というほかない。日本人の私自身、韓国人である崔さんから

「日本」について、これまでどれほど沢山のことを教わり目を開かされてきたことか。

「説」を持たねば“学者”ではない」というだけあって、彼ほどに歴史について、事物について正論・異論・珍説・新説つぎから次に“学説”を創り出した学者は稀少といつてよい。

更に加わえて、彼ほどに真の意味での愛国者もこれまた稀少である。

権力に阿諛迎合するテイの愛国者でもなければ吉田茂が吐いた曲学阿世のそれでもない。彼は日本に於て、明治の元勳伊藤博文を暗殺したか“憎むべき”安重根像を一変させた。そのうち宮城県あたりに「安重根神社」が建立されかねまじきほどにその評価を転換させる芸当をやつてのけた。しかも、彼自身、伊藤博文をも受け入れる度量と大局観に立っている。

そういう男だから、三十六年間の日帝時代、加害者の日本と被害者の韓国、価値観、論理観が百八十度異なる構図の中で、加害者への追究は当然として、被害者たらざるを得なかつた韓国側の追及も厳しい。

それもこれも、あすから創られる韓国の歴史に二度と汚点を刻まぬために、日本にも再び愚を犯させぬために、心魂をそそいだ研鑽がそれであり、殊更に日本研究云々の意味もそこにあると視ている私は崔さんは真の愛国者と断ずる所以である。

毀誉褒貶に頓着せず、内に経論を包み外に心気皓然。雷同せず孤高を守り、附和を欲せず他を追随せしめるに俠気旺盛、その言行一致せざるはない。所詮「学者」の枠には収まり得ない偉物である。

はじめに書いた「滞日三十年記念」の会で“韓国通”の長谷川峻代議士は「崔書勉先生こそ、韓国の“終身大使”だ」と賛辞を呈した。私は不満だ。私だったらこう述べる。言葉のアヤでいうのではなく本当に“近くて近

「日韓関係」は「崔院長が“日韓終身大使”であってこそ実現されていくものだ」と。

(完)

あの方、日本語わかるのかしら

藤塚 明直

(群馬大学講師)

私は齢七十を越えて結婚式を挙げ披露の宴を中野のサンプラザで致し、媒酌の栄は文学博士宇野精一先生御夫妻に仰いだ。崔書勉先生にはあの魁偉な容貌そして容姿を韓服(国服)につつまれじつと燕礼の座に坐しておられた。やがて崔先生の一席となり、やおら立たれるや開口一番「今さっき、私の前の御夫妻、ひそかに『あの方、日本語わかるのかしら』こうささやきかわされていました」ときた。宇野先生思わず「いやはや」。崔先生を知る新郎側の面々どつときたことは言うまでもない。次いで崔さんの寸鉄人を刺す祝辞? それこそドスの利いた日本語ではじき飛んだ次第。さて、ところでであるが、「あの方、日本語わかるのかしら」と思ったのも実は無理もない。有体にいえば韓服姿のこの人物、われらインテリばかりの宴席の面々のなかにあっても、太古も太古、縄文人のなかにふと現れた渡来人、それへの感触この時もそのままと行ってよく、それとそんなに変わるはずはなかったからである。崔先生は本貫がもともと半島の北は北なる江原道、韓人独特の骨格体容が殊更に際立った人、初会の日本人には完全な異人、完全な外人という外はないのである。私も一九七二年八月先生の御好意でソウル

で行われた日韓文化シンポジウム参加の招待に浴し羽田空港ロビーで始めてお会いいたしたが、精悍というか悍というか、遊牧ノツモドか、騎馬民族か、その面構えにアッチラの族長という感を受けた。或いはこの人、高句麗好太王の血を引いているか知れず、そうなればこの一筆、第二の広開土王碑かも。

「あの方、日本語わかるのかしら」といえばもう一人いる。何と聖徳太子。この太子、日本語は分からなかった、言えなかった、そう指摘するのは中国文学専攻で作家の駒田信二氏、それに国語学者の金田一春彦氏もとか。まだ、七世紀へかけてまでは土着の日本語なんて高度な文化言語とはいえず、統治階級者達の言語は専ら中国語（但し呉音系）であったという。これらハイ・サークルの人たちは新渡来の漢人（イマキノアヤヒト）で中国大陸系か半島系。被支配側の一般人民とは先住の民か旧渡来人でいわゆる倭人であった。統治階級の人たちが倭人と話すときは訳語部（オサベ）、即ち通弁が間に介して話を通じさせていた状況ではなかったかと駒田、金田一の両彦が推測をたてている。さあこうなるとこのハイ・サークルの方たち「日本語わかるのかしら」どころか、「日本語はわからなかった」のである。しかし日本語も八世紀に入る頃には書紀を訓読にし、また万葉の詩歌文学を生むまでに文化言語として成熟していったというわけになろう。

いっぽう日本語わからなかったかも知れぬという聖徳太子、相手が漢人であろうと倭人であろうと十人のことを同時に聞いて即座にそれぞれの言いたいことが分ったという。とすれば太子はオサベなど不要、言葉発声以前、話者の動機を即座に掴み、読み取っていたということにならないか。これ為政者としての資格でもあるが。この動機把握、或は、動機探索、これがまたなんと崔先生の話し方に垣間見える。こちらが虚をつかれ、ふとくすぐられる。突風がきてスカートがまくれ上がり、音もなく猛スピードで車が通過するあの手口というか、モー

レツとってスカートをおさえてももう間に合わない。

この動機探索とは、人の言葉、人の行動についてそのインテンション（意図）は何か、それを吟味、或は模索することだ。漢学に於ける註疏もまさにそれ。西欧ではシエークスピア劇の上演でも、ベートーヴェン交響楽の演奏でも、その上演、演奏に当って、それら作品、それら作者のインテンションは何か、それが先ずとことん吟味され、作品が一つの結論に到達したところで、始めて上演プランは樹てられ、やがて華々しくステージにお目見えする。これぞ動機探索であり、註疏である。だからベーム指揮の第七はベームの註疏、カラヤン指揮の第七はカラヤンの註疏で、われわれはベートヴェン作品の演奏に於いて具体的にはその註疏を、その動機探索したものをこそ、聴いているのである。この点、日本の能なり歌舞伎に於いては作品に深刻な動機探索が注がれての上演ではない、やはり日本の芸文が感覚的、情緒的に優れているから哲学性に欠ける所以。こうみてきて崔先生の日本語、日本語でありながら日本的でないものがあり、どこか大陸的西欧的な言葉機能が内的なところで働いていることを見付ける。

日本人の付き合い振り、またわれわれ何を主題にしがちか。最近、Dean C. Barnlund 教授（サンフランシスコ大学 Communication Theory）より忌憚なき指摘があった。人との話題、アメリカ人は理論上のこととなつてゆぐが、日本人は主として世間や身辺のこと。とかくアメリカ人は philosophical issues, political issues, religious issues, life style, morals とくるが、こんな話題、日本人間では主役とならんようと。韓国の人と日本人との違いもまさにこれ、われわれ日本人は willing to be forwards, to articulate our own positions の器量に頗る欠け、韓国の人は expressing themselves, self-assertive に長ける。日本に自然主

義入いるや私小説、心境小説など身辺ものが幅を利かしてきたのも宜なる哉。去る九月二十九日（87）、研究院で作家韓戊淑女史の講演あり、質疑の時間に入って、私は、日本韓国ともども演歌的なものが大いに愛好されるが、すると韓国にも私小説的なものがあるのでしょうかとお尋ねした。答えはノーであった。やはり韓国の人 self-assertive であるからにちがいない。かくて私は崔先生の雄弁な日本語のなかに欧亜大陸の文化土壌が、その深い文化の層が厚く蔵されていることを感ぜずにはいられない次第である。

一見如古以心伝心

榎 浩 史

東洋大学東洋学研究所
所員・文学博士

崔書勉院長——彼と私の最初の出会いは、偶然、隣合わせに座ったソウル行きの飛行機の中——。以来、五年有余にわたって「一見如古」の親交を重ねている仲である。

ところが、二人とも東京に住んでいながら東京で顔を合せて談笑したのは（電話での会話は別として）たったの一度きりであるが、その代り、ソウルでは座を共にする機会が少なくなかった。

それも以心伝心なのか、私が取材のため訪韓の時に限って、まるで、二人が「ソウルで会いましょう」と約束したかのように、必ず出会うのだから妙な因縁だと思う。

崔書勉院長——彼の渡日三十余年における、文化活動やその業績について、今さら、私から改まって述べるつもりはない。彼の仕事については周知の通りであるからだ。

私が彼を尊敬し、彼から学んでいるところは、常に変わらぬ豪放磊落な言動と賢愚の人を問わず胸をひろげて対話を分ち合う抱擁力、そして、何事でも徹底的に解明しないとおさまらない彼の不倒不屈の精神というか、頑

固というか、考えようによつては、神経が……。

それでいて、風流を解する粋な男。酒席における（韓国における）辛辣なジョークと、斗酒なお辞せずの海量（中国語の大酒豪）には、李太白も墓の中で寝返りを打ちながら悶えることであろう。

最後に、彼の面白い生態を紹介しよう。彼がソウルの常宿であるプラザホテルでのことである。彼はソウルに来るたびに洋服を新調するらしく、私が訪ねて行った時、ちょうど新調の服を二着届けられたのであるが、その時、彼は洋服の上衣をひろげて、『おい！ ネームのとなりに数字が入っていないじゃないか』と洋服屋に文句を言っていた。洋服屋も、それに気がついたのか、あやまつていたが結局、その洋服を持って帰った。「洋服のネームに数字とは何のことですか」と聞くと、彼いわく、『僕は洋服を新調するたびに、ネームと一緒に作った時の年月日を必ず入れることにしているんだが、今度のは洋服屋が忘れていたので、入れさせろとしたままで……』と。言うなれば、彼は沢山持っている洋服には、どの洋服は何処でいつ作ったという表示がついているというわけ。こんなの私は生れて初めて見た光景である。おそらく、洋服タンスから洋服をひっぱり出す時、これは、何時、何処で、どういう時に作ったものだと思いだしながら、日記代りの記憶を辿るといふ全く新型の思考方式といえるかも知れない……。

崔書勉さんと

『朝鮮キリスト教の文化史的研究』の再版

宮原 兔 一

(元・東京教育大学講師)

数年前、日比谷の古本市で崔書勉さんにめぐりあった。十何年ぶりか、病気でつとめもしごともしもすべて退いて、いささか回復していた頃であったが、覚えていて下さった。そして、「山口先生の『朝鮮西教史』を韓国研究院にも何部かそろえていたが、なくなってしまう。古本市にも出ないがありませんか」とのお話で、かねて友人の田中明氏（拓殖大学海外事情研究所教授）からも、同書が絶版で入手できないと聞いていたので、二十年ぶりの再版を決心した次第である。

著者山口正之先生は、京城帝国大学の第一回卒業生で、私の京城中学校（現在ソウル高等学校となっている）時代の恩師であり、戦後も一九六四年六十三歳で急□されるまで親しい交わりと御指導を頂いた。

先生は朝鮮キリスト教史の研究をライフワークとして、多くの論文を発表されたが、同書はそれらを基盤として書下し、朝鮮キリスト教の伝来発展を明らかにされた名著で、一九六七年遺著として出版された。岩生成一東

大名誉教授や、柳洪烈ソウル大教授、天理教中山正善真柱の方々から、著者や本書についての文を頂いて、跋の文におさめてある。

出版社との交渉や、いくつかの困難や問題もあったが、幸い多くの方の協力をえて、一九八五年十月、初版の副題を書名としてお茶の水書房から発刊された。八十歳を過ぎてお元気な奥様や、それぞれ成人された六人のお子様もたいへんよろこばれて、また史学やキリスト教の研究分野においてもいささかお役に立ちえたかと思う。

先生は、旧制佐賀高等学校から、京城帝大に進まれたが、佐高時代は水泳部歌の作曲、京城中学でも応援歌の作曲をされるなど、たいへん多才、多趣味な方であった。戦後は、滋賀県で、高校長や教育長として活躍されたわら、任地で甲賀流忍者の研究を『忍者の生活』という名著にまとめてもおられる。

私は同書の知られ読まれんことをねがって、ゆかりあるローマのバチカンのグレゴリアン大学に一冊を、ソウル大学に、旧知の国史学教授辺太變氏を通して一冊を呈し、学会や同窓のあつまりでも紹介させて頂いた。

一九八七年十月の早朝、ソウル明洞の大聖堂を訪ねた。私の幼少のころは、フランス教会といて、市街の中心にゴシック建築の大尖塔がそびえて立っていた。今は林立する高層ビルにとりかこまれているが、仰ぎ見てやはり大きくすばらしい。ソウルの市街には、いたるところ十字架が見られ、教会の多いのに驚かされる。国民の四人に一人、千万人がクリスチャンという韓国のキリスト教の成長に思いをはせた。

本書再版のきっかけをつくって頂いた崔書勉さんに、あつく感謝している。崔さんは熱心なカトリック信徒である。

崔書勉博士と

『国際韓国学研究機関協議会』結成のことなど

村上 四男

(和歌山大学名誉教授)

私が初めて崔先生にお会いしたのは、今を去る十五年前の一九七三年（昭和四十八年）七月であります。そして、その場所はパリでした。すなわち、この年の七月十六日から二十一日までの六日間、フランスの首都パリーではコレヂ・ド・フランスと、その隣のパリー大学（ソルボンヌ校舎）を会場として第二十九回国際東洋学者会議（一般にオリエンタリスト会議と略称した）が開かれたのであります。

そもそも、このオリエンタリスト会議は、これより百年前の一八七三年（明治六年）にオリエント学に携わる学者・学会の国際会議としてパリーで開かれたのに端を発し、爾来ロンドン（七四年）、セントペテルスブルグ（七六年）、フロレンス（七八年）、ベルリン（八一年）、ライデン（八三年）、ウィーン（八六年）、ストックホルム（八九年）、ロンドン（九二年）、ジュネーブ（九四年）、パリー（九七年）、ローマ（九九年）、ハンブルグ（一九〇二年）、アルジェ（〇五年）、……第一次大戦で休止……オクスフォード（二八年）、ライデン（三二年）、ロ

ーマ（三五年）、ブリュッセル（三八年）……第二次大戦で中断……パリ（四八年）、イスタンブール（五一年）、ケンブリッジ（五四年）、ミュンヘン（五七年）、モスクワ（六〇年）と続き、六三年には初めてアジアに移ってインドのニューデリーで、六七年には北米（初めて）に移って米国のアナバー（ミシガン州）で、七一年には南半球に移って（これも初めて）豪州のキャンベラと続いたが、七三年は会議百周年を記念して最初の開催地パリで開かれた次第であります。

世界における東洋学の発展は目覚ましく、さらに今回は地理的にも恵まれた関係もあって、その参加者は空前の四千名という盛況でありました。日本からは約二百名が参加しましたが、韓国からは団長の李崇寧博士を筆頭に李瑄根、柳洪烈、崔虎鎮、金元竜、金泰坤、姜周鎮、柳承国、孫宝基ら旧知の各氏をはじめとして多数が参加されました。

そして会議第一日（十六日）の夜に凱旋門に近きシャイヨー宮で韓国代表団主催による大パーティーが開かれたのでありますが、私も招待をうけて参加しました。このとき阿部吉雄先生（故人）であったか、或は今般の会議の코리아部会の責任者 *U.O.Sg*（李玉）先生（パリ第七大学教授）によってであったか忘れたが、崔先生が紹介されました。これが崔先生との初対面だったわけです。これまで寡聞にして東京に韓国研究院が設立されていたこと、崔先生のことなどについても全く識らなかつたのですが、崔先生には何か惹かれるものがあり、この一瞬から旧知のような間柄になりました。プログラムの都合で、私は、この会議での崔先生の発表やシンポジウムでの発表を拝聴する機会には恵まれなかつたが、崔先生の活躍は目覚しく色々の会合や諸機関の見学に誘って下さったので、不案内の土地に始めて訪れたのにも拘らず不自由をしなかつたのであります。

とくに十八日の昼食時には L. Ong (李玉) 先生、崔先生の御世話でソルボンヌの中華料理店(上海楼)にて懇親会が開かれ、日本人では私のほか阿部吉雄、井上秀雄の両氏、韓国人では李崇寧博士ほか数名、ヨーロッパ人ではアグノエル(仏)、ジェルネ(仏・パリイ大学中国語教授)、スキルレンド(英・ロンドン大学教授) など数名が参加して懇談したが中々有益でありました。とくに、アグノエル氏の往時の日本滞在中における日・韓に関する懐古談は興味がありました。

この懇親会に集まった面々は勿論でしたが、このほかの会議参加者の間からも、海外の朝鮮研究への協力と知識・情報の交換や研究者相互の親睦などを計る組織をもつべきであるとの意見が強く出され、翌十九日の昼から先の上海楼に集まって国際組織を発足させたのであります。集まった者はスキルレンド(ロンドン大)、L. Ong(パリイ大)、V. Anselmo(ナポリ大)、W. J. Vedeler 女史(ストックホルム大)、金洑洙(キール大)、ピョン・キュ・ヨング(パリイ大)、G. D. Palge (ハワイ大)、姜英勲(ワシントン韓国研究所)、キム・ホング・ラク(ワシントン・アジア学会)、崔書勉、阿部吉雄、井上秀雄、村上四男の十三名でありましたが、この組織の正式な名称は The Association of the Organizations for Korean Studies とし、さらに地域代表、事務局などを決め、諸問題についても語り合われました。事務局は東京の韓国研究院が引受け、事務局長は崔先生が当ることになりました。その後、ソ連をはじめとする各国の研究機関からも、この協会への参加の意を表明して参りました。

右の会合が、この協会の第一回会議とされますが、第二回会議は一九七五年(昭和五十年)七月(一日から八日まで)に韓国政府(文教部)の援助をうけてソウルのタワーホテルで開かれました。この大会には内外から多

数の参加者があり、大変盛会でありました。私は崔先生の強い要請により参加したのですが、余りにも急であったので、一人で大阪の韓国領事館でビザをとったり、二・三日間は転手古舞をしましたが、これが終戦後では初めての韓国訪問となりました。しかし、私は勤務の都合で本番の会議が終了するや直ちに帰国しましたが、参加者はなお朴大統領の招宴に参加したり、板門店見学、新築開館したばかりの慶州博物館見学の旅行を行なって散会したようです。ライデン大学（オランダ）のフォス教授やウィーン大学日本研究所長のクライナー教授らとの面識を得たことは私にとっても大きな収穫であった。クライナー氏とは、この後の七月二十八日～三十一日に東京で開かれた柳田国男生誕百年記念日本民俗学会主催「柳田国男生誕百年記念国際シンポジウム・第二十七回年会」でも再会同席し、親しく同氏の発表を拝聴することが出来たことは幸でした。

その後、韓国で何か事件が起ったりすると、崔先生が黒幕の如く日本の週刊紙に出たり、大新聞にも中傷的記事が出たり、国会でもある政党が非難したりしたことがあります。これらの或るものは、先の第二回会議に呼んで貰えなかった人士（内外を問わず）から出た腹いせの言辞にもとずいていたようです。私事で恐縮ですが、先の会議で私を三品彰英先生の後継者として、また三国遺事研究会の主宰者として紹介下さったことは光栄でした。

次にヨーロッパでは、右の協議会の下部組織が出来て何回か会議が開かれたようですが、日本では大まかな組織が出来たが十分な活動が出来ないままになっております。また第三回の協議会も残念乍ら財政難で開きたくても開けないままになっています。何とか公私の浄財が得られたらと念願する次第です。

崔先生は私財をなげうって韓国研究院を設立され、当院に沢山な研究資料を備えつけられた功績は大きいが、

さらに

①徳川家康の侍女ジュリア（キリスト教を改宗しなかったので伊豆の神津島に流刑になった）の顕彰。

②金玉均に関する史料の発掘。

③安重根に関する史料を発掘して、その顕彰。

④竹島帰属に関する史料の発掘。

などに精力的に努められ内外輿論を喚起された功績も多大ですが、何と申しても更に更に大きな功績は『韓』の発行であります。これは財政難で一時の中断はあったが、研究院創設以来今日までに百号を越す大部となりました。これこそ研究院のシンボルともいえましょう。研究院の存在を誇示するものと言っても差支えないでしょう。

私は先のパリーでのオリエンタリスト会議から帰国して間もなく、編集委員に加えていただき徴力を尽してきた次第ですが、崔先生はオーナーではあるが、編集には口を出さぬことになっております。あくまでも編集権は委員会にあり、いわゆる編集権の独立が確保されているのであります。毎月行われる編集委員会は一種の研究会のように全く楽しいひとときとなりますので、私も遠路をいとわず事情の許す限り上京出席して参りました。この編集を通じて学問的なことは勿論ですが、韓国の政治・社会・文化などに関する盛り沢山の情報が穫られるからです。

話は前後いたしますが、私たち十名は昭和五十二年十一月末に韓国歴史教育研究会（ソウル大学校師範大学）の招待をうけて「歴史教育訪韓団」を組織（団長は筆者）して訪韓し、韓国の関係各位とのシンポジウムを開催

していただいたり交歓を行なったりしましたが、この橋渡しをして下さったのは崔先生でした。お蔭で韓国の各方面から大変歓待をうけましたが、文教部の招宴の際に社会教育局長がはっきりと御自分の管轄の下に韓国研究院に補助金を出していると言明されて、当時の日本の大新聞に出た中傷記事（先述）を遺憾なことに述べられたのであります。特にこのことを明記しておきます。

崔先生はよく怪物だとかナゾの人などと、よく言われて来ました。確かに政治亡命者ですので、そのように言われたものと思われませんが、先生の人脈の大なるものは出身校の延世大同窓生であろうかと思われるが、終戦迄京城師範に在学して居られたことは最近知りました。かつての韓国で師範に入学した人は特別の秀才であります。また終戦後、韓国で独立の志士が何名か顕彰されたが、数少ないその中で三名までが先生の伯父（叔父）様であったということから、韓国では大変著名であること、また外相・首相・大統領をされた崔圭夏氏（京城高等普通学校から東京高師に進み、昭和十五年三月に、この学校の文科第三部Ⅱ 英語英文学専攻を卒業）は先生の従兄であることも著名であろうと思います。

ある会合で、「韓国のことは金山（元駐韓大使）に、日本のことは崔書勉に聞け」と、ある人が讃詞を述べたということがありましたが、崔先生は怪物にあらざるして魁物でありましょう。崔先生の日本における役割は文化大使的役割を果して来られたものと言えましょう。以前崔先生は御気嫌の悪い時にはよく秘書に灰皿を投げつけたようですが、最近はとみに丸くなつたとの由。今後も御活躍をお願いする次第であります。

滞日三十年に寄せて

ニール・ローレンス

(神父・聖アンセルモ修道院)

三十年という歳月は非常に長い時間のよう聞こえますし、また実際長い時間であることは確かであります。しかし、振り返って見ると、ほんの一瞬のように思える時がしばしばあります。貴方が日本で過ごされた三十年もきつと同じなのであります。韓国と日本との間のかけ橋として、他者を助けながら過ごされた滞日三十年を心からお祝い申し上げます。私が韓国人と初めて接したのは、アメリカ海兵隊が進駐した沖縄においてでありました。私は当時、米海軍の軍政将校として従軍していました。海兵隊が進駐するにつれ、多くの人々が捕虜としてつかまり、日本兵たちは戦争捕虜収容所に収容されました。しかし、韓国人はかなりの自治が許された別のキャンプに収容されたのであります。彼らは、自分たちは日本の支配から解放されたのだと信じていました。沖縄人は軍政当局に移管され、できるだけ早期に正常な住民生活を再開されるよう配慮されてきました。

韓国人たちはアメリカ人を解放者として考え、非常に友好的、協力的であり、また極めて快活な性格の持ち主でありました。それ以後、私は韓国人はみんな、初めて出会った人々と同じように、友好的で快活な人々である

うと期待するようになりましたが、貴方も含めて、その期待が裏切られることはなかったのであります。

貴方が私に施して下さいた数え切れない親切に対しては、常日頃感謝の念を抱いておりますが、とりわけ、貴方を通して多くの著名な学者や政治家に会えたことは私にとつて貴重な経験でありました。その中には、歴代の駐日韓国大使や坂田道太・元衆議院議長なども含まれていました。

私が在日外国人教授協議会の会長を務めていた一九六三年、貴方は私のために韓国を公式訪問する機会を準備して下さいました。文化公報部と文教部の招請でありました。訪韓を終え、長文の報告書をまとめましたが、私は、訪韓の際、韓国人のキリスト教に対する熱心な態度、日本に比べ極めて高いカトリックの比率など、多くの事実に深い感銘を受けました。当時、韓国の学生たちの知性、独立性、成熟さを褒め讃えたことも思い出します。しかし、現在の状況を目にするとき、その成熟さには多少疑問を抱かざるを得ないのですが、一九六九年以来、韓国には二度訪れる機会がありました。昨年は、英語で短歌を作る私の趣味のおかげで、『一九八六年アジア詩人ソウル大会』に特別ゲストとして招かれました。

私は、韓国の未来に対して大きな希望を持っています。貴方と研究院のためにお祈り致します。

(一九八七年五月二十六日・記)

ジキル博士と私

李 鳳 雨

学識厚く慈悲溢れる一人の医者が、人間性の善悪を薬品で分離することが出来ると信じて作った薬を服んだらハイド氏に転じたという話だが、この稿の主人公の「ジキル博士とハイド氏」
— 崔書勉 — は、一つの「時代」という薬によって生まれ転身したのではないだろうか——。

(以下、崔書勉をジキルと呼ぶ)

ジキルと私の出会いは、一九七三年初夏（六、七月頃）に始まる。

その年の四月、私の夫・李禹世はソウル新聞駐日特派員に任命された。私が夫に伴い東京生活を始めてから二、三カ月後のことであった。

李特派員の友人である申泰暎（元京郷新聞副社長）を招いての夕食の席のことであった。申先生は、食事の途中で是非連絡すべき友人がいるということで電話をお掛けになられたが、間もなくその友人なる人が押しかけて来た（その時の入り方は、全く押しかけて来たという表現がふさわしかった。）。

「崔書勉です」と、食事の終わりにかけた食卓に座ったのだが、初対面の来客を迎えた主婦の困惑は言うまでもない。急いでお料理を補うのに精一杯で、客を観察する余裕もなかったが、シャープな印象ではなかった。

子供達をソウルに残し、夫婦で東京生活を過ごしているうち、空いた時間を東京韓国研究院の図書室で司書としてお手伝いすることになった。ここでは、後に私に洗礼を授けて下さった盧基南大司教や呉基先神父とお目にかかることが出来た。

私が初めて足を運んだ韓国研究院は、飯倉の古い木造三階建ての建物であった。三階建てとは言えその実、三階部分は物置同然であった。階段はギシギシ音がするし、お手洗いはいつも故障していた。しかし、この英国風の洋館は、春になると庭園にあやめ、クローバ等の花が咲き、自然の美溢れる所であった。私達はその庭に集まり昼食を楽しむことが多かった。

当時の職員は、院長秘書である佐藤洋子さん、川里美沙子さん、小林秀子さん、里見キヨさん、山路時江さん、金秋美さん、それに私（「ミセス・李」と呼ばれていた）であった。その頃の院長と私のつきあいは、勿論、顔を合わせた時にはお辞儀をする程度のものであったが、たまたま昼食を院長が職員と一緒にする時には、きまつて私のお弁当と、院長のおうどんが交換される（強制的に！）のであった。

一九七五年夏、研究院は現在の三田に移転した。当時、蔵書は六万冊に及んでいたが、引越しセンター等に頼まず、職員達が自ら、はたきで本のホコリを払い、雑巾で拭きながら荷造りをし、三、四日かけて運搬したものである。私はこのような重労働をしたのは、後にも先にも初めてである。

三田の研究院は、文化的設備を整えた現代的建物で、金山政英元駐韓大使が所長をなさっておられる国際関係

共同研究所も統合して面貌を一新した。エレベーターがあり、大型のエアコンも設置されて、夏になっても快適に過ごせることが出来るようになり、最新式のコピーマシーン、製本機も整えられた。院長室にはモニターテレビが設置されたが、カメラレンズを図書室の職員達に向けて据付け、動静を逐一見られるようになっていた。私達は、レンズに紙を貼ったり、レンズの方向を変えたりしたので、院長が飛んで来て、「誰のいたずらか」とよく叱られたものである。私達はこんないたずらを大いにたのしんでいた。

オープニング・セレモニーは大変盛大なものであった。院長室も以前に比べるとまるで宮殿のように思えたものである。金山所長の率いる国際関係共同研究所のスタッフも移ってきて、お客様の出入りも一層多くなった。研究院は急に賑やかになり始め、院長自身も活気に満ち溢れ、多忙な日々を送るようになり、ソウルに朝発って、東京に夜帰着するということも度々あった。ソウルからは貴重な資料を買い求めてきて、所蔵資料の数は目に見えて多くなった。

韓国研究院は歴史的資料の宝庫であると私は感じている。大きな事件が無い時には、東京特派員達は研究院を訪ねて来るが多くなった。夫の李特派員は、研究院にあった「酒幕譚叢」という本を韓国に紹介することに よって、特派員活動の初期を飾ることが出来た。それ以来、李特派員は院長から、今に至るまでずっと「ミスター・李」ではなく「西山さん」と呼ばれている（その頃、毎日新聞の西山記者事件があったが、西山記者と顔が似ていたからである）。

しかし、院長は東亜日報を優待する嫌いがあった。一九七五年九月、「閔妃弑害——日本人警察官の目撃手記」全文が、院長が神田で収集した資料の中から見出し出され、職員一同興奮した。院長はこれを書庫の奥深くに收藏

し、かつコピーを一部私にとらせた。院長にそのコピーを渡したところ、院長はその日ソウルに飛ぶ用意をしており、そこに東亜日報の朴敬錫特派員が駆け付けて来て、院長室に入って行った。それを見て血が逆流する思いで、私は非常に悲しかった。直ぐさま大使館の記者室に電話をかけ李特派員を呼び出し、事の仔細を告げた。李特派員はすぐソウルの本社に緊急電話を入れ、翌朝金浦空港に着いた院長の前に、ソウル新聞の潘永煥氏（文化部長）が出迎え（実は見張っていた）「出して下さいよ」と迫ったので、結局、「閔妃弑害——日本人警察官目撃手記」は、全文一九七五年九月九日付きのソウル新聞の紙面を飾ることとなったのである。

東亜日報の朴特派員はひと頃、院長から離れていたように記憶している。

しかし、院長はどうしてあの手記がソウル新聞の知るところとなったのかを聞き質すことはなかった。私も長い間このことについて触れることはなかったが、漸く昨年、院長に告白した。しかし、その時も今も、私には罪の意識はなく、ただただ痛快であるのみであった。

一九七六年五月、特派員の任期を終え私達夫婦は帰国した。その後二、三年は彼に会ったことがなかった。いつ頃であったか、院長が胆石の手術を受けるため聖母病院に入院した時、私達は院長のお見舞いに行った。彼は私達を見るや、定められた患者用の衣類の上に「チャンパオ」という中国服を着込み、主治医・看護婦の目を盗んでこっそり病院を抜け出し、私達を明洞の食堂に連れていったのである。

その小さな食堂の「ママ」は寡婦であったが、院長はすぐ仲良しになり、これは自分の店であります——と言いながら、いつの間にか主人のママを自分の女房にしたような身振りであった。彼は今でもその店の食べ物を食べたい時は明洞（ミョンドン）の妻の家に行こうかと言う。いつかそのママは、私達を（院長、夫、私）近

所の喫茶店に連れて行ってお茶を接待してくれた。真剣な表情で私達をもてなしてくれたところを見ると、ママの気持ちも相当動いたものがあるらしく、丁重に遇していた。

院長とはこれまで数え切れぬほど食事を一緒にしてきたが、まず「あなたの心のように冷たいおひやを一杯」というのを皮切りに、その場を笑わせずにはおかないのが院長の食事の席である。その場の誰にも一挙手一投足全てにこじつけ話を巧みに作り上げ雰囲気盛り上げるのである。大統領から果ては食み屋の女性に至るまで、その人脈の幅の広さは一驚するものがある。

研究院は昇龍の如く発展していたが、全斗煥政権時代になって何らかの打撃があったのではないかと思っている。ソウルの自宅さえ売って研究院の運営費にしたりしていた。傍目にも困難な状況であった。我々夫婦はこの時代の院長を労り、大事にした。ソウルに彼が滞在中は出来るだけ時間を割いて彼を慰めることに努めたものがある。

或る時、私の末の娘が彼に挨拶をするために朝鮮ホテルを訪ねたが、たちまち二人は意気投合して、「お父さん」「娘」と呼び合うようになった。その後、娘は、院長の紹介により奈良にある帝塚山大学に留学することになり、一九八二年、娘と一緒に私は帰任後六年振りに研究院を訪ねた。その時はまるで実家（さと）に帰ったような感慨を覚えたものである。

一九八三年十一月二十一日は院長の引導により「モニカ」という女性が誕生した日である。この日私は、呉基先神父様の助けを借りて、病床に伏していらっしやった盧大司教様により洗礼を授けられた。代母様は院長の紹介で韓戊淑先生にお願いして、院長と彼の二人の息子が儀式に参席して洗礼式を行って頂いたのである。

それ以来、実家である研究院に毎年出入りするようになり、長男の鍾元も来日して東大博士課程に現在留学中である。鍾元がB型ビールス肝炎を患った時もやはり院長のお世話になった。優秀な病院を紹介してもらえたおかげで、そこでの入院加療により息子は健康を取り戻すことが出来た。「結草報恩」——この気持ちで私は研究院の仕事に励んできた。また、それは私の里に注ぐ愛着心そのものである。これが私と研究院の関係ということになるうか。

研究院の図書整理は、一般の図書館のそれではなく、崔書勉式分類法に依っている。「夜の行事」（宴会）が無い限り、その独特の分類法での図書整理は終わることがない。夜十時を過ぎることはないものであり、十二時を過ぎ夜明け前になったことも一度や二度ではなく、私は院長より先に帰ったことはない。研究院の中だけではない。八十三年春、古地図カードを作成している頃のことである。ゴールデン・ウィークの時であったが、院長の弟子である孫昌熹博士（法学博士——労働法）が国分寺に住んでいらつしやって、院長と私と娘の暁京で訪ねて行った。タイプライターや文房具用品等々を自動車に積み込んで孫先生のお宅に運び入れて、私達三人と先生御夫妻の五人で仕事をしたのだが、結局仕事を終えたのは明け方の五時であった。

院長は、職場でスタッフが自分より先に帰ったりすると頗るご機嫌が悪い。彼の間近にいるうちに、以前の特派員時代に知らなかった面——裏面も知るようになった。美しい月の裏側があばたであるように、ジギル博士の裏側のハイド氏の顔が見えて来た。それを列挙するには紙面が足りない。箇条書きにすると——

- ① 家庭的年齢と社会的年齢に差がありすぎる。
- ② 優越感が極度に強い。

③ 対人関係が極めて片寄っている。

④ 人を過度に褒めすぎる。

⑤ 感情の起伏が激しい（或る職員は「爆弾を抱えているようだ」と表現した）

⑥ 自分の行為は全て正しく、その能弁によって巧みに自己を正当化する。

院長のニックネームはたくさんあるが、それらが彼をよく紹介していると思う――「怪物」「凶物」「たぬき」「クレムリン」「仕事の鬼」「鬼」「大院君」「在日韓国人會長」等々である。

先に触れたように、苦境に陥った研究院は一時移転せざるをえないという決断をしなければならぬ時もあった。大阪の方が赤坂にあるこじんまりとした四階建てのビルと、別のビルのワン・フロアーを移転先に提供して下さるといふことになり、院長も職員会議を召集して、このことを発表した。それを聞いて私は思わず院長に叫んだ。

「それはいけません。小さく貰うのは物乞いであり、大きく貰うと寄付になる。小さい家を頂くより、大きい家を頂きなさい。この三田の建物を買って頂けるようお願いするのが良いです。小さい建物に移ると、いかにも没落したという印象を与えるだけです。」

勿論、蔵書の収容能力の不足ということもあるし、私は反対の気持ちを強く主張した。しかし院長は、「貰えるだけでも有り難いのに、君のような要求を言うことが出来ようか」と言下にはねつけた。

これは八十五年初め頃のことであり、その後どうなったのか何も知ることがないままに私は帰国してしまっただけだが、同年末頃、安永佳世さんから国際電話がかかってきた。「ミセス・李のおっしゃった通りになりました。」

この三田のビル買って頂けました」——電話から飛び込んできた彼女の明るいついで、研究院が難関を克服したことを知り、私は何ともいえず嬉しかったことをありありと今も記憶している。

以上、私を日本にいる人と同じく待遇して下さい、また貴重な紙面を提供して下さいことに対して、「ジキル博士」に限りない感謝を捧げ、「ハイド氏」には批判を申し上げながら、最後に書経 商書中 臣 仲虺が王に話した文を捧げたいと思います。

徳日新万邦惟懐

志自満九族及離

徳日に新たなれば、すべての国が従い、志自ら満つれば 九族 離れゆく——ということの意味する言葉を献じ、大きく徳を積み、世に正しきを建てられんことを願います。

崔書勉 略歴

一九二六・四・四、東京韓国研究院院長。韓国江原道原州生れ。延世大学政治外交学科卒。

安重根に関する資料収集と研究で知られ、日韓関係史に関する蔵書十八万冊は世界一。日韓の文化交流を推進する歴史学者。

総督府時代は山奥に潜り反日独立運動をしていたので昭和二十年八月十五日の解放（終戦）を知ったのは同年九月になってから。カトリック教総務院事務局長を経て三十二年五月二十七日に来日、亜細亜大の客員教授（韓国史）となり四十四年四月四日の誕生日に研究院（東京都港区三田一一五一三 三田NKビル）を設立した。月刊学術誌「韓」を発行、「アジアの将来を考える九カ国共同委員会」事務総長ともなり『シンポジウム日本にとって韓国とはなにか』を出版し、日本人が独立国としての韓国を見直すべきだ、と日本の政治家、知識階級、マスコミ関係者に訴えた。こうした日韓親善の文化交流に大きく貢献したことから朴大統領時代は海外文化公報費が提供され、民間の駐日大使との声も。

四十八年八月八日、金大中誘拐連行事件が起きて日本で反韓世論が高まったので鎮静させるため李秉禧^{りへいき}第一無任所長官と協力して金鐘泌^{きんしょうひつ}首相が来日する裏工作をやった。韓国人として高いプライドを持って伊藤博文を暗殺した安重根の心を「わが心」として日本人に語りかけている。四十九年に東京・神田の古本屋で安重根が獄中で

書いた手記（日本文）を発掘したことから有名になり日本国内で発見される日韓関係の貴重な古文書はかならず崔院長に鑑定を求めて寄贈される。総督府時代の文献や安重根関係の資料を同研究院ほど多く所蔵している図書館は世界にない。彼はカトリックだが愛酒家でスピーチが上手で論文も書きまくり、礼儀正しく、人に誠意をもって接するので日本人にも広くて深い交友層がある。ソウルで開かれた安義士生誕百年祝典（五十四九月二日）では「日本における安義士の研究」という記念講演を行い韓国人を感動させた。同研究院には「安重根研究室」が設けられて資料が豊富なので内外の研究者は閲覧できる。

（記・鈴木卓郎）

——『現代日本人物事典』（旺文社 一九八六）より抜粋——

崔書勉 寄稿目録

当刊行委員会は、崔書勉院長の論文目録を掲載することを予定していた。

院長の滞日三〇年に残した論文の量は、列挙するまでもなく、衆人のそれをはるかに越えるものがある。その間の業績の目録を掲載すべく彼に何えは、

「自分は、研究院長の忙しい合間に書いたことであるので、一つの論文も、自分としては満足すべきものはない」と、強く固辞した。

我々の再三の要望に対しても、

「院長を卒業して始めて卒業論文を書き、また、後世に残るべきものを書き認めます。残りの人生に同じような企画があれば、その時に譲りたい」——と、彼らしい言い方である。

彼は、言い出したことは引っ込めることはあまりない。我々は彼のこのような強い要望に目録掲載の望みを曲げることとした。

従って、寄稿文のみ左記に掲載することにした。

発表年月日

題目

発表紙誌

- 一九六二年 聖女おたあジュリアの殉教伝 「韓来文化の末裔」
一九六二年 韓国教会の成立 「カトリック新聞」(一七四七号)
一九六三年 六月 儒教精神の生きている国(対談) 「若き集い」(一〇号)
一九七〇年 五月 安重根自伝 「外交時報」(一〇七四号)
一九七〇年 五月一五日 金大中候補善戦にみる国民的意思 「週刊ダイヤモンド」
一九七〇年 七月 五日 自主防衛の上に同盟を 「国際勝共新聞」
一九七一年 二月一〇日 Japan must promote cultural exchange with 「シヤパン・タイムズ」
Korea in addition to economic aid
一九七一年 九月 日本外交に原理はないか—木内信胤・李瑄根と鼎談— 「心情公論」(一二号)
一九七二年 二月 卷頭言 「韓」誌(通卷二号)
一九七二年 三月 金玉均研究の今日的意義 「韓」誌(通卷三号)
一九七二年 四月 バングラデッシュを訪れて 「外交時報」(一〇九四号)
一九七二年 六月 統一のための民族会議を定義する金九の書簡の紹介に題して「韓」誌(通卷六号)
一九七二年 七月一五日 韓日関係資料・古書発掘 「朝鮮日報」
一九七二年 一〇月九日 自由は貧困、生命に優先する 「世界と日本」(二七号)

- 一九七二年一月 韓国と日本研究
- 一九七三年一月一日 統一へ―韓半島の新情勢―
- 一九七三年二月 アジアの将来―韓国を中心として―
- 一九七三年三月 独立記念館の建設を
- 一九七三年 韓国から見た日本
- 一九七三年三月一日 朝鮮半島統一の現在と未来
- 一九七三年五月一九日 韓半島における南北統一問題
- 一九七三年五月 密接不離の日本と韓国
- 一九七三年五月 七年戦役の被虜おたあジュリアについて
- 一九七三年六月 反日感情
- 一九七三年六月二三日 南北統一問題と国連の課題
- 一九七三年六月 金九先生の自叙伝―白凡逸志の自筆原本に寄せて―
- 一九七三年八月二三日 戦争のない統一を摸索する
- 一九七三年一〇月 金大中事件をどうみる
- 一九七四年一月七日 金玉均・安重根・金大中
- 一九七四年一月二五日 早川・太刀川両氏の判決を聞いて
- 一九七四年四月八日 韓国の対日感情について―藤島泰輔と対談―
- 「びぶろす」(二三―一一)
- 「世界と日本」(三九号)
- 「世界と日本」(四〇号)
- 「韓」誌(通卷一五号)
- 「実業の世界」
- 「アジアレポート」
- 「週刊ダイヤモンド」
- 「実業の世界」
- 「韓」誌(通卷一七号)
- 「反日感情」
- 「週刊ダイヤモンド」
- 「韓」誌(通卷一八号)
- 「世界と日本」(七一号)
- 「政界往来」
- 「週刊世界と日本」
- 「朝日新聞夕刊」
- 「月曜評論」(一六七号)

- 一九七四年 四月 韓国の現状について 「電気倶楽部だより」(一二九号)
- 一九七四年 四月 一千万家族さがし 「自由」(第一六卷第四号)
- 一九七四年 五月 ロシア帝国大蔵省「韓国誌」について 「韓」誌(通卷二八・二九合併号)
- 一九七四年 六月 七日 北鮮における日本人妻の窮状に関する 「外交時報」(一一一六号)
- 永末英一議員の質問 「浪漫」(第三卷第八号)
- 一九七四年 八月 ソウル通信―チュジャ島の少女― 「生政連ニュース」(三九号)
- 一九七四年 一〇月 一日 日韓に断交の足音が 「韓」誌(三二号)
- ―金山政英・藤島泰輔と鼎談― 「時の課題」
- 太王陵古伝将来記 「二〇世紀」(第九卷第一一号)
- 一九七四年 八月 「日本人だから」は不幸にする 「アジアレポート」(五〇号)
- 一九七四年 九月 日韓癒着を排す 「韓」誌(通卷三六号)
- 一九七四年 一二月 安重根と文世光にみる歴史のすりかえ説を衝く 「韓」誌(通卷四六号)
- 一九七四年 一二月 為堂 鄭寅晋先生の□去をきいて 「韓」誌(通卷四七号)
- 一九七五年 七月一九日 Koreanologists meet fruitfully 「韓」誌(通卷四七号)
- 一九七五年 一〇月 第二次国際韓国研究機関協議会開会の辞 「韓」誌(通卷四七号)
- 一九七五年 十一月 国際韓国研究機関協議会創立の経緯 「韓」誌(通卷四七号)
- 一九七六年 二月二〇日 日本のなかの韓国

- 一九七六年 二月二七日 江華島条約をふりかえって 「朝鮮日報」
- 一九七六年 三月二八日 安重根義士の最後 「週刊朝鮮」
- 一九七六年 二月 金玉均最後の上海メモ 「中央」
- 一九七七年 五月 人心はこれを失うべからず 「韓」誌(通卷六四号)
- 一九七七年 七月一五日 金炯旭の証言は自ら職中の悪行の暴露 「言論人」
- 一九七八年 三月 七五年ぶりに確認された壬辰義兵大捷碑 「韓」誌(通卷七四号)
- 一九七八年 三月一九日 金麟昇の活動と気概 「週刊朝鮮」
- 一九七八年 六月 日本外務省お雇い外国人金麟昇について 「韓」誌(通卷七七号)
- 一九七八年 一〇月一六日 韓ソ接近の事情 「月曜評論」(四〇三号)
- 一九七八年 四月一二日 ふたたび「義兵の精神」をさがす 「朝鮮日報」
- 一九七八年 一月一日 リアングルと独島 「東亜日報」
- 一九七九年 一月 三行半 「アジアレポート」(第一〇〇号)
- 一九七九年 二月二八日 韓国人陸海軍学校 「ソウル新聞」
- 一九七九年 三月二七日 是母是子―安重根とその母― 「ソウル新聞」
- 一九七九年 七月三一日 安重根義士の獄中自伝 「統一日報」
- 一九七九年 八月三一日 安重根義士、今日の視角 「ソウル新聞」
- 一九七九年 八月 失楽園 「月刊カレント」

- 一九七九年 九月 一日 歴史認識にみる平和主義 「朝鮮日報」
- 一九七九年 九月 七日 高句麗と花文瓦の里帰り 「朝鮮日報」
- 一九七九年 一〇月 ソクラテスと総選挙 「アジアレポート」(第一〇九号)
- 一九七九年 十一月 中共・北朝鮮 「アジアレポート」(第一一〇号)
- 一九七九年 一二月 大統領狙撃事件一〇・二六事件を四つの問題から見る 「アジアレポート」(第一一一号)
- 一九八〇年 一月 民族中興の祖 朴正熙を語る 「正論」
- 一九八〇年 一月 一日 朴大統領射殺事件とその後の韓国情勢 「ひろば」
- 一九八〇年 三月 三日 現時点の韓国をどう見るか―わずか四ヶ月で新体制の安定へ 「世界と日本」
- 一九八〇年 五月 韓国人から見た日韓関係の歴史と展望 (インタビュー) 「新勢力」
- 一九八〇年 七月 七日 韓国に重要な「政治」の安定
―光州暴動事件・「成果」を否定した「ひずみ派」の暴走― 「世界と日本」
- 一九八一年 一月 一日 白頭山は生きている 「ソウル新聞」
- 一九八一年 四月 二日 日本で見たソ連現況 「東亜日報」
- 一九八一年 四月 七日 日本に韓国を植える 「ソウル新聞」
- 一九八二年 三月 一三日 義士 安重根 「中央日報」
- 一九八二年 八月 五日 経協と教科書問題 (インタビュー) 「中央日

報

- 一九八二年 八月一九日 (座談) 安重根・歴史・教科書 「東亜日報」
- 一九八二年 一月 異説 伊藤博文の死 「カレント」
- 一九八二年 二月二五日 忠臣蔵・武林唯七は韓国人だ 「東京新聞」
- 一九八三年 二月二八日 日本の独島領有権は主張は史料で阻止する (インタビュー) 「中央日報」
- 一九八三年 三月二五日 韓日関係の新史観 (インタビュー) 「東亜日報」
- 一九八三年 八月 ふるさとを思う崔書勉 (インタビュー) 「女苑」
- 一九八三年 九月 仁村と吞虚 「新東亜」
- 一九八三年 九月二五日 聞く耳を持つ者は幸せなり 「アジアレポート」 (第一五二号)
- 一九八三年 一〇月 江戸の仇は江戸でとれー大韓航空機墜事件によせてー 「カレント」
- 一九八三年 一〇月二五日 小さきソ連・大きな韓国 「アジアレポート」 (第一五三号)
- 一九八三年 一月 金玉均と宇品開港記念碑 「アジアレポート」 (第一五四号)
- 一九八三年 一月 (座談) 韓国人の立場からKAL機墜事件を考える 「自由」
- 一九八四年 一月二五日 ヨーロッパ政治屈折史から見た一二月一八日選挙 「アジアレポート」 (第一五五号)
- 一九八四年 二月二五日 フランスで感じる円の価値 「アジアレポート」 (第一五六号)
- 一九八四年 一〇月 日韓関係の明日に向かって 「カレント」

一九八七年八月 韓国はいま（矢野弾が聞く）

「カレント」

一九八七年十二月一日 韓国民主化の行方

「日韓協力」

一九八八年一月一日 韓国の心・日本の心

「世界経済」

一九八八年二月一日 韓国大統領選後の情勢と展望

「日韓協力」

第三部 一 東京・韓国研究院略史 一

東京・韓国研究院 略史

(一)、創設に至るまでの経緯（前史）

現院長崔書勉氏は、その来日後約一〇年間に、日本の大学で韓国学に関する講義を担当していたが、この間、次のように分けられる三群の人たちの訪問を受けた。

- 1、韓国研究に着手したいがもつとも賢明なすすめ方はどうあるべきかについてたずねる人たち。
- 2、戦前韓国研究に関係していたが、戦後の両国関係の正常化がまだ果されていないため、韓国の事情がよく分らぬ、崔氏の韓国研究と当時の韓国における韓国研究との対比下での諸事情について教示を得たいという人たち。
- 3、日本研究のため来日した外国人で、日本研究深化のためには韓国研究を欠かし得ないことを知ったが、それはいかにすれば可能かについて指導を受けたいという人たち。

これら三群の来訪者は、大学での受講学生数に比しはるかに多数であり、当初はそれぞれの各人に対応的に対処していたが、その数の著増につれて到底個人としての対応では処理し得ないようになって来た。

そこで、韓国政府はこれらの人たちに對して便宜を供与し得る何らかの施設を持つべきではないか、と考えるようになった。ちょうどその頃、これと相呼応するかのようになり、韓国政府は、韓国公報館を東京に設けたので、その方にこれらの人びとを紹介し、それによって善処達成可能とみていたのである。ところが、同館設置後前記の崔氏訪問者はかえって増加した。その理由は、一般的事情の理解のためには公報館でいちおう所期の希望が満たされるけれども、一步踏みこんだ研究をしようとなると未だしい点があり、そのような人たちを逆に公報館が崔氏の方へ紹介して来るようになったからである。

そこで、当時の日本赤十字総裁川西実三氏、文相坂田道太氏、東京電機社長山岡憲一氏、世界經濟調査会理事長木内信胤氏らの諸氏に、右の実情をお話し、むしろ日本政府自身が何らかのかたちで具体的措置を講ずべきではないかとただしたが、当時における両国間の現実的關係のもとでは、その機未だ熟せずとのことであつた。そこで、それでは有志の協力によつて、そのための具体的施設を創設しようということになった。

これが東京・韓国研究院の出発であつた。

そして、一九六九年四月一日付の「定款」を定め、同年四月四日、実際に発足することとしたのである。

(二)、創設当初の三大目標

韓国研究院発足当初、その使命、任務とするところを奈辺におくべきかについて十分検討したが、その結果、

次の三つの目標を設定した。

1、韓日両国は、他の諸国との間の関係とは同じようには考えられないほどの深い歴史的關係を持っているが、その關係を科学的に見究める姿勢をとるべきこと。

2、そのために、

(イ) 図書文献資料の収集を当初三年間計画で行うこと。しかも、漫然たる収集ではなく、従来のゆがみを是正するための発掘をもめざして、内容の吟味に重きを置いた。こうして、幸いにもまず五万冊の資料を収集することができた。その中には、没後六〇年を経てはじめて発見された安重根の獄中執筆の『自叙伝』など画期的なものもある。

(ロ) 戦前の韓国研究の成果を吸収しながらも、それを今後どのように発展させるかが重要であるので、その後進展の基礎を確立するうえでの人材を獲得すること。その結果当初の研究・編集委員会の委員・幹事の諸氏を得た。

3、当時、大韓民国李承晩大統領の政策に起因してか、解放後韓国の学界の非常な発展が実際にあったにもかかわらず、それが日本にはほとんど伝わらず、また韓国学界の発展に照応するような日本内の研究の発表の場も乏しかった。それで、そのための出版活動を研究院は持つべきであるということになった。これが

『韓』誌出発の動機となった。

以上が当初から考えられた三大目標であった。

これはその後順調に進展した。

(三)、研究院の発展の足跡

東京・韓国研究院定款の総則は次のように定められており、前記の三大目標はこれに沿ってその具現が努力されて行つた。

第一章 総則

第一条 (名称) 本研究院は東京 韓国研究院 (THE INSTITUTE OF KOREAN STUDIES, TOKYO) と称する。
(以下単に研究院という)

第二条 (事務所) 研究院は事務所を東京都に置く。なお必要に応じて、現地に分院、又は連絡事務所を設ける。

第三条 (目的) 研究院は韓国に関する政治・経済・社会・文化及び歴史の基礎的且つ総合的な調査研究を行うとともに、その成果を保管・普及し、もって韓国についての適正な理解と国際協力及び文化交流の促進に、寄与することを目的とする。

第四条 (事業) 研究院は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1、 に関する諸般の調査研究
- 2、 韓国に関する内外の書籍・資料の収集・整理及び公開
- 3、 内外の専門家による研究委員会の開催とその成果の普及

- 4、韓国問題に関する講座・講演会・座談会等の開催
- 5、韓国及び韓国問題に関する大学研究機関・団体並びに専門家等との交流及び研究家の研究活動に対する協力助成
- 6、韓国問題に関する書籍・雑誌等の出版及び紹介
- 7、その他理事会において必要と認めた事項

(以下略)

右の第四条第一号の「諸般の調査研究」は、前記の第二目標(イ)の図書文献資料収集の具体的成果と連動している。

研究院の資料収集は順調に進み、今日約二〇万冊に達する蔵書を擁する一大図書館を現出するに至っているが、それは単に量的な面でのことだけでなく、韓民族の発展を歴史的かつ精神的に把握できるような第一次的資料が数多く収集されているところに特質がある。その中でも、とくに、金玉均関係、安重根関係、それから日本側が秘匿に努めて来た閔妃事件関係、その他間島関係を中心とする国境問題、独島(竹島)関係、旧韓末日韓関係(義兵を含む)資料などの収集は他にその例をみないものである。また、朝鮮王朝実録、備辺司騰録、日省録、承政院日記など朝鮮朝時代に関する根本資料(影印版)なども完備されている。

これらの諸資料は、韓国研究院直接関係者のほか、研究院への協力者、研究院からの依頼者ならびに助成者たる諸研究者の研究活動の中から収集、集積され来つたもので、単なるコレクション・マニア的収集の結果ではないことを強調しておきたい。

研究者の研究活動の助成（定款第四条第一号後段）および交流（同上前段）については、韓国研究分野での人材育成的助成ならびに研究委員会の運営による研究会活動および両国第一線学者によるシンポジウムなどがある。前者については、所蔵資料および研究会活動などを媒介とする研究活動を通じて、韓国研究による学位取得、諸大学の関係部門専任者その他学術機関専任者の育成が行われ、それぞれにその所を得た研究者も少ない。

また、交流は、前出定款第四条の第二、三、四、五各号に関係する活動と有機的にかかわっているが、その主なるものの第一は、故阿部吉雄博士の李退溪研究を軸とする諸交流活動であって、韓国の精神的支柱の一つとされる李退溪思想の日本における影響を深く研究された阿部博士、およびその影響下にある数多くの日本人研究者たちによって、阿部博士収集の『日本刻版李退溪全集』上・下二巻の刊行（一九七五年一月・退溪学研究院・ソウル）にひき続き、一九七六年六月『韓』誌「儒学をめぐる東洋思想史」（阿部博士古稀記念）特集（全三二五頁）の刊行、さらに翌一九七七年五月、東京において「近世アジアにおける朱子学与李退溪」国際学術会議開催を機として、阿部博士収集諸本の現物展示会を韓国研究院で開催、各国学者に韓日間の思想的歴史的関係の深さを感銘させた。

その第二は、二回の大規模で水準高いシンポジウムの開催である。

その第一回は、一九七三年九月五・六日、東京プリンス・ホテルにおいて開かれた「日本にとって韓国とはなにか」を主題とするセミナーであり、第二回は一九七四年三月一〜三日、韓国ソウル特別市の世宗ホテルにおいて開かれた「韓国にとって日本とはなにか」を主題とするシンポジウムである。前者は衛藤藩吉東大教授ら七名の国際政治学関係者が参加し、後者では高麗大金洙総長はじめ、韓国学界・文化界各分野の代表的学者二三名

の参加を得た。その成果はすでに国書刊行会より公刊（一九七七・二・一〇） されている。

そのほか日韓文化シンポジウムが、一九七一年一月五日、東京の経団連ビルで、第二回が一九七二年八月一三、四日、ソウル特別市のウォーカー・ヒルで開催された。

交流関係ではこのほか、韓国・日本それぞれの側の諸學術団体からの要請により、その都度当該催しにもっとも適任と目される両国の第一線研究者を相互に派遣もしくは斡旋して、講演会・研究会その他に参加して頂いている。

定款第四条第六号の出版活動の主なるものは、月刊『韓』誌の発行である。当初同誌は三号雑誌で終るであろうとの世評もあり、また季刊誌の方がよいのではないかとの意見もあったが、関係委員の継続的努力によって、本号で通巻一〇八号に達した。

次に、研究会は、日本国内の専門研究者、来日の各国研究者を招いて開催するほぼ月例的研究会と、一九七一年三月第一回として発足した「金玉均研究会」とがある。とくに、第一回金玉均研究会においては、会場である慶応大学国際センターで金玉均に関する展示会を催し、一二〇余点の関係文献を採録した「金玉均関係文献目録」を参加者に配布した。以来毎年、金玉均の命日である三月二十八日を前後して同研究会を開催している。

右二つの研究会の題目・講師・日時などはその都度『韓』誌の「研究院だより」その他に紹介しておいたのだからここには省略する。

『韓』誌以外の出版としては、目下数点の企画が進められているが、既発行のものとしては渡部学編訳『韓国の中学校「国史」教科書』がある。これは韓国の現行国定国史教科書を全訳したものである（一九七七・七・二

○、図書文献センター、東京）。

最後に、『韓』誌の月刊発行は大きな財政的負担であり、日本国内における発行部数はあまり多くはないと言えるけれども、それをはるかに上廻る部数が、世界各方面の諸外国の研究機関・研究者に、交換もしくは会員購読として送られており、交流は世界的規模に達していると言っても過言ではない。

本研究院の研究活動としての定例研究会である前記金玉均・定例二つの研究会の期日・演題・講師名を、一覧表にして次に掲げておく。

▼金玉均研究会

第三回

一九七二・三・二八

金玉均を偲ぶ夕

講演「金玉均と開化党」

西江大学校教授 李 光 麟

他に追悼部会、討論座談会を設けた。

第二回

一九七一・三・二八

金玉均追悼会墓参

金玉均研究文献の展示および解説

第四回

一九七三・三・二八

慶応大学国際センターにて

講演「福沢諭吉と金玉均の交際」

韓国研究院にて

慶応通信（株）社長 富田正文

第八回

他にパネル・ディスカッションを行った。

一九七七・三・二四

慶応大学西会議室にて

講演「金玉均の生涯」

第五回

作家 湯浅克衛

一九七四・三・二八

韓国研究院にて

講演「甲申政変について」

第九回

山辺健太郎韓国研究院にて

一九七八・四・二八

第六回

講演「壬午・甲申の変前後の国際情勢について」

一九七五・三・二〇

外務省 岡崎久彦

講演「金玉均研究遺跡取材談」

韓国研究院にて

中央日報社駐日特派員 朴 東 淳

韓国研究院にて

▼定例研究会

第七回

一九七六・三・二七

一九七二年九月二十八日於・研究院会議室

講演「金玉均の日本亡命をめぐる」

演題「フランスにおける韓国研究」

早稲田大学教授大畑篤四郎

講師 李 玉

一九七三年十二月 於・研究院会議室

演題 「備蒙彙編」 講師 渡部 学

一九七四年一月十一日 於・研究院会議室

演題 「ソ連のアジア集団安全構想と中ソ対立」

講師 寺谷 弘壬

一九七四年二月八日 於・研究院会議室

演題 「韓国の仏教美術について」

講師 中吉 功

一九七四年四月二十六日 於・研究院会議室

演題 「高麗社会から李朝社会へ」

講師 旗田 巍

一九七五年五月十八日 於・研究院会議室

演題 「アメリカ合衆国における韓国研究の動向」

講師 A・C・ナム

K・Pヤン

一九七五年八月一日 於・研究院会議室

演題 「三国遺事考証」 講師 村上 四男

一九七五年十月七日 於・研究院会議室

記録映画試写会 「琵琶湖を訪ねて―百済文化

と古代日本」

一九七六年六月二十八日於・研究院会議室

演題 「日本史教科書にみられる韓国史関係

記述について」 講師 李 元 淳

一九七六年十一月一日 於・研究院会議室

演題 「好太王碑について―古典解釈の―管見―」

講師 金 鍾 武

一九七六年十二月二日 於・研究院会議室

演題 「李氏朝鮮社会の階層構造の再検討」

講師 宋 俊 浩

一九七七年二月二十五日 於・研究院会議室

演題 「韓国学における日韓交流の諸問題」

講師 白 鉄

一九七七年五月二十五日於・研究院会議室

演題 「パンソリについて」 講師 姜 漢 永

一九七七年六月一日 於・研究院会議室

演題一、「李退溪先生と阿部吉雄先生」

演題「韓国儒学の特性」 講師 裴 宗 鎬

講師 友枝龍太郎

一九七七年九月十六日 於・研究院会議室

演題二、「日本儒学における李退溪」

演題「ヨーロッパにおける韓国学」

講師 麓 保 孝

講師 W・E・スキレンド

演題三、「阿部吉雄編日本刻版李退溪全集について」

一九七七年九月二十日 於・研究院会議室

講師 山崎 道夫

演題「朝鮮世宗時代言語政策の歴史的性格」

一九七八年十月十一日 於・研究院会議室

講師 俞 昌 均

演題「韓国口承文芸」 講師 張 徳 順

一九七七年十月二十八日 於・研究院会議室

一九七九年二月二十三日 於・研究院会議室

演題「鶴峰金誠一の朝鮮国沿革考異」及び「風俗考異」―「大明一統志朝鮮関係記事に

演題「アジア文化と日韓学术交流について」

関する批判に就いて」―

講師 酒井 忠夫

講師 李 佑 成

一九七九年二月二十三日 於・研究院会議室

講師 李 佑 成

演題「韓国における日本史研究の現況について」

一九七八年三月十日 於・研究院会議室

講師 李 元 淳

演題「私の韓国観」 講師 豊田 有恒

一九七九年三月十五日 於・研究院会議室

一九七八年六月二十日 於・研究院会議室

演題「韓国文化交流の母型的関係」

阿部吉雄博士追悼研究会

講師 鄭 明 淑

一九七九年三月十五日 於・研究院会議室

演題 「韓国女性高等教育の実像」

講師 申 銀 淑

一九八一年二月九日 於・研究院会議室

演題 「百濟周留城考」

一九八一年二月十三日 於・研究院会議室

一九七九年九月二十八日 於・研究院会議室

演題 「安重根の今日的意義」

講師 鈴木 卓郎

一九八一年六月五日 於・研究院会議室

演題 「韓国研究のための日本外交史料」

一九七九年十月二十六日 於・研究院会議室

演題 「義兵將・崔益鉉の生涯」

講師 旗田 巍

一九八一年七月三日 於・研究院会議室

演題 「明治期の錦絵にみる日韓問題」

一九七九年十二月十日 於・研究院会議室

演題 「韓・日自然主義作家・廉尚燮と島崎藤村」

講師 韓 戊 淑

一九八一年九月十一日 於・研究院会議室

演題 「新羅仏教の特質について」

一九八〇年三月二十六日 於・研究院会議室

演題 「義士安重根伝考証」

講師 西川 孝雄

一九八一年十二月四日 於・研究院会議室

演題 「日本儒学の特性について」

一九八〇年六月七日

演題 「半伽像の諸問題」

講師 田村 圓澄

講師 尾藤 正英

一九八二年一月八日 於・研究院会議室

演題 「肌で感じた韓国社会」

講師 鈴木 満男

一九八六年七月十六日 於・研究院会議室

演題 「甲申政変に関する一考察」

一九八二年二月十二日 於・研究院会議室

演題 「丹陽赤城碑について」

講師 鄭 永鎬

一九八六年十月二十四日 於・研究院会議室

演題 「日本文化と韓国」 講師 西 一祥

一九八二年三月一日 於・研究院会議室

演題 「縮みの文化論について」

講師 李 御寧

一九八六年十二月十九日 於・研究院会議室

演題 「解放直後韓国の教育改革」

講師 阿部 洋

一九八二年三月二十六日 於・研究院会議室

演題 「韓国の一カ年留学をふりかえって」

講師 木下 礼仁

一九八七年九月二十六日 於・研究院会議室

演題 「朝鮮通信使の訪日と文化交流

——筆談唱和を中心に——」

講師 李 元植

一九八二年五月十九日 於・研究院会議室

演題 「倭寇をめぐる韓中関係について」

講師 有井 智徳

一九八二年四月六日 於・研究院会議室

演題 「韓国の国史教科書について」

東京・韓国研究院 定 款

第一章 総 則

第一条 名 称

本研究院は**東京・韓国研究院** (THE INSTITUTE OF KOREAN STUDIES, TOKYO) と称する。
(以下単に研究院という)

第二条 事務所

研究院は事務所を東京都に置く。なお必要に応じて、現地に分院、又は連絡事務所を設ける。

第三条 目 的

研究院は韓国に関する政治・経済・社会・文化及び歴史の基礎的且つ総合的な調査研究を行うとともに、その成果を保管・普及し、もって韓国についての適正な理解と国際協力及び文化交流の促進に、寄与することを目的とする。

第四条 事 業

研究院は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 一、韓国に関する諸般の調査研究
- 二、韓国に関する内外の書籍・資料の収集・整理及び公開
- 三、内外の専門家による研究委員会の開催とその成果の普及
- 四、韓国問題に関する講座・講演会・座談会等の開催
- 五、韓国及び韓国問題に関する大学研究機関・団体並びに専門家等との交流及び研究家の研究活動に対する協力
助成
- 六、韓国問題に関する書籍・雑誌等の出版及び紹介
- 七、その他理事会において必要と認めた事項

第二章 役員及び事務局

第五条 研究院に次の役員を置く。

理事 若干名（理事長一名、院長一名、専務理事若干名、常任理事若干名を含む）

監事 一名以上

理事及び監事は理事会でこれを選任し、理事長・院長・専務理事・常任理事は理事の互選により理事長が委嘱する。

理事及び監事は相互に兼ねることが出来ない。

第六条 理事長は

研究院を代表し、その業務を総理し、理事会の議長となる。

院長は

業務を統轄し、理事長が事故あるときはその職務を代行する。

専務理事は

院長を補佐して業務の執行を統轄し、一般事務を処理する。院長が事故あるときはその職務を代行する。

常任理事は

院長・専務理事が共に事故あるとき、理事会が予め定めた順序によってその職務を代行する。

理事は

理事会を構成し、院務を審議・決定する。

監事は

研究院の会計を監査する。

第七条 理事の任期は四年とし、監事は一年とする。ただし重任を妨げない。

補欠によって就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。

役員は任期満了の場合においても後任者が就任するまでその職務を行わなければならない。

第八条 理事及び監事は無給とする。ただし常務にたずさわるものは、この限りでない。

第九条 役員は任期中であっても研究院の名誉を毀損したとき、研究院の目的に反する行為があったとき、その他やむを得ない事情があるときは、理事会の議決により解任されることがある。

第一〇条 研究院に顧問と評議員及び諮問委員若干名を置く。

顧問及び諮問委員・評議員は理事会において推薦し、理事長がこれを委嘱する。

顧問は

理事長の諮問に応じ、又は研究院の運営に意見を具申することができる。

評議員は

理事長が必要と認めた事項を審議・決定する。

諮問委員は

院長の諮問に応じる。

理事及び監事は

評議員を兼ねることが出来る。

第一一条 研究院の事務を処理するため事務局を置き、職員若干名を置く。職員は有給とする。

第三章 研究委員・専門委員・研究員

第一二条 理事長は適当な学識経験者に対して研究委員を委嘱することができる。

研究委員はそれぞれの問題について研究委員会を構成する。

研究委員及び研究委員会に関する事項は理事会の議決を経て理事長が別に定める。

第十三条 韓国問題に関して深い関心を有し、専門的に調査・研究に携わる者を登録し、本研究院に名簿を備え、これに登録されたものを専門研究員と称する。

理事長は必要に応じて専門研究員に対して、特定の課題に対して調査研究を委託することが出来る。

専門研究員に関する事項は理事会の議決を経て理事長が別に定める。

第十四条 研究院に研究員若干名を置く、研究員は理事長がこれを任免し、専ら研究に従事する。

研究員に関する事項は理事会の議決を経て理事長が別に定める。

第四章 会 員

第十五条 研究院に会員を置き、会員の種類及び要件を次の通りとする。

一 会 員

会員の種類及び要件

一、**通常会員** 学術・文化、その他社会活動の各分野において、すでに業績をのこした個人で、研究院の事業・目的に賛成し、これに協力・参加する意志のあるもので、会員二名以上の推薦による理事会又はその任命する委員会の承認を経て、所定の入会金及び会費を納めたもの。

- 二、**賛助会員**（法人）は研究院の事業・目的に賛同し、研究院の要望に応じ、特別の財政的支援を受ける法人。
- 三、**優待会員** 理事会、又はこれが任命した委員会の推薦に応じた学識経験者。
- 四、**名誉会員** 研究院に特別な貢献のあったもので、理事会の推薦によるもの。

II 会員の特典

- 一、会員は研究院の使用規定にしたがい、講堂・会議室・談話室等を無料又は実費によって利用することができる。図書室の諸資料（図書・文献・フィルム）の閲覧ができる。
- 二、会員は本研究院が行う講演会・研究会・講義・座談会などの集会の通知を受け、出席することができる。
- 三、会員は特別に定めたものの外、研究院が発行する会報その他の無料配付を受けることができる。
- 四、会員は入会希望者を推薦し、又研究院の諸施設の利用希望者を紹介することができる。

III 会費

- 一、入会費は 通常会員 一八、〇〇〇円とする。
賛助会員・優待会員・名誉会員は入会金を必要としない。
- 二、会費は 通常会員年額一二、〇〇〇円とし、終身通常会員を希望するものは一〇〇、〇〇〇円を一括して支払う。維持会員は一口一〇〇、〇〇〇円を一括して支払う。優待会員・名誉会員は徴収しない。

IV 会員の退会

- 一、退会を希望する会員は、退会届を書面で本研究院に提出する。
- 二、会費を六ヵ月以上滞納した場合、退会とみなす（但し特別事情がある場合、事前に書面で諒解を得、会

員徴収を延期することができる。)

三、会員としての名誉を傷つけたと認められた場合、理事会の決議によって除名されることもある。

第五章 会 議

第一六条 理事会は理事長・院長・専務理事・常任理事及び理事をもって組織し、理事長は之を招集する。

理事会は研究院の一切の重要な事項を審議・決定する。

第一七条 理事会に出席することのできない理事は書面をもって、又は他の理事を代理と定め、表決をすることが出来る。

理事会は出席者及び書面代表決者の過半数をもって決める。可否同数の場合は議長が決する。

第一八条 顧問会は理事長の提請により理事長が招集し、研究院の重要事項を諮問する。

第一九条 評議員会は評議員をもって組織し、毎年一回或は必要に応じ理事長が招集し、理事会が必要と認めたる事項を評議する。

評議員会の議長は評議会の推薦により理事長が委嘱する。

第六章 資産及び会計

第二〇条 研究院の資産は、次の各号により構成される。

一、会費 二、入会金 三、寄付金 四、事業にともなう収入 五、資産から生ずる収入 六、その他の収入

第二一条 研究院の資産は理事長が保管し、その方法は理事会が決める。

第二二条 研究院の会計年度は毎年五月一日に始まり翌年四月三十日に終わる。

第二三条 理事長は、毎年度始に、理事会を招集して、前年度の決算を報告するとともに、当該年度の事業、予算案を提出してその承認を得なければならない。

第七章 規約の変更及び解散

第二四条 研究院の規約を変更せんとするときは、理事四分の三以上の同意を要する。

第二五条 本研究院を解散せんとするときは、理事・評議員・顧問の四分の三以上の同意を要する。

第八章 附則

第二六条 研究院の規約は一九六九年四月一日より有効とする。

第二七条 研究院の設立当時の理事及び監事を次の通りとする。

(以下略)

「国際関係共同研究所」設立趣意書

東京・韓国研究院

理事長 木内信胤
院長 崔書勉

一九六九年四月、東京に於いて日本における韓国学研究のセンター的役割を果たすべく、志ある数人の同志によつて創立された東京韓国研究院は学問的成果においても、また、日韓両国の文化交流においても大きく貢献してきた。韓国に関する資料の件数も東京最大の保有を誇るようになり、内外の研究者に寄与すると共に、その学問的成果は毎月「韓」誌を通じ報告している。また、日韓両国共同主催の「日韓文化シンポジウム」の主管、毎月の研究会には既に六ヶ国より学者を招請して意義深い交換を続けている。韓国研究院理事会は創立満三年を目前に控え、政治・経済に関する社会科学的分野の研究を人文科学的分野から分離独立することを議決し、政治経済を含む社会科学の研究を一層効果的にするため分院として国際関係共同研究所を設立することになった。

最近の国際情勢、特にアジアに於ける国際関係は一つの大きな転機を迎えたかの観があり激動を続けているがこの所謂「緊張緩和」の潮流の中で、分裂国家と言う不幸な重荷を担わされている韓国の将来は、歴史的に、地

理的に、更には文化的に強い絆で結ばれている我が日本にとっては極めて重大な関心事であることは申すまでも無い。韓国は今や韓民族統一の国民的悲願という困難な事業を達成するため北鮮との間に先ず、南北赤十字の接触を開始し「家族捜し運動」という人道的問題を解決することにより、慎重に統一問題解決の足掛かりをつかむべく努力している次第であるが、社会体制を異にするこの南北関係の推移はそれ自身、相互に幾多の困難な問題の解決を前提としているのみならず、米・中・ソ・日・その他周辺諸国の国際関係に、大きく左右される現状を否定し得ない。このような韓国を中心とする国際関係の現実と将来の発展について冷静な判断と分析を行い、そのあるべき姿を鮮明にして行く努力は日韓両国関係のみならず、アジアの平和のため極めて重要であると考える。

東京韓国研究院国際関係共同研究所は、学界・言論界にある知識人の積極的協力を得て、それぞれ専門分野に於ける権威者に依頼しこのような国際関係の基礎的且つ総合的な調査研究を行うと共に、その成果を保管・普及し、国際関係についての適正な理解と国際協力及び文化交流促進に寄与することを目的とするものである。

この目的のために本研究所は、

- 一、国際関係に関する諸般の調査研究。
- 二、国際関係に関する内外の書籍、資料の蒐集・整理及び公開。
- 三、内外の専門家による研究委員会の開催とその成果の普及。
- 四、国際関係に関する講座、講演会、座談会等の開催。
- 五、国際関係に関する大学、研究機関、団体ならびに専門家との交流及び研究活動に対する協力助成。
- 六、国際関係に関する書籍、雑誌等の出版及び紹介。

等の事業を行うものである。

なお、アジアの将来を考える九ヶ国委員会の一九七二年度特別集会でこのような組織が必要であるとの決議が行われ、その業務をこの研究所に委託された。

なお、初代の所長には前駐韓大使・金山政英博士に就任を委嘱した。金山博士は東京大学法学部を卒業後、四十年に近い長い外交官生活を送り、欧亜局長、ニューヨーク総領事、駐チリ、ポーランド、大韓民国大使を歴任し、日本の外交に大きく貢献したことは周知のことであり、この任に最適であるとの各方面からの推奨を得、同博士にこの大役をお願いした次第である。

韓国研究院を平素より愛顧して下さった諸先生に以上の報告を申し上げ、新設の国際関係共同研究所と金山初代所長へ御愛護のほど、衷心よりお願い申し上げる次第である。

一九七二年十一月十四日

国際関係共同研究所 概要

一、沿革

国際関係共同研究所は、韓国及び日韓関係に関する基礎的、総合的調査研究とその成果の保管・普及を行い国際協力及び文化交流の促進に寄与することを目的とした東京韓国研究院併設の社会科学部門研究機関として、一九七二年十一月十四日発足致しました。アジアの国際関係の諸問題に関する研究・普及と国際協力・交流を推進して、アジアの平和と安全に寄与することを目的としたのであります。一九七四年には会員制度を設け各界有識者の積極的な協力を得ることにより飛躍的發展をとげ、翌一九七五年には韓国研究院と共に現在の事務所に移転して資料面の充実化を計ることをもって調査研究事業の拡大を見、以後順調に發展して今日に到っております。

国際関係共同研究所としては、当面最も資料の欠けている北朝鮮を対象に選定し、多角的かつ継続的研究を行い、その成果は国内外の研究者・研究機関からも評価を得てまいりました。

二、調査研究事業

調査研究事業は、国際関係共同研究所の活動の中心となるもので、その対象は、ソ連極東地域・中国東北地方を含めた北東アジアの政治・経済・社会・軍事の諸面にわたっており、国際的・学際的調査研究として実施して

おります。特にアジアの緊張度を左右する国家である北朝鮮は、同国が閉鎖的な政策をとっていることから、適正かつ多量の情報の収集と分析の必要度が近年益々増大したため、月刊誌「北朝鮮研究」を一九七四年六月に創刊、同誌を通じて北朝鮮、ソ連、中国の文献に依拠した事情分析を発表してまいりました。

特別調査研究としては、アジアの国際関係の実験的かつ総合的なテーマを設定し、国際的なアジア研究者を各国から招聘してシンポジウムを開催、その成果を世に問わんとするものであります。これまでに主なものでして、

- 1 一九七四年八月「第二回アジアの将来を考える九カ国委員会」
 - 2 一九七五年六月「アジアにおける日・米・韓の政策」シンポジウム
 - 3 一九七九年四月「韓国の統一問題について」シンポジウム
- を実施しております。特別調査研究は今後益々拡大強化する方針でおります。

三、対外活動

国際関係共同研究所は、その対外交流・普及活動として研究会・講演会を専門家を招き毎月定期的に実施しております。テーマはそのつどアジアの政治・経済・文化全般にわたる問題をとりあげ、会員各位をはじめ広く参会者のアジア情勢の理解増進の一助となっております。

Ⅳ、資料収集・整理

国際関係共同研究所はその事業の一環として、韓半島及び日本と韓半島関係に関する全般的な資料の収集と整理を行っております。韓国研究院との共同図書館は、資料点数一八万冊に及び、世界でも有数の特殊専門図書館としてアジア研究学界に寄与しております。また国際関係共同研究所がこれまでに集積した北朝鮮のデータは各国からも注目を浴びて大いに利用されております。

Ⅴ、出版活動

国際関係共同研究所の出版物は、月刊「北朝鮮研究」のほか次のようなものがあります。

一九七八年『北朝鮮の工業』

一九七九年『改訂北朝鮮の工業Ⅰ』・『北朝鮮政経年鑑』

一九八〇年『北朝鮮の工業Ⅱ』・『北朝鮮——世襲的社会主义の国』

Ⅵ、結び

国際関係共同研究所は、以上のような事業活動をさらに一層積極的におしすすめ、その成果を会員の皆様およ

び広く世に問うため新たに研究報告書『北東アジア』（仮称）の発刊を予定しております。これに伴い月刊『北朝鮮研究』は通巻七十八号をもって廃刊させていただきました。今後は従来の調査研究活動を深化させるとともに、北東アジア全般をカバーする国際的・学際的地域研究誌として意義ある報告書の作成を目指しております。

会員各位をはじめ多くの方々の一層の御理解と御協力をここにお願いする次第であります。

「国際韓国研究機関協議会」

——創立の経緯と展望——

崔 書 勉

(東京・韓国研究院院長)

一九七五年七月一日から四日までの四日間、ソウルのタワーホテルで開かれた「国際韓国研究機関協議会」の第二次総会が他の一般的な学術会議と異なる特色は、世界各国に於ける「韓国研究所」の所長および大学や教育機関で韓国学を教えている責任者だけが集まった会議であったということである。

大学で韓国学以外の名目で在職している人や、時事的な論文の発表などによる韓国問題研究者は、この会議の性格上招聘されなかった。

このように世界各国から韓国学研究機関の責任者だけが一堂に会したことは、解放前後はもちろん今日までも初めてのことであり、大部分の参加者が韓国人ではなく、外国人であったことも特記すべきことであった。

殊に、この総会は、韓国政府や韓国内の団体の招請によって開かれたものではなく、協議会自らが主催した会議であったことも付記しておきたいことである。

「国際韓国研究機関協議会」が、ソウルで総会を開きたいきさつを説明するためには一九七三年七月十九日ま

で廻らなければならない。

一九七三年七月十二日から十日間、パリで開かれた第二九次東洋学者総会には、世界各国から約三千名の東洋学者が参加し、まさに「東洋学の世紀の祭典」ともいうべき盛況であった。「東洋学のオリンピック」ともいえるこの会議には、共産圏からも多くの学者が参加したことはもちろん、北韓からも十余名の学者が同席した。この会議の席上で、外国からきた数名の韓国研究所代表と韓国学教授達から、韓国関係の研究者達がこれを契機に一度集まってみたらという案が提起され、十三機関の代表者が集まり、「国際韓国研究機関協議会」を組織するに至ったのである。

創立総会を聞いて、韓国学を教科目に盛り込んでいる大学の教授と韓国研究所の所長および公認された韓国研究協会等の機関長の間には、資料、知識および情報の交換、学問的共通問題に関する相互協力ならびに会員の間の親睦をはかるために、協議会を置くことに合意したのである。

このときの重要な決議の一つは、「外国で韓国研究に携わっているわれわれは、韓国学者によっておさめられた高い水準の研究成果を学ぶために、韓国学者の相互間の交流が必要であることを認識し、二年ないし三年に一度、本場の韓国の南北において定期的に総会を開くことにする。」ということである。

従来、あらゆる方面の韓国研究に関するセミナーがたえず行われたアメリカと同様に、欧米においてもこのような会議が一日でも早く開かれることの願いと、また韓国政府からの惜しみない協力を賜り、創立後まだ三年も満たないうちに、今回の協議会第二次総会の実現をみたのである。

総会を終えた参加者一同は、韓国での総会は一―また協議会としては自らの手により、総会を組織したのであ

るが――招請された会合以上の成果を得ることができたことを誇りに思い、また個人としても予期以上の収穫を得たことを喜びながら帰国したのである。

まず、総会参加者の熱意はいかなるものであったか、その例を上げてみると、

オランダからきたフォス教授は、六回手術を受けた不自由な身体にもかかわらず喜んで参加したし、オーストラリアのガーディナー教授は、厳冬で学期の最中にもかかわらず参加した。また、オーストラリアのクライナー教授は、他のプログラムの進行責任者として遠路の旅行はほとんど不可能と思われていたが、オーストラリアがこの会議に参加したという事実を残すため一日のみの参加で帰国し、英国のスキレンド教授は、八年ぶりの東北アジアへの旅行であるから日本に立ち寄るようすすめたが、「たとえそれが一日だけであっても韓国学を学ぶ自分としては、その一日を韓国で韓国研究に費やしたい」との希望から彼の予定された旅行期間をすべて韓国で費やしたのである。

この総会の準備に携わっていたアメリカ西ミシガン大学の南昌祐教授と、アメリカ代表である姜英勳博士等は、別の会議に参加するため六月初旬訪韓していたが、この会議に参加するため一ヶ月を待たなければならなかったし、アメリカの最大の学会の一つであるアメリカアジア学会（会員六千名）から、公式のオブザーバーとして尹正錫氏を参加させたこと、一ヶ月前韓国からアメリカに帰っていた梁基伯博士を帰任間もないにもかかわらず、総会で「ハングル・ローマ文字化のワーク・ショップ」についての講演をするように、米国議会図書館が公務旅行として許可してくれたことなどは、この総会への大きな励ましでもあった。

国内に協議会の事務所をもたないわれわれにとって、準備の中心的役割を果たしてくれた延世大学教育大学

院の院長をはじめ職員一同の声援等は、外国における韓国学関係の仕事に携わっている人士の胸に忘れ難い韓国のイメージを植え付けたのである。

この総会は、長い伝統を持つ中国学・日本学に比べマイノリティーの立場にある韓国研究の学者たちに国の違いこそあれ目的を同じくする同僚が、一度に集まることによつて悩みを語りあい、孤独ならざる学問的協力を約し、また国内の学者から得た声援に大きく勇気づけられたこともこの総会の意義の一つであった。

今回の総会を通じてみうけられた画期的な現象の一つは、従来、韓国人教授達の手によつて導かれてきた世界における韓国学が、これからは外国人の手に主導されて行く、いわゆる「静かな革命」が進行中であることである。四十名の参加者のうち韓国人は、わずか七名にすぎなかった。

また、今後の課題に関してあらゆる意見が提示された。即ち韓国で出版された多くの學術書が、欧州、アメリカ、アジアで少なくとも一つの場所にそれぞれ收藏されるセンターの設置が必要であること、韓国文字のローマ文字化における「マツキューン・ライシャワー方式」の長所と短所、今後韓国政府の韓国学研究機関への積極的な後援、まだ交流の少ない共産圏内の韓国研究者との交流、外国の韓国研究者が韓国を訪問する際、より効果的に韓国の伝統と文化により一層接することが出来るように、また国内の学者と意見交換の場として「インタナショナル・ハウス・オブ・コリア」を一日も早く設立すること等である。

このような組織の強化過程を通じて、国内学者の研究成果が各国の学者達に容易に伝えられ、また各国の学者達の研鑽が加えられて、「韓国学の世界化」に拍車をかける契機をつくることになれば、この会議は一応成功であったといえよう。

ある会員は、共産圏学者達を参加させるためには次の総会を中立国で開くよう提案したが、韓国の慶州で開く意見が支配的であった。これは、碧眼の外国学者が、今回の会議がソウルで開かれたことをどれほど有益かつ幸いに思ったかを示すよい例といえよう。

総会は、新しい事務総長に筆者を、欧州代表にスキレンド、アメリカ州代表に姜英勲、アジア州代表に井上秀雄教授を選んだ。そして、米国代表に南昌祐、カナダ代表に呉基松教授をそれぞれ任命して、二、三年内に再び韓国で総会が開かれることを希望した。

アジアの将来を考える九カ国共同委員会

——東京総会報告——（一九七一・一〇・三〇）

議長 木内信胤

一、この報告の目的は、第一には去る十月十四、十五の両日東京で開催された我々の第一回の集会の議事内容を報告して記録に止めることであるが、第二に、集会の最終段階で合意を見た「この会の今後の進め方」を確認し、さらに第三として、その「今後この会の進め方」の第一歩を、この報告によって実践しよう、ということである。

二、後段で明らかになる通り、われわれの委員会は、集会によってのみ仕事をするものではない。常時不断、あらゆるコミュニケーションの手段を通じて相互に協力することによって、共同して“アジアの将来を考え”、考えたところを各人のそれぞれの立場と能力に従って、実行に移して行こうとするものである。この「会報」は今後引き続き急ピッチで二号三号と続けて行く筈であるが、そうすることによって、この「会報」は、我々のコミュニケーションの重要な手段のひとつとなる筈である。

三、我々の第一回の集会を終わってからまた二週間にしかならないが、この期間に、国連においては「アルバニア決議案」があつた圧倒的多数をもつて通過した。こうして事態は急転しつゝある。我々はこの新事態を何と考へ、この事態下に何を為すべきか。私は私の所見を、この報告の最後に、「アピール」の形で発表したいと思う。

四、その前に上記の三目的の第一と第二とに属することを簡明な形で述べておこう。第一は今回の集会のあらましの報告である。

(一) 今回の会合は十月十四日、十五日の両日、東京の経団連の一室を借りて行われた。参集した人々は

日本から

木内 信胤 (世界経済調査会理事長)

崔 書 勉 (東京韓国研究院長)

三好 貞雄 (外交時報社長)

西村 光夫 (日本大学教授)

永田 一郎 (法政大学教授)

平 良 (慶応大学教授)

筑波 常治 (青山学院大学教授)

三好 切子 (聖心女子大学学長)

久住 忠雄 (評論家)

NEAL LAWRENCE (在日外人教師会長)

香港から

周 鯨 文 (大陸研究所長)

雷 健 (ロタニ研究所研究委員)

裴 有 明 (香港時報主筆)

インドから

ASOCK SIRCAR (ソフィア大学教授)

インドネシアから

OMAR TUSIN (インドネシア商工会議所副会頭)

韓国から

李 瑄 根 (嶺南大学総長)

李 漢 基 (ソウル大学教授)

パキスタンから

匿 名 (放送局員)

フィリッピンから

LEON TY (エキザミナ発行人)

台湾から

胡 秋 原 (立法院議員)

アメリカから

IL PYONG KIM (コネチカット大学教授)

YUNG HOON KANG (ワシントン韓国研究所長)

の九カ国二十二名であった。(もう一國ベトナムの方が参加される筈であったが、都合がつかず欠席であった。)

なお、オブザーバーとして西ドイツのキール大学の YUN SOO KIM 教授が参加した。

会議では日本語、英語、中国語の三カ国語を使用し、日本語及び英語による同時通訳が行われ、原語、訳語にすべて録音された。写真と映画も、記録のため撮影された。

参加した各人は、各人の人種もしくは国籍によってそれぞれの国を代表する、というものではなく、人種国籍に拘らず、その居住する地域の考え方を(各人の個人としての見解と共に)会に向かってコミュニケーションする、そのための適格者として選ばれたものであった。

会議は、限定された数名の傍聴を許容したほかは、秘密会であった。

会議の進行に協力した同時通訳を含め事務局員は二十六名であった。

(二) 議題には、アジアの将来を考えるため、当面、最大の注意を注がねばならぬ対象として、「中共と北鮮の対外

政策」が選ばれた。このテーマの講演者として、次の三氏が、次の題下に、それぞれ約一時間の講演をされた。

「毛沢東政権とアジアの情勢」 周鯨文（香港大陸研究所長）

「毛沢東政権とその外交」 金一平（米・コネチカット大教授）

「金日成政権とその外交」 姜英勲（米・ワシントン韓国研究所長）

別に衛藤瀋吉（東京大学教授）、神谷不二（慶応大学教授）両氏から、本集会の参考として、それぞれ次の報告が提出された。

「70年代アジアにおける日本」 衛藤瀋吉（東京大学教授）

「南北朝鮮統一問題」 神谷不二（慶応大学教授）

なお、最近の中共内部の状況を理解する一助として、去る四月、アメリカのピンポンチームの北京訪問に随行した某ジャーナリストが撮影した約三十分のカラーフィルムを鑑賞した。

上記三氏の講演と映画鑑賞以外の時間は、すべて参加各位の発言に充てられたが、その発言は必ずしも講演に対するコメントとは限らず、本委員会の基本目的と今回の討議のために選ばれた中国と北鮮の外交政策という問題意識とを中心に、極めて自由な発言が行われた。

(三) それらの発言内容は、それをサマライズして会報に載せるのが通常の慣行であろうが、ここではその努力は行わないことにした。前記のように、発言はすべて録音され、その全部は筆写されて本部に置かれている。見た人はいつでも見ることが出来る。また一方、「外交時報」の三好貞雄社長の好意により、本会が発表したいと

思うドキュメントは、概ね同誌に載せることになった。「外交時報」が日本語オンリーの雑誌であるのは聊か遺憾であるが、今回の集会における発言内容は、遂次何らかの形でこの雑誌に発表されるであろう。労多くして功少き内容のサマリーの記録は行わないことにしたのは、それらのことを考え併せた結果である。

(四) 第二日の或る時期に、“本会の性格は何か”という質問が出た。この会は実際活動を行うための団体か、それとも学術的研究を行なうための団体か、という質問である。答はその中間ともいふべきもの、即ち本会は、それ自体としては研究思索をするのみである。しかしその研究対象としては、アジアの将来を考えるために必要な、具体的なる“現に燃えている問題”を選ぶ。そしてその研究思索の結果として得られたところを、各人がめいめいの立場と能力とに応じて、實際政治に反映させるための努力を行うであろうことを期待する。但しそれは、会そのものの活動ではない。

右の諒解を基礎として、今後の会の運営について次のような決定がなされた。

- 一 本会を「アジアの将来を考える九カ国共同委員会」と呼ぶ。英文名は“Council of Nine Nations on the Futures of Asia. (CONNFOA)”とする。
- 二 本部を東京におき支部を各国におく。
- 三 本部のアドレスは「世界経済調査会」東京都千代田区永田町一ノ九ノ二である。事務局は「韓国研究院」東京都港区飯倉町六ノ十三に置く。
- 四 本会は会議体としてこれを運営し、格別の機構を持たないことにする。
- 五 議長の職務は木内信胤（任期二年）、事務総長の職務は崔書勉（任期二年六カ月）が担当する。

六 集会は少くとも年一回は東京で行うが、その便宜とその価値とを認めた場合には、支部もしくは他の必要と認めた場所において行う。

七 会の目的は“アジアの将来を考える”ことである。考えて得たところは、それぞれの道においてその実現を期する。但し会としては実際活動は行わない。

八 支部は本部の機構に準じることがのぞましいが、メンバーが一人でも支部である。必要に応じてその拡大を計る。支部がその事務を他の機関に委託することは自由である。また意見の発表は、実際活動と共に、各人の自由である。

九 本部支部の間、もしくはメンバー相互の間において、コミュニケーションの徹底を期する。
決定事項は概ね以上の通りであるが、強いて会則といったものは設けないことにした。

(五) 議題に関する直接の発言ではなかったが間接に諒解されたところ並びに正式の会議以外の場所における個人的接触の結果、何となく感知されたところで記録しておく価値ありと思われたのは、次の三件であった。

その第一は、中共と北鮮とは、確かに「世界の在るべき姿をかき乱している存在」である。しかしながら、彼等を非難し、彼等から来る危険を警告するだけでは、願わしき結果は出ないのであって、禍根はむしろ「彼等以外の世界が、その在るべき姿にはない」ということにある。ニクソンのアメリカもおかしいが、佐藤の日本も、まことに奇妙である。その他の諸国も、必ずしも自慢していい状態ではない。従ってこれから我々は、それら中共並びに北鮮の周辺の諸国はどう在るべきかということに、より多くの注意を注ぐべきであろう。

第二は、ニクソンの訪中は、非難に値する行為であった。しかし一方、彼には彼なりの理由付けがあり、アメリカ国民の大多数は、むしろ圧倒的というべき程度、それを支持している、ということも忘れてはならない。然らば、我々として、例えばニクソンを非難する場合、より深き理解に基く、より深き理由付けを持たねばならぬ、ということになる。

第三は、アジアの将来を考えるには、その領域がとかく東北アジア的になりがちであることをいましめるべきであり、アフガニスタン以東を妥当とするとされ、その代表の人選案も提出されたが、これは今後しかるべき時期に、しかるべき方針を立てることにしたい。

以上の如き観点は、我々の今後のコミュニケーションにおいても、また我々が次回の会合をプラン上においても、その重点の置き方に対する指針のひとつとして役立つものと思われる。

(六) 以上をもつてこの報告の第一と第二を終る。以下は目的の第三に関することであるが、その第一着手として、其の後に起つた国連における「アルバニア決議案」の採択についての所見を一言しておきたい。この事件は、本委員会の仕事に対して、強い影響力を持つものだからである。

国連における今度の結果が、「ニクソンの訪中発表」をひとつの原因として起つたものであることに疑問の余地はないが、この事件によって、今後の国連並びに国際政局は、“中共の出方”を中心に動くことになったものと思われる。彼等にして賢明ならば、彼等はその終局目標である世界共産化に向つて大きく前進するであろう。

そこでこれはひとつの反省であるが、今回の国連の討議が、“誰に代表権を与えるか”という形で争われた

ことは、いまとなつては致命的なる誤りであつたことが明瞭となつた。“中共は新国家かどうか、然りとすれば中共にも、国連の議席を与えるべきではないか”という形で争われればよかつたのである。

「アルバニア決議案」は、“中国はもともとひとつであり、それは中共である。従つて本来不法なる存在であるところの国府が、いままで国連の議席を占めていたことは「不法」であつた、それを匡正し、奪われていた権利を取り戻すのが今回の決議である”という形に出来ているから、一度この決議案が採択された以上、アメリカが不法な存在である国府に対し、その国防を援助して来たのは、“仮りに「侵略」ではないとしても、明らかに「不法」であつた”ということになる。その論理を一步進めれば、不法なる存在である国府と条約を結び通商を行っている日本の行動もまた、中共の正当なる権利を侵犯する行為だ、ということになる。

この点、今後アメリカ政府がどのような自己弁護を行うか注目したいと思うが、日本において佐藤総理はすでに“アルバニア決議案が通つた以上は、その趣旨に従う”と言つてゐる。従つて今後日本は、中共の追求に對して何と受け応えをするつもりか。不安は頗る大きい。

一方中共は、「アルバニア決議案」の採択を盾にとつて、国府を国連のあらゆる機関から追放せんとする行動を、すでに開始している。それに対して、国府の防戦に分があるとは思えない。従つて遠からず国府が国連という機構から完全に追放されるとすれば、その時は同時に、世界の舞台一般から“爪弾きされた形”となることと思う。

この形勢にアメリカはどう対処するか、韓国はどうか。他のアジア諸国はどうか。日本においては状況は更に深刻であつて、下手に対処すれば、日本の国論は真二つに分裂することになる。それこそ周思來の思う壺、

日本を共産革命化するところまでは行くまいが、少くとも日本を一大危局に陥没せしめることが可能となろう。

右の如き私の所見を、本会のこの会報によるコミュニケーションの第一号として、取り敢えず代表諸君のお耳に入れたいと考えた次第である。

(七) そこで最後に、私はひとつの「アピール」を行いたい。これは本報告に眼を触れられるであろうすべての人々に対して行う訴えである。これは正式の手続きを踏んだ行為ではないが、今回の会合の際に知り得たところを総合して考えれば、以下に述べるところは間違いなく、本会全員の総意であろうと思う。そこで私は、急進行を遂げつつある事態に鑑み、前記の観点に立ちつつ、本会の議長として、本委員会を代表して左記の「アピール」を行うものである。前記した本会の在り方に従って、代表各位がそれぞれの分野において、このアピールを効果あらしめるための努力を行われんことを切に期待したい。

全世界の心ある人々へのアピール

アジアの将来を考える九カ国共同委員会

議長 木内信胤

- 一 中華人民共和国を国連に迎え入れることは歓迎である。国連は、およそ国たるものは全部集って、共通の問題を討議する場所であることが望ましいからである。
- 二 但し中華民国もまた明らかに国である。その中華民国を国連から追放することに決定を見たことは、国連が一個の誤りを犯したことである。従ってその誤りは、急速に訂正されねばならぬ。
- 三 誤りが起った原因は、中華人民共和国の国連加盟問題を、“ひとつの国である中国を誰が代表するか”という形式で論議したことから起った。問題は明らかに、“中華人民共和国もまたひとつの新しい国と認むべきではないか”という形で論議されなければならなかった。そして新国家である中華人民共和国と中華民国とが国連で併立することは、この両国が将来、何らかの方法で一国となることを妨げるものではない、とすべきであった。
- 四 すでに大きな誤りを犯した以上、早くその訂正運動を起さない限り、国連は必ず自壊作用を起すであろう。

そして世界は、平和の大きな支柱を失うであろう。事態のこのような進展は、何としても防止せねばならぬ。

五 救いをどこに求めるか。国連は第一にプリンシプルを持たねばならぬ。“およそ国と認むべきものは凡て国連のメンバーとする”ということは、すでにそれ自体、国連が創立された当時のプリンシプルとは違っている。しかし世界の実際の動きが、この新しいプリンシプルを必要としたのであるから、それに従うはいい。但し、国連は、このプリンシプル変更という事実を、公式に認め、それを確認する、という手続きを取らねばならぬ。国連はその際に、改めて中華民国の国連加盟を議題にのせると共に、現在の他の分裂国家に適用すべきプリンシプルをも明らかにしなければならぬ。さもなければ国連は、自壊するのみである。

六 国連は、右に述べたように、「加盟に関するプリンシプル」を明らかにすると共に、「平和維持に関するプリンシプル」を明らかにしなければならぬ。平和維持を、大国のバランス・オブ・パワーに求めることは、必ずしも悪いことではない。しかしそれは、国連外の事である。国連としては、“何が平和を阻害する行為であるか”を認定し、その阻害行為のなかの或るものは、“武力に訴えてでも阻止さるべきもの”であることを改めて確認しなければならぬ。その武力の行使者が国連警察軍ではなく、或る強国もしくは若干の国の連合体であるとしても、その事は深く問う必要はない。人々の理解がそのようになって始めて、「法の下における平和」が実現する。

七 中国共産党政権は、その真の意図を隠しているのではないか、ということがある。彼等は“全世界の中小国の代弁者となって、いままで国連にも一般の国際政治にも見られた大国支配を打破する”という。しかし彼等是一方、“全世界の後進国が全世界の先進国に向かって革命戦争を起す、それが歴史の必然であり、その戦争に

勝つことによって、全世界の共産革命が成就する”ともいつている。中華人民共和国は果して何の意図を以つて国連入りするのか。心ある人々は、彼等の真の意図がいずれにあるかを、手遅れにならないうちに看破しなければならぬ。

北鮮についても同様であつて、彼等も最近は平和意図を装つてはいるものの、彼等の真意は依然として「武力統一」であり、その実行のときは迫っている、と彼等は考へているのではないか。真意看破の必要はここにもある。

八 韓国は国連がかつてその総会で、“韓半島における唯一の統一合法政府である”と決議し国連総会の名において誕生させた他に例のない国である。またこの国が外部からの侵略を受けたとき、国連はその総会の決議をもつて国連軍を組織して、韓国の国土を護つたのであつた。

いま国連が中華人民共和国を国連に迎え入れた背景には“普遍性”の主張が認められるが、もしも国連がその同じ普遍性の主張を北鮮にも適用しようとするならば、それは国連の自殺行為に等しい。いま国連が「平和維持のプリンシプル」と併んで「加盟に関するプリンシプル」を設定せんとするに當つて、特にこの点に関する明確なる意志表示を要望せざるを得ない。

以上の各項を全世界の心ある人々に対してアピールする。

第四部
『韓』誌
総目次

『韓』のことば

北東アジアの媒介変数をなすものは、韓半島の動向である。

韓半島を中国文化の辺境としてとらえたり、また逆に脱亜日本を含むいわゆる西欧的近代文明の辺境としてとらえたりする、いわば「韓半島辺境交錯地帯観」は、韓半島の文化を独自の存立性あるものとせず、いずれかの文化圏に従属させてのみ理解しようとする単眼的思考形態の産物たるに過ぎない。それは、韓半島のもつ始源的な力動的媒介変数性に眼をとざすもので、北東アジアの全力動構造をたたく把握する考え方ではない。いわゆる「韓半島バルカン論」も、この種の思考方式に基く短見者流の北東アジア観の一つである。

韓半島辺境交錯地帯観、従ってその系として導き出される韓半島バルカン論は、文化の始源的な力動を中国や日本やその他にのみ見る立場であって、そこでは、韓半島はつねに黙殺される通過駅としての性格を付与されるのみである。なるほど、歴史的に大観すれば、古代以来の文化伝播の流れが、長いあいだ、中国から韓半島を地理空間的にいわゆる「通って」日本に流れ、また近代においてのそれが、日本から韓半島を「通って」大陸に流れた事実を否定することはできない。しかし、今日われわれの留意

すべきことは、そのような「通って」流れた文化の底にはそれをになった民衆のあったこと、従ってそれらの文化が北東アジアの民衆にとって何を意味したかということであり、同時にまた反面では、その「通った」ことの根底に、独自の創造性に立脚しながら、それを自主的に「うけとめ」て自力によりそれを「通した」韓民族のあったことを忘れてはならないということである。

韓半島は、決して単なる「通過駅」ではなくして、まさに北東アジアのかけ橋の一つのかなめとなる柱、すなわちかけ橋を支える一つの橋脚であったのである。中国文化は、韓半島民衆のうけとめをえてはじめて日本に流れえたのであり、日本の文化の流れも、韓半島民衆のうけとめと主体的発動によっておおきく規制された。それにもかかわらず、このような韓半島の橋脚性を黙殺したうえで流れの設定が行われ、それが北東アジア諸民族の民衆にもたらした不幸はきわめて大きいものがあったことを忘れてはならない。

今日、北東アジアのかけ橋は、流動する国際関係のなかで、よりいっそう多元的となりつつあるが、韓半島の橋脚性を確認することなしには、ゆるぎなきかけ橋の構築は不可能である。

われわれは、このような視点に立って、韓半島のもつ橋脚的媒介変数性をふまえつつ、北東アジア文化の諸問題への基礎的かつ総合的な研究を、誠意ある識者の協力をえて進めて行きたいと念願する。

『韓』第一卷（一九七二年） 総目次

創刊号（通巻一号）

実学研究序説……………	李 佑 成	73
韓国儒学に関する断章……………	李 佑 成	97
研究	阿 部 洋	111
韓国学生運動日誌（稿）上……………	編 集 部	133
知られざる韓国現代史の記録（1）……………	編 集 部	141
メモランダム	稲垣二三……………	155
南北家族さがし運動詳誌（一）……………	清水弘文堂……………	160
新刊紹介	宮原兎一 中川清 訳・李基白著『韓国史新論』……………	175
記事	『第一回日韓文化シンポジウムに対する韓国側の反響』……………	185
	第一回日韓文化シンポジウムの成果（李錫烈）……………	195
	韓日文化シンポジウムに参加して（李箕永）……………	205
	口絵 百済武寧王陵玄室内部および発掘遺品……………	215
論 文	木内 信胤……………	225
日韓関係史研究の問題点……………	中村 栄孝……………	235
韓国民族思想と韓日関係……………	李 瑄 根……………	245
米・中関係の転換と……………	イルピョング・キム……………	255
その韓国に与える影響……………	J・ベッカー……………	265
唐津焼と韓国（一）……………	……………	275
特集 百済武寧王陵の発掘……………	……………	285
百済武寧王陵遺品展示にあたって……………	……………	295
一 韓国国立博物館提供……………	……………	305
遺品展示に際しての挨拶……………	黄 壽 永……………	315
武寧王陵発掘記……………	金 元 龍……………	325
百済史上の武寧王……………	李 基 白……………	335
千五百年・百済の神秘……………	李 丙 燾……………	345
学説紹介一 李朝儒学思想史……………	……………	355

第 号（通巻一号）

卷頭言……………崔書勉
口絵 月出山靈岩磨崖石仏

論文

百濟・新羅仏教と飛鳥仏教……………田村 圓澄……………5

— 聖徳太子研究の問題点 —

知性の社会的実践……………千寛宇……………33

私の提言

日韓協力を反省しよう……………衛藤 藩吉……………51

学説紹介 — 開化思想と宗教 —

開化僧李東仁……………李光麟……………53

— 韓国開化運動と仏教 —

李樹廷の人物とその活動……………李光麟……………73

研究

韓国学生運動日誌(稿)下……………阿部 洋……………93

資料

知られざる韓国現代史の記録……………金俊熙……………13

日本国内発刊韓国関係文献目録(一)……………申昌淳……………129

新刊紹介

ジェームス・ホイット訳(英訳)

『童飛御天歌』……………

メモランダム

南北家族さがし運動詳誌(一)……………稲垣二三……………123

記事

日本所在の韓国研究関係欧米文献目録の刊行……………50

第三号(通巻三号)

論文

新羅仏教の性格とその現代的意義……………李箕永……………5

— 金玉均特集 —

金玉均研究の現代的意義……………崔書勉……………25

付・金玉均研究文献目録(韓国研究院蔵)

学説紹介 — 民族主義史学 —

民族主義史学の問題……………李基白……………43

民族主義史学の発展……………李基白……………57

研究・紀行

洛山寺の古き思い出……………中吉功……………65

新聞記事による韓国新史料発見暦……………稲垣二三……………77

随想

韓国に暮らして(一)……………馬越徹……………85

書評

李朝党争史研究……………李昇……………95

資料

知られざる韓国現代史の記録……………金俊熙……………107

日本国内発刊韓国関係文献目録(一)……………申昌淳……………98

海外東洋学研究所一覽『韓』頒布先……………130

メモランダム

南北家族さがし運動詳誌 (三) 稲垣二三三 117

記事

甲申政変は儒教打破から 李光麟氏発表 41

口絵 金玉均肖像 ソウル南大門 (最古の写真) 等

第四号 (通巻四号)

論文

二十世紀韓国詩壇の足跡 金光林 5

韓国経済の現状とその評価 加藤 義喜 35

一九七一年度韓国近代史研究動向 李 鉉 淳 45

学説紹介 一民族史学一

丹斎史学の位置 金 哲 峻 63

亀 船 考 崔 永 禧 77

随 想

韓国に暮らして (二) 馬越 徹 99

資 料

寺内正毅韓国関係文書目録 (上) 金 俊 熙 109

知られざる韓国現代史の記録 申 昌 淳 131

日本国内発刊韓国関係文献目録 (三) 申 昌 淳 131

朝鮮は世界の発明国なり (建築雑誌・第一六八号より) 98

メモランダム

南北家族さがし運動詳誌 (四) 稲垣二三三 127

口絵 一九〇〇年代のソウルの写真

第五号 (通巻五号)

論文

韓国農村社会の変化一京畿道六個村落の事例一 李 萬 甲 5

学説紹介

李朝末期における韓国とアメリカ 李 普 珩 27

研究会報告

第一回金玉均研究会報告 渡 部 学 49

書 評

尹泰林『意識構造上から見た韓国人』 馬 越 徹 63

資 料

白頭山関係文献目録 71

史 料

鴨綠江 下流 国疆調査復命書 (二) 101

随 想

なぜ韓国に留学するか 田 中 明 87

メモランダム

南北家族さがし運動詳誌 (五) 91

記事

新聞記事による韓国新資料発見暦……………95
 口絵 白頭山定界碑……………

第六号 (通巻六号)

特別資料

統一のための民族会議を提議した……………崔書勉 5
 金九の書簡の紹介に題して……………
 大韓民国臨時政府主席金九が……………
 独立同盟主席金科奉に寄せた書簡……………
 原文……………13
 日本語訳……………16
 わたくしの念願……………金九 20

学説紹介

開港一世紀についての政治史的な一考案……………
 一一八七〇年代を中心としてみた近代史の諸問題……………崔昌圭 33
 ……
 書評・文献解題……………

資料

李碩崙『韓国貨幣金融史研究』……………李昇 49
 崔漢綺の文集『明南楼叢書』……………渡部学 53
 ……
 知られざる韓国現代史の記録……………金俊熙 77

史料

豊経下流国疆調査復命書(一)……………107
 随想……………
 韓国に暮らして(三)……………馬越徹 65

記事

南北家族さがし運動詳誌(一六)……………93
 口絵 大韓民国臨時政府金九主席……………

第七号 (通巻七号)

論文

米中和解と極東情勢……………金一平 5
 一特に韓半島の周辺気流……………
 唐津焼と韓国(二)……………J・ベッカー 17
 学説紹介……………
 韓末外来文化の受容階層……………
 韓国における図書館及び図書館員……………金泳謨 23
 養成の概要……………李載喆 43

資料

寺内正毅韓国関係文書目録(下)……………65
 ……
 豊経下流国疆調査復命書(三)……………107

史料

随想

高松塚古墳壁画断想……………中吉功…55

一特に婦人像について一

記事

南北家族さがし運動詳誌(七)……………80

口絵 おたあ・ジュリアの墓

第八号 (通巻八号)

論文

日本儒字の発展と李退……………阿部 吉雄…3

日韓両国語の方位を表わす語について…大野晋…29

中世の日本人は高麗・朝鮮を

どのように考えていたか……………田中 健夫…35

日韓通交史の問題点一一四一―一五世紀の

日韓関係を中心に……………田村 洋幸…43

韓国教育史学研究への序説……………渡部 学…53

二十世紀初頭の韓国における

キリスト教主義学校……………阿部 洋…63

八幡神について……………田村 圓澄…75

古代瓦窯研究の意義……………大川 清…83

日本の近代化と韓国……………大畑篤四郎…95

一国際関係の視角から一

日本における儒教の現状……………宇野 精…105

第九号 (通巻九号)

学説紹介 一韓国近代教育史……………3

育英公院の設置とその変遷……………李 光麟…5

韓国近代学校の成立過程……………孫 仁 銖…49

随想

韓国文化財十日の旅：関野克……………75

史料

学部所管日本国留学生規程……………117

記事

新聞記事による韓国新資料発見暦……………87

南北家族さがし運動詳誌(八)……………91

口絵 福沢諭吉と韓末慶心義塾在学韓国人留学生

第十号 (通巻十号)

学説紹介 一高句麗語……………李 基 文…3

高句麗の言語とその特徴……………3

高句麗語における「口蓋音化現象」について……………金 完 鎮…37

論文 一 韓国語字一

中期韓国語の敬語法体系……………李承旭…49

韓国語の声調、その特徴と変遷……………鄭然燾…71

韓国語音韻論における遠心性……………金鎮宇…89

朝鮮語の問題(一)

一 おもにハングルと漢字について……………竹端 瞭…99

新刊紹介

梅田博之『現代朝鮮語基礎語彙集』……………菅野 裕臣…121

記事

南北韓国黨の比較(一〜四)……………98・120・124・138

口絵 韓末のソウル日本公使館……………

第十二号(通卷十一号)

論文

韓半島の平和のための政治

一 南北韓政治への批判と二つの提案一

「契」研究の諸問題……………金 淵 洙…3

十七・十八世紀における奴婢の身貢について……………金 三 守…31

……………平木 実…49

紹介

韓国における法制史研究……………田 鳳 徳…61

ソ連における韓国研究……………イ・エス・カザケーヴィツチ…71

資料

陸奥宗光韓国関係文書目録……………87

記事

南北家族さがし運動詳誌(九)……………100

口絵 修復前の石燈庵……………

第十二号(通卷十二号)

論文

韓国人形成の核思想

一 「モツ」(■)の教育哲学的解釈……………韓 基 彦…3

奈良の高句麗古墳と日本古代史学……………文 定 昌…29

「任那」の名義について……………李 炳 銃…41

韓国儒字の特徴……………朴 鍾 鴻…55

李朝陽明学の伝来と受容の問題……………尹 南 漢…60

十七〜八世紀韓日貿易関係の推移……………李 鉉 淙…65

韓国経済社会の歴史像について……………高 承 済…79

韓国新聞の抵抗性……………崔 峻…75

一一八九六年から一九四五年までの考察

韓国政治風土の史的特徴……………申 相 楚…79

インド・韓国・タゴール……………アシヨーカー・サルカール…83

紹介

韓国における日本典籍	姜周鎮	88
資料		
桂太郎韓国関係文書目録		93
随想		
韓国で生活して：木下一郎		99
記事		
新聞記事による韓国新資料発見暦 （一九七二年八月～十一月分）		109
南北家族さがし運動詳誌（十）		111
『韓』第一巻総目録		132

『韓』第二巻（一九七三年）総目次

第一号（通巻一三三号）		
論文		
アジアにおける変遷する韓国の役割	関寛植	3
総督治下韓半島における民間流布教科書 本の一断面		
一「その他」分野について	渡部学	11
★ 日本IPRの蔵書寄贈について	木内信胤	47
紹介		
韓国の現状	W・F・サンズ	51
在庫文献資料紹介(1)		
随想		
『兵要 朝鮮事情』	渡部学	59
ある文化人類学専攻学生の手紙	諏訪春生	63
一韓国をテーマにしての悩み		
資料		
間島関係文献目録		73
Korean Repository 総目録	桜井義之編	106
記事		
南北家族さがし運動詳誌（十二）		115

論文

李朝後期における政治思想の展開

一特に近世実学派の思惟方法を中心として

朴忠錫 3

朝鮮語の問題(一)

一おもにハングルと漢字について

学説紹介 一古代日韓関係史

任那問題について

古代韓日関係史研究の方向

古墳を通じてみた古代韓日関係

書評

崔虎鎮『^註韓国経済史』

在庫文献資料紹介(2)

鈴木省吾編輯『^譯金(玉均)氏言行録』他

渡部 学 107

研究ノート

北朝鮮の動向

資料

Transactions of the Korea Branch of the Royal Asiatic Society

ハワイ在住韓国人の韓国語

口絵 旧露国在韓公使館

総目録

寺谷 弘壬 115

桜井義之編 126

127

第三号(通卷十五号)

学説紹介

三二運動と国際環境

一韓国近代女性運動史一

日帝治下の婦女運動小考

一民族運動との関連を中心にして

キリスト教が韓国女性の開化に及ぼした影響

丁堯燮 77

広開土王陵碑と任那問題

わたしの提言

独立記念館の建設を

口絵 現存する郵征総局

第四号(通卷十六号)

崔書勉 43

千寛宇 111

鄭世鉉 46

金龍徳 3

阿部洋編訳 3

韓国高等教育の現況と問題点

長期総合教育計画審議会 7

韓国における高等教育の改革動向

韓国高等教育の改革方向

金相浹 41

韓国高等教育機関の役割分担の問題と方向

特集 韓国高等教育の現状とその改革動向

高等教育改革における政府の役割	金鍾喆	47
大学教育の質的向上のための自律的規制方案	R・ケラー	54
大学の教育課程編成上の問題と展望	李基鐸	71

韓国における短期高等教育機関の役割	劉仁鍾・李鉄柱	78
韓国放送通信大学の役割	劉奉鎬	95
新刊紹介	金宗西	103

影印本『鶴峯全集』	渡部	学	116
在庫文献資料紹介(3)	渡部	学	111

古筠会発行『古筠(金玉均研究資料)』	渡部	学	123
『韓国研究会談話録』・『韓半島』総目録	桜井義之編		118

第五号 (通巻十七号)

論文

七年戦役の被虜	崔書勉	3
おたあ・ジュリアについて	張徳順	55
韓国の口碑文学	金敏洙	81
日帝の対韓侵略と言語政策		

第四回金玉均研究会報告・渡部学	渡部学	103
史草		
“夢をけずる”		
一慶長の役朝鮮人被虜奮闘の日記	長節子	111
資料		
明治期刊行『朝鮮地図』の解題	桜井義之編	115
第六号 (通巻十八号)		
談話		
金九先生の自叙伝『白凡逸志』の自筆原本に寄せて	崔書勉	3
付・金九関係在庫文献目録		
論文 一旧韓末の思想情況一		
実学と開化思想の連関形態	金泳鎬	17
衛正斥邪思想と民族意識・洪淳昶	鄭漢模	63
韓末抵抗期の詩歌		
学説紹介		
任那問題(続)	千寛宇	103
随想		
ソウル日本人学校・稲葉継雄		129
一その昨日・今日・明日一		
口絵 金九先生『白凡逸志』自筆原稿		

第七号 (通卷十九号)

論 文

三国時代の食邑、下戸及び私田の起源	李 玉	3
卵生神話の分布圏	金 在 鵬	15
韓国と日本の神話	金 烈 圭	53

学説紹介

任邦問題 (統)	千 寛 宇	65
開化思想研究	李 光 麟	89

新刊紹介

『穀奮集』影印本	渡 部 学	127
----------	-------	-----

第八号 (通卷二十号)

特集Ⅰ 『光復』直後の韓国言論

進歩的民主主義の旗の下に	朴 憲 永	5
人民を土台とする政治	呂 運 亨	9
新民主主義と新民族主義	安 在 鴻	12
全民族の均等なる発展	宋 鎮 禹	15
新国家建設の胎動一政治・経済・軍事・文化・教育		
『革進』誌創刊号編集部		19

朝鮮の将来	金 性 洙	37
付・年表		45

特集Ⅱ 独立をめざしての韓国言論

民立大学発起趣意書 (一九三三年)	李 南 在・外	53
年頭にあつての希望 (一九二六年)	徐 載 弼	56
史眼からみた朝鮮 (九三五年)	文 一 平	61

論 文

日本統治時代末期の朝鮮教育における民族主義	稲 葉 継 雄	77
-----------------------	---------	----

学説紹介

朝鮮後期実学思想史序説Ⅰ	千 寛 宇	101
影印本『修堂集』	渡 部 学	133

新刊紹介

口絵 ソウル西大門外の迎恩門及び独立門		
---------------------	--	--

第九号 (通卷二十一号)

特集 韓国の高校における日本語教育

(第一部) 日本語教育開始をめぐる教育界の反応	全 海 宗	3
日本語に対する我々の姿勢	金 光 植	11
日本語採択の歴史的背景	李 文 遠	19
外国語教育の当面課題	金 基 定	31
日本語教師の養成問題		

〔第一部〕 現地報告

日本語教育に関する韓国世論の動向	稲葉 継雄	39
高校における日本語教育の現況	稲葉 継雄	45
論文		
韓国における二言語主義	渡部 学	57
一日語の特殊歴史相のもつ重層構造		
旧韓末の官立外国語学校	李 光 麟	91

資料

『日韓通商協会報告』総目録	桜井義之編	123
---------------	-------	-----

第十号 (通卷二十二号)

特集 朝鮮王朝の両班体制とその社会

姓・氏・族の形成発展	金 斗 憲	3
李朝三議制の社会的背景	金 泳 謨	47
両班気質と知識の神秘化	崔 珍 源	75
論文		
一八九六〜一九一〇年における		
婦女団体の研究(下)	朴 容 玉	87
アジアの発展途上国における民族の問題		
	G・F・キム	125

資料

『朝鮮協会報告』総目録	桜井義之編	135
-------------	-------	-----

口絵 李朝両班の邸宅

第十一号 (通卷二十三号)

檀君説話の歴史性(上)	リ・サンホ	3
檀君神話の精神分析	李 丙 允	29
一八九六〜一九一〇年代における		
婦女団体の研究(下)	朴 容 玉	53
学説紹介		
任那問題(続々) 一その二	千 宇 寛	81
研究紀行文		
韓国の音楽をたづねて(一)	草 野 妙 子	113
一なぜわらべ歌から研究するのか		
資料		
『朝鮮総督府月報』分類総目録	桜井義之編	119
口絵 神竿と神樹		

第十二号 (通卷二十四号)

特集 韓国史をめぐる国際論の問題

朝貢の起源とその意味	李 春 植	2
一先秦時代を中心に		
『朝鮮史論』	申 采 浩	37

嚮洋論の登場とその思想的性格……………崔昌圭…91 記事

論文

檀君説話の歴史性(下)……………リ・サンホ…103

『韓』第巻(一九七三)総目次……………129

『韓』第三巻(一九七四年)総目次

第一号(通巻二十五号)

韓国の音楽をたづねて(三)……………草野 妙子…135

書評

特集 韓国の考古学……………八幡 一郎…3

東アジアの紡錘車……………坪井 良平…11

佚亡朝鮮鐘……………田村 晃…27

带方郡の位置……………佐藤 敏也…43

韓国の古代米……………樋口 隆康…57

武寧王陵出土鏡と七子鏡……………伊藤 秋男…77

韓国における三国時代の鍔鐔について……………韓国国立博物館刊…97

韓国の支石墓(一)……………

論文

韓国語のローマ字表記に関する国際的同意……………

ウアレリオ・アンセルモ…129

研究紀行

論文

特集 解放後韓国における価値観の変容……………

序にかえて……………高永復…7

韓国家族文化の変容過程……………洪承稷…33

解放後韓国人の価値観変化……………金泳謨…55

アメリカ文化の韓国社会に着化の問題……………

(フランスにおける) 朝鮮研究……………ダニエル・ブウシユ…75
研究ノート

津田梅子と金活蘭……………金 蕙 卿…83
在庫文献資料紹介(4)

井口一眠著『函館游寓名士伝』……………渡部 学…97
資料

『朝鮮叢報』分類総目録……………桜井義之編…101

第二号 (通卷二十七号)

論文

宋の詞楽一步虚子論攷……………張 師 勛…3
研究紀行

韓国の音楽をたづねて(目)……………草野 妙子…57
論文

辛未年 文化度の朝鮮通信使……………李 元 植…63
好太王碑文と日本国家の起源……………金 在 鵬…94

書 評
韓国・歴史学公編『美学研究入門』……………李 丙 洙…116

資 料
『日本外交文書』日韓関係文書(1)……………大畑篤四郎…123

口絵 伽倻琴散調と大笏の演奏風景

第四号 (通卷二十八号)

論文

梵唄チツソリとホツソリの比較研究……………韓 萬 栄…3
新羅骨品制の研究……………金 在 鵬…30

韓国の支石墓(目)……………韓国国立博物館刊…60
研究ノート

解放後韓国教育の再建に尽した人々……………稲葉 継雄…91
一教育諮問委員会の人脈一
報告

シ系
ジ系
史料
「韓国にとって日本とは何か」……………渡部 学…108

ロシア帝国大蔵省発行『韓国誌』(一)……………(解説) 崔 書 勉…115

第五号 (通卷二十九号)

特集 旧韓末の海外留學

紳士遊覽閉考……………鄭 玉 子…3
アメリカ留學時代の兪吉濬……………李 光 麟…45

旧韓末の日本留學(二)一資料的考察一……………阿 部 洋…63
史 草

西洋人のみた暗行御史……………田 鳳 徳…84

紹介

日本で発見された松雲大師墨跡に寄せて……………崔書勉……………91
研究会報告

ソウル大・崔昌圭教授にきく……………94
資料

おたあ・ジュリア関係在庫文献目録……………97
史料

ロシア帝国大蔵省発行『韓国誌』(一)……………(解説)崔書勉……………101
口絵

(1)東京府立第一中学校特設韓国委託生科卒業写真
(2)「日本外務省記録文書」
旧記録中の韓末日本留学生関係資料

(3)慶応義塾学簿「入社帳」(明治一七年)

第六号 (通卷二十号)

特集 金玉均研究

金玉均と国民運動……………ゲ・デ・チャガイ……………3

甲申政変内任発展論に寄せて……………渡部 学……………53

金玉均研究会報告

“甲申事変について”……………山辺健太郎……………60
★

領選使行に関する一考察(上)……………権錫奉……………69

一軍械学造事を中心に

旧韓末の日本留学(目)一資料的考察一……………阿部 洋……………95
在庫文献資料紹介(5)

福地桜癡居士手稿『張嬪』朝鮮宮中物語(明治一十七年)
……………桜井 義之……………117

口絵 金玉均が隠れていた北里結核病院養生園内の一小亭

第七号 (通卷三十一号)

特集 李朝礼論

李朝礼論の特集に寄せて……………渡部学……………3

李朝の礼俗一家礼を中心に……………金斗憲……………5

李朝礼学の形成過程……………黄元九……………33

礼訟と老少分党……………姜尚雲……………49

第四回研究会報告一高麗社会より李朝社会へ一

論文

領選使行に関する一考察(下)……………権錫奉……………85

一軍械学造事を中心に

旧韓末の日本留学(目)一資料的考察一……………阿部 洋……………103

口絵 忠清北道堤川郡にある寒水菴と寒水菴所蔵の
尤菴宋時烈的肖像

……………旗田 巍……………71

第八号 (通卷三十二号)

特集 白凡金九先生

日帝資料『金九ノ母子脱出ニ関スル件』……………金正柱…3

—その紹介と若干の敷衍—

金九先生の思想と行動……………李聖根…46

韓国臨時政府の外交に関する考察……………秋憲樹…71

紹介

太王陵古墳将来記……………崔書勉…93

研究紀行

チェコスロバキアとポーランド研究旅行記(第一回)

……………金淵洙…97

資料

日本人の朝鮮語学研究(一)……………桜井義之…197

—明治期における業績の解題—

口絵 太王陵古墳

第九号 (第三十三号)

論文

外交政策決定過程における大衆世論の分析

—韓国日国交正常化を中心として—……………申熙錫…3

資料

限本繁吉文書

三・一独立運動が中国の五・四運動に及ぼした影響

……………李聖根…41

研究紀行

チェコスロバキアとポーランド研究旅行記(第二回)

……………金淵洙…69

書評

張壽根著『韓国の民間信仰』……………金西基…79

資料

日本人の朝鮮語学研究(二)……………桜井義之…83

—明治期における業績の解題—

第十号 (通卷三十四号)

特集 日本統治期の教育

日本統治期朝鮮の教育……………阿部洋…3

—研究史的考察—

日帝支配下の労働夜学……………姜東鎮…25

『私設学術講習会』の「露頭」……………渡部学…63

—日政時代私学初等教育の一領域—

日本統治下書堂教育の具体相(二)……………朴来鳳…91

—全羅北道を中心にして—

『秘教化意見書』解題および原文……………渡部 学…117
口絵 檀園金弘道の「書堂図」問恵の瑞句書塾

第十二号 (通卷三十五号)

論文

慶州皇甫洞一五五号古墳の發掘……………金正基 3
漢委奴国論……………伊藤 皓文…39
学説紹介
任那問題 (続々) 一その二……………千寛 宇…63
韓国最初の近代学校設立について……………慎 鏞 廈…99
研究紀行
チェコスロバキアとポーランド研究旅行記 (第三回)……………金 淵 洙…120

論文

日本統治下書堂教育の具体相 (三)……………朴 来 鳳…57
一全羅北道を中心に一

随想

為堂 鄭寅普先生の□去をきいて……………崔 書 勉…81

新刊紹介

崔虎鎮教授の還曆を祝う

一その評論集『韓国經濟の諸問題』(全五卷)と

『華甲 (還曆) 記念論叢』(全四卷)の新刊紹介

をかねて……………李 丙 洙…91

韓国經濟思想シリーズ(1)

茶山 丁若鏞……………金 柄 夏…98

資料

日本人の朝鮮語学研究(三)……………桜井 義之…107
一大正期における業績の解題一

第十一号 (通卷二十六号)

特集 李朝美学論

実学と開化思想の関連問題……………金 泳 鎬…3
朝鮮後期実学思想史序説 (三)……………千 寛 宇…35

『韓』第四卷（一九七五年）総目次

第二号（通卷三十七号）

特集 韓国史学界の「回顧と展望」

韓国史学界の

「回顧と展望」特集にあたって……………	渡部 学……………	3
1 古代……………	崔柄憲……………	5
2 高麗……………	邊太燮……………	18
3 朝鮮前期……………	鄭昌烈……………	24
4 朝鮮後期……………	鄭昌烈……………	34
5 近代……………	朴容玉……………	42
6 考古学……………	韓炳三……………	50
7 民俗……………	金泰坤……………	55
8 書誌……………	千惠鳳……………	61
9 海外……………		
(1) 日本……………	崔吉城……………	71
(2) 中華民国……………	王聿均……………	80
(3) 米 国……………	崔永浩……………	82

(4) 欧州…………… 李 玉…………… 91

書評

アジア経済研究所 図書資料部編

『旧植民地関係機関刊行物総目録』（朝鮮編）

李 丙 洙…………… 97

韓国経済思想シリーズ(2)

星湖 李 瀾…………… 金 柄 夏…………… 103

記事

『韓』第三卷（一九七四年）総目次…………… 111

第二号（通卷三十八号）

論文

『二国史記』百濟本紀の史料批判	坂本 義種……………	3
一 中国諸王朝との交渉記事を中心に		

羅末の戦乱と縮軍……………李弘植…85

新刊紹介

韓国における日本語教育の陽性化と

カナ文字による朝鮮語の発音表記に思う

▼安田吉美・孫洛範共編『エッセンス

日韓辞典』石原六三・安田吉美共著

『韓国語会話の友』の紹介をかねて▲……………李丙洙…107

口絵 新羅の書石(金新羅花郎の新史料)

第二号(通卷二十九号)

論文

高麗中期の文化意識と史学の性格

一『二国史記』の性格に対する再認識……………金哲垓…3

邪馬書国考……………金在鵬…51

資料

一九七三年度韓国発行

韓国古代史関係著書及び論文の目録：村上四男編訳……………79

研究ノート

韓国楽器の特色Ⅰ

一世界に分布する類似楽器との関連……………草野妙子…87

韓国経済思想シリーズ(3)

磯浜 柳馨臺……………金柄夏…95

第四号(通卷四十号)

特集 韓国史観の模索Ⅰ＜植民地主義史観の克服＞

植民地主義的史観は克服されたか？……………崔永禧…3

植民地的史観の克服……………洪以燮…11

植民地主義的史観とその克服……………盧明植…27

歪められた韓国史観の問題……………李基白…39

論文

朝鮮後期実学思想史序説(目)……………千寛宇…47

研究ノート

韓国楽器の特色Ⅱ

一世界に分布する類似楽器との関連……………草野妙子…97

韓国経済思想シリーズ(4)

燕岩 朴趾源……………金柄夏…85

書評

金知見・葵印幻共著『新羅仏教研究』……………鎌田茂夫…93

第五号(通卷四十一号)

特集 韓国史観の構築Ⅱ > 民族史観の定立 <

韓国民族の主体性

— 主体性定立のための争点 —……………張 宇 鉉… 3

民族史観序説……………金 成 植… 35

民族史観の再評価

— 真の「民族史観」確立のために —……………梁 秉 祐… 44

— 国史再建的方法的叙説 —……………文 定 昌… 56

論 文

朝鮮後期実学思想史序説 (Ⅱ)……………千 寛 宇… 77

研究ノート

韓国楽器の特色Ⅲ

— 世界に分布する類似楽器との関連 —……………草野 妙子… 111

書 評

金知見編著『均如大師華嚴学大書』……………朴 鍾 鴻… 117

第六号 (通卷四十二号)

特集 高麗統治機構

高麗時代の「官僚制」に関する考察……………朴 菖 熙… 3

高麗官人社会の性格に関する試考……………金 毅 圭… 32

高麗時代の台諫機能の変遷 (上)

— その変遷過程を中心に —……………朴 龍 雲… 51

— 高麗商界の監督使について —……………金 南 奎… 71

研究ノート

韓国楽器の特色 (Ⅱ)

— 世界に分布する類似楽器との関連 —……………草野 妙子… 93

韓国経済思想シリーズ(5)

楚亭 朴齊家……………金 柄 夏… 101

新刊紹介

『与猶堂補遺』(二)・(三)

— 茶山研究への新展望 —……………渡部 学… 111

第七号 (通卷四十三号)

特集 近代以前における韓中関係

朝鮮後期の辺境意識……………趙 珖… 3

— 韓国と中国の朝貢関係概観 —……………全 海 宗… 41

— 韓中関係史の鳥瞰のために —……………李 鉉 淳… 83

— 明使接待考(1) —……………李 鉉 淳… 83

第六回金玉均研究会報告

金玉均研究遺跡取材談……………朴 東 淳… 107

韓国経済思想シリーズ(6)

鶴臺庵 柳寿垣……………金 柄 夏… 123

新刊紹介

藤塚郷著『清朝文化東伝の研究』……………渡部 学…130

第八号 (通卷四十四号)

特集 民族主義の発展過程

朱子学的民族主義論……………金 龍 徳…3
義兵運動を通じてみた民族意識の成長過程(1)……………崔 昌 圭…20

韓末民族運動の系譜的研究……………金 栄 国…36
開化期の政治意識状況……………具 範 謨…72

一一八七六年から一九一〇年までの
開化過程に関する政治史的考察一
韓国経済思想シリーズ(7)

清潭 李重煥・金柄夏…129
新刊紹介

国立教育研究所紀要八七集
『アジア諸国の高等教育に関する研究報告』

……………稲葉 継雄…138

第九号 (通卷四十五号)

特集 二十世紀初頭の学会活動ⅠⅡ

畿湖興学会について……………李 鉉 淳…3
湖南学会について……………李 鉉 淳…43

旧韓末政治・社会・学会・会社・
言論団体調査資料……………李 鉉 淳…76
研究ノート
韓国楽器の特色Ⅰ

一世界に分布する類似楽器との関連一……………草野 妙子…113

韓国経済思想シリーズ(8)
酔石室 禹夏永……………金 柄 夏…119

第十号 (通卷四十六号)

特集 海外における韓国学研究の現況

特集への緒言……………渡 部 学…3
第二二次国際韓国研究機関協議会……………5
一 学術会議および総会次第

開会の辞……………崔 書 勉…10
特別講演……………L・ヴァンデルマーシユ…13
オーストリアにおける韓国学研究……………J・クライナー…16

東欧における韓国学研究……………金 淵 洙…21
イギリスにおける韓国学研究……………W・E・スキレンド…31

フランスにおける韓国学研究	李 玉	37
ドイツにおける韓国学研究	B・レヴィン	42
イタリアにおける韓国学研究	< アンセルモ	53
オランダにおける韓国学研究	F・フォス	55
スウェーデンにおける韓国学研究	S・ローゼン	64
アジア各国における韓国学研究	井上 秀雄	66
オーストラリアにおける韓国学研究		
中国(台湾)における韓国学研究	K・H・J・ガーディナー	70
日本における韓国学研究	林 秋 山	76
カナダにおける韓国学研究	渡部 学	82
アメリカの大学における韓国学研究	吳 基 松	89
アメリカにおける韓国学研究	徐 斗 鉢	89
	南 昌 祐	94

第十二号 (通巻四十七号)

国文学研究の現況	金 東 旭	61
最近の韓国における書誌学研究	沈 俊	75
韓国語で書かれた資料の書誌的整理方法における問題点	李 載 喆	91
韓国図書産業の現況	韓 萬 年	98
海外研究者からの国内研究者に対する提案	≡・ロ・スキレンド	112
国内研究者から海外研究者に対する提案	全 海 宗	118
全体討議	渡部学 訳	127
創立の経緯と展望	崔 書 勉	145

第十二号 (通巻四十八号)

特集 韓国学における韓国学研究の現況

韓国考古学の現況	金 元 龍	3
国史学界の現況	崔 永 禧	12
韓国古代史研究の現況	千 寛 宇	26
韓国民俗学界の現況	李 杜 鉉	38
国語学界の現況	李 崇 寧	50

特集 二十世紀初頭の学芸活動Ⅱ

旧韓末救国団体小考	金 根 洙	3
大韓自強会について	李 鉉 涼	71
大韓協會に関する研究	李 鉉 涼	109
新刊紹介		
“一期を画する可能性”を孕む若干の書	渡部 学	151

『韓』第五卷（一九七六年）総目次

第一号（通卷四十九号）

特集 韓国社会経済史研究ⅠⅠ

朝鮮王朝の社会経済的基礎……………洪淳昶…3

一 土地経済を中心として……………

大韓帝国時期の商工業問題……………姜萬吉…39

李朝後期の「特權マニユファクチュア」序説……………劉元東…78

昭和七年（一九三二）……………

朝鮮農家経済実相調査解剖（一）……………慮東奎…95

論文

大韓協会に関する研究ⅡⅠ……………李鉉淙…116

第二号（通卷五十号）

特集 韓国史学界の「回顧と展望」

1 古代……………李萬烈…3

2 高麗時代……………李泰鎮…16

3 近代……………李元淳…28

4 書誌……………安春根…40

5 考古学……………崔夢龍…51

6 美術史……………秦弘燮…60

7 民俗……………任東權…71

韓国経済思想シリーズ(9)

梅月堂 金時習……………金柄夏…81

記事

『韓』総目次（創刊号）四十八号……………89

第三号（通卷五十一号）

特集 韓国社会経済史研究ⅡⅠ

開港期における近代的貿易関係の展開と

その影響（一八七六—一九一〇）……………崔虎鎮…3

居間……………朴元善…27

朝鮮王朝の社会経済的基礎ⅡⅠ……………洪淳昶…63

一 商工業と財政制度を中心として……………

論文

高麗時代における台諫の機能について(下)……………朴龍雲…82

—その変遷過程を中心に—……………

随想……………

日本語を教えて……………李敦甲…103

—一 高校教師の手記—……………

韓国の高校における日本語教育……………稲葉 継雄…109

—その後の推移—……………

韓国経済思想シリーズ(10)

栗谷 李珥……………金柄夏…117

第四号 (通巻五十二号)

論文

徐載弼の法律思想……………田鳳徳…3

米国における韓国人の経験……………ハウチンス・夫妻…54

—一九〇三—一九二四年にかけて—……………

現代日本の政治過程における政党の役割……………申 熙 錫…83

— 韓日国交正常化をめぐる政策論争を中心として—……………

韓国経済思想シリーズ(11)……………

農圃子 鄭尚驥……………金柄夏…105

第五・六合併号 (通巻五十三号)

特集 儒学をめぐる東洋思想史

>文学博士・阿部吉雄先生長篇記念<……………

献 辞……………崔書勉…1

阿部吉雄博士 略歴……………4

阿部吉雄博士 著書論文目録……………9

序 文：渡部 学……………5

論文

近世日本における朱子学の……………

—二つの系譜—二つの試論……………源 了園…28

闇齋学の精神—儒学を中心として—……………岡田 武彦…55

朱子学の性格—理気論の意味—……………山下 龍一…99

横井小楠と朱子学(一)……………友枝龍太郎…115

民国初期の教育状況……………阿部 洋…138

朝鮮朝書院講会小考……………渡部 学…171

—一八・九世紀書院の相貌追求—……………

研究ノート……………

『三國遺事』覚書(その二)……………村上 四男…207

壬乱僧将松雲大師墨跡の発見に寄せて……………李 元 植…218

— 加藤清正陣宮への往返を中心に—……………

別集 丙子年江華開港条約締結百周年記念セミナー報告

江華条約締結百周年記念学術

セミナー報告……………渡部 学 237

他意開国「江華悲劇の教訓」……………崔書勉 239

韓日間に新たな理解・認識提示……………李圭泰 244

一 江華条約百年韓日学術セミナー総括一

雲揚艦事件に関する二・三の問題点……………小谷秀二郎 248

旧韓末教科書類にみられる思想変容……………渡部 学 256

一 丙子修好条規締結後の思想情況一

江華島事件当時の日本政府……………坂田 吉雄 259

条約史からみた江華島条約……………大畑篤四郎 264

東洋三国の開港……………全海宗 268

丙子開港の諸般契機……………李元淳 270

江華条約の意味……………尹炳奭 273

報告一海外学界動向一

第四次韓独国家統一問題学術会議報告……………金淵洙 275

口絵 阿部吉雄先生古稀祝賀会

第七号 (通卷五十四号)

特集 李朝後期の西学研究(一)

西欧思想の導入、批判および撰取……………朴鍾鴻 3

一 その一 天主亭一

実学の理念的な貌……………洪以燮 37

一河濱・慎後聯著「西学弁」の紹介……………李元淳 77

第八号 (通卷五十五号)

特集 韓国古代史(一)

井邑詞解釈に対する二・三の疑問点……………李熙昇 3

「武康王伝説」の研究……………史在東 20

中国史書における百済王関係記事の検討(一)

……………坂元 義種 68

研究ノート

「三国史記」百済本紀における臆支と

扶余豊の記事の比較検討……………東 幸夫 99

資料(一九七五年度韓国発行)

韓国古代史関係の著書及び論文の目録……………村上四男・訳編 104

第九号 (通卷五十六号)

特集 江華開港条約周年

江華開港条約前後の国際情勢……………李瑄根 3

旧韓末教科書類にみられる思想変容……………渡部 学 14

一 丙子修好条規締結後の思想情況一

江華島条約の条約史的考察	大畑篤四郎	60
江華島事件当時の日本政府	坂田 吉雄	80
學術講演		
日本史教科書にみられる		
韓国史関係記述について	李 元 淳	87
報告(第七回金玉均研究会報告)		
金玉均の日本亡命をめぐる	大畑篤四郎	107
韓国経済思想シリーズ(12)		
古筠 金玉均	金 柄 夏	118
口絵 江華島の草芝鎮砲台の現状全景		

第十号 (通卷五十七号)

特集 韓国近代史Ⅱ<

南山新城碑からみた新羅の地方統治体制	李 鍾 旭	3
廉斯説鑑話考	丁 仲 煥	58
一 加羅前史の試考として		
辰韓の鉄産と新羅の強盛	文 暉 鉉	80
研究ノート		
『三国遺事』覚書(その二)	村上 四男	121

第十一号 (通卷五十八号)

特集 李朝後期の西学研究Ⅱ<

天主教の初期伝播とその反響	韓 〇 勲	3
明清時代流入漢訳西学書の		
韓国思想史的意義	李 元 淳	32
パリ外邦伝教会の韓国進出	崔 爽 祐	57
(一五〇〇—一八三六年)		
辛酉教難における訊問状況	洪 以 燮	79
論 文		
日本統治下書寫教育の具体相Ⅲ<	朴 来 鳳	88
一 全羅北道を中心に		

第十二号 (通卷五十九号)

特集 日韓両国間における教育・文化交流

まえがき	阿 部 洋	5
「解放」前韓国における日本留学		
(第一部)		
韓国社会における日本留学の位置		
一 留学帰国者の社会的活動を中心に		
(第二部)		
「解放」前日本留学の史的展開過程とその特質	馬 越 徹	74
「解放」後韓国における海外留学	具 良 根	98
明治日本の韓語教育と韓国への留学生派遣		

『韓』第六卷（一九七七年）総目次

第一号（通卷六十号）

第二号（通卷六十一号）

特集 韓国社会経済史研究ⅡⅠ

『韓』誌通巻第六十号発刊にあたって……………渡部 学……………1

韓国の所得分布不均等度について……………崔虎鎮・尹起重……………1

韓国商業史……………劉 元 東……………37

近世郷村制度の成立と

村落社会の構造的変化Ⅰ<……………高 承 済……………52

韓国的工業化の類型……………李 潤 根……………76

一農・工兼進策を中心に

外資導入の国際収支効果……………宋 英 一……………94

学術講演

好太王碑について……………金 鍾 武……………127

一古典解釈の一管見

特集 韓国史学界の「回顧と展望」

1 古代……………朴 漢……………3

2 朝鮮前期……………申 解 淳……………17

3 朝鮮後期……………金 昌 洙……………40

4 近代……………金 敬 泰……………47

5 美術史……………鄭 永 鎬……………57

6 書誌……………尹 炳 泰……………66

7 民俗……………張 籌 根……………74

8 海外

(1) 欧洲……………李 玉……………81

(2) 米国（一九七四）……………權 延 雄……………87

(3) 米国（一九七五）……………崔 永 浩……………97

(4) 日本……………井上 秀雄……………103

記事

『韓』第五卷（一九七六年）総目次……………124

第二号 (通卷六十二号)

特集 独立協会の研究

「独立新聞」の創刊とその啓蒙的役割……………慎 鋪 廈… 3
 独立協会の民権思想Ⅰ<……………柳 永 烈… 67
 論文
 愛国歌作詞経緯考……………吳 世 昌… 100

第四号 (通卷六十三号)

特集 韓国人の海外留学

海外留学生小史……………崔 承 萬… 3
 韓国留学生の日本留学観……………阿 部 洋・稲 葉 継 雄… 9
 一「アジア人留学生意識調査」分析結果の一端

第五号 (通卷六十四号)

特集 兪吉濬

人心はこれを失うべからず……………崔 書 勉… 3
 「西遊見聞」と兪吉濬の法律思想……………田 鳳 徳… 10
 兪吉濬の開化思想……………金 泳 鎬… 69

独立協会の民権思想Ⅱ<……………柳 永 烈… 98

韓国経済思想シリーズ(13)

「西遊見聞」と「西洋事情」……………金 泰 俊… 122
 一比較文化的研究のための問題提起
 矩 室 兪 吉 濬……………金 柄 夏… 133

第六号 (通卷六十五号)

特集 韓国の儒学

韓国儒学史……………尹 南 漢… 3
 横井小楠と朱子学Ⅱ<……………友 枝 龍 太 郎… 28
 東西思想の特殊性と普遍性……………柳 承 国… 54
 論文
 近世鄉村制度の成立と
 村落社会の構造的変化Ⅱ<……………高 承 濟… 70
 兪吉濬の論文「中立論」……………姜 萬 吉… 89
 南山新城碑からみた
 新羅の地方統治体制Ⅱ<……………李 鍾 旭… 107

第七号 (通卷六十六号)

特集 パンソリ

パンソリの文学的側面—沈清伝批評—……………成 沢 勝… 3

口碑文学としてのパンソリ	張徳順	19
パンソリ史研究の諸問題	金東旭	40
パンソリの二元性と社会的背景	金興圭	76
一 申在孝と沈清伝の場合を中心にして		
學術講演		
パンソリの概念	姜漢永	114

書評

韓国と朝鮮とウリ	李丙洙	122
----------	-----	-----

第八号 (通卷六十七号)

特集 科擧研究

高麗科擧制度の検討Ⅰ<	許興植	3
朝鮮時代の科擧と両班および良人Ⅰ<	宋俊浩	26
一 文科と生員進士試を中心にして		
星湖・李瀛研究の一端	韓 3 勛	67
一 彼の科擧制是非論を中心にして		
高麗時代の科擧風俗	李東歆	95
韓国経済思想シリーズ (14)		
汝宝 禹植圭	金柄夏	107

第九号 (通卷六十八号)

特集 朝鮮語学会事件

ハンゲル学会とハンゲル運動の歴史 (抄)	金允経	3
朝鮮語学会事件回想録Ⅰ<・Ⅱ<	李熙昇	25
ハンゲルをめぐる闘争と受難	崔鉉培	79
朝鮮語学会事件関係資料		100
判決文 (予審終結決定) / 学界略史 / 「ハンゲル」の発刊に当って・他		

第十号 (通卷六十九号)

特集 李朝官人体制の研究

李朝後期の武科の運営実態について	宋俊浩	3
一 丁茶山の五乱説を中心に		
李朝初期の科擧における良人Ⅰ<	崔永浩	31
一 朝鮮社会構造の一側面		
高麗科擧制度の検討Ⅱ<	許興植	54
李朝時代の科擧風俗	李東歆	84
論文		
韓国部落祭の社会人類学的機能	崔吉城	101

學術講演

韓国儒字の特性……………裴宗鎬…106

第十二号 (通卷七十号)

高麗科挙制度の検討Ⅲ……………許興植…91

第十二号 (通卷七十一号)

特集 朝鮮朝の救荒政策

李朝時代の救荒史研究……………李泰榮…3

—救荒法制度を中心として—

世宗と社会政策……………柳永博…37

—荒政とSocialpolitikの接近可能性の検討—

論文

日本統治下書堂教育の具体相……………朴來鳳…59

—全羅北道を中心に—

特集 新羅花郎研究

新羅花郎研究の動向……………清水慶秀…3

新羅花郎道の研究……………洪淳昶…15

—その歴史的形過程を中心に—

新羅花郎徒の起源についての一考察……………李基東…37

花郎五戒の思想的背景……………金忠烈…65

花郎集團の教育制度と
その実際に関する考察……………朴贊軒…98

『韓』第七卷 (一九七八年) 総目次

第一号 (通卷七十二号)

特集 韓国国字界の「回顧と展望」

1 古代……………申澄植…3
2 高麗 (一九七五)……………安啓賢…11
3 高麗 (一九七六)……………金毅圭…21
4 朝鮮前期……………金泰永…26

5 朝鮮後期……………李元淳…38

6 近代……………朴容玉…48

7 考古学……………林炳泰…56

8 美術史……………文明大…64

9 書誌……………千恵鳳…71

10 民俗……………李光奎…80

歴史教育シンポジウム

日本の歴史教育における韓国史……………加藤章…85

韓国の歴史教育における日本史……………南都泳…95

講演

鶴峰金誠一先生の「朝鮮国沿革考異」および

「風俗考異」……………李佑成…99

記事

『韓』第六卷（一九七七年）総目次……………111

第二号（通巻七十三号）

特集 民俗劇

韓国の民俗劇：張徳順……………3

仮面劇と民衆意識の成長……………趙東一…34

社会的現美文脈の中の仮面舞劇……………金烈圭…66

韓国経済思想シリーズ(15)

順庵 安鼎福……………金柄夏…99

第三号（通巻七十四号）

特集 民俗劇（続）

鳳山仮面舞劇……………李杜鉉…3

「コクトウカクシ」人形劇……………沈南晟…27

論文

高麗科挙制度の検討ⅡⅢ……………許興植…44

七十年ぶりに確認された咸鏡道壬辰

義兵大捷碑……………崔書勉…68

新刊紹介

原本『明心宝鑑』影印本の刊行……………渡部学…84

韓国経済思想シリーズ(16)

三峯 鄭道伝……………金柄夏…96

〔口絵〕北関大捷碑

第四号（通巻七十五号）

特集 訓民正音Ⅱ<

訓民正音解例……………鄭麟趾・他…3

訓民正音解題……………俞昌均…40

ハングルの起原……………崔鉉培…86

第五号 (通卷七十六号)

特集 訓民正音Ⅱ<

訓民正音解例の言語学的分析……………	金錫得	3
一 二元論的な弁別的實質論および言語学的理解一		
世宗の言語政策事業について……………	李崇寧	36
論文		
李朝初期(一九三二—一六〇〇年)の		
科挙における良人Ⅱ<……………	崔永浩	79
一 朝鮮社会構造の一側面一		
一九七六年度・日本における韓国史研究の		
回顧と展望……………	井上秀雄	97
韓国経済思想シリーズ(17)		
湛軒 洪大谷……………	金柄夏	104

第六号 (通卷七十七号)

特集 旧韓末義兵闘争

韓末義兵運動とその性格……………	洪淳昶	3
日帝植民統治史研究序論……………	金雲泰	40
許薦の義兵活動……………	慎鏞廈	52
淳昌十二義士に関する覚書……………	洪淳昶	80

論文

日本外務省御雇外国人『金麟昇』について……………	崔書勉	94
韓国経済思想シリーズ(18)		
苒峯 李晔光……………	金柄夏	113
〔口絵〕 旺山許薦の筆蹟……………		

第七号 (通卷七十八号)

特集 韓国古代史

灤河下流の朝鮮……………	千寛宇	3
一 中国東方州郡の設置、廃止に関連して一		
日韓歴史教育協議会発表論文要旨		
歴史教育における世界的視野……………	伊瀬仙太郎	70
歴史教育における古代史の諸問題……………	井上辰雄	75
任那日本府管見……………	千寛宇	79
古代史随想		
漢委奴国王……………	伊藤皓文	87
韓国経済思想シリーズ(19)		
実学派の土地制度論……………	金柄夏	118

第八号 (通卷七十九号)

特集 三・二運動以後

参議・正義・新民府の成立過程……………尹炳奭……………3
 新幹会運動……………宋建鎬……………38
 韓国光復軍について……………朴成壽……………82
 一 いわゆる準繩九項を中心に一

在庫文献資料紹介(6)

『朝鮮事情』シムンシキョク……………櫻井 義之……………114
櫻本武揚 訳

第九・十合母号 (通巻八十号)

特集 韓国近代教育史関係史料
 一 限本繁吉文書を中心として一
 韓国近代教育史関係史料について……………渡部 学……………3
 限本繁吉文書……………
 韓国教育……………19
 韓国教育ノ現状……………61
 韓国教育ノ既往及現在……………141
 韓国教育ト警察行政……………237
 朝鮮国民教育新案：岡倉由三郎……………257

朝鮮教育談……………本多 庸一……………271

第十一・十二合母号 (通巻八十一号)

朝鮮教育関係文献資料……………櫻井 義之……………292
 限本繁吉 略歴……………阿部 洋……………297

特集 韓国プロテスタント史研究 >I<

開化派の改新教観……………李 光 麟……………3
 開化期における基督教の受容過程……………閔 庚 培……………55
 韓末基督教徒の民族意識形成過程 >上<……………李 萬 烈……………74
 論 文

民族運動としての義烈団活動……………金 昌 洙……………115
 日本統治下書堂教育の具体相 >V<……………朴 来 鳳……………142
 一 全羅北道を中心に一
 研究ノート
 草創期の簡易学校 >I<……………藤原 美歌……………201
 一 その実践記録一
 韓国経済思想シリーズ (20)
 実字派の農業論……………金 柄 夏……………216

『韓』第八卷（一九七九年）総目次

第一号（通卷八十二号）

第二号（通卷八十三号）

特集 韓国史学界の「回顧と展望」

1 古代	李基東	3
2 高麗	李熙徳	14
3 朝鮮後期	李章熙	24
4 近代	李炫熙	35
5 考古学	崔夢龍	51
6 書誌学	沈俊	62
7 民俗学	崔仁鶴	68
8 日本における韓国史研究の回顧と展望	井上秀雄	78

研究ノート

草創期の簡易学校（三）	藤原美歌	88
— その実践記録 —		
韓国経済思想シリーズ(21)	金柄夏	108
実学派の財政論		

特集 韓国プロテスタント史研究ⅤⅡⅢ

開化期の関西地方と改新教	李光麟	3
— 改新教受容の一事例 —		
金教臣の無教会主義と『朝鮮的』キリスト教	閔庚培	23
金教臣の民族精神史的遺産—『聖書朝鮮』の日記を中心として—	金丁煥	52
韓末基督教徒の民族意識形成過程ⅡⅢ	李萬烈	91

第三・四合併号（通卷八十四号）

特集 東アジアの巫俗

韓国の巫俗—概説—	任哲宰	3
韓国のシヤマニズム研究半世紀	金泰坤	58

韓国巫俗研究の批判的紹介―戦後の韓国人

学者の研究を中心として……………崔吉城…90

漢人村落の宗教空間における巫―漢蕃

接触地帯の一事例……………鈴木満男…108

韓国民俗ノート

草墳及びクツ……………成沢勝…155

論文

韓国農村家族の構造―京畿道広州都中部

面奮尾里の資料を中心に……………李光奎…159

研究ノート

草創期の簡易学校〈三〉

―その実践記録―……………藤原美歌…195

第五・六合月号(通巻八十五号)

中国・朝鮮・日本の実学の比較……………源了圓…105

李栗谷と郷約……………酒井忠夫…134

韓国儒学の根本思想とその現代的意義……………柳承國…152

一六、七世紀朝鮮書院学規における教育把握

形態の推移……………渡部学…162

―李栗谷の教育観に焦点づけて―

日本の「対支文化事業」と中国教育文化界

―一九二〇年代後半期を中心として……………阿部洋…213

或る宗親会の誕生―Political fieldにお

ける漢人親族集団……………鈴木満男…279

韓末教育の構造

―言語教育を中心として……………稲葉継雄…314

東京 韓国研究院十年史略……………340

第七号(通巻八十六号)

特集 故阿部吉雄博士を偲ぶ

―創立十周年記念―

阿部博士と李退溪研究……………宇野精一…3

阿部吉雄博士を偲ぶ……………松戸光夫…10

李退溪の四七論弁と理勳説……………友枝龍太郎…15

朱子の哲学における「太極」……………山井湧…37

中国における現実主義思想の実体について

……………岡田武彦…68

伝記

三千百日程〈一〉或る抗日韓国人の軌跡―

……………平洲李鼻菴先生望九頌寿記念会…3

韓国学研究的海外現況

ドイツにおける韓国学……………デイーター・アイケマイア…29

韓国経済思想シリーズ(23)

実学派の貨幣論……………金柄夏…38

第八号 (通卷八十七号)

研究ノート

日本陸軍士官学校に留学した大韓帝国学生 (稿)

—その在校の史実—……………鈴木一…3

伝記

三千百日紅 > II < — 或る抗日韓国人の軌跡 —

……………平洲李昇靛先生望九頌寿記念会…45

韓国経済思想シリーズ (22)

実学派の商業論……………金柄夏…71

第九号 (通卷八十八号)

特集 『韓』誌通卷全八十五巻の総目録

『韓』誌通卷全八十五巻の総目録特集にあたって

……………渡部学…3

分類総目録……………編集部…9

著者名索引……………編集部…39

第十号 (通卷八十九号)

伝記

三千百日紅 > III < — 或る抗日韓国人の軌跡 —

……………平洲李昇靛先生望九頌寿記念会…3

随筆

無窮花 — 韓国の国花に関する雑感 — ……三浦吉春…22

講演

義兵将崔益鉉の生涯……………旗田巍…27

韓国経済思想シリーズ (24)

実学派の階級論……………金柄夏…50

第十一号 (通卷九十号)

伝記

三千百日紅 > IV < — 或る抗日韓国人の軌跡 —

……………平洲李昇靛先生望九頌寿記念会…3

随筆

三伏の犬と土用の鰻……………三浦吉春…58

論文

朝鮮民俗画における虎のモチーフ

……………C・S・ハウチンス…61

韓国経済思想シリーズ(25)

実学派の度量衡制度論……………金柄夏…68

第二号(通卷九十一号)

三千百日紅〱〱一或る抗日韓国人の軌跡……………平洲李貞馥先生望九頌寿紀念会…3
論 文
旧韓末外国人雇聘考〱一……………李鉉淙…67
韓国経済思想シリーズ(26)
玄玄居士 朴泳孝……………金柄夏…85

伝記

『韓』第九卷(一九八〇年) 総目次

第二号(通卷九十二号)

特集 韓国史学界の「回顧と展望」

- 1 古 代……………李基東…3
- 2 高 麗……………李熙徳…42
- 3 朝鮮前期……………鄭萬祚…32
- 4 朝鮮後期……………李章熙…42
- 5 現 代……………李炫熙…53
- 6 考古学……………任孝宰…65
- 7 美術史……………文明大…75

記事

- 8 書誌学……………千恵鳳…86
- 9 民族・人類学：李光奎…97
- 10 日本における韓国史研究の回顧と展望……………井上 秀雄…107
- 『韓』第八卷(一九七九年) 総目次……………118

第二号(通卷九十三号)

- 伝記
三千百日紅〱〱……………平洲李貞馥先生望九頌寿紀念会…3
一或る抗日韓国人の軌跡一

論文

旧韓末外国人雇聘考 > 二 < 李 鉉 淳 17
 進溪朴在馨先生と『海東統小字』 渡部 学 71
 研究ノート

日本の大学生のための
 韓国事情学習会を指導して 鈴木 満男 83
 語彙解説
 朝鮮朝古文献にあらわれた
 用語および術語解説 > 一 < 金 在 得 93

第二号 (通巻九十四号)

特集 韓国土地制度史 > 一 <
 新羅及び高麗の量田法に関して 朴 興 秀 3
 新羅時代の王土思想と公田 李 佑 成 74
 一 大崇福寺碑および鳳巖寺智証碑小考
 研究ノート
 日本のミコ・イタコ・ノロ等々を
 Shamanism の枠組で分析する (上) の
 疑義 任 哲 宰 91

語彙解説
 朝鮮朝古文献にあらわれた
 用語および術語解説 > 二 < 金 在 得 95

第四・五合併号 (通巻九十五号)

特集 旧羅末の独立運動

大韓民国臨時政府の成立過程 洪 淳 鉦 3
 一九〇七年の義兵戦争朴成壽 5
 安重根義士生誕百年にあたって
 歴史上からみた安重根義士 崔 永 禧 74
 日本人がみた安重根義士 崔 書 勉 80
 資料
 ①寄稿 (海朝新聞、隆熙二年
 三月二十一日、第二十一号) 安重根 (応七) 96
 ②安重根自叙伝『獄中記』 98
 ③東京韓国研究院所蔵
 『安重根関係文献目録』 215

第六号 (通巻九十六号)

特集 韓国思想史研究 > 一 <

韓国思想史における『外』と『内』 渡部 学 3
 趙静庵と朝鮮朝ソンド精神 琴 章 泰 28
 李朝士大夫の基本性格 李 佑 成 50
 栗谷 理氣論をめぐる問題点 松田 弘 63

語彙解説

朝鮮朝古文獻にあらわれた

用語および術語解説>三<……………金 在 得…71

第七号 (通卷九十七号)

論 文

実学史……………金 龍 徳…3

語彙解説

朝鮮朝古文獻にあらわれた

用語および術語解説>四<……………金 在 得…49

第八号 (通卷九十八号)

論 文

韓国における家系記録の歴史とその解釈……………宋 俊 浩…3

語彙解説

朝鮮朝古文獻にあらわれた

用語および術語解説>五<……………金 在 得…57

第九・十合併号 (通卷九十九号)

論 文

勿欺意妻鷹煥の生涯と業績>上<……………宋 俊 浩…3

語彙解説

朝鮮朝古文獻にあらわれた

用語および術語解説>六<……………金 在 得…61

第十一・十二合併号 (通卷一〇〇号)

論 文

伝統的社会と法思想……………田 鳳 徳…3

黄玠の現実認識と歴史感覚……………崔 洪 奎…36

日本統治下書堂教育の具体相>VII<……………朴 来 鳳…5

在庫文献資料紹介(7)

『鶏林事略』瀬脇寿人

林 深造 同輯……………桜 井 義 之…113

季刊誌『韓』(通卷一〇一号)通卷一〇八号) 総目次

季刊誌『韓』(通卷一〇一号)

季刊誌『韓』(通卷一〇一号)

特集 朝鮮朝法史学

実学派の財政論……………	金柄夏……………	108
まえがき……………	渡部学……………	3
論文		
朝鮮時代の寺院教育……………	南都泳……………	5
一とくに朝鮮後期の制度を中心として		
高麗雜劇と宋……………	成沢勝……………	69
一叙事化以前の戯劇形態比較研究序説		
李朝時代の「木版人道総図」について……………	西川孝雄……………	102
限本繁吉文書		
『限本繁吉文書』解題……………	渡部学……………	133
儒学卜科拳(韓国)……………		141
書房及ヒ在来ノ通俗教育ニ就イテ(台湾)……………		165
語彙解説		
朝鮮朝古文獻にあらわれた		
用語および術語解説>七<……………	金在得……………	175
『朝鮮不動産用語』解題……………	桜井義之……………	187
朝鮮不動産用語略解……………		191
復刊の辞……………	渡部学……………	3
序文……………	申泰煥……………	5
一亜細亞文化社創立十周年記念論文集出版への		
趙義●博士を偲ぶ……………	高橋幸八郎……………	9
朝鮮王朝の法典編纂の考察……………	田鳳徳……………	16
李氏朝鮮王朝の六分主義法典……………	李丙洙……………	48
一経国大典編纂の歴史的背景を中心に		
李朝駅制攷……………	松崎寿和……………	94
蚕室の研究……………	李崇寧……………	170
韓国人權史論……………	崔柱昊……………	210
論文		
韓国研究所蔵朝鮮通信使関係		
資料について……………	李元植……………	241

季刊誌『韓』（通卷一〇三号）

特集 朝鮮語文集研究

文集雜考……………	任昌淳……………	3
來庵先生文集について……………	金忠烈……………	23
一 鄭仁弘の略状を兼ねて……………		
寒洲全書に関する管見……………	宋贊植……………	62
李朝中期思想叢書について……………	李佑成……………	91
一 陶山及門諸賢集を中心として……………		
論文		
『挾里志』の異名について……………	西川孝雄……………	112
一付 文献目録……………		
官立漢城外国語学校について……………	稲葉継雄……………	133
一 日語学校を中心に……………		
中国における孔子復権の現況……………	鈴木満男……………	183
一 二五三六周年誕辰に曲阜を訪ねて……………		
在庫文献資料紹介……………		
韓国政府委託……………	阿部洋……………	189

季刊誌『韓』（通卷一〇四号）

特集 韓国古典文学

春香伝における妓生的性格および人間覚醒……………	西岡健治……………	3
一 「南原古詞」をテキストとして……………		
北朝鮮における郷歌研究……………	畑山康幸……………	43
韓国古典詩歌の文献的研究……………	金東俊……………	83
古典小説の文献学的考察……………	金起東……………	111
開化期文学研究のための文献考……………	河東鎬……………	157
一 小説を主として……………		
論文		
朝鮮総督府編『朝鮮語辞典』編纂の経緯……………	矢野謙……………	184

季刊誌『韓』（通卷一〇五号）

特集 韓国古代史

新羅の梵鐘と萬波息笛の説話……………	黄壽永……………	3
三国遺事紀異篇の考察……………	李基白……………	11
『三国遺事』王曆篇の検討……………	金相鉉……………	31
一 王曆撰者に対する疑問を中心に……………		
国家形成期における斯盧国について……………	洪淳昶……………	59
日本神話と韓半島三国の服飾……………	金東旭……………	71
新羅美術研究における諸問題……………	鄭永鎬……………	90

日本の城と東アジアの城郭……………	井上 秀雄……………	108
南北朝の碑文字と百濟一地域と階層……………	佐竹 保子……………	119
論 文		
黄巢の死去と唐軍の長安奪回の期日について……………	李 希 泌……………	131
……………		
一 崔致遠の《桂苑筆耕集》を合せ紹介する……………	楊 普 景……………	139
一六―七世紀呂誥の編纂背景とその性格……………		
研究ノート		
韓国美術史『五〇〇〇年』の学問的検討……………	鈴木 満男……………	185
日本文化と韓国……………	西 一 祥……………	192
一とくに秦河勝についての疑問を中心として……………		

季刊誌『韓』(通巻一〇六号)

特集 韓末外交史		
一八八〇年代における露朝関係……………	佐々木 揚……………	3
一八八五年の『第一次露朝密約』を中心として……………		
巨文島事件と李鴻章の対韓政策……………	朴 日 根……………	56
青木周蔵外相の対韓政策……………	河村 一夫……………	96
間島協約に関する外交的考察……………	盧 啓 鉉……………	145

論 文		
甲申政変と裸負商……………	李 光 麟……………	182
在庫文献資料紹介		
一 大正九年十二月未現在 在京朝鮮人三関スル団体調／朝鮮人発行雑誌調／朝鮮人学生調(警務局) 解題……………	金 祥 起……………	211

季刊誌『韓』(通巻一〇七号)

特集 韓国における人類学・民俗学研究		
韓国の口碑文学……………	崔 仁 鶴……………	3
一 一九八〇年代を中心にした研究動向……………		
韓国巫俗研究を通して見た民族主義……………	崔 吉 城……………	29
韓国の歳時儀礼と人生儀礼……………	李 光 奎……………	51
ナシヨナリズムの祝祭……………	鈴木 満男……………	84
一 韓国の民俗文化祭を……………		
政治人類学的に観察する……………		
民籍調査と隠居……………	松本 誠……………	137
戦前における在日韓国・朝鮮人に関する調査……………	秀村 研……………	176

季刊誌『韓』（通巻一〇八号）

特集 韓国体育史

近代韓国の社会体育史……………李学來…3

— 民族主義と体育 —

論 文

韓国近代学校体育の発展過程についての考察

農書小史……………金容燮…142

……………羅 絢 成…39

— 朝鮮後期を中心に —

高麗の擊毬について……………李 鎮 洙…75

— その伝来年代を中心に —

花郎道の体育思想……………權 賞 澤…102

韓国現代体育政策の考察……………李 相 哲…129

— 学校体育管理行政を中心として —

古文の源流と性格……………金 都 鍊…176

*阿部洋

田鳳徳

崔永禧

千寛宇

*稲葉継雄

*李元植

李杜鉉

川島藤也

*木下礼仁

*河村一夫

*草野妙子

*松嶋光保

*村上四男

成沢勝

*西川孝雄

*西岡健治

大川清

朴忠錫

*桜井義之

*鈴木満男

清水慶秀

*馬越徹

梅田博之

*渡部学

兪昌均

東京・韓国研究院
研究・編集委員（ABC 順）
研究・編集委員（ABC 順）

*印は現在（一九八八年四月）の編集委員を示す。

お礼のことば

崔 書 勉

「崔書勉と私」の原稿が入り始める頃のこと、最初にいただいた原稿は、教育団体の事務総長と高等学校理事長のお二人からのものであった。お二人の原稿を拝見したあと、私は大きな不安を感じた。原稿の内容はいずれも、全く私の生まれる日から、素晴らしい……の調子の賛辞ばかりであった。

私は、私を目の前にして賞められることほど辛いことはないと平素思っており、かえって殴られる方がよほど気が楽なのである。このような原稿のみが集まった文集になると、世の笑いや者になることになるといふ不安が高まったのである。私は編集者にその二つの原稿を文集から外すようにお願いした。御本人達には私から辞退の欠礼をお詫びさせて頂いた。それ以来、私は原稿を拝見していない。また、原稿をお寄せ下さる方々には、私への批判をなるべく書いて頂けるよう依頼することを、編集の方にお願ひした。

この文集の目的は、私の滞日三十年について、公正に御覧になつて良かったこと、悪かったことともどもに指摘して頂くことにより、この文集が人間味溢れるものとなり、またそれ以上に自分の今後の生きる参考にさせて頂くことであつた。

花だけ、葉だけでは花束にならない。そう考えると、賞め言葉ばかりの花だけの花束よりも、批判という葉のついた花束が滞日三十年に頂くに相応しいと思いつつ、玉稿をお寄せ下さった方々に深く感謝するものである。

紙面の制限もあって締め切り時迄に頂いた玉稿を掲載させて頂いたようであるが、公務ご多忙であられたり、海外御出張中であられたり、寄稿が間に合わなかった方々のためには第二巻が予定されるであろうと信じている。

敬 具

編集部からのお詫び

「崔書勉と私」の編集に際しましては、多数の方から玉稿が寄せられ厚く御礼申し上げます。中には締切りの期日を過ぎて寄せられたのが数本有り、今回掲載することが出来ませんでした。お詫び申し上げますと共に、引き続き続刊を企画しますので玉稿は当編集部でお預かり致します。

なお、職業・役職名等は、掲載が行われた時点のものとして致しました。

